
バカとテストと前世魔王と

BALSEN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと前世魔王と

【Nコード】

N2976W

【作者名】

BALSEN

【あらすじ】

前世が魔王な人……………？人でいいや。とにかく人がバカテスの世界でのんびりと生きる。
たまにはっちゃけたり暴走しながら彼？彼女はFクラスで頑張って生きてます。だいたいコメディです。

1 - 1 Fクラスに加入した理由（前書き）

最初に投稿した小説から大分時間がたち、久々の投稿。

この作品はTS・性転換・転生素材があるのでそういうのが苦手な人は回れ右でお願いします。

1 - 1 Fクラスに加入した理由

場に緊張感が流れる。

手に持った5枚のカードで相手を挑発するかのようにひらひらと前後に振る。

既に顔が汗で酷いことになっている対戦相手は真っ青になりながらそのカードに釘付けになる。

「レイズ」

「ま、まだ上がるだ！？」

周囲の観客からどよめきが走り、対戦相手の震えがさらに酷くなる。クスリと小さく哂えばさらに怯えは隠し切れなくなる。

「ふふふ……それでどうするんですか？応じますか？おりますか？」

対して自分の顔はまったく変わらず笑みを浮かべているだろう。分かりきっている結末に動揺したりはしないのだ。

「も、もう勘弁してくれ！！」

「ふふ」

「ひい！？」

お馬鹿さんですね、そう言いたげに微笑むも相手には理解されなかったらしい。

ふと椅子の周囲に倒れふしている男達の強面を見る。

「なかなかいい顔をしている、そう思いませんか？」

「な、なななな何をだ!？」

「がっ！」

動揺への返答は椅子の傍で既に気絶している巨漢への蹴り。

それにさらに怯えを強くした相手は小さく悲鳴をあげて椅子から転げ落ちる。

手にもったカードを落とさないのはプロである彼の最後の抵抗だろう。

「さて、結果は分かりきつたので答え合わせといきましょうか？」

「答え合わせ……だと？」

「はい。私がこのカジノに目をつけたのは……まあ単に目についたからです。特に理由はありません」

そんな理由で、そう呟く彼はきつと極上に運が悪かったのだろう。

「連日連夜通い詰め、毎日大金をかけながらも少しずつ負ける人物。当然あなた方も既に理解していると思いますが、私は力モを装っていたのですよ」

「……………」

「そして『偶然』仲の良くなったバーテンダーのお姉さんに帰国の日程を話し、カジノに来る最後の日を伝えます。」

『偶然』それを知ったあなた方が最後に私から掛け金をむしりころうとするんです。ふふふ……偶然って怖いですよ？」

その場にいる誰もが理解した。

ああ、こいつ性悪だなと。

「そしてあとは簡単です。最初のほうは小額で負け通し、私は最後だからという呟きで高いレート在台へと向かいました。

もちろんその台にイカサマが仕込んであったのは見抜いてましたし、簡単に阻止できるだけの実力もありましたから」

そして、と言ってから私はそのカードを公開する。

「クイーンのおカード。望みさえすれば常にクイーンは私の下に集まるのですよ？」

ま、非常識ですが最近日本でオカルトを利用した学校があるから非常識も常識ですよ。

「……そ、それもオカルトだということか!？」

「ふふ。フルハウス如きで得意げにどんどん値を吊り上げていく貴方にプロならば絶対に見つける私の動揺のサインを見せれば後は簡単です。

貴方の敗因はただ一つ……私をウサギだと思い、さらに自分の技量に自信を持ちすぎました。あれ？二つですね」

私ってば馬鹿ですねえ、と苦笑いをして後ろから青い顔をして見ていた店員の顔を踏みつける。

まあ降りろとサインを流しているにも関わらず得意げに値を吊り上

げていくディーラーを見て武力に訴えたのが悪い。

え？サイン？当然こっちは『オカルト』で妨害しましたよ？フォーカードのほうは我ながら不思議ですが。

「それで、どうします？応じますか？おりますか？」

「ん、んー！さすがに毎日カジノに通い詰めは疲れちゃいました」

伸びをしてスカートのポケットから携帯電話を取り出す。

時刻は既に午前3時……夜中じゃないですか。

「明日はゆっくり寝ますか」

明らかに違法行為へと手を伸ばしているであろう荒くれ者達の視線を無視して表道へと出るために迷路のような裏道を歩く。

しかしさすが違法カジノ、たんまりお金は溜め込んでいたようだ。

やはりあの辺で手打ちにしておいて正解だったようだ。

あれ以上値を吊り上げていたならば彼らの命に関わってくるので命を狙われていただろう。

別にその程度、前世においてこの世界にはない魔法を習得している私にはあつてないような刺客だが。

ちなみに私には前世というものが存在する。

何を間違ったのか——間違ったのは性別だが——前世では男なのに女として産まれてきた元魔王。

それが私の全てを語るのに相応しい。

幼少の頃はよく「詩織が男の名前で何が悪い！」と近所の子達を殴って泣かせてたなあ……。

まあそれが両親にバレて淑女としてのスパルタ教育をほどこされ、無事少女になったわけだが。

今までは少女（笑）だったからなあ。

「そつえばそろそろクラス振り分け試験があるから帰らないといけませんね」

2年生から転校生として入る文月学園。

妹のクリスも新入生として入学することになる学園だ。

詩織は丁度2年から開始される召喚戦争——そのクラス振り分けの為に試験を受けるよう藤堂カヲルから言われた。

「あんたもFクラスは嫌だろう？」とは藤堂学園長の言である。

別に詩織はFクラスだろうとAクラスだろうとどうでもよかったのだが学園行事なので一応受けようと思っていた。

思っていた、が。

「あら？……試験、昨日でしたね」

カジノで粘りすぎたらしい。

桜が舞う坂道を登校する詩織は久々の日本に小さく歌を歌いながら

歩いていた。

あの後文月学園、藤堂学園長へと連絡してクラス振り分け試験について聞いてみたがやはり再試験はダメらしい。

まあ厳しいところなんだろうと納得し、チャーターしたジェットで帰ってきた。

時差の関係で多少眠いが平気だろう。

「あー………そういえばクリスちゃんに連絡してませんね。ふう、また文句を言われます」

ふと妹がぶんぷんと怒る姿を思い出したため息を吐く。
別に怖くないのだが恐ろしくしつこいのだクリスは。

「お前が詩織」レッドフィールドか。遅刻だぞ」

校舎へと入ろうとした時にかけられた声のほうへ向くとそこにはいわゆるガチムチ体系のジャージ教師が。

……実践的ないい筋肉ですね。

「そうですよ。それでも急いだんですけどね」

なんせジェットをチャーターしましたし。

「急ぐ急がない以前に試験当日に外国でゆっくりしてるのが悪いと言ってるんだ」

仰るとおりです。

「しかし本当にいい筋肉ですね………何か格闘技でもしてるんですか？」

「人の身体をジロジロ見るのは関心せんな。まあいい。そういう話はまた今度だ。受け取れ」

箱から取り出して差し出されたのは一枚の封筒。

箱の中身を見れば既に空だったので自分が最後らしい。

「……？なんですかこれ？」

「中の紙にクラスが書かれている」

「事前にFクラスと聞いてるんですが」

「それでも、だ。文月学園は試験校だからな。こういったシステムはその一環だ」

はあ、そうですか。

そう気のない返事を返して丁寧に封筒から中の紙を取り出す。

『シオ||レッドフィールド……Fクラス』

「当然ですね」

「しかしお前、なんたって男のフリして転校したんだ？」

「藤堂学園長に聞いてませんか？」

藤堂は研究者なので学園経営者としての才能はなくてもいいが、凡才だったはず。

しかしそれでも組織における伝達を適等にするほど凡愚ではないは

ずだ。

「聞いてはみたんだが、本人に聞けとの一点張りだな」

ふむ、そういうことですか。

「簡単な話ですよ」

「ん？」

「Fクラスって大半が男なんでしょう？なら男として入学したほうが場に溶け込みやすいじゃないですか」

1 - 1 Fクラスに加入した理由（後書き）

この作品で二次って今更だよなあ……………まあなんかアニメ二期が出るらしいけど。

ちなみに作者はアニメのほうはまったくみてません。

原作を読んでからアニメみると想像からの劣化が激しくて……………。

1 - 2 傍観（前書き）

亀執筆速度ながらもしばらくは一日更新。

といってもストックあんまりないので期待はできない！

ちなみにバカテスのバカ回答集ですが、主人公が今のところ珍回答
するような要素の問題じゃないので出してません。

数学とかはちゃんとした回答だす子なんで・・・。

1 - 2 傍観

いい筋肉の教師、彼は西村先生という生活指導の教師らしい。明らかにこちらの嘘に気付いていたにも関わらず深くつつこんでこなかった辺り、空気は読める教師らしい。

前世云々なんていってもどうせ信じな……西村先生なら信じるかもしれないと詩織は若干思った。

なんにせよ西村先生はよき理解者になってくれそうである。

「ここがFクラスですか」

………

「帰っていいですかね、これ」

設備が悪いと聞いて想像していたようなレベルじゃなかった。

いったいいつの時代の貧乏平屋だここは。

ピンク色の髪の女の子が教卓に立っていることから今は自己紹介をしているらしい。

「はいっ！質問です！」

「あ、は、はいっ。なんですか？」

「なんでここにいますか？」

めーでーめーでー！

この学園の風紀はどうなってるんですか！？

虐め！？

おらお前なんでここににいるんじゃワレ、貴様の居場所はロッカーじゃけんのう！ってことでしょうか！？

こんな成績的な意味でも風紀的な意味でも世紀末なクラスにいて私は本当に大丈夫なのですか！？

「おうシオ。パン買ってこいや」

「わ、わかりました先輩。……」

「どうした」

「え？あの、お金は……？」

「当然お前が払うんだ」

「ま、まじですか？」

「汚い！さすがFクラス汚い！教室も汚いけど心も汚い！」

同じクラスなんだから先輩なんていないだろうとかつつこんでくれる人物はここにいない。

「振り分け試験の最中、高熱を出してしまいまして……」

「え？」

ああ、なんだ。

私と同じような理由——明らかに違う——でFクラスへと身を墮とした少女なのですか。

『そつえば俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに』

『ああ。化学だろ？アレは難しかったな』

『俺は弟が事故に遭ったと聞いて実力が出し切れなくて』

『黙れ一人っ子』

『前の晩、彼女が寝かせてくれなくて』

『今年一番の大嘘をありがとう』

……成績と頭の良さは直結しないという私の考えですが、訂正する必要があるかもしれません。

「で、ではっ、一年間よろしくお願いします！」

正直「こんなクラスで大丈夫か？」と脳内で謎の渋い声が響いている。

ふむ

「大丈夫です。問題ありませんっ！」

がらっ、と閉まっていたドアを開けて中に入る。

ドアが開く音にFクラスの人間達の視線が集中した。

「おや、レッドフィールドさんですか。これまた丁度いいですね。自己紹介お願いします」

おや、Fクラスを纏める教師なのだからどんな屈強な人かと思ったら結構普通に見える。

学園長も何か考えがあつてのことだろうか。

「シオ＝レッドフィールドです。2年から編入という形になります

が、諸事情によりクラス振り分け試験を受けてませんのでFクラスになりました。

今後一年間、よろしくお願いします」

こらその男子？

「ちつ、男か。しかも美少年だと？いらね」とか言っではいけませんよ？。

「可愛い女の子の転校生がきたとして、Fクラスに入る理由ありませんよねえ。馬鹿で可愛い女の子なんてどれだけ希少価値が分かってます？

万が一そういった女の子がいたとして、貴方に好意を抱く理由は？貴方、容姿は悪くないですが良くもないですよ。

このクラスで言えば10位つてところですか……しかも見たところこのクラスの女子は二人。そんな貴方に青春の席が回ってくるんでも？」

「れ、レッドフィールドさん？何を言ったんですか？須川君が何故か泣いてるんですが……」

「いえ何も？ただその男に現実を教えてあげただけですよ」

だいたいにしてそのピンク娘がこのFクラスに入ってきたことじたいが奇跡なのだ。

このクラスの男どもはモテナさそうだし、この一年は間違いなく灰色の青春を送ることだろう。

「えっと……この席いいですか？」

「うむ、構わんのじゃ」

適等に空いている席に座り、隣の座席の……男子、ですよな？

「あの、男ですよね？」

がしっ！

何故かいきなり手をつかまれた。

……やはり女子だったのでしょうか？

「ありがとうなのじゃ！やはりワシは男に見えるのじゃ！ワシは木下秀吉じゃ。秀吉で構わぬ」

「えっと、どういたしまして？シオ＝レッドフィールドです。シオでいいですよ」

「うむ、了解したシオ」

どう見ても魔力基盤が男の形だったので半信半疑だったのだが、合つてたらしい。

この容姿は魔力基盤で判断できる自分とはかく他の人物に一目で見分けろつてのはちよつと難しいだろう。

……いや、待て何を考えているのです私。

どう見ても男の制服を着てるから男子でしょう。

どうやら魔力基盤のおかげで正気は保っていますが、性別誤認の呪いでもかかつてるのでしょうかこの方は？

「まあいいですか。ちよつと私寝てますね」

「それに、吉井明久だっている」

シーン、そんな擬音が似合いそうな光景だ。

何故かその言葉に目覚めた詩織は教卓に——なんかさっき見たのと微妙に違うけど、なんででしょう？——

いるワイルドな男子が言い放った言葉に場の空気が停滞していた。

『誰だよ吉井明久って』

『聞いたことないぞ』

「ホラ！折角上がりかけた土気に翳りが見えてるし！僕は雄二たちとは違って普通の人間だから、——ってなんで僕を睨むの？

土気が下がったのは僕のせいじゃないでしょう！」

な、何事ですか？

「そうか。知らないようなら教えてやる。こいつの肩書きは『観察処分者』だ」

観察処分者、なんだか不吉な単語ですね。

『……それってバカの代名詞じゃなかったっけ？』

「ち、違つよちょっとお茶目な十六歳につけられる愛称で」

「そつだ、馬鹿の代名詞だ」

「肯定するなバカ雄二ー!!」

吉井明久、馬鹿つと……メモする必要はありませんね。

ふむふむ、話を聞くに召喚獣に実態をもたせてそれにフィードバック機能をつけられた人物のこのようですね。

おそらく学園からの褒美というよりは罰なんでしょう。

何をやったんでしょねこの吉井とかいう方。

「気にするな。どうせ、いてもいなくても同じような雑魚だ」

「雄二、そこは僕をフォローする台詞を言うべきところだよな?」

「とにかくだ。俺達の力の証明として、まずはDクラスを征服してみようと思う」

「うわ、すっごい大胆に無視された!」

……一人を除いてクラス振り分け試験で下位の成績をだしたFクラスにも関わらず初日に試召戦争を仕掛ける、ですか。

しかも一つ上のEクラスではなくDクラス。

端から見ればアホそのものですね。

これで無策に攻撃を仕掛けるならばアホの証明なのですが……まあ、ゆっくり見極めさせて頂きましょうか。

しかし雄二ですか。

聞き覚えがありますが、はて?

「皆、この境遇は大いに不満だろう？」

『当然だ！！』

「ならば全員筆^{ペン}を執れ！出陣の準備だ！」

『おおーっ！！』

「俺達に必要なのは卓袱台ではない！Aクラスのシステムデスクだ」

『うおおーっ！！』

「お、おー……」

ピンクの小さい女の子が小さく握り拳を挙げていた。
ふむ……

「負け犬どもを上手く焚きつけてますね」

冷静に考えれば自分より上のクラスへ十分な準備なしに戦うなど自殺行為もいいところだ。

にも関わらず雄二とやはは上手く周囲の戦意を漲らせている。

……Fクラスがそのようなことすら考え付かないアホだという可能性は否定できないが。

「何か言っ たかのシオ」

「いえ、なんでもありません」

秀吉が不思議そうに聞き逃した声を問うがそれを流す。

面と向かって言う気はないが簡単に負け犬が下克上をできるほど世の中はうまくない。

「明久にはDクラスへの宣戦布告の使者になってもらう。無事大役を果たせ！」

「……………下位勢力の宣戦布告ってたいてい酷い目に遭うよね？」

……………何やら明久という人物が人身御供として差し出されようとしているが、まだ深く関わるべき時期ではないだろう。

1 - 2 傍観（後書き）

二次作品って実はこれが初めてなんだけど、セリフ引っ張ってくるのが面倒だな・・・。

うつ手間が面倒なだけで実際はオリジナルより楽なんだろうけどね。

1 - 3 スパイ？（前書き）

今回Fクラス主要メンバーに認識される回。

ちなみに毎日更新するとかほざいておきながら九月三日は外泊して
ていないのでお休みです。

1 - 3 スパイ？

明久が「騙されたあつ！」と叫びながらボロボロの姿で駆け込んできたのを確認してから詩織は携帯電話を取り出した。

袋叩きにされている様子から一応宣戦布告には成功したようだ。ならばあとは雄二……

「雄二？……雄二、ですか」

ひょっとしてあの雄二だろうか。

「秀吉君、雄二君の苗字を教えて欲しいんですが」

「苗字？坂本じゃが……何か気になることでも？」

「いえ……そうですか。ありがとうございます。坂本雄二……あの坊や」ですか」

詩織は坂本雄二と幼少の頃に会ったことがある。

彼の幼馴染である霧島翔子とは今でも連絡を取り合う仲だったが、まさか雄二と同じクラスになるとは思いもよらなかった。

というか詩織の知っている雄二は優秀な成績をとっていたので神童と呼ばれていたのだが……いったい何があってFクラスにいるのだろうか。

「ならば予定通り、翔子と連絡を取りますか」

携帯電話から翔子の電話番号を選び、かけようとする前にふと思う。とりあえず教室の中じゃあれだから屋上にも行ってかけようと。

ところで教室を出る時にドイツ語でペットの躰をする時にしか使わないような単語が聞こえたのは気のせいだろうか。

屋上への階段を登っていき、その入り口で雄二が険しい顔で突っ立っていた。

何してるんだあの馬鹿は。
隣で姫路さんが困っているじゃないか。

「雄二、何してるの？」

「しっ！見てみるあれを」

「あれ？」

僅かに空いた扉から声が聞こえてくる。
その声を聞き取るように扉に耳をつけると、高いながらも力強さを感じさせるそれが聞こえてきた。

『ええ。構いませんよ』

あのロングポニテの男子生徒は確か転校生の……

「えっと、塩〓レフィさんだっけ」

「お前の脳の容量はどれだけ小さいんだ」

「あの吉井君？ シオ〓レッドフィールドさんですよ」

そうそう、そのシオ〓なんたらさん。

結構線が細いのが印象的だったんだけど、皆なんで屋上に入らないんだろう。

「……スパイの疑惑」

そう考えているとムツツリーニが答えてくれた。

なるほど、スパイじゃこうやって警戒するのも仕方ないね……

「ってスパイ！？」

「大きな声を出すな！」

『Fクラスですか？今は様子見といったところですね』

「！？」

『大丈夫ですよ。貴方の思惑通りに進む程度には協力してあげますよ。浅からぬ縁がありますからね』

「ゆゆゆゆ雄二！？」

「ちい！振り分け試験を受けていないということから学力には期待していたが、とんだ転校生だな」

「ふむ……そういうふうには見えなかったのじゃが」

そういえば秀吉だけはシオ君と話してたんだっけ。

「ムツツリーニ」

「——（グッ）」

既に用意しているらしいボイスレコーダーを扉の隙間に入れているムツツリーニ。

「あんたら、何してんの？」

島田さんが頬を引き攣らせてその様子を見ていた。そんなの決まってるじゃないか。

「脅迫の準備だよ」

『Aクラスとの試召戦争は——もし坂本雄二が馬鹿でなければ、既に戦い方は決まってるでしょう。』

なら翔子ちゃんがやるべきこと、分かってますね？』

「しょ、翔子だと!？」

突然雄二が席を立ち上がり驚いた表情を浮かべる。

「あの、坂本君？」

傍にいた姫路さんが心配そうに雄二に声をかけるが、聞こえていないのか反応がない。

「確か……霧島翔子かの」

霧島翔子って……

「霧島さんってAクラスの代表だよね！？あわわわわ」

「……………確定」

『もし彼が変わっていなければそれも考えたんですが……まだ負け戦の気配が濃厚ですからね。』

何ともいえません。私は基本勝てる勝負しかしません。

……………そうですね。わかりました。また会いましょう』

ごくりと唾を飲み込み、シオ君が携帯をポケットの中にしまつ。そしてシオ君が一言。

「ところで、いつまで覗いてるんですか？」

『！？』

「ばばばれてるよ雄二！」

「馬鹿！名前を出すんじゃないやねえ明久！」

「落ち着くんじゃ二人とも！」

「……………危険」

「あの、別に決して覗いてたのはやましい気持ちがあるわけじゃないんですけどね」

「姫路さん落ち着きなさい。そして吉井は落ち着きなさい!」

「ぶべらっ!?!」

何故か島田さんに殴られた。

「何をするんだ島田さん!?!」

「壊れたテレビは殴ったら治るでしょ?」

「僕の頭と電化製品と一緒にするんじゃない!」

まったく失礼な。

「むしろ劣ってるだろ」

「同感じゃ」

「……………(こくこく)」

「みんななんて嫌いだ!」

「わ、私は吉井君は電化製品よりは賢いと思います!」

「姫路さん……………貴方は天使だ!」

がしつと姫路さんの両手を掴むと小さな悲鳴をあげて硬直した。

「……………よりは、ってある意味貶されているんじやが……………」

「……覗きがバレているというのに何ですかこの騒ぎは。まあいいです。今日の試召戦争、頑張ってくださいね？」

まさか彼らも屋上に来ると思わなかった。
詩織は次に雄二達がどう動くかをシミュレートしながら校庭の隅に座りお弁当を取り出す。

「……………」

ご飯にピンクのハートマークが書かれていたがスルーする。

「しかしスパイ疑惑ですか」

彼らは自分達の会話が筒抜けだとは思っていなかったようだが、詩織には筒抜けだった。

聴力を強化すればあの程度の距離と声、簡単に聞き取れる。
もともと今回の試召戦争にはあまり積極的に出る気はなかった。

「もしクラスに私がスパイであることをばらされれば動きにくくなるし居心地も最悪になりますね。問題ないでしょうが」

おそらく雄二はそんなことはしない。

それは私が孤立したら可哀相だとかそういう同情ではなく、意味がないからである。

現在Fクラスの士気というものは雄二の扇動じみた行為によって一時的に上げられたものだ。

そんな中獅子身中の虫と言わんばかりにスパイである私の存在が露見したらどうなるか。

どの程度かは想像できないが間違いなく士気は落ちるだろう。

雄二が賢い人間のままだと過程すればDクラスへ戦争を仕掛ける理由は計略以上に士気を上げるという理由があるはずだ。

戦力が最低のFクラスが勝つにはせめて士気だけでも高くなければ戦略も何もない。

まずは士気をあげ、実績を作り、自分の策に従えば勝てると刷り込まなくてはいけないのだ。

「となれば、やはり静観ですか」

まだ私が女であるという秘密をバラしても大きな反応は得られそうにないので探りは流す感じでいきますか。

Dクラスの攻略が終われば次はBクラスか……………？

Aクラスとともに正面から戦うとは思えないから、おそらく何か変則的な戦い方をするはずだ。

それも両者に同意があつた成立する類の何かが。

一騎打ち？

Fクラスに秘密兵器がいればこの勝負は成り立つのだが、そうなればAクラスが黙ってそれを受けるわけがない。

試召戦争で隠し切るという選択肢も存在するが最低クラスが試召戦争を仕掛けるのにそんな戦力を遊ばせておく余裕はないはず。

となれば脅して試召戦争に勝利する？

雄二がそこまで腐っているのなら有効な手段だが翔子にどこまで通じるか分からないのは幼馴染の雄二も承知しているだろう。

「……………」

それが駄目なら代表である翔子をどこかに呼び出して袋叩きにする？
試召戦争にそんな迂闊な行動を雄二に惚れている翔子ならともかく
Aクラスの周囲が許さないはず。

そもそも翔子はそこまで馬鹿じゃないし、Fクラスの実力じゃ学年
最強に束になっても敵うはずがない。

「……………まさに無理難題ですね。まあ期待してますよ……………雄二君」

1 - 3 スパイ？（後書き）

基本詩織の行動とかの理由とか考察を自分なりに書いてみた。

他の作者の批判をする気はなかったけど、それに類似したことを書いてしまっていることを自覚しているので基本スルーでもオケです。大前提として自分は理屈やじゃないのでご都合主義は嫌いじゃないということ覚えておいてもらえれば幸いです。

他の方のバカテス小説読んできると負けたらさらに設備が悪くなる（Fクラスメンバーという最下位勢力という悪条件の上で）のに最初から召喚戦争に乗り気だったり過去の明久雄二喧嘩事件での出会いという下地があって親しい原作の男メンバー達と何の脈絡もなく仲良くなったりしてるんですね。

まあ彼らは人が良いのですぐに仲良くなれる素質はあるんですが、それなりの理由か事件は必要だと思っんですよ。

それにバカテス知ってる知識あり転生者ならともかく、何故か点数が高い知識なし転生者がFクラスに加入して何の文句もなくたかだかFクラスの代表である雄二に従う理由ってあんまないと思います。馬鹿じゃない限り、ですが。

無双できるなら雄二に従う理由がないし、無双できないならそもそも雄二に従ってAクラス打倒なんて夢を見るはずがない。

そもそもそんなに学力高いなら試験高よりもっとレベルの高い高校にいけよ……ゲフンゲフン。

特にAクラスの霧島翔子すら圧倒できる点数とか厨二設定だったらDクラス如き特攻かけるだけで終わりますよね？

普通の人と違うこと書いてる俺格好良いつてわけじゃないし、リアル思考とか言わないけどそれなりの理由ってのを書いていこうと思

ってます。

ちなみにこう最初からスパイ疑惑かけられる主人公って珍しいんじゃないかなと思った。

詩織は試合に負けて勝負に勝つというのなら受け入れますが、勝負に負けるのは大嫌いなので今回の敗戦濃厚の召喚戦争に参加する気がおきません。

実際詩織の考察が一番まっとうで雄二のことを信用していなかったらAクラスへの宣戦布告って自殺行為である他ないし、不幸でFクラスに入れられたのに負けたらさらに設備が悪くなるからモチベーション上がるわけないんですね。

詩織が参加するには召喚戦争に勝つ以外の理由を見つける必要があります。

色々切り貼りしすぎたので後書きの文章滅茶苦茶な自覚ありですよ！

1 - 4 まだまだ傍観（前書き）

一日空いて更新完了。

今回あんまり進展ありません。

というか積極的に介入してないので最初のほうは進展殆どないかも。

1 - 4 まだまだ傍観

先程Fクラスの面々が意気揚々と出かけていったのが5分前。

Fクラスの教室まで聞こえてくるサモンやらサーモンやらの叫び声をBGMにしつつ詩織は本を読んでいた。

タイトルは『ミジンコの怒り』。

ミジンコって怒りとかそういう感情あるの？という疑問の前にミジンコが怒ったところであ………という諦観を思わせた一冊だ。

つい気になって買ってしまったのだが、面白くはない。

ただ面白くもないので、ある意味出オチである。

「レッドフィールド。お前は行かないのか？」

教室に少数の護衛と残っていた坂本雄二。

白々しいですね、できればスパイ疑惑のかかっている私にFクラスの戦力を見せたくないでしょうに。

「ええ。私が行ったところで戦況に変化はありませんから」

言外に行ったところで戦わないと言いつつ本から目を離さない。

「……一つ聞きたいんだが」

「どつぞ」

「振り分け試験を受けていないと言っていたが、理由を聞いていいか？」

つまり雄二は本心はどうあれFクラスに来た詩織のことがよくわかっていないのだ。

スパイをするにしてもFクラスは最弱クラスだ。

本来そのような絡め手をするまでもない相手だし、何よりFクラスに行くことになる人間にメリットがない。

ならば突発的な理由で受けられなかったのでスパイということをしているのか、そう聞きたいのだ。

もしくは振り分け試験を受けなかったというのは建前で、本当はFクラス並の成績であることも否定できないのだが。

「少々外国で遊びすぎまして。気付けば振り分け試験が終わってたんですよ」

「……………馬鹿か？」

「クラスの設備に興味がなかっただけです」

これは事実。

FクラスだろうがAクラスだろうが設備で学校生活がそこまで変わるわけではない。

……………と想像していたのだが、内心詩織は想像よりだいぶ酷いと思った。そう過去の自分に嘆いていると雄二が近づいて小声で言った。

「なぜ、スパイを？」

直球ですね。

そう思うものの、確かにこのタイミングがベストなのだろう。

これから先Aクラスを狙うという発言が戯言でないのならばスパイという存在は邪魔になってくる。

地力で低いFクラスがAクラスに勝つために絶対必要なのが正攻法

ではない搦め手。

搦め手は相手に知られればそれだけで敗北の原因となり、さらに力量差があればそれが如実に出てくる。

ならばこそ今ここで詩織の真意を確かめたいというのが雄二の考えだろう。

「はて、何のことでしょう?」

以上の理由から例え詩織がとぼけようとしてもその追及は止む事はないだろうが、ついとぼけてしまう。

「屋上での会話は既にボイスレコーダーでとつてある。バラされたくなければ言う事を聞くんだな」

やはりそうきたか。

いや、雄二に取れる行動はもはやそれしかない。

「分かってるんですか? 今Fクラスは薄氷の上を渡っているようなものです。そんな中私の存在の露見は貴方の望むところではないのでは?」

雄二が苦虫を噛んだような顔をする辺り、考察は少なからず間違っていないようだ。

「もし私がスパイであるならばどっちでも構わないんです。Fクラスが自滅するもよし。情報に価値が出るもよしです」

「……ちっ」

「……と言いたいところですが」

「ああ？」

「私はスパイではありませんよ。今のところ自己申告ですが、それだけは保証しましょう」

そう言い放つと疑わしい目で見ていた雄二は何かを考えるような素振りを見せた後、紙に何かを書いて男子に渡す。

「横田、これを明久に言って来い」

「わかりました」

ムツツリーニと呼ばれていた少年のように若干忍者っぽい少年が教室から出て行く。

Fクラスを出て右手にすぐある渡り廊下で戦っているんだろうが、近いとはいえ代表が出るわけにはいかない。

だから伝令を使ったんだろうが、正直無駄だなと詩織は思った。

「雄二君？貴方の学力はどれくらいなんですか？」

「なんだいきなり」

「いえ、Aクラスを破ると言ってるわりには正面突破なんて上位クラスに挑むにしては似合わないことをしているなと思ひまして。

貴方が愚鈍でなければ何か隠し玉があると考えていいのでは？」

何度も言うようだがFクラスは最下位で、地力は上位クラスと比べるまでもなく劣っている。

そんな劣っている戦力で時間稼ぎとはいえ正面から策もなしに戦うというのは愚かというほかない。

確かに時間稼ぎは出来るのだが相手より確実に戦力の低下が早いので次に繋がらないのだ。

試召戦争に勝つための条件は相手クラスの代表を討ち取ること。

その時になって戦力が足りませんでしたでは意味がないのだ。

「相手は曲がりなりにも上位クラスです。普通なら放課後の混雑する時間を狙って奇襲するのが定石です。

ですが、私はFクラスの戦力を把握してませんがその作戦には圧倒的に足りない要素があります」

「言ってみる」

「文字通り、切り札です。例えば相手の代表がDクラスどころかAクラス並の学力を持っていたとしても撃破できる切り札。

そもそもそれがなければAクラスへの勝率はどんな手を使ったとしても1%を切りますよね？」

「否定しないが、肯定する理由もないな」

でしょうね。

そう返してクラスの隅で補充試験をしているピンク髪を見る。

確か彼女は「なんでここにいますか？」と言われた子だ。

あの言動から有名人であることは明らかなのだが……………それがどういった面で有名なのか。

成績優秀者であるにも関わらずFクラスにいることがおかしかったから？

ありえるが、根拠がない。

「坂本」

「あ？なんだ須川」

「吉井が時間稼ぎの為に偽情報を流して欲しいと言っていた。何か良い案はないか？」

「そうだな……こんなのはどうだ？」

「ごによごと須川の耳元で何かを呟く。
すると須川も何を聞いたのか吹いた。」

「その放送を流したら今日はもう帰っていい。明久の馬鹿が暴走するだろうからな」

「あ、ああ。……まあいいか別に」

何を納得したのかは知らないが教室から小走りで出て行った須川。
雄二が何か成し遂げたかのように満足げに笑っていたが、特に気にしないことにした。

ピンポンパンポーン 連絡致します

はい？これってさっき出て行った須川君の声ですよ？

船越先生、船越先生。吉井明久君が体育館裏で待っています。
生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです

…………… 船越先生という人のことをよく知りませんが、大丈夫なん
でしょうかこれ。

「あの、雄二君？」

「大丈夫だ。明久ならきつと幸せな家庭を作れるさ」

「よ、吉井君は同級生と家庭を作るべきだと思います！」

帰って来たばかりのピンク髪が何か言っていました、あまりつつこむのもあれでしょう。

『皆、吉井隊長の死を無駄にするな！』

『絶対に勝つぞーっ！』

教室の外から聞こえてくる雄叫び。

なんでか士気が上がっているようだが………いったいどういう理屈なんだろうか。

というか死って何？

1 - 4 まだまだ傍観（後書き）

今更ですが詩織の容姿はリリなのの高町なのは似です。
ちなみにこれは別の詩織の小説とある小ネタの名残です。
作者はリリなのを二次知識でしか知りませんがね。

1 - 5 あれ？バカテス……？

「明久、よくやった」

「校内放送、聞こえてた？」

「ああ。バッチリな」

補充テストを終えたらしい吉井明久が戻ってきた。

詩織の目には明久から修羅の気配がするのだが……いったい前線で何があつたのだろう。

「雄二、須川君がどこにいるか知らない？」

須川という人物なら雄二の指示で帰っていたはずだと詩織は思った。馬鹿が暴走するというのはやはりあの放送に係るものだろうが……何で吉井明久はここまで焦っているのだろう。

「ん？先程シオを見なかったのじゃが、どこにいたのかの？」

今にでも殺人を起こしそうな吉井明久だが、まあこいつらはギャグ補正で大丈夫だろうと思いい目を離す。

1コマ次にいけばボロボロになったはずの服が再生してるとかありそうである。

「読書をしていました」

「ほう……何の本じゃ？」

「『ミジンコの怒り』という本です」

靴からデフォルメされたミジンコが手を振り上げているらしい絵が表紙に描かれている本を取り出す。

案の定それを見た秀吉は微妙そうな顔をして聞いた。

「……それ、面白いのかのう？」

「いえ、微妙です」

最後まで読み終えたが特にどんでん返しもなくミジンコが怒っていただけだった。

いったい作者は何を考えてこんな小説を書いたのだろうか。

「はっ！」

「はい？」

突如包丁と何かを入れたらしい先が丸くなっている靴下を持った吉井明久が卓袱台を蹴散らしながら掃除用具入れに入っていた。

……えっと？

「秀吉君。彼、何をやってるんでしょう？」

「……放っておいてあげるのじゃ」

「さて、馬鹿は放っておいて、そろそろ決着をつけるか」

坂本雄二が教室の扉に手をかけたのを皮切りにクラスメイトがそれに教室を出て行く。

「そうじゃな。ちらほらと下校しておる生徒の姿も見え始めたし、
頃合じゃろつ」

「……………（コクコク）」

「おっしや！Dクラス代表の首級を獲りに行くぞ！」

『おっつ！』

坂本雄二もそのまま出て行くのかと思いきや出口の傍で少々立ち止
まっている。

「どうしたんですか？」

「いや、な」

ニヤリと野性的な笑みを浮かべ、掃除用具入れに向かって

「あー、明久」

「？」

「船越先生が来たっていうのは嘘だ」

そついい残すと坂本雄二は今度こそ教室を出て行った。

残されたのはやる気のない詩織と掃除用具入れに何故が入っている
吉井明久のみ。

恐る恐る格子から覗かれた明久の両眼と目が合い、そのまま見詰め
合うこと数秒。

「逃がすか、雄二いつ！」

掃除用具入れを蹴り開けて包丁と靴下を持ったまま教室から飛び出していった。

これで教室には誰もいなくなったのだが……

「どうしましょう」

まだまだ坂本雄二がAクラスを獲るに足る人物なのか見極め終わらない。

だというのに坂本雄二の為に戦うというのはありえないのだが——戦いという衝動は確かにある。

「……本当にどうしましょう」

詩織が困っているとFクラスの教室がガラツと開いた。

誰か忘れ物でしょうか。

そう疑問に思い振り向くとそこには見たこともない生徒が。

「代表はいないのか」

「あら、Dクラスですか。いい生贄がきましたね」

「は？」

「Fクラス詩織」レッドフィールド、試験召喚^{サモン}」

「待ち伏せか！？」

突然召喚獣を召喚した詩織に合わせてDクラスの男子生徒は驚きながらも召喚する。

別に待ち伏せなどと意図したわけではないが、これでも戦争という言葉には心惹かれるものがあるのだ。

『Dクラス 笹島圭吾 VS Fクラス 詩織』レッドフィールド
現代国語 102点 VS 0点』

詩織の点数を見た男子は驚愕にその顔を固まらせる。

白いドレスを羽織ったサイドポニテの杖を持った召喚獣……召喚獣というより魔法少女のような出で立ちだ。

対して詩織は一人思考を漏らしつつも考えていた。

「やはり名前の虚偽は不可能ですか。でももう片方の細工は成功したようですな」

「馬鹿な！？0点なら召喚獣を出せるわけがない！」

「まあ普通は無理でしょうねえ」

何故詩織が通常ではありえない召喚獣を出して平然としているのか。それは単純に言えば詩織がそういうように弄ったからである。

偶然のオカルトと科学の融合——詩織にとってそのオカルトはまさに子供騙しレベルであった。

術式が滅茶苦茶だった召喚機能を弄る際にこっそり自分のコードを潜ませておいた。

それが0点開始召喚。

「ま、まあいい。0点なら一撃で死ぬだろ」

そう良い笹島圭吾の持った刀が振り下ろされる。

詩織はすぐさま召喚獣へと意識を集中し、振り下ろされた刀をバツクステップで避けた。

しかし避け切れなかったのか髪が数本が切り裂かれる。

「髪とはいえ、召喚獣の一部には違いないので本来ならここで終了なんですよね」

『Dクラス 笹島圭吾 VS Fクラス 詩織』レッドフィールド
現代国語 102点 VS 3点』

「なっ……回復だと!?!」

「いえ、ちゃんとしたダメージですよ?」

「回復してるじゃないか!?!ちっ、召喚システムのバグか?」

ノー、そう詩織は心の中で返答をして杖を前方に構える。

それはまるで何かを打ち出す姿勢のような……

「ディバイン、バスター」

キューーンと何かを溜めるような音が鳴り、放たれるは細い桃色の光線。

それは3点で何ができるかという思いと召喚システムのバグだと思っていた笹島の硬直を狙った一撃。

倒すには頼りない細い光線はそのまま笹島の召喚獣の顔に当たり――

「ブラスターシステム、リミット1!リリース!」

『Dクラス 笹島圭吾 VS Fクラス 詩織』レッドフィールド
現代国語 102点 VS 103点』

チュピーン

「爆殺！」

「はあああああ！？」

太くなつた光線は召喚獣の顔を吹き飛ばし、あっというまに笹島圭吾の点数が0になる。

何故こんな意味の分からない仕様になっているのか。

それは妹のクリスに「お姉ちゃんはい白い魔王に似てるから、召喚獣はこんな方がいいの！それで腕輪の効果は……」というおねだりが理由だ。

あまり召喚獣に執着のなかった詩織が要望通りの仕様にしたのだが

「ふむ……調整が必要ですね」

やはり妹の要望に完璧に答えるのは無理だったらしい。

だいたい腕輪のスターライトブレイカーとかいう機能、周囲の魔力を吸い取るってどう再現するんだと。

点数を消費して大火力を打ち出すだけならできるのだが、それでは妹の要望に答えていない。

どうしようか……そう考えつつ西村先生に補修へと連れて行かれる笹島のことを見送った。

『うおおおーっ！ー！』

初戦闘の割には悪くない結果だったと満足していると外からFクラス
の雄叫びが聞こえた。

「どうやら此度のDクラス戦は終わったようですね。なら……坂本
雄二が取る次の手はきつと……」

1 - 5 あれ？バカテス……？（後書き）

詩織の召喚獣が早いのか遅いのかわかんけど出てきました。

前世が魔法おかるの扱いに最も優れた魔王という設定から通常戦闘では最強に近い動きをします。

操作技能は明久より遥かに上で、システムを弄ればさらにチートにできますが詩織はチートとか嫌いなので武器であるレイハさんの扱い難易度は通常の武器より遥かに高く設定してます。

まあ使いこなせればバインドだのアクセルシューターだのディバインバスターだの一見何そのチート状態になりますが。

1 - 6 我が家でのヒエラルキーは一番下なのです（前書き）

今回バカテス要素から少し離れます

1 - 6 我が家でのヒエラルキーは一番下なのです

問 以下の文章の（ ）に正しい言葉を入れなさい。
『光は波であって、（ ）である』

姫路瑞希の答え

『粒子』

教師のコメント
よくできました。

土屋康太の答え

『寄せては返すの』

教師のコメント
君の解答はいつも先生の度肝を抜きます。

吉井明久の答え

『勇者の武器』

教師のコメント
先生もRPGは好きです。

シオ＝レッドフィールドの答え

『忌まわしい属性。あと熱くて痛い』
教師のコメント

何の体験談なんでしょう？

あれから嬉しそうに帰って来たFクラスの面々を尻目に詩織は一人帰路を歩いていた。

あの様子から見るに坂本雄二は説得に成功したようだが……聞こえてきた会話から察するに設備交換は行わなかったらしい。

深く考えていなかったが、今Dクラスの設備を手に入れるのは上策じゃなかったのだろうか。

詩織は敗者は徹底的に倒すという考えを持っているので今回の策は納得できなかった。

聞くところによると姫路というピンク頭の人物がAクラス並の強さを持つらしいが、それでも単一戦力だ。

今度DクラスがFクラスを侮らずに戦術を練って戦争を仕掛けてきたならば今度負けるのはFクラスだ。

もしもAクラスと戦争をしてFクラスが勝ったらどうなるか？

「……不味い方向に向かってますね」

間違いなくAクラスの設備を狙って負けたDクラスが反旗を翻す。

Aクラスの設備を得たFクラス……どのクラスから見ても力モ同然だ。

ならばDクラスには負けてもらって上下関係を教えると共に負け犬として戦争を指を啜えて見させておけばいいのだ。

「少し生温くありませんか雄二君……」

いったいDクラスとどのような取引をしたのかは知らないがおそらく上位クラスとの戦いで有利に運ばせる為の一助だろう。

しかしあまりに強引すぎる。

Aクラス打倒のみならばそれでいいかもしれないが後が続かない。いったいどうということだろう。

「まさか設備が目的ではない……？」

ありえる話だ。

自分の力を誇示したいか坂本雄二。

翔子から話は聞いていたがまだ暴れたりないのか。

そんなにまでも無力だった自身を否定したいのか。

「調べる必要がありそうですね」

これまではただの翔子の幼馴染ということに興味がなかったから調べなかった。

しかし試召戦争の目的が設備でないならそれは代表として失格だ。

もしこの仮説が正しければ坂本雄二は自分だけの都合で動いている。

「ま、学生だから仕方ありませんけどね」

お金をもらって代表しているわけでもないのにクラス第一で行動するなんて人間無理な話である。

しかしそれならば詩織としては雄二の勝手に巻き込まれるわけにはいかないのだが……。

「とりあえずさし当たったの障害は……」

考え事をしている間についた我が家の門を見上げる。

これでもかというくらいに広い敷地とでかい門——我が妹が待つ実家だ。

両親が仕事で海外に行っているのでもないのは確認しているのだが妹だけは外出を確認していない。

「……………」

心なしか実家から変なプレッシャーを感じる詩織。

長い期間放置してきた妹のクリスに対する引け目故の錯覚なのだがこのプレッシャーに対抗する術を詩織は持っていなかった。

数度門の鍵を開けようとして躊躇うこと数分、ついに決心をした詩織は実家の敷地へと足を踏み入れた。

「あ、お姉ちゃん！やっと帰って来た！」

豪邸の前に仁王立ちしていたのは詩織の妹、クリス＝レッドフィールド。

「あー！どうして男の子の制服着てるの！？また子供の頃の病気なの！？」

「……」

「目を逸らした！？どうしてお姉ちゃんはそんなに男の子の格好したがるの？」

まさかまた前世が男で魔王だとか言い出さないよね」

自身を咎めるクリスの視線に脂汗を浮かばせながら詩織は必死に目をそらす。

クリスには既に魔法を見せており、前世の話を一通りしたのだがいつまでたっても認めようとしない。

まるで詩織のほうがおかしくて妄想癖があると言わんばかりに食いついてくるのだ。

魔法のことは信じてくれているが前世のほうは信じてくれないクリスに詩織の神経は磨り減るばかりだ。

「く、クリスちゃん！私が留守の間、何かありましたか？」

みえみえな話の逸らし方にクリスは一瞬顔を顰めたが、すぐに溜息を吐いて言った。

「特に何もなかったよ」

「そうですか。それは何よりです」

「……何より？」

「はっ！？」

再びクリスの怒りゲージがグングン伸びていくのを詩織は感じた。いったい何が失言だったんだ、魔法すら使用してその解を得ようとするも一向にそれにたどり着けない。

「屋敷に誰もいなくて寂しく過ごしていたのに何より？」

し、しまったですよ！？

そう心の中で叫ぶが現実で叫んではいけない。

「ぶ、無事で何よりということですよ。別にクリスちゃんが一人で良かったなんて言ってませんよ。本当ですよ」

必死に言葉を紡ぐがその度にクリスの顔が阿修羅と化していく。

「お姉ちゃんの……」

クリスの手に淡い光が灯り、それが振り上げられる。

幼い頃にせがまれてついつい教えてしまった付与魔法だ。

「待ってくださいクリスマスちゃん！？その拳で殴られたらお姉ちゃん
とっても痛いんですよ！？」

「馬鹿あああああーっ！！！」

「にやあああああああ！？」

熱くて痛かったその攻撃の余韻、というか鈍痛をしっかりと確認しつつ詩織は上半身を起こした。

あの後気絶したらしい詩織は自室に運ばれて寝かされていたようだ。
窓の外を見ると既に暗くなり始めており、もう夜ご飯の時間だ。

「……急いで作らないといけませんね」

よく外出して家にいない詩織がクリスマスと約束したことの一つ。

詩織が家にいる時は詩織がご飯を作ること。

あの頃は実に簡単な料理しか出来なかったが、それでもとクリスマスが
我俥を言った結果だ。

舌が肥えている我が妹の判定で厳しく批評され、今ではプロ並に上手に
手が作ることが可能なのだが今でも慣れるようなものじゃない。
だって

「花嫁修業の一環ですからねえ」

誰もいない屋敷を歩き辿りついたキッチンの冷蔵庫を確認しながらの一言。

後で知ったことなのだがあれば母がクリスマスへ入れ知恵したらしい。

そのおかげで一通り家事が出来るようになったのだが……。

今では男に対する未練は殆どないのだがそれでも花嫁修業にはまだまだ抵抗がある。

学校で男の格好をしていたのもそれに対するささやかな抵抗なのだがきつと両親には伝わってすらいないだろう。

というか伝わっていたならどんなことをしてでも女の子の制服を着せてくる。

「はあ。下ごしらえ面倒です」

時計を見てみると既に時刻は7時。

ちゃんとしたものを作ろうとするならば料理が出来るのは9時過ぎ。

（またクリスちゃんに文句言われます……）

そしてきつと機嫌の悪い今日は料理にたくさんのかきつけられるのだろう。

そのことを考えて、詩織は若干鬱に入りながら手を動かすのだった。

1 - 6 我が家でのヒエラルキーは一番下なのです（後書き）

魔法少女シオリンも妹には勝てない！

今回と次回は主人公の私生活的な何かが書かれるのでバカテスキャラには絡みません。

ところで勘違いしてもらったらあれなのでここで明記しておきますが、別にこの小説はアンチ小説ではありません。

詩織自身も雄二が嫌いというわけではないので、あくまでそういう時期なんだと思っただけはおけです。

というかなかなか進まないなあ……。

1 - 7 理由

何とか妹様のクリスマスを料理で黙らせることに成功し安堵する。
不機嫌ながらも無言でちょこちょこ食べてるクリスマス可愛いです。

「何？」

「何でもないですよ」

「……………」

期間を空けて久々の手料理なので思い出補正もあり、文句はないようだ。

といつても食べる前にご飯が遅かったことに文句を言われたが。

「………… お姉ちゃん」

「何ですか？」

「なんで文月学園なの？」

突然、しかも何の脈絡もなく出された質問に戸惑うがその目に不満が内包されているのを詩織は確認し、どう答えようかと思案する。
クリスが文月学園へと入学したのは詩織がそう指示したからである。
おそらくそのことに対する解答を求めているのだろう。

「お姉ちゃんと同じ学校に通えるのは素直に嬉しいよ。けどなんで試験高なんて…………」

確かに注目が集まっている期待の高校かもしれない。

だがレッドフィールド家の人間が通うほどの価値があるのかと言ったら疑問だ。

そんな臨床試験のようなもの、別の人間にやらせればいいのだ。

「クリスちゃん」

「何」

「私がクリスちゃんに魔法を教えた時の事、覚えてる？」

「……………」

無言ながらも頷くクリスを確認してから詩織は言葉を続けた。

「魔法は決して他人に見せてはいけない……………これがクリスちゃんに誓ってもらった最初の誓約」

この世界で生きていく為には魔法は不必要な力だ。

可愛い妹のおねだりに魔法をつい教えてしまったクリスに甘い詩織だが、それでもその約束だけはしたのだ。

「私が『レッドフィールドの魔女』って呼ばれているのは知ってますよね？」

「……………この世を支配する魔女」

「そうです。確かに魔法という反則技で色々なしてきましたが、それは同時に敵を作るということです。

私がこの屋敷にいなかった1ヶ月間に魔法目的で襲撃を受けた回

数、分かりますか？」

「……分からない」

「未遂も合わせれば73回。一日に2回以上襲撃されてます。それだけ魔法というものには価値があるんです」

文月学園に注目が集まっているのもオカルトという力を別の何かに活用できないかという期待でもある。

だからこそ文月学園の偶然によるオカルトではなく、完璧に制御してオカルトを使えている詩織はこれ以上ない魅力的な人材なのだ。

「もし私とその道の人間に捕まれば魔法の知識を全て喋るまで尋問、拷問のコンボでしょう。」

クリスちゃん。私は、魔女である私は全てを跳ね除ける力があります。しかしクリスちゃんは？」

確かに詩織はクリスに魔法を教えた。

しかし本来魔法というものがないこの世界では余程の才能と知識がなければ着火の魔法すら使えない。

10年近く教え、鍛錬してきたクリスでさえ詩織基準の判定で使えるのは初級魔法のみ。

魔法を使うくらいなら銃を撃ったほうが強いというレベルなのだ。

「つまりクリスちゃんを文月学園に通わせるのはカモフラージュです。オカルトの学校に通っていたならば多少のオカルトは黙認される。」

「といってもそれは楽観的すぎますがね。あくまで目的は私の手が常にある場所にいるということです」

今もたまに人質目的でレッドフィールド家の人間にちょっかいをかける人間もいるがそれは極々少数だ。

そもそもとんでもない金持ちであるレッドフィールド家には常にガードマンがついている。

この人気のないレッドフィールド家にも何人かのガードマンが詰めているのだ。

彼らはプロなので普段こちらに姿を見せないが、呼べば間違いなく出てくるだろう。

話は戻るがそもそも詩織が狙われるのは魔女である以上にガードマンを一人もつけていないということに起因する。

「私はいざとなれば転移魔法ですぐに逃げれますからね。クリスちやんはそうもいかないでしょう?」

「……理解はしたけど」

納得はしていない。

この感じはどうやらちょっと放置しすぎたようだ。

いつもなら出会い頭にシャイニングフィンガー的な何かを放つことなんてないのだが、機嫌が悪すぎる。

現に今も全然機嫌が直っていない。

……いつも一度怒ればしつこいほど長引くのだが、今回はいつまで長引くのだろうか。

結局クリスは機嫌が直らないまま自室へと戻っていった。

対する詩織は掃除魔法でポルターガイストと化した布巾やスポンジで食器の洗浄を命じてから自室へ籠る。

クリスの部屋に行って一ヶ月の間、体験したことを語り合いたかったがあの感じでは行ったところで門前……扉前払いだ。

「さて今のうちに課題をしておきますか」

プリントを配布していた時に西村先生が言っていたことなのだが、馬鹿なFクラスは課題を出されることが多いらしい。

Aクラスは言うまでもなく自習をしているだろうが、Fクラスは考えるまでもなく自習している人物が殆どいない。

であるからして毎日簡単とはいえ課題が少し出るのはある意味当然だろう。

「まあFクラスレベルの課題だから簡単ですが……あら？」

プリントを机の上に出し、続いて筆箱を取り出そうとして固まる。鞆の中にあるはずの筆箱がなかった。

いったいどこにいったんだろうと一瞬考えるもののどう考えても学校に置き忘れてきている。

まあ明日取りに行けばいいですね、と思いなおし予備の筆記用具を引き出しから取り出す。

この時、詩織が魔法を使ってもFクラスへと忘れた筆箱を取りに行けばあんなことにはならなかっただろう。

「ん……」

カーテンから漏れる光を眩しそうに手で遮りながら詩織はゆっくりと身体を起こす。

両親の買ってきたフリルいっぱいの可愛いピンクパジャマを身につけた詩織は半覚醒状態ながらもノソノソと布団から這い出る。

一回振り向きヌクヌクの布団を名残惜しげに見て、タンスから着替えを取り出す。

そしてフラフラと洗面台へと向かい、朝支度を終えてからゆっくりと着替えた。

今日はたぶん試召戦争はしないだろう。

昨日に点数をだいぶ消費したはずなので、英気を養う意味でも一日は間を空けるはずだ。

だんだんはつきりしてきた意識でそう考える詩織だが、実はこの思考はFクラスの面々をなめ切っていた。

普通連日で試召戦争……もとい、連続補充試験などと体力どころか集中力も続かないものだ。

つまり詩織はFクラスの体力馬鹿どもを正しく認識していなかったのだ。

「今日は休めでいいですよね。クリスちゃんのご機嫌を取らないといけませんし」

だからこんな思考に至ってしまう。

試召戦争に積極的に参加する意思はまだないが知らない間に負けて設備のグレードを下げられる趣味はないのだ。

だというのに自らの認識の浅さによって試召戦争の場にいらないという最悪の選択をしてしまったのだ。

「んう……とりあえずご飯を食べたらクリスちゃんを誘ってお買い物にでもいきましようか」

クリスが学校を休むことは脳内で決定しつつ冷蔵庫から卵を取り出す。

なんだかんだでクリスもシスコンなので姉とのスキンシップがとれると言ったら学校を休んでついてきてくれるだろう。

そもそも英才教育をクリスは受けているので高校の内容くらいなら余裕で満点を取れたりする。

「さてと、次は……」

堂々とサボるのはあまり褒められた行為ではないが、一日くらい許してほしい。

というかそれくらいしないとクリスの機嫌はいつまでたっても治らないのだ。

ならば一日くらい犠牲にしてクリスの機嫌をとったほうがはるかに良い。

既に詩織の頭の中にはデートコースを作っており、試召戦争のことが完全に頭から抜けていた。

1 - 7 理由（後書き）

作中ではそこまで詳しく話してませんが、レッドフィールド家と文月学園はわりと近いほうです。

文月学園に協力してきた関係でわりと融通が効くというのも文月学園を選んだ理由の一つです。

今回はあんまり進展のない話。

あえて言えばフラグがたってますが……原作を読んでいる人なら、ねえ？

1 - 8 b i r t h d a y (前書き)

ついノリで「番外編でやれ」とかわれそうな話を書いちゃいました。

今回やっとバカテス本編に移ります。

たまに詩織「スプリングフィールドと書きそうになるのは秘密」。

1 - 8 b i r t h d a y

薄暗い食卓に置かれたご飯を詩織は黙々と口に運ぶ。

時刻は既に夜の10時を過ぎており、かなり遅めの晩御飯だ。妹のクリスマスにとっては既に夜遅いので今頃寝ているだろう。

「別に……分かってたんだけどよ」

精神は肉体に引き摺られる。

前世では一笑したその言葉が転生してからは幾度となく実感してしまふ。

「……不味い」

食卓の上に乗っているプロが作ったいつもより豪華な食事勢。

いつもの感性なら美味しいはずのそれらが今はどうしようもなく不味く感じてしょうがなかった。

「ちっ」

口汚く舌打ちをして目の前の肉を丁寧に分ける。

今日は詩織の8歳の誕生日……両親は今朝、急な仕事が出来たらしく慌てて出かけていった。

その時の申し訳なさそうな両親を笑って送り出せる程度に詩織は大人だったが一人の食卓に寂しさを感じてしまうくらいには子供だった。

大事な仕事なんだからしょうがない……元大人として詩織はそう理解していた。

「はあ」

無理を言って晩御飯を一人遅らせてもらったのも両親がひよっとすれば帰ってくるのではないのか。

その時は何かに縋るような気持ちで淡い期待と理解しながらも言うしかなかった。

妹のクリスを当然そんな子供の我侭のようなものにつき合わせてお腹を空かせたまま待たせる気はなかったので先に食べてもらった。何を馬鹿なことをしている詩織「レッドフィールド」。

きっとクリスは誕生日だというのに食卓へ顔を出さなかった姉を怪訝に思っている。

だというのに大人であるはずのお前は何故こんなところで一人感傷に浸っている。

喧嘩中だから心配されているか分からないがそれでも心配される種を何故残す。

「分かってる、はずなんだけだよ」

どうしても割り切れなかった。

前世でも自分はこんなに聞き分けのない奴だっただろうかと思い出そうと瞼を閉じる。

既に目の前に置かれている料理郡を食べる食欲はない。

「…………おね…………お兄ちゃん」

ギイと扉が開く音と共に自分を呼ぶ幼子の声が耳に届く。

目を開くとそこにいたのは1年前に兄と呼ばせた我が妹クリス。

この呼び方も前世を前世と5年以上たってまだ割り切れない証明。

クリスからすればいきなり姉が兄と呼ばだの言い始め、意味が分からなかっただろう。

すぐに後悔した詩織だが訂正することもなくズルズルと一年もそれは続いている。

つまり中途半端なのだ自分は。

前世である自分を捨てきれず、現世である自分を受け入れ切れしていない。

だというのに現世である自分は誕生日に両親が同席して欲しいくらいには家族を愛している。

その齟齬は当然日に日に大きなり半年前、ついにクリスと大喧嘩をした。

それ以来クリスと何を話していいか分からず話しかけておらず、またクリスも自身に近寄ってこない。

「どうしたクリス」

「……あ……う」

別に威圧したつもりはなかったがクリスはそうととらなかったように視線をあちこちに飛ばしている。

まただ。

また自分は大人気ないことをしている。

「……大丈夫だクリス。どうしたんだ？」

出来るだけ柔らかい笑みを浮かべながら話しかける。

その言葉に少し安心したのかクリスはとてとと詩織に近づく。

そつえばこうやって正面からクリスと話したのは久しぶりだなと内心苦笑しつつクリスの言葉を待つ。

「あ、あのね」

「うん」

「おねえ……お兄ちゃん」

お兄ちゃん、その言葉を聞く度に心臓が跳ね上がるのを感じつつも無視する。

それはきっと——罪悪感だと自覚しつつも。

「何かな？」

まだ表情の硬いクリスは後ろに手を隠してソワソワしている。見たことすらないクリスの様子に詩織は何か具合でも悪いのかと心配になるがクリスの言葉を急かすわけにはいかない。

数秒か数分か……時計の音が無機質に鳴り響く食堂でその音を数えることすらせずに待つ。

そしてクリスは何かを決心したかのように手を前に差し出した。

「お姉ちゃんお誕生日おめでとう！」

「……え？」

小さな手の上に置かれた棒状のそれは詩織の知識によると兎の蓋がついた安物のシャープペンシル。

幼子なりの工夫なのかピンクのリボンが結ばれたそれを詩織は固まっただ表情で見る。

「おれ、に？」

乾いた声が小さいながらも響く。

クリスは詩織の言葉にしつかりと頷いた。

半年——長い長い姉妹喧嘩だったそれをどうやって解決しようかと詩織は悩んでいたが、まさかクリスから歩み寄ってくるとは思わなかった。

公平な立場で見るならばあの喧嘩は間違いなく詩織が悪い。だというのにクリスはこんな出来ない姉にプレゼントすら持つてきてくれている。

「……………」

情けなかった。

前世があるとか関係がない。

ただ、この子の姉として情けがなかった。

前世を忘れることも現世を受け入れることも出来ない自分より遥かにこの妹は大人だった。

「あ、ま……間違えた！お兄ちゃん、お誕生ばふっ……………」

言い切る前にクリスの身体を詩織は抱きしめた。

「お兄ちゃん？」

「……………ありがとう」

「……………」

「ごめんね」

顔は見えない。

だが確かにクリスが首を振るのが詩織には分かった。

「あとね、クリスマス」

「なあに？」

きつとこの日――

「私はお姉ちゃんだよ」

詩織「レッドフィールドはこの世界に産声を上げた。

懐かしい夢を見た。

昨日クリスマスに散々家族サービスをした後疲れきった詩織はベッドの上で倒れるように伏していた。

隣には自分を抱き枕にしている妹様の姿が。

詩織が疲れきっている顔をしているのに対しクリスマスは幸せそうに寝ているのが実に対照的である。

起きる為に詩織はクリスマスの手をゆっくり剥がそうとするが意外に力が強く、起こさないように剥がせそうにない。

「仕方ないですね」

抱きついているクリスマスの頭を撫で、静かに抱き寄せる。

ここ一月程甘えられなかったのだから少しくらいいいだろう。

学校に遅刻することを確信しつつもクリスに甘い詩織は苦笑一つで許してしまうのだった。

あれから眠気眼で「おひゃようお姉ちゃん……」と間の伸びた挨拶をするクリスをたつぷり堪能してから朝食をとり、家を出た。学校には既にレッドフィールド家の用事で少し遅れると連絡している。

権力万歳。

ちなみにクリスにはとりあえず担任に話を通しておいたとしか言っていない。

別に自分はいくら担任に怒られてもいいのだが、クリスが自身の甘さで怒られることだけは許容できない。

二人手を繋いで誰もいない坂道を仲良く歩きながら試召戦争について話してあげる。

やはり一年後に経験することなので興味深々だったクリスはあれこれと質問してきた。

英才教育を施してきたクリスなので間違いなくAクラスに所属し、代表となるのだからクリスならきつと大丈夫。

というかAクラスと試召戦争なんて馬鹿な真似、普通しない。

Bクラスまでは戦力に上限があるがAクラスは上限がないのだ。

AクラスではBクラスより若干強い人間だけでなくそのAクラスの下位連中を遥かに上回る戦力の人間もいるのだ。

つまりAクラスはあくまで最上位クラスという枠組みであって上限の設定はされていない。

なので同じAクラスメンバーでも戦力に差があったりするので他ク

ラスとの戦力差は考えたくもない程だ。
もちろんクリスはAクラス代表になれる器だけあって規格外の点数をとることも可能だ。

「ですがそれを言うのは良くないですよねえ」

校門で別れたクリスのことを思い一言。

妹は優秀であることを鼻にかけないので事実とはいえあまり持ち上げても仕方ないだろう。

とりあえず昨日が補充テストをしえ終えたならば今日がおそらく試験戦争の日だ。

CクラスかBクラスかAクラスかは分からないが、少なくともこの時刻で決着がついていることはないだろう。

「おはようございます」

例によって渡り廊下で戦闘をしているのを尻目にFクラスの扉を開ける。

中には予想通り代表の坂本雄二がノートに何かを書き込んでいた。

「遅かったなレッドフィールド。昨日はどうしたんだ」

「ただの風邪ですよ」

さらっと嘘を吐いてから自身の席に座る。

胡散臭げな表情を雄二は向けていたが相手をしていたも仕方ないと判断したのかすぐにノートの書き込みに移る。

さて、私の筆箱は……………あ、ありました。

「雄二っ！」

教室の中に吉井明久が飛び込んでくる。
彼は今日は伝令担当なのだろうか。

「うん？どうした明久。脱走か？チヨキでシバくぞ」

チヨキでシバくってなんだろう。

目潰しでしょうか？

そう考えながら筆箱を開け、そして詩織の時間は完全に固まった。

「……………はい？」

中にはへし折られたボールペン、砕かれた消しゴム。
それだけならばまだいい。

所詮消耗品なので買い足せばいい話だ。
しかし

「あ……………ああ……………」

「お、おい？レッドフィールド、どうしたんだ？」

「れ、レッドフィールド君？」

そこには真ん中でへし折られた兎のシャープペンが。

『お姉ちゃんお誕生日おめでとう！』

おめでとうおめでとうおめでとう……………。

その言葉が脳内で何度も繰り返され、視界が真っ赤に染まっていく。

「ひ…………ひひひ」

「レッドフィールド!？」

「どうしたの!？何だか鉄人のヌード見たみたいな顔してるよ!？」

雄二と吉井明久が何かを言っているがそんなことは関係ない。

「『リペア』」

幸いにも欠けた物はなかったらしく修復の魔法でシャーペンシルは元に戻った。

だがそれだけで許せない。許せるはずがない。

「ねえ雄二君に吉井君？」

「は、はいっ!」

「これえ、やったの誰なのかなあ？」

詩織の瞳に剣呑な何かが写る。

下手に答えるとやばいと本能で感じた雄二と吉井明久は背筋を伸ばしてはつきりと答えた。

「Bクラスの根元恭二です!」

この瞬間、根元恭二の運命が決まった。

1 - 8 b i r t h d a y (後書き)

実はとんでもないシスコンな詩織の本性の巻。

T S 転生主人公が現世の自分を受け入れる話ですね。

最初の誕生日の話はもっと短くする予定だったんだけど、気付けばこんなに長く。

実はこれ、今までで一番長く書きちゃったんですよ。

最後にキリがいいところで終わらなくなっちゃって。

そのうちクリスマス幼少時代視点での詩織を書くとは思ってます。

1 - 9 静かに憤るは白き魔王（前書き）

今回魔法少女シオリンが絶賛暴走します。

しつこいようですが、別にこの小説はアンチではありません。

たまたま根元さんが作者のノリのせいでやったいけないことをしてしまっただけです。

暴力的な表現が出てきますのでそういうのが苦手な人は回れ右で。

1 - 9 静かに憤るは白き魔王

まず最初に向かう先は女子更衣室。

本来ならば今すぐBクラスに乗り込んでOSIOKIしたいところだが、その前に準備がいる。

「なんだいいたい。いきなり呼び出して」

女子更衣室に入ったらそこにいたのは藤堂学園長が面倒臭そうな顔をして座っていた。

「というかあんた、なんで女だつてバレてないんだい？その胸の膨らみで誤魔化せるはずないだろ」

詩織の姫路瑞希程ではないにせよ平均に比べれば十分大きい胸を指差して言う。

「認識阻害というやつです。私を女だと知らない人は、例外なく男と思ってしまう」

「まったく常識外れだね」

「そんなことはどうでもいいんです。フィールドを形成してください」

「ほう？お前さんの力なら自分で形成できるんじゃないかい？」

「無駄な思考にリソースを割きたくないです。いいから、フィールドを形成するか学園ともども潰れるか選んでください」

そのかなりマジが入った言葉に藤堂学園長は眉を顰め、無言でフィールドを形成した。

すると詩織の周囲に幾重もの魔法陣が構成されては消えを繰り返す。

「……………完了しました。それではBクラスに行つて来ます」

「ふん。後でレポートはよこしなよ」

「お断りします」

3FのFクラス前に戻った詩織は凄く良い笑顔を浮かべていた。渡り廊下の向こうのBクラス前で雄二がFクラスの指揮をとっているのを確認してそれに近づいていく。よかった、まだ終わってないと満面の笑みを浮かべる。

「……………さっきからドンドンと、壁がうるせえな。何かやっているのか？」

「さあな。人望のないお前に対しての嫌がらせじゃないのか？」

「けつ。言ってる。どうせもうすぐ決着だ。お前ら、一気に押し出せ！」

「……………体勢を立て直す！一旦下がるぞ！」

「どうした、散々ふかしておきながら逃げるのか！」

場はクライマックス。

根元恭二は眼前。

これこそ詩織が望んだ舞台だ。

「雄二君、どいてください」

「レッドフィールド？いや、撤退だ。奴らを前に出さないと……」

「雄二、君？」

「……ああ」

無駄に凄く良い笑顔と謎の気迫に気圧されて雄二は頷いてしまう。
本能が「逆らったら殺られる！？」と言っており、無意識に後退する。

「ふん、増援か。だがFクラスのゴミが何人来ようが意味が——」

「御託はいりません」

「はあ？」

「サモン
試験召喚」

『Fクラス 詩織〃レッドフィールド 総合科目 0点』

この場にいる全員が初めて見る詩織の召喚獣——その点数を見て誰

もが自分の目を疑った。

「あぁん？何だ0点って」

「ブラスターシステム……リミット1、2、3、4、リリース」

最初から出し惜しみなしの全開。

ブラスターシステム——分かりやすく言えば、自身にダメージを与えるシステムだ。

詩織の手によって弄られた召喚獣は様々な特異性をもつが、このシステムもそのうちの一つ。

『Fクラス 詩織Ⅱレッドフィールド 総合科目 4000点』

『なっ！？』

その場にいる全員の驚愕の声。

0点だった人物が詩織の謎の掛け声と共に4000点という腕輪保持の点数まで一気に跳ね上がったのだ。

この現象を理解できる人間は当然この場にいるはずがなく、詩織は一人続けて言葉を続ける。

「非殺傷システム、解除。ストライクコード。S・L・B」

「ちっ！何をしようとしてるか知らんが、そいつを止める！」

根元恭二がそんな詩織に嫌な予感を覚えたのかBクラスの面々に命令を下すが

ドゴォッ！

「んなつ！？」

止める前にぶち抜かれた自分のクラスの壁を見て表情を引き攣らせた。

「くたばれ、根元恭二いーっ……あれ？」

「スターライト……」

何故か器物破損万歳とBクラスの壁をぶち破って進入してきた吉井明久には目もくれず、静かに詩織はキーワードを呟く。
それは――

「ちよっ！？俺の召喚獣が消え……」

「な！？俺もだ！」

「て、点数が減ってるだ！」

周囲の面々が攻撃も受けてないのに点数が減っていることもお構いなしに。

ちなみに雄二は自分の召喚獣の点数が減り始めたのを見てすぐに召喚フィールドから出て召喚獣を消している。

「ブレイカー」

『Fクラス 詩織』レッドフィールド 総合科目 10450点『

最初のDクラス戦で生贄にした生徒に放ったディバインバスターと

は比べものにならない極大の桃色の光がBクラスに降り注ぐ。
Bクラス全てを飲み込むその光は召喚獣達を飲み込み、消滅させていく。

「ぎゃあ ああああ あああ！？」

「いてえええええええええええ！」

召喚獣を出していたBクラスの面々の痛みへの悲鳴を奏でながら。

「ば、馬鹿な……」

根元恭二の召喚獣が極大の光に飲み込まれる前、吐いた言葉はそんな不条理にたいする嘆きだった。

「
の
う
シ
オ
」

「はい、
 なんですか？」

「大半のＦクラスが補習室送りになった上、辛うじて避けた明久も右手を焼かれて転げ回ってるのじゃが……なんじゃこれは」

幸いにも後詰め戦力として待機していた秀吉は補習室送りにされていなかった。

床に倒れこんで痙攣している根元に不遜な態度で見下ろしている雄二も冷や汗を流していた。

「説明を要求するのじゃ」

「俺からも頼む」

「……気になる」

島田美波に姫路瑞希の女子二人はさすがに吉井明久を心配しているのかそっちに向かっている。

この人たちも吉井明久の友達……ですよね？
ちなみにこの……なんでしたっけ。

ムツツリー二でいいですか。
ムツツリー二君は開いている窓から入ってきた時に桃色の光で前後不覚になったので着地にミスっている。

「面倒なので簡単に言います。ブラスターシステムは自身に1000点のダメージを与えます。総合科目の場合は1000点です」

「……なるほど。つまりお前は採点された点数からダメージによって引かれていき、0点になった負けるタイプじゃない。

0点から始まり採点された点数まで到達すると負けるダメージを負えば負うほど強くなるタイプか」

……思ったより坂本雄二は頭が回るようです。

「それで腕輪が使える点数まで引き上げたのは分かった。だが最後に使ったあの光はなんだ？どうしてFクラスの奴らの点数がなくな

った？」

「腕輪の力ですよ。スターライトブレイカー……周囲にいる味方の点数を奪い、攻撃力にする力です。最も、一時的なブーストですが」

「それ何てリリなのなの!？」

吉井明久が動かない右手のかわりに左手でつつこみを入れる。
妹のクリスから見せてもらったアニメなのだが、どうやら吉井明久も知っているらしい。

「というかそれはえげつないか？」

「秀吉君の言うことも最もですが、それ以上にこの攻撃力は魅力的なはずですよ。」

そもそもFクラスの点数が少なくなければ0点になるようなこと
はないはずなのです」

「まあそれはいい。問題は、だ」

雄二は視線を今も痙攣するBクラス連中へと向ける。

「何だこれは？まるで明久のように観察処分者が攻撃を受けた時みたいなの……」

「そのとおりですよ」

「なに？」

「非殺傷システム解除。分かり易く言えば攻撃を与えた相手を強制

的に觀察処分者にし、ダメージをフィードバックさせるシステムです。

さすがにペンをへし折られたのがむかつきましたので先程作ってきました」

うわあ。

FとBクラスの一同の心が一つになった瞬間だった。

「ところで根元恭二君」

「……………あ……………あ」

根元恭二に声をかける詩織だが仮想的であるものの大ダメージを負った根元は呻き声を上げることしかできない。

「起きてください」

ゲシイ！

躊躇なく根元恭二の腹を蹴り上げ、それでも呻き声以上の反応をしない根元の髪の毛を掴んで顔をこちらへと向ける。

この容赦ない行動に姫路瑞希とBクラスは大いに引いている。

ちなみに残りのFクラスの者達は詩織のキレ具合に顔が引き攣っているものの暴力行為そのものには何とも思っていない。

まだ未来の話だが、こいつらはF団などという組織を立ち上げさらに冷酷な私刑をするので当然といえば当然である。

「Fクラスを襲撃して筆記用具の破壊を命じたのはあなたですよね？」

「お——べびゅ!？」

「答えは聞いてません」

ゲシイ!

さらに膝蹴り。

「別に弁解なんて聞きたくありません。貴方の敗因はたった一つ——」

どこまでも冷酷な態度で詩織は言い放つ。

「貴方は私を怒らせた」

1 - 9 静かに憤るは白き魔王（後書き）

はい、今回詩織はブチギレてます。

もし学校じゃなくてチンピラ相手などだったら相手は完全に社会から消えていたことでしょう。

この時キングオブスコンの詩織は髪型を馬鹿にされた丈助の如く根元をぶちのめすことしか考えてません。

まあ元魔王だしこれだけで済んでるので性格は丸くなったんじゃないかな。

ブチギレシオリンはこれから先は（たぶん）出ない……かなあ？

ちなみに最強っぽく見えるシオリンですが、ズルが嫌いなのでところどころに弱点置いてます。

一度攻略法が確立されれば点数（身体能力）と操作技術がそこそこ高ければ倒せます。

気付いてる人もいると思いますが、頭に血が上ったシオリンはフクラス代表の点数まで0にしかかったことに気付いてません。

1 - 1 0 Bクラス戦終了（前書き）

今回少し短め

1 - 10 Bクラス戦終了

問

以下の問いに答えなさい

『女性は何歳を迎える事で第二次成長期になり、特有の体付きになり始める』

姫路瑞希の答え

『初潮』

教師のコメント

正解です

土屋康太の答え

『初潮と呼ばれる生まれて初めての生理。医学用語では、生理の事を月経、初潮の事を初経という。』

初潮年齢は体重と密接な関係があり、体重が1.5kgに達する頃に初潮を見るものが多い為、その訪れる年齢には個人差がある。

日本では平均12歳。また、体重の他にも初潮年齢は人種、気候、社会的環境栄養状態などに影響される———』

教師のコメント

詳しくすぎです

吉井明久の答え

『明日』

教師のコメント

随分と急な話ですね

シオ「レッドフィールドの答え

『婚約者』

教師のコメント

解答欄ずれてませんか？

「ねえ雄」

「……なんだ」

「僕、レッドフィールド君は絶対に怒らせないようにするよ」

「俺もそう思う」

静かに根元をフルボッコにしたレッドフィールドは気絶した根元を

確認して「ぺつ。ゴミが」と唾を吐き捨ててBクラスを出て行った。どこの不良だお前とつつこみたくなる光景だったが、その場にいる誰もが怖くてつつこまなかった。

あの後一応手加減はされていたらしい根元はすぐに起き、そして震えながらレッドフィールドを探しいないと分かると安堵の息を吐いた。

どんだけ怖かったんだ。

それから明久の提案で女装させて写真会なるものが開かれた。

ちなみにその時当然根元は渋ったのだが――

「レッドフィールドをもう一回呼んで来るのと、女装を受け入れるの。どっちがいいんだ？」

「女装です！」

即答だった。

レッドフィールドのレッドって絶対血の色だろ。

「よくわからんが、レッドフィールドの筆箱には触れないほうが良さそうだ」

「ん？筆箱が原因となると……昨日のあれかの？」

秀吉の言葉に明久が見たことを簡単に説明する。

その説明にレッドフィールドの怒りの原因を把握した面々は当然のことながら雄二の発言に頷いた。

誰だって好き好んで竜の尾を踏む者はいない。

「とりあえず、だ。これでAクラスに勝つ為の布石を撒き終えた。万が一のことを考えて補充テストを終えてから……そうだな。二

日後に宣戦布告する」

放課後の屋上、そこで俺は奴を待っていた。

シオ＝レッドフィールド。

奴はスパイであることを否定していたが翔子と何かしらの繋がりがあるのは確かだ。

一昨日に問い詰めようとしたがこちらの状況を正確に把握しているレッドフィールドから情報を引き出すことは困難だった。

「お待たせいたしました雄二君」

「ああ」

Bクラスへと仕掛ける昨日にレッドフィールドとは完全に決着をつけるつもりだったが奴は来なかった。

明後日にAクラスへタイマンを仕掛ける身としてはどうしても今日レッドフィールドを抑えて起きたかった。

「それで、用とは？」

「聞くまでもないだろ。お前の思っている通り、腹の探りあいならぬ晒しあいだ」

「……………はい？」

「む？」

レッドフィールドの頭脳だとそれくらいは予測しているのだと思っただが……。

「……………ああ、そういえばそうでしたよね。完全に私のことを忘れてるんですから、そっちですよな」

「何か言ったか？」

「いえ、何も」

「そうか。まあいい。一つ聞く。お前は翔子の何なんだ？」

この問いに答えるかは分からない。

が、思えばレッドフィールドは何だかんだで質問には答えている。嘘かどうかは分からないが、それはこちらで判断すればいい。

「幼馴染ですよ。極々短い時間のみの関係でしたが、今でも連絡を取り合う仲です」

「……………ということは、俺と翔子のことも知っているようだな」

「ええ。で、貴方は何故試召戦争でAクラスを狙ってるんですか？」

確かに頭の良い奴なら俺がやっていることは不可解だろう。俺だって勝算がなければ絶対こんなことはしない。

「世の中学力が全てじゃない。そんな証明をしたくてな」

「……」

「さて、お前は翔子に何の情報を流した？」

本命はこれだ。

試召戦争で俺達Fクラスの情報を流されるのはともかく俺の策に係する情報を流されると全てが終わりだ。

翔子とタイマン、翔子のミスを誘うことによって勝利するという策はまだ誰にも漏らしていない。

だがもしこいつが翔子がタイマンを張りたくなるような情報をAクラスに流していたとしたら。

それは厄介だ。

誤魔化されても良い。

僅かな動揺でも感じ取れば良い。

あまり意味がないのは分かっているもののAクラスとの戦いには万全を期したい。

「FクラスがAクラスを目標としていること。それだけですよ」

「本当か？」

「ええ。誓約書を書いてもいいくらいです」

「……」

見たところ嘘はついていないように見える。

「レッドフィールドはAクラスとの戦いに手を貸してくれるのか？」

「必要なんですか？」

「……何を言う。試召戦争でお前程の戦力をAクラス相手に遊ばせておく余裕は……」

「そのような状況にもっていかない為にBクラスに勝利したんでしよう？一騎打ちの為に」

「！？」

「あら、やはりそうでしたか」

「……ハッターだと」

「まあ他には不意打ちか袋叩きくらいしか翔子ちゃんを討ち取れる方法はありません。」

しかも決定打である姫路瑞希は確実にマークされるからその二つの方法で翔子ちゃんは絶対に倒せない。なら残るは一つでしょう？」

「……」

「先日申しましたが、私はスパイではありません。今回の試召戦争では傍観者ですよ」

「信じていいのか？」

「信じる信じないじゃありません。それが真実ですから」

雄二との話し合いを終えて屋上の扉から階段を下りる。

隣にいる雄二は何か釈然としない表情をしているが、これ以上詩織が答えないことは十分理解しているはずだ。

（しかし……）

屋上へ呼び出された当初、考えていたのはシオ「レッドフィールドへの言及ではなく詩織」レッドフィールドへの言及だと思っていた。短かったとはいえ幼少の頃に会ったことを思い出し、その真意を確かめる意味での呼び出しだと思っていたのだ。

（名前なんてもじってるだけだし、特に変装をしてるわけじゃないのに……なんで気付かれないんでしょう）

確かに認識障害も使っているがあくまで過去に詩織の正体を見た人物には効き難い。

しかし詩織は忘れている。

過去の自分は今の自分と比べ物にならないくらい荒れており、自分は男だのと言いながら男子に殴りかかる女子だったという事実を。

1 - 10 Bクラス戦終了（後書き）

本来この回に雄二がAクラスへ宣戦布告する前の演説が始まる場面でしたが、作者の「原作通りの会話とかまじ面倒。でもこれは大事な場面なので入れないとAクラス戦導入部分で重要なところになっちゃうし……まじ面倒」と言いながら何時も通りのノリで書いてたら屋上で告白（本心を打ち明けるという意味で）合戦になってました。

どうしてこうなった。

1 - 1 1 思えばこれはFFF団の片鱗ですよ

問

以下の問いに答えなさい

『人が生きていく上で必要となる5大栄養素をすべて書きなさい』

姫路瑞希の答え

『？脂質 ？炭水化物 ？たんぱく質 ？ビタミン ？ミネラル』

教師のコメント

流石は姫路さん。優秀ですね

吉井明久の答え

『？砂糖 ？塩 ？水道水 ？雨水 ？湧き水』

教師のコメント

それで生きていけるのは君だけです

土屋康太の答え

『初潮年齢が十歳未満の時は早発月経という。』

また、十五歳になっても初潮がない時を遅発月経、更に十八歳になっても所長がない時を原発性無月経といい……』

教師のコメント

保健体育のテストは一時間前に終わりました。

シオ||レッドフィールドの答え

『? 肉体 ? 魂 ? 生体エネルギー ? 意思 ? 極々少量の魔力
? 真名』

教師のコメント

5 大栄養素という文字をちゃんと読んでください。

『スターライト……ブレイカー』

画面の中で詩織の召喚獣が「あれ?これオーバーキルじゃね?」つ
て言いたくなるような砲撃を放つ。

場所は移って詩織の部屋。

今日試召戦争に参加したということを晩御飯の際にクリスに話した
ら異様に食いついて記録映像を求められた。

後で弄った部分に不具合がないかどうかを確かめる意味でビデオに
撮っていたのでそれを見せ今に至る。

「むむむ」

「どうかしましたか?クリスちゃん」

「足りない！」

「……………はい？」

突然始まったクリスの駄目だしに詩織は目を点にする。

「足りないよ！SLBを撃つ前は『これが私の全力全開！』って叫ばなきゃダメだよお姉ちゃん！」

「……………技名を言うだけでも結構譲歩したんですけどね」

当然だがその呟きはクリスには届かない。

シスコンの詩織はなんだかんだでクリスの要望を答えるべく腕輪の使用に音声認識を使っている。

つまり技名を言わないと発動しないのだ。

詩織の使う魔法も確かに上級魔法ともなれば魔法の名前を叫ぶ必要があるがそれとこれとは別である。

「それにこれ！この場面！」

『ブラスターシステム……………リミット1、2、3、4、リリース』

「おかしいでしょこれ！リミッターなのに何で最初から全部外してるの！？」

「……………」

詰め寄ってきたクリスに無言で顔を逸らす詩織。

元々0点開始召喚もリミッターシステムをどうにか実用的にしよう

とした末に考案したシステムだ。

さすがに使えば点数が回復するなんて補充試験いらずになるチート機能がつけられなかった末の苦肉の策だったのだが。

正直に言えば現状の詩織の召喚獣は使い辛いことこの上ない。

いかに点数の高い召喚獣とて首を斬られたり心臓を突かれたら消滅するわけで、0点の詩織の召喚獣もその例外ではない。

つまり最初からプラスターシステムを使わない限り一撃で負ける可能性が極端に高いのだ。

今のところ誰にも気付かれていないがディバインバスターやSLBは一度照準をつけたら動かすのは不可能。

つまり素早い相手には当たらないという欠点がある。

まだ使っていないバインドという拘束手段があるもののこれはある程度接近する必要があるし、複数相手には使えない。

牽制用にアクセルシューターというファンネルの如く動かせる誘導弾もあるにはあるが、あれは使用中に集中するので警戒が疎かになる。

「0点の状態だと動きがトロすぎて何もできないんですよ……」

詩織の主張はある意味当然だ。

本来召喚獣にとって0点とは消滅するということだ。

そんな点数で動かそうと思っても1点とは比べ物にならない程重い。

「ヒーローはどんな逆境でも勝てるものなんだよお姉ちゃん！」

「私、ヒーローじゃなくてヒロイン……それと最初から常に逆境って何か違うとおもいます」

「そんなのどうでもいいんだよ！」

「ええー」

お母様にお父様、妹が反抗期です。

「もう！もう一回一緒にリリなの見るよ！」

「え？お姉ちゃん、もう既に30回くらい見てる気がするんですが」

「いいから！座って！」

言葉の通じないクリスに溜息を吐いてクッションにペタリと座り込む。

自然に女の子座りしているのに気付き、一瞬表現しようのない感情に襲われるが気合で押さえ込む。

なぜか詩織の部屋にあるリリなのDVDをテレビにセットするとクリスはこちらへ戻ってくる。

「やあ！」

「ぺふ！？」

詩織の膝の上にダイブするように跳躍し、お尻から着地。

太股に鈍いダメージを負った詩織は顔を引き攣らせる。

「すたーとー！」

「お、お姉ちゃん頑張ります。頑張りますよ」

絶対これ、一ヶ月放置してた影響まだ残ってる。

そう詩織は確信しつつ妹の頭で半分見えないテレビを胡乱な目つき

で見るのであった。

「そついえばお姉ちゃん」

「何ですか？」

「何であんなにキレてたの？」

「……………べ、別になんでもありませんよ。そつ！何となくです！何となく！」

坂本雄二はここまでよくやったと詩織は心底思う。

Fクラスという最低戦力でBクラスに勝利するという大挙を成した。勉強だけが全てじゃない——もはやそれは証明されたといっても過言ではないだろう。

「まずは皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能だと言われているにも関わらずここまで来れたのは、

他でもない皆の協力があったることだ。感謝している」

「ゆ、雄二、どうしたのさ。らしくないよ？」

「ああ、自分でもそう思う。だが、これは偽らざる俺の気持ちだ」

（これがツンデレがデレたという奴でしょうか。そのデレを翔子ちゃんに向けてあげれば喜ぶでしょうに…………）

「ここまで来た以上、絶対にAクラスにも勝ちたい。勝って、生き残るには勉強すればいいってもんじゃないという現実を、教師どもに突きつけるんだ！」

『おおーっ！』

『そうだーっ！』

『勉強だけじゃねえんだーっ！』

いや、あなた方は勉強も戦術もできないでしょう。そうツツコミかけた詩織だが、さすがに空気を害するツツコミなので自重する。

「皆ありがとう。そして残るAクラス戦だが、これは一騎討ちで決着をつけたいと考えている」

その言葉にFクラス一同は困惑したかのような顔をする。Fクラスが今まで勝ってきたのは戦術を駆使してのことだ。真正面からの衝突で勝ち目がないのは誰もが理解していることだろう。

「落ち着いてくれ。それを今から説明する。やるのは当然、俺と翔子だ」

(……………えっと？てつきり姫路瑞希さんをどうにかして翔子ちゃんとぶつけるかと思っていたのですが、正攻法で叩くんですか。何か勝算でもあるんでしょうか？)

「馬鹿の雄二が勝てるわけなあつ!？」

吉井明久が言い終わる前に放たれるカッター。
暗器ばりの活躍をするそれは吉井の頬を掠め、背後にある畳に刺さった。

「次は耳だ」

わざわざ宣言をして脅しにかかる。
こいつら、本当に友達なんだろうか。

「まあ、明久の言うとおり確かに翔子は強い。まともにやりあえば勝ち目はないかもしれない。

だが、それはDクラス戦もBクラス戦も同じだっただろうか？まともにやりあえば俺達に勝ち目はなかった」

過去の栄光を例に出して民衆を扇動する……どう見ても暴君や悪徳商法のそれである。

だが雄二が築いてきた実績が確かな説得力を持たせる。

「今回だって同じだ。俺は翔子に勝ち、FクラスはAクラスを手に入れる。俺達の勝ちはずるがない。

俺を信じて任せてくれ。過去に神童とまで言われた力を、今皆に見せてやる」

Fクラスの人員が雄二に応えて雄叫びを上げる。

方法はともかく雄二はきつちり代表という仕事をこなしている。

それから雄二は翔子との勝負で日本史の小学生レベルの問題で100点満点方式の点数勝負を言った。

確かにその方法ならばFクラスでも対抗のしようがある勝負だ。

だが雄二がここまで自信満々に勝てると言う勝負だ。
ただ対抗できるだけとは思わない。

そう思いながらも作戦を聞いていると幼い頃に翔子は日本史のとある問題で嘘を教えられたようだ。

翔子は頭が良いのでそれを完全に覚えており、絶対に間違える。
大化の改新の年表――それを間違えて教えたらしい。

「あの、坂本君」

「ん？なんだ姫路」

「霧島さんとは、その……仲がいいんですか？」

え、幼馴染ということを知らないんですか？

まあ雄二君は自分のことをあまり話すタイプじゃありませんからね。

「ああ、アイツとは幼馴染だ」

「総員狙ええっ！」

吉井明久の号令と共にFクラスの男メンバー（秀吉除く）が立ち上がり、上履きを構える。

なぜこの団結力とか指揮力を試召戦争で使えないのか。

「あの、吉井君」

「ん？なに、姫路さん」

「吉井君は霧島さんが好みなんですか？」

「そりゃ、まあ。美人だし」

「……………」

「え？なんで姫路さんは僕に向かって攻撃態勢を取るの！？それと美波、どうして君は僕に向かって教卓なんて危険なものを投げようとしてるの！！」

何とかその混乱しはじめた現場は秀吉が纏め上げた。

秀吉曰く翔子はレスビアンで幼馴染とはいえ雄二に興味を持つわけがなく、むしろ姫路瑞希が危ないらしい。

「あほですか」

翔子と連絡を取り合って雄二との関係をしっている詩織はそう呟かずにはいらなかった。

1 - 1 1 思えばこれはFFF団の片鱗ですよね（後書き）

クリスにつっこまれる回。

詩織はシスコンであることを必死に否定してます。

後半はだいたい原作通りなので書くのが非常にだるかった。

ところでオリキャラ紹介を1章分で整理して一応書いたんだが、これっているんだろうか……？出すにしても一巻分とラブレター事件が終わってからですが。

1 - 12 第一回試召戦争編終了

今日で全ての結果が出る。

雄二が望んだ目標。

Fクラスの悲願。

Aクラスがどう出るかはわからないが、詩織個人としてはこのタイマン勝負を受ける可能性は高いと思っている。

なんせ姫路瑞希ではなく坂本雄二がAクラス代表の霧島翔子と戦うのだ。

余程のトラブルがない限りは勝ったようなものだ。

「問題点はあの問題が出るまで、雄二の集中力が保つかどうかですか」

過去に神童と呼ばれていた雄二なら恐らく大丈夫だろうがそれでも翔子は一筋縄ではいかないはずだ。

まあどうでもいい。

AクラスがFクラスの誘いに乗るかどうかという心配もあるが、さすがに雄二はその辺をクリア済みだろう。

もしこれでAクラスが勝負を受けてくれませんでしたとかほざいて教室に戻っていたら一発殴ろうと思う。

「ふん、私はあんな不良が勝てるとは思えないけどね」

「あれでなかなかやりますよ、彼」

現在詩織は学園長室でお茶を啜っていた。

藤堂学園長の取り出したいくつかの書類に適等に目を通しながら会話を優先させる。

「あ、これダメですね。間違はなく暴走します」

「これもダメかい？じゃあこっちはどうだい」

「こんなのアホの極みです。起動はしますがエラーで召喚獣がバグるだけです」

「これはどうだい？」

「アホですか貴方。こんなの点数が低いから平気なだけで低得点保
持者じゃない限り……ってもう作ってあるんですかこれ。アホです
か？」

「……そんなにアホアホ言うことないだろクソガキ」

「アホにアホって言うって何が悪いんですか。事実を指摘されただけで
暴言吐くなんて貴方どこのガキですか」

学園長が出す書類に駄目だしをしながらさらにお茶を要求する。
詩織は駄目だしはするものの具体的な改善案は絶対に出さない。
前世、というか異世界の魔法知識を有する詩織はこの世界に魔法知
識を広めることに否定的だ。

といっても既に身内数人には伝授してしまってるが、それでも彼ら
にはきつちり秘匿を守ってもらっている。

万が一組織に捕まった場合、魔法に関する基礎知識全てを消去する
ように魔法すらかけるほどの徹底っぷりだ。

だからこそ学園長の案を批評はするが魔法の知識で助長させるよう
な真似はしない。

「まあシステムに関してはあくまでソースの整理だったので、引き受けましたが」

「でもあれでかなり見易くなったさ。感謝はしてるさね」

してなかったらむしろぶち抜きますよ。

そう視線で訴えかけてからゆっくりと席を立った。

「もう行くのかい？」

「ええ。『千里眼』で確認してましたが、そろそろ決着がつくようです」

1対1ではなく5対5の戦いになったが何とか当初の予定通りの雄二対翔子の勝負なった。

雄二からすれば詩織にも参加して明久の代わりに出てもらいたかっただろうが、翔子との約束もある。

今回ばかりは翔子のやりたいようにやらせるという約束を、破るわけにはいかなかった。

詩織はスパイでもなんでもない。

ただ翔子に肩入れをしており、Fクラスに非協力的なだけだったのだ。

学園長室を後にして向かうは3FのAクラス。

「ん？」

Aクラスへ近づくにつれ、男の野太い歓声が聞こえる。

「うん！これで僕らの卓袱台が」

『システムデスクに！』

どうやら大化の改新の問題が一回目のテストで出たようだ。
これで翔子は一問確実に間違い、Fクラスの勝利が決まる。

（さて、どうやって翔子ちゃんと慰めましょうか）

「最下層に位置した僕らの、歴史的な勝利だ！」

『うおおおっ！』

ガラ

Aクラスを開ければそこには手を振り上げて喜ぶFクラスの面々と、
その様子を理解できなくて困惑しているAクラス達。

（雄二君には何か御褒美をあげたほうがいいでしょうか？）

日本史勝負 限定テスト 100点満点

Aクラス 霧島翔子 97点

VS

Fクラス 坂本雄二 53点

……。
……。
……。
……。

「……………はい？」

卓袱台がミカン箱になりました。

「三対二でAクラスの勝利です」

「……………雄二、私の勝ち」

雄二は翔子の言葉を受け入れる罪人のように床に膝をついていた。詩織はその姿を見て深く反省する。

小学生レベルの問題でまさか100点を取れないとは思ってもよらなかった。

世の中、下には下がいるんだと実感した瞬間だった。

「……………殺せ」

「良い覚悟だ、殺してやる！歯を食い縛れ！」

「吉井君、落ち着いてください！」

「だいたい、53点って何だよ！0点なら名前の書き忘れとかも考えられるのに、この点数だと――」

「いかにも俺の全力だ」

「この阿呆があーっ！」

思えばFクラスという存在を舐めきっていた気がする。
あくまで普通の尺度でFクラスを測ってはいけないのだ。
奴らは体力馬鹿の考えなし。
その認識で十分だろう。

「……………さすがにみかん箱は遠慮したいんですがね」

「……………雄二、私と付き合って」

あー、ここで言いますか。

「やっぱりな。お前、まだ諦めてなかったのか」

「……………私は諦めない。ずっと、雄二のことが好き」

「その話は何度も断っただろ？他の男と付き合う気はないのか？レシドフィールドとか」

「……………私には雄二しかいない。他のひとなんて、興味ない。あと詩

織……じゃなくて、シオとはそういう関係じゃない」

なんで私の名前を出したんだ雄二とか、私の本名を出すなど言ったのに何故出した翔子とか色々言いたいことはあるが空気を読んで空気になる。

「拒否権は？」

「……ない。約束だから。今からデートに行く」

「ぐあつ！放せ！やっぱこの約束はなかったことに——」

雄二の襟首を掴んだ翔子はそのままデートする為に教室を出て行った。

この時点で雄二の将来が垣間見えた気がしたが、口に出すのは野暮というものだろう。

「さて、Fクラスの皆。お遊びの時間はこれまでだ」

学園に来た当初に聞いた野太い声に振り向くとそこには西村先生がいた。

なんでもFクラスの担任に就任したらしい——そんな簡単に担任って変わるのだろうか。

「いいか。確かにお前らはよくやった。Fクラスがここまでくるとは正直思わなかった。

でもな、いくら『学力が全てでない』と言っても、人生を渡って行く上では強力な武器の一つなんだ。

全てではないからといって、ないがしろにしているものじゃない。吉井。お前と坂本は特に念入りに監視してやる。何せ、開校以来

初の 観察処分者 とA級戦犯だからな」

普通の感性の人間なら「仰る通りです」と言うしかない正論に対し
吉井明久は――

「そうはいきませんよ！何としても監視の目をかいくぐって、今ま
でどおりの楽しい学園生活を過ごして見せます！」

「……お前には悔い改めるといふ発想はないのか」

「ないんですよきつと。まさか私もFクラスがここまで馬鹿の巣窟
とは思いませんでした」

「お前は……そうか。そういえばレッドフィールドもFクラスだっ
たな」

補充試験の監督をしてくれた西村先生とは、初日に少々顔を合わせ
た以来だ。

それ以来はBクラス戦を除いてまったく人前に出なかったのを忘れ
ていたのも当然だろう。

特にAクラス戦に参加していないことがそれに拍車をかけていた。

「そうだ、西村先生。今夜我が家にお食事でもどうです？」

「……いったい何の話だ」

「いえ、前々から西村先生とはお話したいと思ってたんですよ」

特にFクラス担任になればまたお世話になる機会も増えると思いま
すし。

そう付け加えるも西村先生は

「一生徒にお呼ばれするわけにはいかんだろう。それにお前は……分かってて言うてるだろ？」

まあ女子の家に男性教師がホイホイ入っていったら問題ですよ。ね。ならば仕方ないですねと返し、そのままＦクラスに荷物を取りに行く。

しかしミカン箱が……使ったことないけど、机になるのだろうか本当に。

1 - 12 第一回試召戦争編終了（後書き）

描写も特になくAクラス戦あっさり終了。こんなにあっさり終わるなら雄二の演説部分もつとカットしてもよかった気がする。

何度かシオリンも宣言してましたが、最初からシオリンは今回の試召戦争に参加する気はありません。

設備のグレートが下がるのは嫌だくらいしか思っていないので学園長室でまったりしてました。

次回のラブレター事件終了で2巻開始なのでラブレター事件で一章を締めとします。本格的に明久達と交流しはじめるのは2巻くらいからなので、一章はプロローグみたいなものですね。

1・5・1 ラブレター騒動（前書き）

書いてからこれをPV一万記念にしよう!と思った。え?だめ?

1・5・1 ラブレター騒動

問

以下の（ ）にあてはまる歴史上の人物を答えなさい
楽市楽座や閑所の撤廃を行い、商工業や経済の発展を施したのは（ ）である

姫路瑞希の答え

『織田信長』

教師のコメント

正解です

島田美波の答え

『ちゃんまげ』

教師のコメント

日本にはもう慣れましたか？

この解答を見て先生は少し不安になりました

吉井明久の答え

『ノブ』

教師のコメント

ちょっと馴れ馴れしいと思います

シオ「レッドフィールドの答え

『第六天魔王』

教師コメント

間違っではないんですが、何故名前のほうが出てこないんですか

side とある通話記録

「……………はい。そんなことは……………べ、別に忘れてたわけじゃないですよ？」

初日にお弁当作ってもらったのに忘れるわけが……………じゃあ何で会いに来てくれないのかって？

そりゃああれですよ。クリスちゃんが寂しがりですか——じゃな

くて、学校が忙しいんですよ！

え、ちよつと待ってください会いに行くって今そっち寮生活だからこれないんじゃない……」

憂鬱な気分で簡単な朝食を作るべく手を動かす。
もともと規則に厳しい学園生活をしている彼女からの連絡はない。
対外的には詩織と彼女は他人以外の何者でもないのでこちらから連絡することも不可能。

「どうしましょう」

「お姉ちゃん、また綾香お姉ちゃんのこと蔑ろにしたの？」

「……そうじゃありませんよ？」

「じゃあ何で目を逸らすの」

クリスの容赦ない追及に空笑いをしながら料理を運ぶ。
その後をクリスが溜息を吐きながらついてくる。

「お姉ちゃんいい加減認めたら？」

「……いえ、確かに前世の意識で考えたらこれ以上ない話ですよ？」

ですけど今それをするとか倫理的に問題が……」

「魔法で解決できるでしょ」

「家の問題が……」

「むしろお父さんとお母さんが進めてる話でしょ」

「……………持病の問題が」

「お姉ちゃんこれ以上ないくらい健康じゃない。まあ確かに前世持ちの妄想っていう病気だけど」

「ぶべらっ!？」

既に言われ慣れているクリスの病気宣言だが、何度されても慣れるものじゃない。

あれ？なら言われ慣れてないのか？

「会いにいけばいいじゃない。お姉ちゃんなら魔法でちよろちよろっとセンサー類誤魔化せば、簡単でしょ？」

「姉に犯罪を薦める妹がいるのですが」

「それは恐い妹だね。で、行かないの？お姉ちゃん」

結局あの後逃げるように速攻で食事を片付けると登校時間まで自室に籠った。

クリスからは目でヘタレと言われていた気がするが、そんなことはどうでもいい。

「西村先生おはようございます」

「おはようございます」

「おう、おはよう。レッドフィールド姉妹か。早めに登校とは感心だな」

サッカーのゴールの前で立ち尽くす西村先生に挨拶をする。周囲には生徒は見当たらないし、どうしたのだろう。

「何をしているんですか？」

「ああ。このゴールを撤去しようと思ってな」

「……重そうですね、これ」

少なくとも人間一人が持ち上げる重量ではない。

「手伝いましょうか？」

「それには及ばん。この程度、確かに重いが持てなくはない」

この人本当に人間でしょうか？

「いえ、手伝ったほうが早そうなので」

そう言い浮遊の魔法でゴールを持ち上げる。

誰も触れてないのに浮くという超常現象に西村先生は驚くが、事前に学園長から話を聞いているのかすぐに納得顔になる。

「じゃあこれを校門前の隅にでも置いてもらってもいいか？ネットはコチラで処理しておく」

「はいわかりました。クリスマスちゃんは先に行っておいてもらってもいいですよ」

「私も行くよ。お姉ちゃんに綾香お姉ちゃんがどれだけ寂しがってるかわけなきやいけないし」

「……………」

「いいですか？お姉ちゃんは逃げてるわけじゃありません。綾香に会いに行くなんて簡単な話です。

でもまだ会いに行くのはもうちょっと後です。後ったら後なんです」

学校でクリスとの別れ際にそんな捨て台詞を吐いた詩織は妹に「だめだこいつ」と言われながら走り去った。

本当にどうしよう、その頭の中で問いかけながらFクラスの扉を開く。

並ぶミカン箱に一瞬顔が引き攣るもののすぐに気を取り直して挨拶する。

「おはようございます」

それぞれが挨拶に対してしっかりと返してくれる。

Fクラスは何だかんだで仲がいいんだなと実感したが、何だかんだで仲が悪いのも事実なので素直に感動できない。

「……吉井君？」

しかし何故かいつも元気良く返事をしてくれる——たまに空腹で反応がないが——吉井が微動だにしない。

机に突っ伏してないので栄養切れということではないのだろうか……どうしたのだろうか。

「秀吉君。吉井君どうかしたんですか？」

「何も知らないのじゃ」

「ムツツリー二君？」

「……………（ふるふる）」

「姫路さんに島田さん？」

「言われてみれば妙ですね」

「確におかしいわ。アキ、変な物でも食べたんじゃない？」

空腹すぎてその辺に生えてるキノコを食べるくらい、吉井はおかしくなったのだろうか。

さてこの時点で何故雄二には聞かないのかと疑問に思つものもいるだろうが

「……………」

（雄二君は雄二君でどうしたんでしょう）

全身から不機嫌というオーラを放っていた。
本当にどうしたんだ。

頭の中でいくつかの回答が浮かぶものの情報が足りなさ過ぎて推測すら出来ない。

ウンウン唸っているとすぐにチャイムが鳴り、同時に西村先生がFクラスへと入ってくる。

「工藤」

「はい」

「久保」

「はい」

「近藤」

「はい」

「斉藤」

「はい」

あの後ネットを外してどこかへ持っていった西村先生だが、それでも時間ピッタリにFクラスに来た。どうやら時間に厳しい先生のようなので、これから遅刻などをすれば怒られるのは間違いないだろう。そもそも権力が通じ……………ないだろうやっぱり。

「坂本」

「……………明久がラブレターをもらったようだ」

『殺せええっ!!』

「ゆ、雄二!いきなりなんてことを言い出すのさ!」

「ズズ……………いい朝ですね」

何だかんだで仲が悪いFクラスの団結力を目の当たりにしながらどこからともなく出したお茶を飲む。

『どういうことだ!?吉井がそんなものを貰うなんて!』

『それなら俺達だってもらっていてもおかしくないはずだ!自分の席の近くを探してみろ!』

『ダメだ!腐りかけのパンと食べかけのパンしか出てこない!』

いや、どんだけパン好きなんですかあなた。

『もっとよく探せ!』

『……出てきたっ! 未開封のパンだ!』

『お前は何を探してるんだ!?』

これだけ反応する男どもというのもある意味珍しい光景ではないだろうか。

まあ自分は関係ないですし。

そう思いながら一時限目の教科書を鞆から机の中に入れようとして

「あら?」

机の中から謎の手紙を取り出した。

『レッドフィールドの机の中にあっただと!?』

『奴も異端者だ……吉井と同じくな!』

「あ、あら?」

「お前らっ! 静かにしろ! あとレッドフィールドもお茶を飲むんじゃない!」

西村先生の一喝にFクラスが静まるものの、いまだ殺気は治まらない。

むしろ膨張している。

「それでは出欠確認を続けるぞ」

今のうちに中身を確認しておきましょう。

えっと……

「なるほど。というかこれ、ラブレターじゃありませんね。謝罪文でした」

綾香から寮を出れなくてこっちにこれないことへの謝罪の文だった。詩織の言葉にFクラスの吉井と詩織で分散されていた殺気の矛先が一気に吉井へと向かう。

「手塚」

「吉井殺す」

「藤堂」

「吉井殺す」

「戸沢」

「吉井殺す」

「みんな落ち着くんだ！なぜだか返事が『吉井殺す』に変わっているよ！」

「吉井、静かにしろ！」

「先生、ここで注意するべき相手は僕じゃないでしょう！？このままだとクラスの皆は僕に殴る蹴るの暴行を加えてしまいますよ！」

「それだけで済めばいいんですけどねえ……」

「やめてレッドフィールド君！？ありえそうだから！」

Fクラスになった時点でその辺は諦めたほうがよろしいかと。

「新田」

「吉井コロス」

「布田」

「吉井マジ殺す」

「根岸」

「吉井ブチ殺す」

これ殺害宣言ですから殴る蹴るで本当にすめばいいのだが、Fクラスの性質上まず無理だろう。

「レッドフィールド」

「はい」

「レッドフィールド君だけは信じていた！シオ君って呼ばせてもらっよー！」

「……はあ。なら明久君と呼ばせてもらいますね。あと呼び捨てで結構です」

よくわからないが信頼されたいらしい。

「よし。遅刻欠席はなしだな。今日も一日勉強に励むように」

「待つて先生！行かないで！可愛い生徒を見殺しにしないで！」

可愛い……？

確かに美形の部類に入る明久の顔だが、どこかアホっぽいこともあって人によつては評価が分かれる顔だ。
だが間違つても可愛いと表現する顔ではない。

「吉井、間違えるな」

西村先生が扉を開け、一旦立ち止まると明久に宣言した。

「お前は不細工だ」

西村先生も程度はどうあれある意味同じ感想だったようだ。

「不細工とまで言われるとは思わなかったよバカ！」

「……不細工とまではいなくても、可愛いとはいえないのでは？」

「シオ、君だけは信じてたのに……！」

いや、そんな恨めしい目で見られても困るのですが。

1・5・1 ラブレター騒動（後書き）

ラブレター騒動。

この話はあまり重要な話じゃない上に詩織の介入するスペースがあんまりないので書こうか迷ったんですが、書きました。

キリがいいところが見付からないのでここで一旦きります。

1・5・2 招待する魔法使い（前書き）

いいからバカテス本編進めろ馬鹿！って人には面白くない話かもしれません。

あと最初に宣言しておきますが、この小説における詩織と明久はくつつきません。くつつかないったらくつつかないんです。これ書いて「あれ？明久のヒロインって詩織だっけ？」って思ったけど、くつつかないんです。

1・5・2 招待する魔法使い

Fクラスで血の池を作るその噴水箇所になりそうな明久は必死に西村先生を呼び止めていたが、無情にも西村先生は教室を出て行く。今日はビーフシチューにしましょう。そう脳内で流れたわけのわからん考えを一旦流すと、そこには島田に詰め寄られる明久の姿が。

「手紙を貰ったの？誰からなの？どんな手紙なの？」

この様子を見たところ、手紙の主は島田美波ではないようだ。となると残りは……

「……」

もじもじと明久が島田に詰め寄られている姿を見て俯いていた。姫路瑞希があの手紙を？

「いいからおとなしく指の骨を——じゃなくて、手紙を見せなさい」

「ざ、斬新な脅しですね」

「人聞きの悪いこと言わないのシオ！」

そうですか？

……あれ？

「あの、吉井君」

「ん？なに？」

そこには先程から変わらず恥ずかしそうな姫路瑞希の姿が。

まさかここで「その手紙は私が書いたんです」ととても告白するのか!?

「その……できれば、ですけど……私にも手紙を見せて欲しいです……」

「……え？姫路さんが書いたんじゃないんですか？」

「ち、違いますよ！そりゃあ練習として書いた……って今はそんなのどうでもいいじゃないですか！吉井君！」

「その……ごめん」

心底申し訳なさそうに謝る明久の姿に詩織は感動していた。

手紙の主に迷惑をかけない為にも自分以外の他人には決して中身を見せない。

これが噂に聞く日本男児、そしてSAMURAIの卵だともいうのだろうか。

「でも、でも……」

「いくら姫路さんの頼みでも、コレばかりは」

「でも、私は吉井君に酷いことしたくないんです！」

「ちょっと待って！姫路さんまで僕に暴力を加えることが前提なの!?!」

「こらそのピンク頭。Fクラスに入った当初の清らかな心はどこにいったんですか」

明久と詩織でツツコムものの当の姫路は手紙に集中しており、あまり聞いていない。

たぶん手紙を要求してYESというセリフしか聞こえないのだろう。

「皆、ちよつと落ち着け。今問題なのは明久の手紙を見ることじゃない」

「さすが雄二！僕を助けてくれると信じていた！」

手紙を見ることが問題じゃないと言い張る時点でロクでもないことを考えてるような気がするんですが。

「問題は、明久をどうグロテスクに殺すかだ」

「前提条件が間違ってたんだよ畜生！」

こんな殺人鬼だらけの場所にいられるか！と言わんばかりに教室から出て行く明久を追っていく殺人鬼一同。

実際死亡フラグでもなんでもなくこんな場所にいたほうが死亡フラグである。

「しかしあの手紙、いったい誰のですかねえ？」

確かに人間としての魅力はある明久だが、現在彼に魅力をもっているのは島田と姫路くらいしか思いつかない。

この文月学園に第三勢力がいるとでもいうのだろうか。

「……………」

どうしても気になった詩織は席を立て靴箱へと向かうことにする。そこで詩織は衝撃の事実を知るのであった。

「うつ……僕の青春……僕の彼女……」

靴箱へノロノロと重い足を運び、ブツブツ呟いている人物は明久。ボロボロの制服が明久の心情を表しているようで、周囲一帯に負のオーラをばら撒いている。

「明久君」

「うつ……シオ？」

「はい。今日は大変でしたね」

（……………なんでそんなに哀れみの籠った目で見られるんだろう）

「つきましては、我が家の食卓に御招待しようかと思ひまして。お泊りでもいいですが」

「行く！」

即答だった。

「こちらへどうぞ」

「……………」

門前についてここが自分の家だと説明した瞬間に固まった明久の襟首を持って中に入る。

門から本宅まで結構な距離があり、いつもならいわゆるテレポートを使っているのだが客人がいるからそういうわけにもいかない。

「はっ！いつのまに家の中に……これがセレブ力！？」

「何ですかセレブ力って。私が引っ張ってきただけですよ」

気付けば門から家まで移動していたのを驚いた明久だが、どこまでもこういう豪華な物に耐性がないようだ。

「しかし、凄いねこの家……凄いオーラが満ちている」

「そうですか？」

「うん。凄く大きくて凄く高そうなものがいっぱいだし」

「……あの、凄い意外の褒め方ないんですか？」

「……………」

目を逸らされたのできつとないだろう。

「結構成金主義みたいで、私はあんまり好きじゃないんですけどね」

「そうなの？」

「はい。これでもかというくらい置かれてる調度品の数々は時たま来るお客様にレッドフィールド家の威光を示すものです。

お金持ちは誰もが好き好んで高い家具を使ってるわけじゃないんですよ。この絵とか私にはさっぱりですし」

有名な人が書いたらしいんですけどね。

そっ付け加えて明久を先導しながら客部屋へと案内する。

「ここが明久君のお部屋ですね。今日は執事を待機させておくので何か用があったらそちらへお願いします。呼べば出てくるので」

「え？シオは？」

「これから晩御飯の準備です」

「料理長は？」

「……お金持ちに何の幻想を抱いているのかは知りませんが、私だって料理くらいします。まあ食材は豪華ですから楽しみにして結構ですよ」

「じゃあ僕も手伝うよ」

「今日の明久君はお客様ですからダメですよ。一応その部屋にゲームやアニメがありますので、暇ならそちらで」

そっぴい残すと詩織はその場を後にした。

好きにしていとも言われたけど、どうしよう。

「……これ、いくらするんだろ」

座り心地のいいベッドの感触に思わず疑問が漏れる。
というか

「何したらいいんだろう？」

暇を潰せそうなの何かを探して見回し、ホテルのような場所だと感想を抱いて一言。

「……ゲームするって何か違うよね」

あまり何もない——客室だから当然——ので気持ちがゲームへ傾きかけるが何か違うと思いなおす。

「んっと、ゴロゴロしてればいいのかな？」

普段味わえないベッドの感触をゴロゴロと転がりながら確かめる。
最初の数分だけは楽しかったがそれもすぐに飽きる。

「……」

「はっ!？」

気付けばいつもと同じようにゲームをしていた。

「だ、だってスト。ートファイ。ーの新作があるから……」

誰にしているのか知らないが咄嗟に画面に向かって言い訳を始める。

「……あんた面白そうね」

「うん？」

その様子を面白げに見ていたのは一人の少女。
シオと同じ栗色のポニテに藍色の目。
妹かな？

「妹さんかな？」

「そうよ。私はクリス＝レッドフィールド」

「僕は吉井明久。明久でいいよ」

「言われなくてもそうするわよ。私達はファーストネームで呼び合うほうが慣れてるし」

外人さんってそういうもんなのかあ。

「ところで明久、あんたおねえ……じゃなくて、あの人とどういう関係？」

「あの人って……シオのこと？」

「そうよ」

兄のことを「あの人」なんて呼ぶなんて、仲が悪いのかな？

「クラスメイトで友達かな」

「……本当にそれだけ？」

「え？」

「私、あの人が実家に人を連れてきたことなんて一度も知らないんだけど」

「ほえ？」

そう言われても、僕にも何がなんだか。

「まあいいかな。あの人が連れてきたっていうなら、大丈夫よね」

「一人で納得してもらってるところあれなんだけど、僕にも説明してくれる？」

「嫌よ」

「即答!？」

1・5・2 招待する魔法使い（後書き）

.....。

どうしてこうなった!?

おかしい、ラブレター事件で最後の屋上だけちらつと参加して終わりにしようと思ってたはずなのに、気付けば明久をレッドフィールド家へと招待していた。

ポルナレフ状態に驚きながらも意外と長い内容に驚愕。
もう一回きらなきゃだめだね、これ。

1・5・3
……え？（前書き）

今回はそこそこ満足がいく話だった。

1・5・3 ……え？

あれからクリスちゃんとあらゆるゲームで対戦し、その全てで敗北した。

「……クリスちゃん、マリオカートのコース通りに走らないの？」

「え？キノコダッシュでコース外走ってショートカットって常識でしょ？」

僕もゲーマーの自覚はあるけどいくらなんでもついていけない。

格ゲーをすれば通常コンボでHPの半分を削られ、レースゲームをすれば謎のショートカットで周回遅れで負ける。

さらにパズルゲーやクイズゲーでは一度も勝てない。

畜生！レッドフィールド家の人間は化け物か！？

ピリリリ

「ん？おね……あの人から電話ね。ちょっと待ってて」

そう言つと先程まで僕をフルボッコにしていたコントローラを手放して受話器をとった。

「うんわかった」

クリスちゃんは一言返すと受話器を置いて言った。

「晩御飯が出来ただし、行くよ」

「美味しい！美味しいよっても！」

「凄い食べっぷりですね。秀吉君から聞いてはいましたが、そんなに食生活酷いんですか？」

「昨日の晩御飯は塩と砂糖だったよ」

「……お姉ちゃん、この人そんなに貧しい生活送ってるの？」

「……私もそこまでとは思いませんでした」

レッドフィールド兄妹が何かを囁きあっているが、僕は今日の前のカロリーを摂取するのに忙しい。

「ああ、明久君言い忘れてましたが」

「うん？」

「決して2階には上がらないでくださいね。防犯上の理由がありますので」

「うんわかった。ところでそれも食べていい？」

「どうぞ。あとお風呂は明久君の部屋を出て右手のほうにいきまし

たら案内がありますので、そちらに従ってください」

「うん」

「ふう、お腹いっぱいだ……ごちそうさま」

満腹状態になったお腹をさすりながら椅子に深く腰掛ける。

「お粗末さまです。食器ほうは使用人の方が片してくれますのでお部屋に戻っておいてくださいね」

「うん？僕も手伝うよ？」

してもらってばかりじゃあれだし。

「いえ、むしろ手伝わないほうが助かります」

「そうよ。ちよつとうちは特殊だから」

クリスちゃんもシオの言葉に追従するように付け加える、
特殊ってなんだろう？

まああまり深入りしてほしくなさそうだし、ここは御好意に甘えるべきだよな。

「うん、ありがとう。それじゃあ部屋に戻ってるね。シオはこれからどうするの?」

「私ですか?これから宿題をしてお風呂に入る予定ですが」

「宿題かあ」

今日出された課題を思い出す。

てきとうに埋めて提出してまた怒られるんだろうなあ。

「あ、そうだシオ。僕と一緒に宿題やらない?」

チラッとしか見てなかったので断言は出来ないのだがシオは総合教科の点数が10000点を越える超天才だ。

宿題なんてぱっと片してくれるに決まっている。

「構いませんよ。クリスちゃんは何時も通りにして、サボったらダメですよ?」

「はい」

「ですからここが……」

シオの部屋で宿題をしようと思ったのだが、シオの部屋は2階にあるので明久の客部屋ですることになった。

しかしシオって何かいい香りするよね……………違う!?

僕はノーマルだ!

「なるほどなるほど。ならここは?」

気を取り直して宿題に集中する。

「ああ、これはこの公式使っんですよ。一度この公式で整理してみてください」

「えっと、こうだから……………」

「明久君。計算間違ってます」

「え? 本当だ。……………。これでどう?」

「合ってますよ。じゃあ次は……………」

宿題はあとは単純な計算問題だけとなり、シオは疲れたように背伸びをした。

「うーん、もう結構夜遅いですね。私はお風呂に入ってきます」

「え？僕も――」

行くよ。

そついで終わる前にシオは部屋から出て行つた。

どうせなら一緒に入ればいいのに、そう思いながらシオを追いかけて扉を開ける。

そして左手にある廊下の向こうのとある部屋に入つていったのを確認してから宿題を終わらせるためにペンを握る。

簡単な問題なので僕にだつてすぐに終わるはずだ。

「……………。よしできた」

すぐという割には時間がかつたけど、シオもまだ出てないだろう。

客部屋を出てすぐのところに着替えと洗面用具が置いてあつたことに戦慄しつつシオの入つていった場所へと向かう。

お風呂場らしき場所の扉をあけるとそこは銭湯のような脱衣所があり、風呂場の中からは鼻歌が聞こえてくる。

まだシオは入っているらしい。

ここは驚かせるべきだろう。

僕は音をたてないように服を脱ぎ、タオルを腰に巻くと勢いよく浴室へ踏み入った。

「シオ！僕も入りにきたよ！」

若干湯気で曇っているものの浴室は広く完全に視界を遮るには至らない。

だからだろう。

その方向を見て明久が固まつたのは。

「……………え？」

「……………え？」

身体を洗っていたのか身体を泡だらけにしているシオ……ではなかった。

何故ならその人物は一糸纏わぬその身体には女性特有の膨らみが存在していたからだ。

いわゆる——おっぱい。

「……………」

「……………」

「……き」

「……………き？」

「きゃあああああああつ！」

「すすすすいけません！まさか女性が入っているとは思ってもよらなく、決して覗こうとしたわけじゃなくて……」

「いいからあ！出てつてよあ！馬鹿ーっ！」

小さいながらも女性らしい肉付きをした彼女に涙目で石鹸を投げられながら僕はその場を後にした。

「すみませんでしたーっ！」

「……………あれ？シオはどこに？」

浴室から出て脱衣所で服を着直してから明久は思わず脱衣所に置かれた服を探してしまう。

ぱぱと探して見付かったのは一つの文月学園の男子制服。

「……………あれ？」

ならさっきの女の人の服はどこにいったんだ。
そう思い一つ一つ籠を覗いて女の人の服を探す。

「……………明久。何してるの？」

「何って、今お風呂に入っている女の人の服を……………」

「……………」

「……………ち、違う！これは罠だ！」

「黙れこの変態！」

「うばああああ！？」

最後に見えた光景は拳を輝かせて振りかぶるクリスの姿だった。

「それで、何か申し開きは？」

「ひつく……ぐすつ、うう……」

今だ泣きべそをかいている詩織に仁王立ちしているクリス。
そして正座している明久と場は混沌と化していた。

「えっと、僕はシオの後を追ってお風呂に入ったんだ」

「その行為がダメって言ってるのよ！」

「ええーっ！？なんで？！どうして？！」

シオとお風呂に入って何でダメなの！？

「まだ気付かないの！？いい？よく、聞きなさい！あんたがシオだと思ってるのはここにいてるこれよ！」

グスグスシクシクと泣き声まで出している女性に罪悪感を覚える明久だが、その発言にはさすがに眉を顰めた。

「どう見ても女性じゃないか。あと本当に悪かったと思ってますか

「泣きやんで!？」

「……一つ聞くけど、あんたにはお姉ちゃんがどう見えてたの？」

「え？お姉ちゃん？」

「あんたの言うシオのことよ!」

「ロングポニテで」

「そのままね」

「ひよろつとした身体をしてて」

「胸以外はそのままね」

「でも結構目が釣りあがってて鋭いイメージが……」

「それよ」

そこでビシッと明久の指差すクリス。

え？それって？

「まず大前提としてお姉ちゃんは魔法使いなの」

「……？馬鹿だなあ、そんなのいるわけじゃないじゃないか」

「もう一度食らいたい？」

そう言うときクリスは右手を輝かせて振り上げる。

「（ブンブン）」

「そう。それでお姉ちゃんは男として登校してたわけだけど、よく思い出して。お姉ちゃんが召喚獣を召喚した時。名前はどんなってた？」

「どつって……」

言われて何とか思い出そうとして、出てくる。

「詩織……詩織＝レッドフィールド？」

「そうよ。さすがにそつちまでは弄くれなかったみたいで、詩織がお姉ちゃんの本名よ」

「え……嘘でしょ？」

「じゃあなんで詩織なんてバリバリの女名であんた疑問に思わなかったのか分かる？」

「そういえばそうだ。」

「シオと名乗ってたのに詩織なんて名前で表示されてた時点で誰もが疑問に思はずだ。」

「答えは簡単。お姉ちゃんのことを知らない人間はお姉ちゃんを男だと思う魔法をかけてたのよ。」

「だから例え女の名前が表示されてたとしてもお姉ちゃんを男だと思っている限りは疑問にも思わない。」

「明久がお姉ちゃんの胸が平らに見えたこと、釣り目に見えたこと」

は明久がそういうのが男だと思っているからよ。

つまり明久がもし男ならこういう特徴が男らしいと思う姿を無理がない範囲で見っていたのよ。

実際にあんたのクラスメイトに聞いたら分かると思うけど、詳細な容姿を聞いたら全員バラバラのはずよ。わかった？」

.....

「クリスちゃん」

「何よ」

「ごめんもう一回言って」

「ゴッドフィンガー！！！！！！」

間髪いれずに掴まれた顔で謎の衝撃が加わり、意識が遠くなる。次に目覚めた時は既に朝でFクラスのミカン箱の上だった。

「つてことがあったんだ」

「早朝からFクラスに来て寝てた上、まだ頭が夢の中なのか」

「違うよ！本当だよ！あれから僕と目を合わせてくれない詩織に何

度も謝ってようやく許してもらえたんだからね！」

「はいはい。お前の脳内彼女詩織に許してもらえてよかったな」

「違うよ！？脳内彼女じゃないよ！？」

「しかも現実にいる男の名前を変えてまで……お前、そっちのケがあつたのか？」

「だあああああつ！？」

雄二に話してみたが当然理解されなかった。

オマケ

「まったく明久の妄想癖にも困ったものだ。しかし詩織か……どこかで聞いたような」

さらにオマケ

詩織は明久の靴箱の前に立つと、過去視の魔法を使った。

正確な日時を入力した上で自身の視界の範囲のものしか見れないという欠点があるものの型にはまれば便利な魔法だ。

これを使って詩織は明久の靴箱にラブレターを入れた人物を見ようとしたのだ。

しかし……

「……………」

自らの視界に写ったその光景はあんまりにもあんまりな光景だった。乙女として恥ずかしい話だが口が開いて呆然としていたことに数秒気付かなかつたくらいだ。

視界にはキヨロキヨロとラブレターと靴箱を確かめながらそれを入れる男の姿が。

（……………確かに明久君の美少年っぷりってそういう方面に人気出そうですよね）

私くらいは優しくしてあげよう。

そう思った詩織であった。

1・5・3 ……え？（後書き）

作者「シオは実は、女の子だったんだよ！」

明久「な、なんだってー！」

読者「（んなの知ってるよ……）」

シオリンも女の子なんですよという話。

明久に魔法＆性別バレイベント。魔法には半信半疑ですが。

シオリンは前世の男の性格と現世で女として作った性格と現世で自然に作られた女の性格の三つが存在しています。

いつも出てるのは女として作った性格で、今回出てきたのは最後の詩織本来の女としての性格です。

普段男の性格がこの性格を封殺してるのですが、ひよんな拍子に出てくる場合があります。

補足説明として、詩織が召喚獣の名前を弄れなかったのにはわけがあります。原作では明久がテストで名前を間違えて提出した時に召喚獣の名前が変わっていたことがありますのでそれを知っている人からすれば「あれ？」と思う出来事なので付け加えました。

一章オリキャラ紹介（前書き）

誕生日はわりとてきとう。

都合が悪ければ誕生日が変わるとかあるかもしれないので、あくまで暫定ということ。

本編で出す予定のない裏設定もチラチラと乗せている。

基本的に既に投稿されている話のネタバレを含むので一話目として開くのはあまりお奨めできない。

一章オリキャラ紹介

詩織「レッドフィールド

髪：栗色のポニテ。サイドではない

目：藍色

誕生日：7月7日

前世が魔王（n o t r i r i なのの意味）で転生したTS系転生主人公。転生した当初は意識がなく、3歳頃から徐々に追憶する形で前世のことを思い出していく。

完全に思い出してから男としての意識が前面に出て、よく家族のことを困らせていた。

今では女であることを受け入れている。

前世の男の性格と現世で女として作った性格と現世で自然に作られた女の性格の三つが存在している。

普段は作った性格が表に出ることが多く、男としての性格は荒時などにたまに出てくる。

最後の自然に作られた女の性格は男の性格に封殺されてることが多いがひよんな拍子に出てくることがある。

いわば詩織が前世の記憶を持っていなければこう育っていたであろうという性格で、案外泣き虫。

幼い頃に雄二と翔子と出会っており、面識がある。

翔子とはその時から連絡を取り合っている。

現世では魔法使いであることを隠す気がなく、裏世界やそこそ大きい企業では超有名入。

文月学園の召喚獣システムも詩織が作ったと勘違いしている者も決して少なくはない。

バカテス世界にもあるリリカルなのはこのアニメの主人公に非常によく似ている。

妹のクリスがオタクなこともあって文中では語られていないが高町なのはコスをよく着せられている。

髪の毛が長いのもその影響。本人は鬱陶しいから切りたいと思っている。

が、シスコンである詩織はなんだかんだでクリスの言うとおりにしている。

召喚獣は0点から始まりダメージを受けると見かけ上点数が回復し、取得点数まで到達すると消滅する仕様。常に全力は出せない欠点である。

さらに武器はリリなの如くレイジングハート（変形機構まではつけられなかった）。鈍器としての攻撃力は低い。あと喋らない。威力に比例して太くなり、一度照準を合わせたら撃ち終わるまで動けなくなるデイベインバスター。

周囲の味方から点数を奪い、一時的に攻撃力へ変換する腕輪機能スターライトブレイカー。

レイジングハートと接触した部位を空間に固定するバインド。但し拘束する力は召喚獣の点数に比例し、また武器は拘束できない。

現在の点数/50（総合教科だと500）の数だけ出せるアクセルシューター。但し攻撃力は一律50（または500）固定。

自身にダメージを与える（見かけ上の点数は回復）ことによって手っ取り早くブーストするブラスターシステム。

相手を強制的にフィードバックするようにする、つまり観察処分者にして召喚者ともどもダメージを与える殺傷設定。

あと一応だが飛べる。

以上9つが詩織の召喚獣の特徴である。

レイジングハートの扱いは明久が使ったとしても十全に使うことが

できず、魔法使いである詩織でさえも完全に扱えない。
これは一人チートして無双とかが嫌いな詩織がそのように難易度を非常に高くしたからである。

クリスⅡレッドフィールド

髪：栗色のポニテ

目：藍色

誕生日：2月12日

詩織の妹で魔法使い見習い。

主に光魔法を得意としており、その中でもさらに肉体強化系を得手とする。

その姿はさながら東方不敗のシャイニングフィンガーやらゴッドフィンガー。

姉が魔法使いであることはあつさり信じたのに「前世が男なんだ」といい始めた時、病気かと思ひ救急車を呼んだ。

オタクであるが、これは何かと忙しいレッドフィールド家で一人寂しさを埋める為に没頭したのがアニメという設定がある。

姉を尊敬し、憧れているので同じ髪型にしている。

自分が髪型を指定したんだろうとかいうツツコミはなしである。

前世が男と言う妄言はいつか正すと決意している。

姉に「ご飯作るの手伝え」と言われそうなので、人並みに料理は作れることを秘密にしている。

黒谷 綾香

髪：金色

目：碧

誕生日：10月23日

詩織と何か関係があるらしい。

現在どこかの規律が厳しい学園で寮生活をしている。

2 - 1 引き籠もりが登校する話（前書き）

後書きには作者の方針のようなものが書かれています。

2 - 1 引き籠もりが登校する話

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力下さい。

『あなたが今欲しいものはなんですか？』

姫路瑞希の答え

『クラスメイトとの思い出』

教師のコメント

なるほど。お客さんの思い出になるような、そういった出し物も良いかもしれませんね。写真館とかも候補になり得ると覚えておきます。

土屋康太の答え

『Hな本× 成人向けの写真集』

教師のコメント

取り消し線の意味があるのでしょうか。

吉井明久の答え

『カロリーー』

教師のコメント

この回答に君の生命の危機が感じられます。

詩織Ⅱレッドフィールドの答え

『変態を治す薬』

教師のコメント

先生に相談できることならしてください。

静かな廊下を一人の少女が足音を鳴り響かせながら歩く。

カーテンから漏れる光は既に朝であることを示し、僅かに少女を照らす光によって幻想的な光景が作り出される。

やがて少女は一つのドアの前に立つと勢いよく開けた。

「お姉ちゃんいつまで寝てるの！？もう10時すぎてるよ！」

詩織Ⅱレッドフィールド。寝坊であった。

「仕方ないじゃないですか。昨日まで連続昏睡事件にかかりつきりだったんですから……ぐう」

「ほら寝ないの！久々のバトルで疲れたってのは分かるけど、そろそろ学校行かなきゃ不味いでしょ！もう何日休んでると思ってるの！」

妹、クリスの言葉に熊さんのヌイグルミに抱きついていたまま寝惚けた頭で前に休み始めた曜日から休んだ日にちを計算し

「すぴー……………」

「お姉ちゃん！」

「…………一週間」

「違うよお姉ちゃん！二週間だよ！？」

「…………誤差です」

「50%近くの誤差なんて聞いたことないよ！いいから早くご飯食べて！私まで付き合ってるんだから！」

どうしても頭が起きない詩織にクリスは久々に運転手を呼び、学校までと命令すると車に詩織を放り込んだ。

図太いのか半覚醒状態の詩織はそれでも起きなくむしろ横になって本格的に寝始めたくらいだ。

「……………」

姉のあまりにもあんな光景に全てを投げ出したくなる衝動にかられるもなんとか助手席に乗り込む。

「お姉ちゃん、あれで乙女だからね……」

普段は知ったことかと言わんばかりにオカルトや超常現象の類の事件はスルーするのが詩織なのだが、今回に限っては率先して首を突っ込んだ。

何故ならそれは少し前に吉井明久という人物が詩織の裸を見てしまったことに起因する。

ようするに顔を合わせ辛い詩織は現実逃避をし、休む為の大義名分を得るために首を突っ込んだのだ。

実際事件に首を突っ込むまで詩織は乙女モード全開でしようもないことで泣き始めるので大変だった。

あまりにも泣き虫なことを怒ろうものなら魔法を暴発させてさらに泣くのでどうしようもない。

「……………はあ」

その苦勞を全て担うことになったクリスとしてはたまったものじゃない。

今日だって詩織を起こすのが遅れたのはそれらによる疲労によるものだ。

なんせこの姉、連続昏睡事件が終了する間際にヘマやらかして精神攻撃食らったのだ。

その時はなんでもなかったらしいのだが事件が終わって家に帰ってから何故か乙女モード全開。

ふざけるなと吼えるクリスを傍目にシクシクグスグスと今更になつて精神攻撃がぶり返したのか異常に怯える始末。

勘弁してくれ。

「お姉ちゃん、本当にもう大丈夫？まだ無理ならもう少し休んでもいいんだよ？車の中でだけど」

もちろん最終的には学校に行かせる。

そう言外に言い放ちつつクリスは詩織と共に校門を潜る。

「大丈夫ですよ。さすがにそろそろ通常運転に戻らないといけませんから」

「……………何かあつたらすぐに連絡してね」

本当はでもなんでもなくただのお姉ちゃん大好き娘のクリスは心配そうに言うが、たぶん詩織にその心は届いてない。

何故なら今詩織は意識が眠っているほどではないが心底疲れており、あまり話を聞いてないからだ。

たぶんいつもの半分以下の思考力だろう。

「お姉ちゃんは上なので。クリスちゃん、しっかりお友達作るんですよ」

「そこは勉強頑張るとかじゃないの？」

「だって必要ないですよ。高校生レベルの教育なんて今更ですし」

金持ちの財力に物を言わせた英才教育なめんな。

「あれ？西村先生？」

階段をあがったFクラスの前に立っていたのは西村先生その人である。

なんか結構縁があるなあと思いながら詩織は話しかける。

「どうしたんですか？」

「レッドフィールドか。今教室に入ろうとしていたところだ」

「はあ」

「さつき学園祭での出し物を決めるように言ってきたな。時間がかかるだろうから出てたんだが、そろそろ決まる頃かと思ってな」

「そつえばそろそろ学園祭ですね」

文月学園の……というか学園祭というものは初めて体験する。いったいどんな事をするんだろうとワクワクする気持ちがどんどん膨れ上がっていく。

「昨日までレッドフィールドは実家の手伝いをしてたんだってな。今回はあの連続昏睡事件と聞いていたが、怪我はないか？」

「はい。特に問題なく解決しました」

「そうか。それはよかった」

実際は精神攻撃を食らったのだがそこは汚点なので話さない。

「今はどんな案が出てるんですか？」

「分らん。多少心配だが、売り上げによってはFクラスの設備を改善できるからやる気はあるはずだ」

それは確かにやる気上がるはずだ。

元々設備が不満でAクラスに戦いを挑むという無謀をした馬鹿の巣窟なので、間違いなく全力でその餌には食いつく。

ガラガラと音をたててFクラスに入る。

教卓に立っていたのは明久と島田美波の二人。

この時点でかなり嫌な予感がするのだが、それでもと黒板に書かれた文字を確認する。

【候補？ 写真館『秘密の覗き部屋』】

【候補？ ウエディング喫茶『人生の墓場』】

【候補？ 中華喫茶『ヨーロッパアン』】

「……………」

「…………補習の時間を倍にしたほうが良いかもしれんな」

「え？これが学園祭の普通じゃないんですか？…………よかったです」

「見る、レッドフィールドが変な誤解をしたじゃないか。倍どころか3倍にしたほうが良いな」

『せ、先生！それは違っんです！』

『そうです！それは吉井が勝手に書いたんです！』

『僕らがバカなわけじゃありません!』

そうですか？

「馬鹿者！みつともない言い訳をするな！」

さすが西村先生。

文字通りみつともない言い訳をしようとしているFクラスを一喝し、仲間を売ろうとするその魂胆に怒声をあげている。

「先生は、バカな吉井を選んだこと自体が頭の悪い行動だと言ってるんだ！」

「……………」

西村先生って実はFクラスの馬鹿な生徒が嫌いなんだろうか。

2 - 1 引き籠もりが登校する話（後書き）

二章とうとう開始。

一章と二章の間に存在している連続昏睡事件編はある程度の要望がない限り絶対書きません。

そもそもこれ、そういうバトル小説じゃありませんし。

私はバカテスは召喚獣バトルと学校生活の騒動が中心の小説だと思っ
っているのでその方向を外す気は（たぶん）ありません。

今後魔法バトルがある場面があつたとしても、ある程度の要望がない限り丸々カットされます。

詩織の前世の話とか超シリアスな過去とかもそっちに突っ込んでます。

バカテス本編でそんな重い話されても読者困るだけだろ…… と思つたので。

書く気ないなら要望がない限りなんて書くんじゃねえよクソがとか
思う人もいるかもしれませんが、一応構想はできているのでバカテ
ス二次の趣旨から一時的に外れることになっても見たい人がある程
度いるなら書いてもいいかなと思っ
ているからです。

2 - 2 彼女の参加理由

以下の問いに答えなさい。

『バルト三国と呼ばれる国名を全て挙げなさい』

姫路瑞希の答え

『リトアニア エストニア ラトビア』

教師のコメント

そのとおりです。

土屋康太の答え

『アジア ヨーロッパ 浦安』

教師のコメント

土屋君にとっての国の定義が気になります。

吉井明久の答え

『香川 徳島 愛媛 高知』

教師のコメント

正解不正解の前に、数が合っていないことに違和感を覚えましょう。

詩織「レッドフィールドの答え

『バルト第一国 バルト第二国 バルト第三国』

教師のコメント

なんとか埋めようと頑張ったのは分かります。

あれから西村先生の説得というか利益を設備に回すという発言でやる気を出したFクラス一同。

多少騒がしくなったものの多数決により出し物は中華喫茶となった。詩織は密かにウェディング喫茶に手をあげていたので、若干残念そうにしながらもホール班になった。

これは一部からの推薦によるもので、美少年のシオなら平気だろうという推薦だ。

一方Fクラスの中には「美少年……？」と首を傾げていたものが数名おり、そろそろバレるかなと詩織は思っていた。

「うん？」

既に帰り支度をすませ、校門を出ようとした時、不意に詩織の懷に入れていた携帯電話が振動する。

この振動パターンは電話だが、いったい誰からだろう。

「……明久君ですか」

厄介事の臭いがするので切ってもいいだろうか。

「はいもしもし」

『詩織……じゃなくて、シオ。少しいいかな』

「……………ええ」

明久に性別がバレてからというものの明久の第一声が「詩織」であることが最近とても多い。
馬鹿だから仕方ないのだが、こう何度もされるとワザとかと邪推し
たくなってくるものだ。

『……………？まあいいや。シオは召喚大会知ってる？』

「ええ、知ってますよ」

私も一枚噛んでますし。

そう心の中で呟いてその内容を思い出す。

トーナメント形式のタッグ戦で、召喚獣を使った学園外対象のデモンストレーションみたいなものだ。

文月学園の最大の特徴である召喚獣を一目見ようと来るお客さんも非常に多く、文月学園のイベントの中でも一番大きなものだろう。もちろん学生側にもメリットがあり、優勝者には賞状とトロフィーと賞品が存在する。

さらに準決勝や決勝にもなれば大勢の観衆の下に対戦を行うこととなり、方法によっては自身をアピールするチャンスだ。

『実はそれに出て欲しいんだ』

「無理です」

考える間もなく断る。

『えーっ！？ちよつとは考えるとかしようよ！』

「……………。無理ですね」

『考えただけ！？な、なんで無理なの？』

なんで、と言いますか

「まず一つ、私にはパートナーがいません」

チラッと今朝に島田美波と姫路瑞希と話したのだが、どうやら彼女達は二人で出るらしい。

他のFクラスは点数的にいてもいなくても変わらない存在になりそうだし、他クラスだと知り合いは翔子くらいしかない。

しかし彼女は既に秀吉の双子の姉の木下優子とペアを組んでいるらしい。

なら現実的に優勝を狙えそうなペアは知り合いの中では存在しないのだ。

「そして二つ目、これが何よりの問題点なのですが、召喚大会は1試合ごとに教科が変わる仕様ですよ？あれが私には曲者です」

詩織は異世界から転生したという関係上、歴史とか地理が大の苦手だった。

さすがに中学生レベルなら満点をとる自信があるのだが高校生レベ

ルとなると一気に自信がなくなる。

となればやはりそういったときに頑張ってくれるパートナーがいなければ間違いなく詩織は勝ち進めない。

「そして最後に、私は負けるのが大嫌いです。明久君、そういった頼みごとをするということは目標は優勝ですよね？」

『うん』

「私の目標が優勝になるなら、成功率を考えれば参加するに値しません。」

作戦上負けるなら構わないのですが、目標を達成できないことは私にとって屈辱である他なりません」

どちらかという最後の理由が詩織にとって一番大事であった。

100%勝てる勝負は存在しないと理解しているがいくらなんでも勝率が低すぎる戦いに身を投じる気はなかった。

この身は違うが、かつては魔を統べる王であった存在。

負けることが許されなかった自分のその気概は今もなお受け継がれている。

『そっか。なら仕方ないね』

「はい。それに明久君も参加するんでしょう？男なら自分で優勝するくらい言ったらどうですか」

『うん。僕等とあたるまで戦ってもらって、時がきたら棄権してもらおうと思ってたけどそういうことなら仕方ないね』

「……………今、なんと？」

『だから僕等と戦う時は棄権してもら……』

「……………」

『シオ?』

そうかそうか。

「つまり私は捨て駒扱いだったわけですか」

『え?……ち、違う!僕等が優勝しないといけないからシオには負けてもらっただけだっ!』

……………その何が違うんだろうか。

「そうですかそうですか。ええ、わかりました貴方の魂胆は。……
……召喚大会では覚えておきなさい吉井明久」

携帯電話の向こうで『ちょ、まっ』とか聞こえてきたが、無視して切る。

よろしい。ならば戦争だ。^{クレーク}

「……………ふむ」

携帯電話の通話画面を一旦消して電話帳から藤堂の文字を探す。
そして電話をかけると

『どうしたんだい』

藤堂学園長がすぐに出る。

よく仕事で連絡を取り合う詩織と藤堂学園長は直通で繋がる番号をお互い所持している。

「明久君が……つと、観察処分者がこちらへ召喚大会への参加要望を出してきました。心当たりあるんでしょう?」

『何のことだい?』

あくまでシラを切る気か。

「『白金の腕輪』」

『……………』

「まさかとは思つのですが、バグを直さないまま白金の腕輪を賞品に出したんじゃないですよ?」

だいたい明久が召喚大会に出るといつ時点できな臭いものを感じていた。

その上詩織に試合で負けろというまでの勝利への執着っぷりは詩織でなくても疑問に思うはずだ。

明久がもしもそこまで召喚大会の優勝にこだわるとしたら、考えられる理由は二つ。

まず一つは明久がどうしても召喚大会の優勝賞品を手に入れなくてはならない事情がある。

二つ目は優勝そのものに明久自身に対する何かのメリットがある。これは例えば優勝すればお小遣いをあげてあげるだのそういう事もあるだろう。

この二つでおそらく正しいのは後者。

何故なら明久は先程電話をかけてきたからだ。

召喚大会の話は既に三日以上前に出たものにも関わらず今更、という思いもある。

そもそも召喚大会の優勝賞品の白金の腕輪自体、詩織が前に駄目だしをした品だ。

詩織自身も召喚大会の賞品を見て、その項目に載っていた時によくこんなに短期間で修正できたなと感心したものである。

召喚大会で出す腕輪はデモンストレーションの意味も含まれているので優勝者が起動する筋書きだ。

だがもしもそのバグが直ってないなら？

直ってないにも関わらず既に優勝賞品として出してしまったのなら？

「状況を考えてみて明久君を焚きつけた人物がいるのは明らか。Fクラス以外となれば一番可能性があるのは西村先生です。時点で貴方です」

『ちよつと待った。なら西村先生が先じゃないのかい？』

「アホですか。貴方が一番胡散臭いんですよこのババア」

この理論もだいたい無理矢理なことは理解しているが、魔法まで使って考察した事だ。

探查の魔法で今明久達の歩いてきた方向——学園長室があることを確認した詩織が学園長が犯人だと仮定してこじつけた真実。

実際結構間違っていないと詩織は思っている。

「ですから明久君に必要なのは貴方が言う優勝賞品、『白金の腕輪』の回収でしょう？」

白金の腕輪が直ってないのならそれが一番納得いくのだ今回は。

『で、どうしてほしいんだい？ 分かりきってるんだろ？ どうせ』

普段の詩織ならそんなこと知っても放置するのは確実だ。

となれば詩織は学園長にしてほしい何かがあるはずだと藤堂学園長は睨んだ。

「簡単な話ですよ」

『ちょっと待った。あの馬鹿どもの邪魔だけは勘弁してくれよ』

「大丈夫です。私の要求は――」

2 - 2 彼女の参加理由（後書き）

最後あたりがちよつとゴチャゴチャしてるのは作者の力量不足です。実際理論かいてたら「あれ？」って思つてよくよく考えたらおかしいことに気付き、「じゃあ魔法で学園長室にいたことに気がつかせとけばいいや」と半ば無理矢理に進める。書き直すのが若干面倒だったとも言つ。

そして……ごめんなさい。

2章で本格的に明久達と絡むとか言つてたが……ありや嘘だ。すまん。

今回は傍観までは行かないが、少なくとも明久sideに肩入れすることはなさそう。

どうも2巻の話つて詩織が性別バレイイベント完了させてないと参加させにくいんですよ……。

そもそも常夏コンビなんて、詩織が本気で排除しようと思つたら社会的に排除されちゃいますし。上手い具合にキレささずに詩織を常夏コンビと戦わせる文章が思い浮かばない……！！

のわりに自然に性別バレイイベントが出来る場面がないし、今回は全開のように傍観しつつトラブルで参加ではなく、学園祭を楽しむ過程で明久達と遭遇するといった方針にしたいと思います。

ちなみに性別バレイイベントがいつになるかは既に決めています。

2 - 3 Aクラスの中心で怒りを示す

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力下さい。

『喫茶店を経営する場合、制服はどんなものが良いですか?』

姫路瑞希の答え

『家庭用の可愛いエプロン』

教師のコメント

いかにも学園祭らしいですね。コストもかからないですし、良い考えです。

土屋康太の答え

『スカートは膝上15センチ、胸元はエプロンドレスのように若干の強調をしながらも品を保つ。色は白を基調とした薄い青が望ましい。トレイは輝く銀で照り返しが得られるくらいのもを用意し裏にはロゴを入れる。靴は5センチ程度のヒールを――』

教師のコメント

裏面にまでびっしりと書き込まなくても。

吉井明久の答え

『ブラジャー』

教師のコメント

ブレザーの間違いだと信じています。

詩織「レッドフィールドの答え

『ウェディングドレス』

教師のコメント

何かの衣装と勘違いしてませんか？

詩織は屋台の食べ物を買って食いをしのご機嫌だった。

学園祭当日までに認識障害の術式を大幅に弄っていて期日に間に合うか不安だったが何とか完成させられたことも一押ししている。

「ん」

鼻歌を歌いながらタコヤキを一口。

冷静に考えたら自分で作ったほうが何倍も美味しいのだが不思議と学園祭で買った食べ物は結構美味しかった。

そして――

「あわわわ」

それらの幸福度は横に黒谷綾香がいることがさらに一押ししていた。

「綾香、はぐれないようにしてくださいね」

「うにー……詩織ちゃん、手を繋いでもいい？」

甘えるように片手にだきついて上目遣い。

背が平均より若干低め（女子基準で）の詩織よりさらに背が低い綾香。

金髪碧眼のイギリス人と日本人のハーフだ。

もはや小学生ではないかと思われても仕方がないほどの童顔でもある彼女を見て、詩織は言った。

「タコヤキのほうが大事です」

「ひどい!？」

ぶーぶー言ってる綾香だが、その顔はだらしない程綻んでいる。

綾香は詩織とは久々に会ったので一緒にいるだけでも嬉しいのだ。

今日の詩織は少女趣味の白いワンピースを着ており、白いブラウスにチェックのミニスカートを着込んだ綾香が並ぶと姉妹に見える。

「詩織ちゃん詩織ちゃん！あれ食べたい！」

「チヨコバナナですか」

まだ学園祭は始まったばかりで、昼前なので屋台に人通りは少ないので当然チヨコバナナの屋台も人が並んでいることはなく、屋台で座っている学生も散発的に客が来るものの暇そうだ。

詩織は「二本ください」と綾香を連れてチヨコバナナを買うために

財布を取り出す。

「ところで詩織ちゃん」

「はいなんですか？」

「クラスのほうは手伝わなくていいの？」

ああ、そんなことですか。

「私は物資的な部分で援助しましたので、Fクラス代表には来なくても大丈夫だといわれましたから」

Fクラスが中華喫茶を経営しようとした時点で問題になったのがFクラスの設備の悪さである。

どうオブラートに包んでも飲食店を営んでいい衛生設備ではないので、雄二にそれを話すと彼も困った表情をしていた。

そこで詩織が提案したのが机や畳等の客からまず文句は言われないレベルの喫茶店の備品の提供。

何を思ったのかは知らないが雄二はそれにとっても食いつき、頷きながら「これで保険は大丈夫だろう」と言った。

何の懸念をしていたのかは知らないが、詩織の提案はかなり助かったらしい。

「じゃあ今日明日は一日中一緒にいられるの？」

「いえ、召喚大会にちょっとだけ出ますから、少しだけ待ってもらうことになりますね」

「そうなんだー。あ、詩織ちゃん！これ見て！」

「はい？」

綾香の持っていたパンフレットのある部分を指差し、詩織へと伝える。

【メイド喫茶『ご主人様とお呼び！』】

「……………」

メイドってこんなに高圧的なのがこの世界の常識なのだろうか。
少なくとも前世でメイドというと空気のような存在で、間違っても主人の邪魔や話し相手を担当する相手ではないはずだ。

「メイドだってメイド！綾香気になるよ！」

「お嬢様の綾香にとっては見慣れてるのではないのですか？」

「ぶー。違うよ！綾香は素人のメイドが見たいんだよ！」

……………何が違うんだろうか。

「素人のメイド、響きがいいよ……………。し、詩織ちゃん？今日帰ったらメイド服きてみない？」

「……………」

「綾香見たいなとつても」

「……………」

小さい頃はまともだったはずだ。
そう呟き、残念に育った綾香を見て僅かに涙を零した。

綾香にせがまれてメイド喫茶に来た詩織。

2年Aクラスが経営している喫茶店だが、その内装はAクラスであること権利をフルに使って小奇麗であり、涼しげな空間が広がっている。

それにAクラスは女子が多いので、花もあつて足を運びやすい喫茶店といえるだろう。

「……………おかえりなさいませ、お嬢様」

「翔子ちゃんじゃないですか。とても似合ってますよ」

「はろはろー！お久ー、しょーちゃん」

手をブンブンと振って全身でアピールする綾香に翔子は僅かに微笑む。

「……………久しぶり。二人？」

「はい」

「……………こっち」

ウェイトレスをしている翔子の案内で席についた詩織と綾香は出されたメニューを二人で見る。
結構凝った装飾をしているメニューは、本当の喫茶店で使われていても違和感のない代物だ。

「んー……私はレアチーズケーキにします。綾香はどうしますか？」

「ショートケーキ！」

「……ご注文を繰り返します。レアチーズケーキが一つ、ショートケーキが一つ。以上でよろしいですか？」

「はい」

「うに」

最初から決めていたらしい綾香は席を立ち上がってまで主張した。
まあこの子はいつもこんな感じだし。

顔と背丈……というか外見が完全小学生なのだが、中身も小学生というまるで成長していない少女なのだ。

それからしばらくして秀吉似の女の子——木下優子でしたっけ？——が笑顔でケーキ二つとそれに合わせるように紅茶を置いてくれた。
紅茶のほうは頼んでいないので聞いてみたのだが、翔子の奢りらしい。

「気を使わせちゃいましたかね」

「いいんじゃない別に。詩織ちゃんも似たような感じだし」

「そうですか？」

あ、このレアチーズケーキ美味しい。
プロレベルとまではいかないものの素人が作るにしてはそれなりの出来だ。

向こうのショートケーキはどうなんだろうか。

「綾香」

「うに？」

「はい、あーん」

フォークに刺さったレアチーズケーキを綾香の口元に差し出すと綾香は素直に口を開けてそれを食べる。

「もぐもぐ。甘すぎず、酸っぱすぎず。悪くないね」

「でしょう？そっちはどうすか？」

「うに。あーん」

あーん、と口を小さく開けて出されたショートケーキを頬張る。

レアチーズケーキと同様なかなか美味しいが、若干甘すぎな気がするけどそこは好みの問題だろう。

ただ紅茶、てめーは駄目だ。

「残念ですねこっちは」

「うにー。仕方ないよ。紅茶をマトモに淹れられる高校生って普通じゃないし」

ケーキの完成度に比べたら雲泥の差だ。

恐らくパツクかなにかで作ってるのだろう。

まあ学生が喫茶店を出すならそれが一番手っ取り早い。

『それにしても、この喫茶店は綺麗でいいな!』

「はい?」

「うに?」

いきなり後ろの席で大声で話し始める二人の男。

こついうマナーのなつてない人はどこにでもいるもんだなと自己完結し、目の前のケーキを一口頬張る。

『そうだな。さっきいった二・Fの中華喫茶は酷かったからな!』

『テーブルはちゃんと拭いてないし、埃がつもつてたもんな!』

うるせえ。

綾香も同様のことを思ったのか困つたように眉をハの字にして綾香から見て正面の席をチラチラと気にしている。

『あの店、出している食い物もヤバいんじゃないか?』

『言えてるな。食中毒でも引き起こさなければいいけどな!』

『二・Fには気をつけろつてことだよな!』

無視無視。

だいたいこんな悪評をばらまいてるからってFクラスの人間が過剰に反応すれば悪化するのが目に見えている。
たぶんFクラスに人が来なくなった雄二が疑問に思っただけで、
最中だろう。

ならば詩織がすべきことはスルーだ。

イライライライライラ

『とにかく汚い教室だったよな』

ええ。今はともかく普段は汚いですよ。

『ま、教室のある旧校舎も汚いし、当然だよな』

そりゃあ新校舎のほうが新しいんだから、比べれば汚いのは当然ですよ。

「……………」

「……………」

詩織の怒りが頂点に達しようとしている時、綾香は静かにショートケーキをパクついていた。

こういつ時の詩織に下手なちよつかいをかければ巻き添えを食らうのは自分だと学習していたからだ。

（うに。あの二人、死ななきゃいいんだけど）

「お客様」

「なんだ？——へえ。こんな子もいたんだな」

「結構可愛いな」

「お客様、足元を掃除しますので、少々よろしいでしょうか」

「掃除？」

男の一人が足元に一旦目を向けて

「さつさと済ませてくれよ」

立ち上がるうとした時、ちょうど後ろにいた詩織の椅子に男が当たりそれは起きた。

「……………あ」

「うに？」

「あん？」

「はあ？」

「ん？」

綾香、男二人と今テーブル下を拭こうとした店員。
詩織の声につい顔を向け、その膝元を見る。

「……………」

そこにはレアチーズケーキで汚れた白いワンピースが。
今日の詩織は男子の制服ではなく女物の服を着ており認識阻害もしていない。

なのでマナーのなっていない3年らしき男二人は素直に謝ろうと――

「ふん！」

「ぺぎゅ！？」

する前に拳で返礼された。
そしてもう一人の男が反応する前に

「ダークネスフィンガー」

漆黒に染まった右手が男を捕らえる。
頭を掴んだその手にどれだけの力を入れているのかメキメキと幻聴のようなものまで聞こえている。

気がつけば最初の一撃で殴り倒した男の顔も左手でもっている。

「「あだだだだだ！」」

「……………イグニッション」

ボフン。

そんな擬音が似合う音がして詩織の黒く染まっていた両手が一気に濃くなり、そして小規模の爆発をした。

「え、えと。詩織？」

「……」

手足に力が入れられなくなって人形のように重くなった両手を離した詩織は光の灯っていない眼でウェイトレスを見た。
ヤンデレアイやレイプ目とか言われそうな単色の目の詩織はそのウェイトレスを見た瞬間、すぐに正気に戻る。

「……明久君」

「うん？」

「……もう学校では私に話しかけないでくださいね」

「え？……ち、違うよ！誤解なんだよ詩織！雄二に頼まれたから着ただけだよ！」

「はい？……雄二君とそういう関係だったんですか？」

『雄二。浮気は許さない』

『ちょっと待て翔子。お前は一部始終を見ていたはず——』

その後、男二人は額に肉とかかれたり頭にブラジャーを瞬間接着剤をつけられたりしていたが、起きるとすぎに逃亡し、それを雄二と

明久が追っていった。

2 - 3 Aクラスの中心で怒りを示す（後書き）

綾香登場回。

通称『うにつ娘』。

……通称は今てきとうに考えた。

コンセプトは見た目は子供、中身も子供、性癖は変態。

バカテス2巻をおさらいで読んでて介入ポイントを考えてたらやっぱり介入ポイント少なくて困りました。その中で悩んだのが2巻でどういう立ち位置にするかということです

Fクラスでウェイターポジ↓常夏コンビが死亡。プロ並の料理を作れるので料理人として覚醒↓中華喫茶大繁盛↓あれ？詩織の出番それだけにならね？

召喚大会に参加↓前にも詩織が話した通り、なのなの召喚獣は苦手な教科では雑魚です。↓あれ？どうやって勝つの？

召喚大会そのもの自体、詩織参加で書き始めるとどうしても召喚獣バトルが多くなる予感がありますし、その場合ストーリーの関係上準決勝で常夏コンビ倒しちゃって決勝で盛り上がりにかけるんですよね。いや、決勝は原作通りなんで描写しませんが。

ところでもし中華喫茶でホール班担当するとして、服は男か女かどっちにしたらいいんだろうか。

個人的にはチャイナ娘服着て恥ずかしそうにしてる詩織書きたいけど、まだシオなんだから自重必要なんだ。男装&認識障害でウェイターするのも面白くないですしねえ。

2 - 4 瑞希との会話……のはずだった（前書き）

無視できないくらいリリナの要素出てる気がするので（今更）、原作タグにリリなの加えました。

2 - 4 瑞希との会話……のはずだった

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力下さい。

『喫茶店を経営する場合、ウェイトレスのリーダーはどのように選ぶべきですか？

【？可愛らしさ　？統率力　？行動力　？その他（　）】

また、その時のリーダーの候補も挙げてください』

土屋康太の答え

『【？可愛らしさ】　候補……姫路瑞希＆島田美波』

教師のコメント

甲乙つけがたいといったところでしょうかね。

吉井明久の答え

『【？可愛らしさ】　候補……姫路瑞希（×）　木下秀吉（×）
島田美波』

教師のコメント

用紙についている血痕が気になるそうです。

詩織＝レッドフィールドの答え

『【？可愛らしさ】　候補……黒谷綾香　理由……小さくてコロコロ

口と懐いてくるところが可愛くて少し苛めると涙目の上目遣いで睨みつけてくるのがとても可愛くて特に美味しいもの食べた時のフニヤリとした笑顔なんて最高で――』

教師のコメント

裏面までびっしりと書いてありましたけど、自重してください。

坂本雄二の答え

『【？その他（結婚相手）】 候補……霧島翔子』

教師のコメント

どうしてAクラスの霧島さんが用紙を持ってきてくれたのでしょうか。

詩織は綾香を連れて各クラスの出し物を堪能しながら歩いた。

さっきお化け屋敷に入った時に無銭入場客はメイド服をきた男だの話の話を偶然聞いたので詳しく聞いてみると明久であることが判明。

さすがにFクラスであることがバレると悪評に繋がるのでお金は詩織が払っておいた。

何やってるんだろうか明久と雄二は。

無銭入場してまでも入りたかったのか雄二は。

それも明久を女装させてまで。

「……変態ですか」

「うに？詩織ちゃん？」

「なんでもないですよ。ただクラスメイトは馬鹿なだけじゃなくて変態だったんだなと思ひまして

「……？」

雄二と明久がデキているという話、案外笑ひ話にできないかもしれない。

（とりあえず翔子ちゃんには学園祭が終わったら連絡してあげましょうか）

今連絡したら職務を放り出して肅清しにいくかもしれないので、駄目だろう。

「詩織ちゃん、次はここがいい！」

「2年Fクラスの中華喫茶ですね」

「詩織ちゃんのクラスでしょ？」

「はい。まあ馬鹿の巣窟と化していますが、中々仲が良くて悪い連中です」

「………？仲が良くて悪い？」

いったいどういうこっちゃ。

綾香が首を傾げている気にせず、繋いでいる手を引っ張ってFクラスへ向かう。

そしてFクラス前に着いた時、妙な光景を見ることになる。

「……………ばつちり」

「うむ。これでいけるのじゃ」

「あれ、秀吉君ですよね」

Fクラスから出て行くのは何故か女子の制服を着た秀吉とカメラをもったムツツリーニ。

女子の制服を着てどこに行く気なんだ秀吉は。

そう思った詩織はふと召喚大会のリストを取り出し、千里眼で対戦表と見比べる。

「……………翔子ちゃんと木下優子ですか」

……双子だから入れ替わって棄権でもする気なのだろうか。
さすがにそれはルール違反で失格の可能性高いですよ。
そう思った詩織は携帯電話を取り出して。

『……………もしもし』

「翔子ちゃん」

『……………詩織？』

「はい。木下優子さん、そこにいますか？」

『……いるけど、それがどうかした？』

「実は今――」

「ということなんですよ。さすがにFクラスが反則負けは勘弁したので、注意しておいてくださいね」

『……わかった。ありがとう』

「いえいえ。どういたしまして」

そう言い残して通話を切る。

仲間を売った形になるのだろうが、そもそも詩織にとってまだ翔子>Fクラスの段階だ。

さすがにクラスメイトが負けるように仕込んだりはしないが入れ込む理由もない。

「中華喫茶ヨーロッパアンヘようこそ！」

詩織と綾香を出迎えたのはチャイナ服をきた姫野瑞希。

ちよつと胸を出しすぎでエロくないかこれと疑問に思いながらも案内された席に座る。

案内を終えた姫野瑞希はそのまま別の席で注文を受けて急いで厨房へ伝えにいき、また新たに来たお客の所へと行く。

先程秀吉とムツツリー二が出て、明久と雄二は召喚大会に参加している最中なので今は相当忙しいのだろう。

でもホールに女の子三人しかいないのはさすがに無用心……………三人？

「ご注文はお決まりですかっ？」

元氣よくツインテールの女の子。

こんな子はＦクラスにいなかったはずだが……………外部協力者か？

「えっと、貴方はこのクラスの子じゃありませんよね？小学生ですか？」

少なくとも今の自分はシオ「レッドフィールドではなく詩織」レッドフィールドなのでそれ相応の聞き方になる。

「はいっ。葉月は小学生ですよ！」

小学生を働かせるのって高校生としていいのだろうか。

「Ｆクラスの人の関係者かな？綾香は黒谷綾香！あ、高校生だよ！」

「葉月は島田葉月です！」

キヤーと騒ぐ二人に苦笑いをしてメニューに目を落とす。

この二人は波長……………というか精神年齢が非常に近いのか気が合うようだ。

「オススメは胡麻団子でしたっけ」

「なら綾香それにするー！」

「私もそれをお願いします」

「わかりました！」

元気よく応えた葉月は厨房へと小走りで行った。

「お待たせしました！」

「あれ？多いですよ？」

「これは葉月の分だと言ってました！もうすぐ馬鹿のお兄ちゃんが帰ってくるそうなので！」

ようするにヘルプ要員だったのだろう葉月は馬鹿のお兄ちゃんとやらが帰ってくるから休憩してていいということだろう。

席に着いた瞬間綾香と喋り始める葉月に和みながらそっぴいえばと話しかける。

「その馬鹿のお兄ちゃんってというのが、葉月ちゃんのFクラスの関係者ですか？」

そのお兄ちゃんとは仲が悪いのだろうか。

馬鹿のお兄ちゃんなんて……明久のことだろうか。

そっぴいえば島田葉月と言っていたから、島田美波の妹だろう。

あれ？なら馬鹿のお兄ちゃんとの関係は？

「はいっ！馬鹿なお兄ちゃんは吉井明久って人で――」

「ああ、やっぱりですか」

「チューをして将来を誓い合った仲です！」

「ちょっと待ってる。変態^{ペト}を殺してくる」

あの糞野郎。

俺の裸を見ただけじゃなくて小学生を騙して源氏計画だと？
元男として、生かしておけん。

「し、詩織ちゃん落ち着いて！男言葉になってるよ！」

「離せ綾香！俺には変態^{ペト}を若狭湾に沈めるといふ崇高なる義務が！」

「今の詩織ちゃん離すと絶対洒落にならないことになるから駄目っ
！」

「H A N A S E！」

小さな身体で力いっぱい抱きついてくる綾香を出来るだけ傷つけずに引き離そうとするも出来ない。

次第に綾香が抱きついているので心が落ち着き溜息を吐いて席に座る。

それを見て綾香も詩織が落ち着いたのが分かったのか同様に席へついた。

「はぁ……お手洗いで頭冷やします」

「……詩織ちゃん。そのまま闇討ちに行くのは駄目だよ」

「大丈夫ですよ」

2 - 4 瑞希との会話……のはずだった（後書き）

シオリン、雄二と秀吉を翔子に売るのお話。

ちなみにお気づきの人もいると思うのですが、シオリンはルール違反により失格を心配しており、ルールを破ることは否定していません。

ようするにやるなら上手くやれって思ってます。

今回はシオリンの判断で上手くいかないと思ったので密告されました。

実際原作でもゴリ押しでしたからね……え？原作のほうはどうなりました？

そりゃあ元々情報提供者（たぶん教頭一派）がシオリンに変わっただけですから特に変化はありませんよ。

そして瑞希と会話をさせようと思ったのに気付けば葉月と会話をしていた。

あるえー？

そして気付けばシオリンが男モード全開だった。

あるえー？

感想で書かれて初めて知ったんですが、戯言シリーズの青色サヴァンとうちの綾香は無関係です。

wikiで調べただけなのでどこまで似てるかは知りませんが、類似点があることは理解しました。

綾香について説明させてもらいますと「うに」は本当にできとうに考えた設定で、幼いなら舌つたらずだろうと安直に考えてできた口癖です。

登場人物を「 - ちゃん」と呼ぶのは綾香が幼いならこう呼ぶんじゃねと考えた結果です。

あと令嬢なのは詩織と昔からの知り合いの時点でそういった類の人物であることが設定上殆どです。

バルセンは綾香をあくまで作者が考えたキャラと主張します。

2・5 プチグレシオリン降臨、満を持して（前書き）

もつ出ないって言ったのに……どうしてこうなった。

2 - 5 プチギリシオリン降臨、満を持して

「ん……」

Fクラスへ戻る最中に軽く背伸びをして一息。

頭は完全に冷えたようで、今では冷静に考えることができる。よくよく考えたら明久は馬鹿だが変態ではない……はずだ。

「断言できないのが悪いと思うんですよ」

他の人だって同意してくれるはずだ。

そう自分を納得させながら綾香の下へと戻――

「あれ？綾香がいませんね」

葉月ちゃんもいませんし、そう付け加えて椅子のところに綾香のシヨルダーバックが置かれていた。

バッグを置いてどこにいったんだろうか？

とりあえず待つてましよう、そう思い席に座ろうとした時にムツッリーニの声が偶然届く。

「……………ウエイトレスが連れて行かれた」

「……………随分物騒になりましたね」

本当に今日の文月学園の外来者のマナーは悪すぎではないだろうか。いや、Aクラスにいた男二人は内部の人間か。

「はあ。それで、誰が攫われたんですか？」

「……………？お前は確か、Aクラスで常夏コンビを沈めてた……………」

「詩織」レッドフィールドです」

「詩織だと？おい明久、この前言ってたあれだが、兄弟かなんかじやないのか？」

あれってなんだろう。

そう思うが明久は苦笑いをしてその場を流す。

「シオとは同じ家で育ったんですよ」

嘘は言っていない。

「で、誰が連れて行かれたんですか？場合によっては協力出来ると思いますか」

「いや、それには及ばぬ。連れて行かれたのはFクラスの失態じゃからの。まったく、部外者が二人も連れて行かれるとは……………」

「部外者ですか。……………部外者？一つ聞きたいんですが」

「何だ」

「ひょっとして葉月ちゃんともう一人、同じ席に座ってた子が連れて行かれたなんてこと、ないですよ？私の連れなんですが」

「……………」

明久に雄二に秀吉の視線がムツツリー二に集中する。

「……………連れて行かれた」

ムツツリー二の返答にそれぞれが不甲斐ないと自分を責める。

あくまで部外者の人間、しかもFクラスの身内の連れなんてFクラスとは無関係といっても同じじゃないか。

そんな中、明久と詩織だけが違う反応をしていた。

「な……………」

「明久？」

「なんて愚かな……………」

「は？」

「どうしたのじゃ明久」

「……………」

表情と身体を固めたままの明久の意味不明な言葉につい明久の見ている方を見る。

「ふ、ふ、負腑負不腐譜」

「で、出たーっ!？」

詩織が魔法使いであることを知っている明久は右手が疼くのを感じながら思った。

Bクラスの時の被害で済めばいいのだが……主に犯人の生命的な意味で。

明久達がムツツリー二の言葉に走り去るのを確認してからとある場所に電話をして、それを終わると文月学園を出る。

ズンズンと文月学園を出た詩織は坂道を下っていた。

目標は登校路の途中にあるカラオケボックス——そこにいるゴミの掃除。

社会のゴミという名の汚物を処理するための仕事に躊躇いなど必要ない。

「さて、ここですね」

にこつと満面の笑みでカラオケボックスの入り口に仁王立ちする詩織。

それは日常で見れたならば思わず見惚れてしまうこと間違いなしな笑みなのだが、いかんせん額にでっかい怒りマークが幻視できてしまう。

どこかコミカルな印象をそのマークだが、詩織のオーラが全てを台無しにして魔王様な印象を抱かせる。

カラオケボックスの中から出てきたお客が「ひい！管理局の白い魔王！？」と本気で驚いているのを尻目にカウンターへ進む一同。

「男が数名にチャイナ服を来た女の子が3名、そしてこの写真の子

が1名。どこの部屋をとりましたか？」

「はい？その方々との御関係は……」

メキッ

唐突に聞こえた何かにヒビが入る音。

受付嬢がその音の発信源をふと見てみればそれは詩織の手に持っていた携帯電話。

既に画面は外れ、ボタンはいくつかが外れ飛び、カバーは全体的に折れ曲がり、さらには中からバラバラになった電子部品が飛び出している。

「ひっ!？」

「まあいいです。だいたい分かりますから」

出会い数秒で怯えさせることに成功した詩織だが受付嬢には目もくれずそのまま階段を上がっていく。

「204……205……206……見つけました」

カラオケボックスの中には目も向けずに廊下を歩いている最中に急に立ち止まり、その部屋を勢いよく開ける。

そしてあんまりに悪いタイミングでその光景を詩織は見ってしまう。

「坂本よお。このお嬢ちゃんがどうなってもいいのかア？」

見知らぬ男が綾香を羽交い絞めにして雄二を脅していた。

……

「あ、詩織ちゃん！」

「綾香は少し黙っててくださいね。ところで貴方——ヤスオ君でしたっけ？」

「あん？誰だてめえ」

「教頭に依頼をされた不良の一人ですね。いくらもらったのかは知りません」

「はあ？」

「ああ、ムツツリー二君。そこ、どいてくださいね」

バイトのフリをしていたのか店員の格好をしたムツツリー二は静かに灰皿を背中に隠した。

そして身の危険を感じたのかすぐさまヤスオとやらの男から距離をとる。

「誘拐に傷害に脅迫に……未遂も含まれてますが、まあなんでもいいです。貴方達は青春を楽しく遊ぶ金欲しさにこんなことしてるんでしょうが——」

表情のなくなった顔で詩織は怪しく眼を輝かせた。

『思考誘導』の魔法——その中でも基本的な思考に空白を生み出す魔法。

数秒視線を合わせないといけないうと発動前に魔力を簡単に感知される使いづらい魔法だが、魔法のないこの世界では十分に脅威だ。今この男はいわばずっと呆然としている状態で、考える思考がない

ので魔法を解かない限り植物人間のようなものだ。

「その青春は牢屋で臭い飯を食って過ごすことになります。心配いりません。私がそうさせますから」

「……………」

「綾香、こっちへきてください」

「うに、詩織ちゃん」

動かなくなった男の拘束を簡単に外し、トテトテと詩織の下へと走り寄る。

そして詩織に抱きつく胸に顔を埋めてグリグリと押し付けた。

「んん……くすぐったいのでやめてください」

「やー」

はあと溜息を吐いて雄二を見ると既に人質は全て救出し終えたようで、雄二が無双していた。

「綾香——この屑どもは性的なことを実行しようとしたか？」

「うに？みずちゃんのお胸を触ろうとしてたよ」

ほお、そうですかそうですか。

「じゃあ——『一生性交渉が出来なくなる呪い』でもかけましょうか」

呪いなら現代医学では治療不可能ですしと言い、倒れている男一人一人に丁寧にかけていく。
ちなみに詩織は呪いをかけるのは得意だが解くのはあまり得意じゃないので本気で呪いをかけたら解けなくなるのだが——詩織は容赦なくかけた。

2 - 5 ブチギレシオリン降臨、満を持して（後書き）

今回再び降臨したブチギレシオリンですが、暴力的な手段は使いませんでした。

そもそもそつちは雄二がしていたのです。る気も起きなかったの間違いですが。

その代わり『不能の呪い』をかけられ、十年ほど臭い飯を食うことになったのでチンピラ涙目ですね。

正直魔法のない世界で一番強い魔法は何かって聞かれたら呪いの類だと思ふんだ……単純な火力とかだとミサイルで代用できますしねえ。

今回明久達と協力をして綾香達を助け出すストーリーを書いたのですが、「なんか詩織に違和感がある……」と没にしてまたもや単独行動をすることになったシオリンです。どうもブチギレシオリンはキャラが強すぎて明久達を潰してしまえますからね。

2 - 6 戦い、終わらず――

夢を見る。

人の脳とはいわゆる記憶の保管庫だ。

そして記憶のバックアップは魂によって為される。

だからこそ転生した詩織も当然魂に刻まれた記憶を垣間見ることがある。

『やはり貴様も犬か。 国に忠誠を誓う王という名の、な』

『……………』

『ふん、だんまりか。 覚えておくといい。 貴様は必ず後悔する。 ここで引かなかったことに。 安寧に逃げなかったことに。 立ち止まらなかったことに。』

覚えておくといい。 その後悔は全て貴様のせいだ。 貴様が、引き起こすのだ』

逃げるのは恥ずべきことじゃない。

時には負けを受け入れる事もまた、 大きな勇気なのだ。

そうだ、後悔している。

あの時何故友の忠告に耳を貸さなかったのか。

そうすれば俺達は――俺とカーベラは最後まで何も失わなかった。

意識が急に浮上し、 水面に手を伸ばすように意識を覚醒させる。

「……………最悪です」

嫌な夢を見た。

今日は召喚大会も締めなので久々に朝稽古をしようと思いを振り払

って身体を起こした。

朝日に照らされる庭の中央で静かに眼を閉じ、両手に集中する。

右手には赤い炎、左手には青い氷。

ゆっくりと眼を開け、さらに両手の炎と氷を大きくしながら武術の型をとる。

「……………」

籠った光はぶれることなく静かに両手に宿り、それが詩織の演舞のような訓練を幻想的にさせる。

「……………これくらいでいいしう」

行使していた魔法を消し、それを見たテラスに座っていたクリスが紅茶を注ぐ。

「それにしても同時行使って凄いね。マルチタスク並列思考でしょ？」

「ええ。クリスちゃんが思ってるような便利な代物じゃありませんが」

クリスの入れてくれた紅茶を飲み一息。

「そうなの？」

「はい。並列思考ということは思考力を他の事に割くということですから。

アニメのように分割できる数が多いほど高度な魔法が使えるわけじゃありません。むしろ分割しすぎると魔法なんて使えません」

違う処理をいくつも同時に行ったパソコンのようなものだ。

それぞれの処理が遅くなり、下手をすればフリーズしてしまう。

「上級魔法使いでさえも使用しない使い勝手の悪い技術です。思考を分割すればその分戦いに割ける思考がへりますから」

「上級魔法使い……神にさえ匹敵する力を持っていて、本気を出せば町の一つや二つ、簡単に無くすことができる存在だっけ」

「はい。私が前いた世界は神さえも人間に倒される存在でした。それでもあの世界が存在していたのは、おそらくあそこが実験場だったからでしょう」

魔王であつた詩織とて正攻法で同時に発動できるのは二つまで。それ以上となると動きに支障が出るし、四つも魔法を使えば集中して動けなくなる。

「ふーん。ところで何であれやらないの？」

あれ、とは何だろうか。

「炎と氷といったあれでしょお姉ちゃん。メ。ローア」

「……？メド。ーアって何ですか？」

「お姉ちゃん知らないの？今度貸してあげるね」

……今度は何を貸されるのだろうか。

前に貸されたのは某スタンドがガチンコ殴り合いをする漫画で、頑張って50巻以上ある漫画を読んだものだ。

「そういえばお姉ちゃん。あのチンピラ達、無事牢屋に入ったらしいよ？」

「へえ。そうですか。よかったですね」

「うん。本当に……チンピラ達が死ななくて。さすがに目覚め悪いもんね」

本当にそう思っているのかと問い詰めたくなるような妖しい笑みを浮かべたクリスに苦笑して

「私の点数稼ぎの為に肅清とかし始めちゃう方たちも存在しますから。私は現代に蘇った聖女じゃないんですが……」

以前のレッドフィールド家の詩織の誕生日に集まった来賓客の数人の血走った眼を思い出す。

その眼から感じ取れた感情は——崇拜。

あまり私生活に干渉しないように詩織は言っているのだが、今回のような誘拐事件までいくと彼らも動き出す。

前なんてレッドフィールド家へと敵対した同盟の盟主が気付けば拷問から晒し首のコンボを食らっていたくらいだ。

正直勘弁してくれと思ったのだが彼らは心理学でも学んでいるのか詩織がよっぽど不快に思わない限りは行動に移さない。

だから今回の誘拐事件は詩織にとって文字通りよっぽどのことだったので、十分に肅清される可能性があったのだ。

「彼らもさすがに一般人には手を出さないということですか……」

「……………だといけどね」

学園祭二日目、登校してきた詩織は校舎の階段でクリスに別れを告げてそのままFクラスへと入った。
今日は女子制服を着て新たな認識障害をかけている。

「おおシオ。どうしたのじゃ？」

「秀吉君。さすがに二日とも手伝わないのはどうかと思ったのでお手伝いにきました」

「うむ。それは助かるのじゃ。ウェイターの服はないので、そのまますててくれると嬉しいのじゃが」

「構いませんよ」

女性制服を着ているにも関わらず自分がシオに見えていることに静かに認識障害の魔法の成功に喜ぶ。

今回の認識障害の魔法はシオのことを知っている人物は詩織がシオに見えるという内容だ。

つまり知り合いは詩織がシオに見え、他の人物には女の子に見える。

「そついえば雄二君と明久君はどこですか？」

「アキと坂本なら屋上で二人仲良く寝てるわよ」

「……………なんですか？」

島田美波からもたらされた新たな情報に思わず妙な返答をしてしま
う詩織。

「やっぱりそういう関係なのでしょうか？レッドフィールド君はど
う思いますか？」

「姫路ちゃん。貴方も染まってきましたね本当に……………」

いや、BLが嫌いな女の子はいないと確かクリスが言っていたので、
これは元々なのか？

「まあ昨日もわざわざ明久君を女装させて二人仲良くお化け屋敷に
入ったらしいですよ」

「「詳細を！」」

何となく餌を撒いてみたら島田と姫路が釣れた。

客が来るピークの12時前後を過ぎ、時刻は既に1時を回っている。

文月学園学園祭の最大の特徴である召喚大会に来客は殆ど行っているのか、既に店内にお客は存在していない。

この状態になつてすぐにFクラスの主要メンバーは明久と雄二の応援に向かった。

今残っているのは極々少数のFクラスメンバーのみだ。

「……そろそろ、ですか」

「何か言ったか？レッドフィールド」

「いえ」

クラスメイトになんでもないとアピールしながら千里眼の魔法を発動させる。

既に召喚大会の場は緊迫しており、Fクラス対Aクラスの戦いが始まろうとしていた。

まるで少し前に行った試召戦争の焼き増しだな、と笑いながらFクラスの教室の扉に手をかける。

「私、そろそろ行きますね」

「おう」

元々シフトに入ってなかった詩織はいてもいなくても大丈夫だ。

「詩織ちゃん」

「綾香？」

召喚大会の決勝戦が終わる前に行こうとした詩織を呼び止める声は

綾香から。

無垢な笑みを浮かべた彼女はえへへと照れつつ詩織に抱きつく。

「頑張つてね」

「……はい」

綾香に応援されただけでやる気が出る自分に現金だなと苦笑いして今度こそ詩織は戦場へと向かった。

いいタイミングで来た。
本当にそう思う。

『坂本・吉井ペアの勝利です!』

物足りなかったのだろう。

思えば試召戦争でもやったことといえば不意打ちだけ。
戦い足りなかった。

満足できなかったのだ。

「いいいよっしやああー!!」

今私を縛る魔法はいらない。

認識障害なんて無粋な魔法はここに来る途中で切っている。
あるのは……

『さて特別試合に移りたいと思います』

「「は？」」

『優勝者である坂本・吉井ペアVSレッドフィールド。最強の壁を
Fクラスタッグは壊せるか!?!』

魔法使い——否、魔王詩織。

「さあ戦いましょうか雄二君、明久君」

2 - 6 戦い、終わらず——（後書き）

今回は導入部分。

マルチタスクがやたら万能に書かれてる小説多くみかけますけど、あれ並列思考が前提なのでそこまで便利なものじゃないと思うんですよやっぱ。

魔法のみの固定砲台戦闘ならいくつも同時に魔法を使えるというメリットがありますが、魔法剣士みたいなタイプだとあんまりメリットないと思います。

2・7 レッドフィールドの魔女（前書き）

今回は語るは不要です。

2・7 レッドフィールドの魔女

3年のコンビを打ち倒して最高の気分だった僕らは目が点になっていた。

優勝したと思ったら特別試合だとか言って何故か詩織が出てきていたからだ。

詩織は固まっている僕達に腕輪をそれぞれ投げつける。

「う、うわっ!?!……し、詩織?」

何とかそれを受け止め、呼びかける。

「はい」

「お前はシオの兄弟の……レッドフィールド。どういっつもりだ?」

雄二が剣呑な目を向けているが、詩織はどこふく風でなんとも感じていないかのようにその視線を無視している。

事態に困惑していた僕等の耳に偶然観衆からの声が聞こえてきた。

『あれは魔女か?』

『何故ここに?』

『いや、ここにいるわけがない』

『いいや……あれこそが——レッドフィールドの魔女だ』

レッドフィールドの魔女。

よくよく周囲を観察してみるとそう言っているのは年配の方々が多い。

でも一体何のためにこんなところに出てきたんだろう？

「安心してください。貴方達の優勝は既に決しました」

「なんだと？」

「ただ腕輪を起動させるだけじゃ味気ないじゃないですか。ですから、こつやつとお披露目の場を作ったんですよ」

「……目的は何だ」

「簡単なことです。ねえ、明久君」

急に話を振られた僕は首を傾げて雄二を見る。

雄二は「いったい何をしたんだお前」と言わんばかりに見下すような視線を向けてくる。

「私を捨て駒扱いしたこと、まだ許してないんですね」

「へ？」

「だから、戦いましょう。全員の点数の持ち点は総合教科4000点」

「ちょ、ちよつと待ってよ！4000点なんて点数で起動したら……」

お披露目にならないじゃないか。

そう言おうとしたが雄二がガンを飛ばしていることに気付き、言葉を止める。

「安心してください。レッドフィールドの名にかけて、確実に安全です。雄二君、学園長から使い方は聞いているはずですよ。起動を」

そういえば学園長が白金の腕輪の使い方を突然教えてきた。

一体何の風の吹き回しかは知らないが、その時は特に疑問は持たなかった。

だが今となつては馬鹿の僕でも分かる。

「あのクソババア……最初から計画済みだったな」

「それは私が直しました。もう遠慮はいらないですよね」

「ああ、上等だ。起動！」
アウェイクン

いつのまにか切られていた召喚フィールドが再び張られる。

「戦いましょう。試獣召喚」
サモン

「ちっ、行くぞ明久！試獣召喚！」
サモン

「う、うん。試獣召喚！」
サモン

『Fクラス 吉井明久&坂本雄二 VS ???クラス 詩織Ⅱレ
ッドフィールド』

総合教科 4000点&4000点 VS 4000点』

雄二の腕輪が暴走しない……ということはバグを直したというのは

本当のことなのだろうか。

それにしても何で0点から開始じゃないんだろっ？

「さて、明久君。貴方の力は分かってますよね？」

詩織は召喚獣の持つ杖を真っ直ぐ雄二と僕の召喚獣に向けながら聞いた。

さっきまであんなに右腕が痛かったのに、不思議と今は痛くない。むしろこれから戦う相手の強さを思い高揚感すらあふれ出る。

「^{ダブル}二重召喚」

僕の声に反応して召喚獣が二体に分裂する。

使ったのは初めてだが、何とか操作できそうだ。

「今回は白金の腕輪のデモンストレーションの為、4000点でも腕輪は出ないことになってます。ルールはデスマッチ。審判お願いします」

『え？……そ、それでは始めてください！』

審判の言葉と共に僕は一気に詩織の召喚獣へと駆け抜ける。

雄二は円を描いて遠回りするように走った。

「ディバイン……」

「明久！」

「うん！」

雄二の目を見て何を言いたいのか分かった僕は詩織の杖の向き先をしっかりと確かめ、ワンステップだけ右手にずれる。

「バスター」

先程までいた空間を桃色の光線が一瞬で通り過ぎる。

これは――

「やはりな。部外者であるお前は召喚獣の操作に慣れていない。飛び道具という有利な武器も照準を合わせるまでしか出来ないってことだ！」

なるほどと納得して僕はそのまま木刀を撃ち終わったままの姿勢でいる詩織に振り下ろす。

ギンッ

しかし振り下ろされる木刀へ詩織は冷静に杖を横に構えてそれは防がれる。

ダブルで呼び出した片方を一旦放置してそのまま追撃に移る。

白金の腕輪の特性上、ダブルは点数を二分するので今は2000点しかないがそれでも操作に慣れていない詩織なら押し込める！

だが

「な――」

その全てを踊るように詩織はいなした。

「これは……慣れていない動きじゃないよ雄二！」

「その通りですよ。あの攻撃は単に一度照準をつけたら打ち終わるまで動けないだけです。仮にも今回は最強の壁ですから。そして――」

一気にバックステップ、距離をとった詩織の召喚獣は向かってきた雄二に手を向ける。

「――アクセルシューター」

「「な!?!」」

出現したのは8つの桃色の光弾。
召喚獣の頭くらいの大きさのそれだが、それは詩織の周囲を自由に飛び交っていた。

「いきなさい」

「ちっ!」

それぞれが違う動きをしながら襲い掛かる光弾。
四方八方から来る光弾に上から召喚主が見ているので対応できるが、それでも8つは多い。

「詩織!」

「明久君!?!」

雄二にかかりつきりになっていた詩織に飛び掛ってきたのは僕の待機していた召喚獣。
密かに詩織の召喚獣にじりじり近づいていたのだが、気付かれなか

つたようで接近できた。

「まだ！」

光弾の半分の4つを雄二のところから戻し、そのまま僕の召喚獣へと向ける。

やばい……僕の召喚獣は腕輪の関係で2000点だけど、詩織の攻撃は4000点クラスだ。

「はあ！」

武器が折れるかもしれないが、それでも何もしないで受けるよりはマシだと思い光弾に向かって木刀をなぎ払う。
すると予想外にもあっさりと光弾は消えた。

「そうか明久！この光弾の攻撃力はたいしたことない！」

今のうちに被弾覚悟でいけ！

そう目で語る雄二に僅かに頷いて迫る光弾を無視して詩織の前へと躍り出る。

顔や体勢が崩れる胴への攻撃のみ弾き、何度か光弾に攻撃され身体中に痛みが走るが気にせず詩織に木刀で突く。

「！？デイベイン……」

僕の木刀が詩織のわき腹を突くと同時に杖が僕に向けられた。

「バスター！」

「がつ！？」

一瞬で消滅した僕の召喚獣のフィードバックで激痛が走るが構わず召喚獣の点数を見る。

『Fクラス 吉井明久&坂本雄二 VS ???クラス 詩織Ⅱレ
ッドフィールド』

総合教科 1806点&2271点 VS 1319点』

急所を一撃された詩織はさすがに大幅に点数を削られたようで、総合点数では僕等が上回っていた。

このまま押せば勝てる――そう思った瞬間、棒立ちしている僕の召喚獣に詩織が既に杖を向けていることに気付く。

「デイベインバスター！」

避けることは既に間に合わないことを悟った僕は迫る光線を木刀を盾にした。

しかしメキメキと嫌な音を木刀がたてたので、一瞬の判断で木刀を捨てて横へと滑り転がる。

すると間一髪で木刀は砕け消滅し、僕がいた空間を光線が過ぎ去っていった。

「馬鹿明久！集中しろ！」

「へ？」

雄二の声に光線を見送っていた僕はマヌケな声をあげて詩織を見る。そこにはいつのまにか放たれた二発の光弾のうち一発を拳でかき消す雄二の姿。

そしてもう一つが僕の召喚獣に向かって放たれていた。

「ぺぶら!？」

見事に頭にクリーンヒット。

木刀さえあれば追撃できたのだが、それすらできずに頭に直撃を食らう僕の召喚獣。

『Fクラス 吉井明久&坂本雄二 VS ???クラス 詩織IIレ
ツドフィールド

総合教科 21点&2115点 VS 1152点』

「ちっ！生き残りましたか」

あ、危ない。

反応すらしてなかったら消滅していたところだった。
というか頭がガンガンしてて痛い。

「つつこめ明久！」

雄二はもはや僕を捨て駒にする気であることが分かったが、もうそれしかない。

僕の召喚獣は既に殆ど攻撃力を失い、決定打は雄二しかない。

チームの勝ちを狙うならば僕が囷になるのが一番だ。

「まったく！ここまで点数差があると防御しただけで削られますね
……！」

雄二の猛攻を杖でガードしながら悪態をつく詩織。

光弾を拳で打ち消した時に雄二も若干ダメージを食っているものの
詩織ほどの勢いではない。

「これで！」

最初に比べてだいぶ動きが鈍くなった僕の召喚獣だけど、牽制くらいはできる。

そう思い拳を振り上げて詩織へと飛び掛る。

「仕方ありませんね！」

詩織は一步下がり、雄二から距離をとろうとする。

しかし詩織の召喚獣が遠距離型だということを分かっている雄二は逃がすものと詩織に食いついていく。

「雄二！」

詩織の顔めがけて拳を放つ。

しかしその攻撃は簡単に杖でいなされ、僕の召喚獣が詩織に一瞬だけ覆いかぶさるようになり――

「デイベイン……」

その声を聞いた。

「危ない雄二！」

僕の召喚獣が覆いかぶさったことで僅かに出来た不可視時間。

僕が拳を振り切って通り過ぎた時、既に詩織の持っていた杖は雄二に向けてチャージされていた。

「バスター」

「なんだと!？」

僕と雄二が立っている側からすれば少し見えなくなったと思ったら既に杖を構えた詩織の姿が。

発射された光線は真っ直ぐに雄二へと向かっていく。

慌てて避けようとするものの僕が攻撃を外した瞬間に追撃をしようとしていた雄二は既に遅く、飛び掛る寸前だった。

そんな体勢で避けられるわけがない雄二に僕は――

「おおおおおおお!」

既に拳を振り切っていた召喚獣を無理矢理動かして雄二を突き飛ばした。

明らかに人間であれば再現不可能な動きであつたが、何とか雄二を突き飛ばすことができた。

「なっ!？」

詩織が驚きの声をあげ、雄二の召喚獣を見る。

僕は召喚獣を消し飛ばされ、全身に悪寒が走るような痛みを感じつつしっかりと雄二の召喚獣を見る。

発射後の硬直で動けない詩織に向かって滑るように右手を振り上げる。

それに対し慌てて詩織は向かってくる雄二に杖の照準を合わせる。

まだだ。まだ届かない。

ならば僕が詩織の注意を引くしかない。

でも既に召喚獣が消滅した僕に出来ることは……あつた!

「詩織!」

「……ディバイン」

ガン無視。

試合中だから当然のことだが、それでは負けてしまうので困る。
だから僕は——対詩織専用破壊呪文を唱えることにした。

「裸、とっても綺麗だったよ!」

「ふえ?」

白熱していた会場全ての空気が凍りつく。

一瞬僕の言ったことを理解できなかった詩織だが、理解するとよほど恥ずかしいのか顔を真っ赤にして自分の身を抱きしめた。

胸が強調されるようなその格好を脳内フォルダに焼付ける。

ついでに観客席から向けられる変質者を見るような冷たい視線はスルーする。

雄二も僕を信じられないような目で見て固まっていたが、すぐに意図を理解したのか詩織に向かって高速で近づく。

今度こそ終幕だ。

詩織も雄二もお互いの攻撃を避ける気がない。

どちらが先に自分の攻撃を出し切るか。

それしか二人は考えていなかった。

「これで……」

「ディバイン……」

雄二の拳と詩織の杖が交差する。

二人は吼えるように己の武器を信じた。

「終わりだああああ！」
「バスター！」

2 - 8 召喚大会その後（前書き）

超しつこいようですが、この作品において詩織と明久はくつつきません。絶対にくつつきません。くつつかないったらくつつきません。大事すぎるので4回言いました。

2 - 8 召喚大会その後

「……………」

「……………」

撤収が終わり、今は機材のみが残る屋上で詩織は寝転がっていた。スカートなので当然角度によっては中身が見えるのだが、そんなことを気にする余裕すら今の詩織にはない。

「……………ねえ綾香」

「うに」

「あれはないと思うんですよ」

あれ、とは当然明久が詩織の注意をひくために叫んだあれ。あの後当然の結果として明久はFクラス連中に肅清されていた。その中に詩織と綾香が加わっていたのもある意味当然だ。フルボッコにして病院送りレベルにしたが、最後に回復魔法をかけておいたので今頃けろっとしてるだろう。

「私、とってもシリアスだったんですよ？」

「……………だね」

「……………。あやか」

困った顔をしている綾香に抱きつく詩織。

頭を撫でながら顔をこすり付けている辺り、相当参っているのだろう。

「だいたいですね、私の召喚獣弱すぎなんですよ。そりゃあ卑怯くさい武器もありますけど、弱点だらけですし複数相手には弱いです」

うじうじと詩織らしからぬ愚痴を黙って聴く綾香。

間違っても「それ詩織ちゃんが設定したんじゃない？」とか言うてはいけない。

「そうだね。うに、そう思う」

「ですよ。だいたい明久君だって観衆の中であの発言はないと思うんですよ。何ですか？私にとつての羞恥プレイですか？」

だいたいあの馬鹿は……そう前置きしてから始まる不満の数々。全力ではなかったが本気であつたあの勝負に負けたのがとても悔しいのだ。

愚痴を言い続けること5分弱、そろそろ止めないと不味いかなと思つた綾香は相槌ではない言葉を言う。

「綾香は可愛い詩織ちゃん見れて満足だっただけ」

「ふえ？」

一瞬でボンと顔が赤くなる詩織を見て悪戯が成功した子供のように笑う綾香。

その様子を見てからかわれたことに気付いた詩織は自身の不甲斐なさに呻いてから立ち上がる。

そして屋上端のフェンスまで向かい、撤収作業をしている生徒達を見る。

「……平和ですね」

「どしたの詩織ちゃん」

「今朝夢を見たんです。友達に忠告されたのに、聞かなかった夢を」

「……………」

「言われたんですよ。いずれ必ず後悔する、と。あの時は勝てず後悔したのに、今は負けて後悔していない。どういふことなんでしょうね」

「今は平気？」

「色々と思うところはありますが、負けたのは私の未熟です」

これで次は全力を出せる。

その時にも負けてしまえば、さすがに不敗伝説は返上しなくてはならないか。

そこまで考えて不意に笑う。

前世では不敗にあればど拘っていたのに今となってはただの称号くらいにしか思っていない。

「……………いえ」

不敗伝説は既にある、か。

目の前の少女、綾香には負けっぱなしだ。

既にないなら拘っていないのも当然だ。

「綾香」

「詩織ちゃん……」

どこかピンク色の空気が流しながら屋上の隅で彼女達は見詰め合う。
もはや完全に二人の世界に入っていた。
だからこそ気付かなかったのだろう。

「夏川、そっちの準備は大丈夫か？」

「大丈夫だ。へへっ。これが流れりや俺達の逆転勝利だな」

屋上のドアが開いて放送設備を弄っている二人に。
そして

『それじゃ、雄二。よろしく』

『了解だ——起動』
アウェイクン

不穏な動きをしている撤収作業をしている生徒達から離れたところ
にいる怪しい二人の生徒を。

「し、詩織ちゃん今日は格好良かったよ。だから、しゃがんでくれる？」

「……はい」

頬を赤く染めて綾香の身長に合わせて膝に手をつく。

もはや背景に百合の花が咲いていたが、聞こえてきたのは何かの飛来音。

ドオン！ パラパラパラ

「「え？」」

近くに何か着弾したかのような爆発音にキョロキョロと周囲を見回す二人。

何だ、いったい何があったと混乱する二人に無情の二撃目が放たれた。

しかもかなり近くで

ドオン！

「にゃああああああ！？」

「ひう！？し、詩織ちゃん！」

背中では何か爆発したような衝撃をうけ、屋上を転がっていく詩織。強い爆発を正面から見た綾香は咄嗟に防御魔法を発動するが、詩織は転がっている通り、間に合っていない。

「しおりちゃん！？」

詩織はそのままフェンスの足元にある隙間を潜って屋上から落ちていった。

side：明久

シャワーを浴びながら考える。

今日は色々あった。

とにかく姫路さんの転校を阻止できたのが最大の成果だろう。

Fクラスの設備はよくなるし、姫路さんもFクラスに留まってくれるしいことだらけだ。

最後に美波に袋にされたのはいつものことだしね。

……………自分で考えて泣きそうになった。

「でも最後に詩織が出てきたのには驚いたなあ」

あの試合は本当に辛勝だった。

僕の咄嗟の機転がなければ雄二の攻撃は間に合わずに打ち落とされていた。

実際攻撃を受けてみてわかったんだけど、ディバインバスターは低得点相手には卑怯だ。

ある程度点数があれば照準から攻撃までのタイムラグの間に避けることができるけど、得点が低いとそれもままならない。

戦っててわかったけど、詩織の召喚獣は点数が上の相手とか複数相手には致命的に向いていない。

後方支援に向いている召喚獣なんだろう。

まあ詩織は総合教科で10000点をとれる大天才だから接近戦でも点数の関係から無敵なんだろうけど。

「とにかく強かった……詩織がFクラスにいてくれて本当によかつ

たよ」

詩織が例えばAクラスにいたならばあの試召戦争でも雄二が戦う前に一敗増えてただろう。

BクラスにいたならばFクラスの面々相手に無双していたかもしれない。

そんな詩織がFクラスにいるのは心強いといえる。
だが

「……明日、僕生きてるかな」

公衆の面前で堂々と彼女を辱めた。
詩織は自称魔法使い——少なくとも妹のクリスちゃんは謎の光る拳をもっていた——である。

ふと根元相手にブチギレてた詩織の姿を思い出す。

……あれ？

なんだか美波より優しい気がする。

「きつと許してくれるかな」

「そうですね。明久君は許してもらええると思ってるんですか？」

「うん。だって美波より優しいし」

「へえ……比較対象があれなので素直に喜ばませんね」

あれ？僕は今誰と話してるんだろっ。

「……」

さび付いた機械のようにギギギと風呂場にやけに響く高い声の発生源に顔を向ける。

そこには肉切り包丁を持ってメイド姿で全裸の僕を見下ろしている詩織の姿が。

……………え、何この状況。

咄嗟に傍においてあるタオルで女の子に見せられない部分を隠す。

「明久君」

「え。あ、うん」

肉切り包丁を片手にポンポンと軽く叩きながら冷笑を浮かべる。
ぶっちゃけちよっとちびつた。

「私が何を怒ってるかわかりますか？」

「召喚大会の時に詩織の裸が綺麗だっ——」

「違います」

「え？」

即座に否定されて疑問の声をあげる。

ならなんなんだろう。

首を傾げる僕にピツと詩織は携帯電話を操作してその画面を見せた。

『ま、待て翔子。確かに俺は明久を女装させてお化け屋敷に入った。
だがだな、それには事情が……………』

『……………浮気は、許さない』

『し……死んでたまるかあああああつ!』

「……………」

いったいこれを僕に見せて何が言いたいのだろうか。
はっ!? まさか……

「詩織、僕が雄二とお化け屋敷に入ったことに嫉妬して……」

ギンッ

風呂場の壁に肉切り包丁が突き刺さった。
腰が抜けた。

「察しが悪いですね。明久君には雄二君と同様の罰を受けてもらおうかと思いました。雄二君のほうは翔子ちゃんに任せました」

「何で!?!」

「…………… 召喚大会のあと、私がどこにいたか教えてあげましょう」
それがどうしたんだろう。

「屋上ですよ。理解しましたか?」

「……………」

召喚大会の後、屋上。

このキーワードで導き出される答えは——すなわち、花火による爆

撃。

「……………」

考える明久。

ここでの返答はまさに命に関わる。

よし、この美少年の僕が詩織を惚れさせれば全てが丸く収まる！（かなり混乱している）

「詩織！」

「……………なんですか」

「好きだ！」

「遺言は以上でよろしいでしょうか」

駄目だった。

シャワーの音のみが流れる風呂場で殴り飛ばされた明久は気絶している。

ちなみに殺傷沙汰はさすがに駄目だと思ったので肉切り包丁は使っていない。

持ってきたのも明久を脅すための小道具のようなものだ。

「しかし、水シャワーですか……」

風邪ひいたらどうするんですか。

そう内心で呟きシャワーをとめてからその身体を洗面所まで引っ張る。

このまま放置してもいいが、それでは風邪をひくことは確実だろう。

「えっと、下着は…… あら、明久君はパジャマ派ですか」

あらかじめ用意してあった服を確認してから詩織は明久の身体を同じく用意してあったタオルで拭く。

そして寒そうに震えていたので魔法で布団に暖かいと思う程度の熱を与えて、パジャマを着せた明久を放り込んだ。

翌朝起きた明久が女の子の手によって身体を拭かれて服を着せられた事实に気付き、顔を真っ赤にしながら登校してきた。

2 - 8 召喚大会その後（後書き）

なんかもう明久の介護する詩織をヒロインに加えてもいいいきがしてきた。

だめだ落ち着くんだ俺。

というか明久をお仕置きするシーン書こうと思ったのにどうしてこなくなった。

詩織はなんだかんだで面倒見がいいからなあ……。

2巻と3巻の間のハイランド事件とプール事件とバイト事件は全て飛ばします。

かわりに一つオリ話をいれてお茶を濁します。

………だつてさ、ハイランド事件って介入して面白くできるような余地ないし、プールなんてもろに地雷じゃないですか。性別バレイベントしてない詩織にとって。バイト話はあれ男だけで行ってるので、一応ちよろつと書きますが詩織がバイトにいくとかはありえません。

なのでバイト後の明久達の話を書こうと思ってます。

2・5・1 詩織と翔子の関係（前書き）

テイルズやってたら予約忘れてた……。
とりあえず徹夜明けで主人公男選択でクリアしたので投稿。
二週目行く前にストック頑張るぜ……。

2・5・1 詩織と翔子の関係

『困った電話』

霧島翔子は昔からの友人の電話をかけていた。

電話の呼び出し音が鳴り響くこと数秒、いつもならすぐ出る詩織に小首を傾げる。

プライベート用の携帯電話にかけているので余程忙しい用事じゃない限りは出てくれるはずなのだが――

頭に疑問符を浮かべているとようやく繋がったのか電子音を鳴らし、通話を通じる。

『ん、はあ……も、もしもです』

「……詩織」

『翔子ちゃんですか。どうかしましたか？』

何か電話越しに聞こえてくる息が荒いのだが、どうしたのだろう。

「……風邪？」

『ふえ？違いますけど……なんでですか？』

「……息が乱れてる」

『……気のせいじゃないですか？それはそうと、何か用ですか？』

いまいち納得がいけないが、用事をすませなくてはならない。

「…………明日、暇？」

『明日ですか…………えっと、だいじょひゃっ!？』

「…………？詩織？」

いきなり悲鳴をあげた詩織に呼びかけてみるものの

『だ、駄目ですよ綾香。今電話中なんですから…………ちよっ、そこはひゃうつ!？』

『ふふふー。詩織ちゃん。綾香じゃなくてご主人様でしょ？』

『ご、ご主人様あ…………』

「……………」

反応に困る。

とりあえず御取り込み中みたいなので、無言で通話を切った。

『困った電話、その後』

詩織は昨日に電話で呼び出された通り霧島翔子の家を訪ねていた。昨日は気付けば電話がきれていたが、あの後かけ直したらどうやら料理の練習がしたいらしい。

それで料理が上手い友人である詩織に電話をかけたのだが――

「……………どんな顔して合わせればいいんでしょうね」

あれから一通り襲われた後、正気に戻った詩織は綾香に催眠魔法をかけて放置しておいた。

今日だってご飯を作り置きしてきてないし、屋敷に駐在している連中にも決してご飯を作らないようにと言い含めている。

つまり兵糧攻めだ。

空腹に苦しみめばいいのだあんな色情魔。

冷蔵庫の中は空にして屋敷に全力の結界を張って出られないようにしている。

特に綾香にはロック式の呪いと誓約と思考誘導を使って絶対に出不れないようにしてあるので安心だ。

とりあえず入り口から念話で翔子を呼び出し、扉をあけてもらう。顔を合わせた時、双方若干顔が赤かったがどちらもそれに関してつつこまなかった。

「翔子ちゃん、お弁当作りたいって言ってましたけど」

「……………」

「普通に料理作れませんでした？」

翔子も一応名家の生まれなので家事全般はこなせるはずだ。

まあ結構両親が親馬鹿なのでだいぶ甘い躰になっているが、それでも基本的なことくらいは出来る。

「……出できれば美味しいの作りたい」

「ああ、なるほど。雄二君ですか」

雄二の為にお弁当を作るといふのなら納得だ。

一途な翔子のことなので文字通り手を抜くことはないだろう。

「デートにでも行くんですか？」

「……」

翔子の顔が赤くなり、無言で頷く。

なんでこんな可愛い子を雄二は拒否するのだろうかと一瞬考え、そういうばと思ひ出す。

（あの上級生を殴り飛ばした事件ですか）

もうあの時には既に詩織は二人の下を離れていたので資料でしか知らないが、おおまかな流れは知っている。

おそらくだが自分のせいで翔子に迷惑がかかることを恐れているので引け目があるのだろう。

「……あれ？」

引け目……雄二が翔子に対して引け目だけじゃなくて恐怖とかも感じていたのはなんなんだろう。

……強引すぎる翔子も悪いんじゃないか。

「デートはいつですか？」

「……明日」

へえ、明日ですか。

「……早くないですか？」

「……恋はいつだって唐突」

「用法間違ってますよねそれ。まあいいです。なら今日の晩に仕込みをして、明日の早朝に作りましょう。今日の昼御飯と晩御飯はその練習です」

時間がないならお弁当を作るときにアドバイスすればいい。

手伝ってあげてもいいが翔子は自分で雄二にお手製弁当を作りたいのだろう。

「……いいの？家のほうは」

「いいんですよ。あんな馬鹿、飢え死にさせておけばいいんです」

クリスちゃんも食いつぶれるのは心苦しいが、昨日助けにこなかったから綾香と同罪です。

「……ありがとう」

「いいんですよ。親友ですから」

「……うん」

『ハイランド編後日談』

「へえ。雄二君も格好良いですね。……浮気しましょうか」

「駄目」

最近の綾香の変態っぷりに当てられては正氣に戻って落ち込むことを繰り返しているので綾香株が下がっている詩織であつた。

現在ハイランドから帰って来たばかりの翔子に呼ばれてお茶会をしている最中で、詩織は優雅に紅茶を飲んでいる。

だらしなく飲んだほうが楽なのだが、両親から受けて淑女狂育がそれを許さない。

しかし、いきなり呼び出されて「……これ」と差し出されたヴェールに保護魔法をかけてほしいと言われた時は何事かと思つた。

乙女の顔をして保護魔法のかかつたヴェールを大切そうに抱えている翔子に話を聞いてみると、聞いてほしかつたのかペラペラ話し始めた。

ハイランドには翔子を補佐してくれる親切な係員が多くいたらしい。話を聞いてみるに、それ絶対Fクラスメンバーだろと思つたのだが特につつまなかつた。

（しかし……）

お化け屋敷で『姫路のぼうが翔子よりも好みだな。胸も大きいし』と流し、しかも釘バットまで流すとは……そんなに雄二が嫌いなのだろうかFクラスの連中は。

そっという行為が雄二を追い詰めているようにも見えるのだが、ヘタレな雄二なことなので押しに押さないと射止めるのは不可能だろう。

「結婚式ですか……私もいずれあの変態と……はあ」

「……詩織」

そんな哀れみのこもった目で見ないで頂きたい。

「そりゃあ惚れてますよ？惚れてるんですよ？でもですね、あの変態性だけはどうも受け入れられません。

なんで魔法には変態を治す術式が存在しないんですか！魂復元とか死者復活とか出来るくせになんで変態は治ないんですか！」

一気に紅茶を飲み干す詩織。

淑女にあるまじき姿だが、そうでもしないとやってられない。

「ワイン！」

「……未成年」

「いいの！私が許可するからいいの！」

翔子は詩織が完全に仮面を外して癪癪を起こしているのを見てワインを持ってくるように指示する。

凄く万端で頼りになる親友なのだが、癪癪をおこした時等に精神年齢が5歳並になるのはどうにかならないだろうか。

世の中は上手いこといかないものと詩織の愚痴を聞きながらヴェールを抱きしめる。

詩織の愚痴を無表情で聞き、相槌をうちながら親友としてその話を聞き続けた。

その後のレッドフィールド家

「うつ……頭が痛いです。飲みすぎました……」

「な、何で私まで御飯抜き……？」

「かゆ……うま……」

三者三様の苦しみ方をしていた。

2・5・1 詩織と翔子の関係（後書き）

予防線としてはっておいたR15タグはつてあるのでこのレベルなら余裕ですよ。

今回原作に直接は関わらないけど間接的に関わる回です。

2・5・2 バイト（前書き）

またもや定時投稿ではない。

まあ定時投稿でないときは「ストック十分じゃないんだな」と思っ
てもらっていいです。

書き始めればストック常に4つくらい抱えるとか余裕なんだけどね。
今はなんとなく筆が乗らない。

2・5・2 バイト

詩織は気分転換にウィンドウショッピングをしながら困っていた。というのもレッドフィールド家当主である詩織の仕事が滞ってるからだ。

クリスに手伝ってもらおうと思ったのだが、この前の兵糧攻めの巻き添えを食らったことに拘ねて家出している。

どうせ婚約者のところに行っているんで、特に心配はしていない。

「問題はあの書類の山ですね……」

基本的に詩織のチェックの必要のない書類の確認等が主で、時間がかかる仕事ばかりだ。

ちなみに面倒な書類は既に詩織が全て片付けているので問題ない。

「どうしましょう」

「……………アアア」

「うーん……アルバイトでも募集しましょうか？　そういえば募集ってどうするんですかね……張り紙？」

でもレッドフィールド家の手伝いなんて怪しいものにはたしてバイトがくるのだろうか。

ただでさえ一ヶ月に数人くらいの頻度で侵入者が結界にひっかかって焼け死んでるというのに。

バイトに来るのはスパイとかのような気がする。

安すぎたら来ないだろうし、高すぎたら引かれる可能性が高い上、来たとしても守秘義務を守ってくれるか微妙だ。

「……………タアアアアアアーツ!!」

「どこかに守秘義務を守って、お金が欲しくて信頼できる人っていないものねだりなのは分かっているが、あの量の書類を見ればやる気がなくなるのは仕方がない。」

普段はちゃんとした役職の人が処理しているのだが、最近欲が出たのか詩織の情報を他者に売ろうとしたので断罪している。

今頃病院でレッドフィールド家に就職してから全ての記憶を失って混乱していることだろう。

まあ記憶を消しただけで今まで稼いだ財産はそのままだからたぶん二ト生活を送ることだろう。

「ディア・マイ・ドウタアアアアアアーツ!!」

「さつきからうるさいですね。どこの野蛮人ですか本当」

激しく自己主張している中年らしき人物の声にうんざりとしながら声の主を探す。

探査魔法の結果、発信源は店の中。

外からみたところなかなか立派な喫茶店だ。最近喫茶店で騒ぐのが流行っているのか？

「ち、違うのよおじさん！うちは美春じゃなくてアキと——」

「み、美波！僕を巻き込まないでよ！って、どうして店長が僕に襲い掛かってくるの！？誰か、助け——っ！」

「……………また、ですか」

どれだけ明久はトラブルに巻き込まれればすむのだろう。

明久がいるということは雄二とムツツリー二と秀吉もいるだろう。

そしてそこに美波という人物が加わったのならば姫路瑞希がいるのも容易く想像できる。

またFクラスが他所に迷惑をかけているのか。

詩織が溜息を吐くと同時に明久が仕事着なのかウェイター服を着たまま店から出てきた。

そして――

「し、詩織！？助けて！！」

「……………何やってるんですか」

「いいから僕をあの変態から助けて！」

そりゃあ真昼間からディアマイドターなどと声高々に言っやつは変態だろうさ。
って

「ディア・マイ・ドウタアアアアアアアーツ！！」

「なんでこっちにくるんですか……………はあ」

拳を前に突き出す。

体術はあまり得意じゃないんですがと呟き変態が詩織に襲い掛かった瞬間――

「ぶべっ！？」

席を巻き込みながら吹っ飛んでいった。

そのまましばらく観察したが、起き上がらないところを見るに気絶したようだ。

「で、何ですかこの状況は？」

とりあえず隣で呆然としている明久の首根っこを捕まえて聞いた。

「店長が気絶した時点でバイトやめましようよ」

「そうじゃの……」

Fクラスのノリを学校外に持ち出すのは……いや、この変態店長のことだから構わないか。

ついでに言えばFクラスの面々は明久と雄二を除いて直接は初対面という設定なので先程自己紹介をすませた。

「新しい女の子です」

「アキ、妙なことでなければいいんだけど」

何か後ろで不穏な会話が聞こえるが気のせいだ。

「レッドフィールド凄いな。スタンガンでもなかなか気絶しなかつ

た店長が一撃だ」

「……雄二、詩織は古武術の使い手」

確かに古武術の使い手ですが

「私、体術苦手ですよ？」

「嘘だ！」

「嘘だと言われましても……」

実際魔法とかに比べてだいぶレベルが低いのだ。

「あの、レッドフィールドさん？」

「何ですか姫路さん」

「さっきのどうやったんですか？触れただけで吹き飛んだように見えましたが」

「あれですか。寸頸ですよ」

「すんけ……？」

「動かずに触れた場所に瞬発的な力を加える技術のことですよ」

一部じゃわりと一般的ですよ。

そう付け加えてふとFクラスメンバーの男達を見る。

……………ふむ。

「明久君に雄二君に秀吉君にムツツリ」

「……………ムツリツ違う」

「私のところでバイトしませんか？このありさまじゃお金なんてもらえそうにありませんし」

ムツツリー二の言葉を華麗にスルーしての提案。

Fクラスの面々なら話すなど言われたら……………明久だけは信用ならなかった。

まあ誓約ノロイの魔法でもかけておけばいいだろうと思ったのでそのまま誘うことにした。

結果、日曜で終わるならと4人ともレッドフィールド家へと来ることになる。

日曜日、レッドフィールド家を初めて見る3人はその大きさに唖然と……………雄二だけは翔子の家で慣れたのか特に驚きは少なかった。
4人を応接室へと案内し、そこで書類を出す。

「今回の雇用条件です」

労働時間、仕事が終わるまで。

日給、2万円。

当仕事で見たことを外部に漏らした場合、死刑。

「『『『おかしいだろ!?!?!』』』」

「え、そうですか?」

ある意味ヤクザな仕事をする事の多い詩織は守秘義務はある意味当然と思っていたのでそこにつっこまれるとは思わなかった。

「……………詩織が非常識だつてことくらい分かってたけどさ。それで詩織、この仕事が終わるまでつて何すればいいの?」

「書類の整理やチェックです。だいたい数字が合ってるかとか見てくればいいですよ」

本来ならあとそこに不正しているかどうかなどを見分けないといけないのだが、そこまでは期待していない。

時間はかかるが寝ながら魔法でチェックすればいいだろう。

「す、数字…………」

明久が自信なさそうに呟くのを見て詩織は言った。

「安心してください。無理矢理頭良くしますので」

「へ?」

そう言うのと詩織は集中の魔法を使い、4人の頭を明晰にする。

戦闘中の詠唱速度や精度を上げたりする魔法なのだが、こっちにも使えるだろう。

「おお！凄いのじゃ！今ならどんな問題でも解けそうな気がするのじゃ！」

「……今ならどんなパンチラと撮ってみせる」

ナチュラルハイになってしまつたのがある意味副作用なのだが、こうでもしないと使い物にならないのでいいか。

そして大量の書類を部下に持ってこさせてそれと入れ替わるようにして部屋を後にした。

2・5・2 バイト（後書き）

今回原作で言うバイト編の後の話。

この場には優子と美春もいたはずなのですが、特に喋らせる言葉なかったのでスルー。
それでいいのか！？

2・5・3 バイト……したっけ？

夢を見ていた。

前世の、懐かしい夢。

主観時間では十数年の話だが、実際にはもう数百年も前の出来事の話。

222代目魔王、グラスト。

アインザツグルッペ
通称『移動殺戮』。

よく「そろ目なのに何故666代目じゃなくて222代目なんだ……」と愚痴たものだが、今ではいい思い出だ。

しかしそれも遙か昔の話。

もう今はあの頃のように絶対的な魔力を保有していない。

前世に比べると魔力量は十分の一以下だ。

中規模魔法なら使えるが大規模魔法ともなると保有魔力の関係上難しいだろう。

前世で言う上級魔法使いにはギリギリ届かないレベルだ。

それでもこの世界では過ぎたる力。

「全ては過去の話」

今でも魔法の研究はしているがそれらも補佐的なものばかりだ。

破壊系の魔法を研究ばかりしていたあの頃とは違う。

そういえば認識阻害の魔法も上手くなったものだと一人感心する。

ああいった小技的なものは全て部下に任せていたものだ。

魔法使いが自分一人になってからはそのありがたみが良く分かる。

というか魔法のない世界で認識阻害が便利すぎてつい頼ってしまうのは自分でもどうかと思う。

「ん……」

意識が浮上する。

ここ三日くらい徹夜していたので仮眠をとっていたのだが、もう十分のようだ。

魔法でいくらかでも誤魔化しはきくのだが、やはり見えないところに疲労が溜まっていたらしい。

そんな時にただ単調なチェックをこなせる自信がなかったからバイトを呼ぶとまで考えたのだ。

起きたらとりあえず彼らにデザートでも持っていこう。

そう思いながら彼女は目覚めた。

詩織が夢の中にいる間、明久達は書類を片付けていた。
しかし――

「もっと！もっと早くいける……！」

明久は書類を無駄に大きなアクションをつけつつ取り、

「まだだ……俺の速さはこんなもんじゃねえ！」

雄二は両手が見えないほどのスピードで動き続け、

「今なら姉上にも勝てる気がするのじゃ！ちょっと行ってくるのじゃー！」

秀吉は何故かバイトを放棄して優子を討ちに行き、

「……………この数値はふつくしい」

ムツリーニは数字にエロスを見出していた。

この現場を見れば詩織は「…………やりすぎました」と反省することだろうが、今彼女はいない。

4人から3人に減ったアルバイター達はそのことに不満を言わず、むしろヒートアップしていた。

ナチュラルハイ怖い。

というかナチュラルハイってレベルじゃない。

「雄二いいいいいいっ！」

「明久ああああああっ！」

「…………黄金比、だと？」

場はカオスへと変化していた。

寝起きの詩織はしっかりと疲労が取れて思考がはっきりしているのを感じ取ってから頭をフルフルと振った。

それに連動して長い髪の毛が尻尾のように揺れる。

ベッドから降りて鏡を見てみると裸ワイシャツの詩織の長い髪が少し乱れているのでセットしないといけないなと思い、そのまま洗面

所へ向かう。

「ふああああ……本音を言えばもう少し寝ていたいですね」

3 徹明けの睡眠はとても気持ちよかった。

このままアルバイトなども放って寝続けたいと思うほどに。
でも一応彼ら4人の雇い主なのだからその責は果たさなければいけない。

「とりあえずお湯沸かさないと……あとケーキ確かありましたよね」

詩織もお気に入りの職人のケーキ。

あまりお菓子類を作るのが得意じゃない詩織の数少ないお抱え料理人だ。

まあお抱えといっても彼らは普通に店を持っており、詩織の無理のない依頼を優先的に受けて作ってくれるという契約を交えているだけだが。

店の先行投資をしたのだからそれくらいの役得はあってもいいはずだ。

雄二は翔子の関係で食べなれているかもしれないが、明久達は喜ぶことだろう。

髪の毛をセットしながら詩織は差し入れのメニューを考え始めた。

「僕達にかかれはこの程度の敵、造作もないよ」

「ふつ。俺も翔子に仕返しをしにいかうか」

「……仕返し、だと？（ブシャアアアッ）」

クリスは困惑していた。

婚約者のところへ逃げていたのだが、そろそろ姉と綾香も仲直りしているだろうと戻ってきたのだ。

しかし戻ってきて最初に出会ったのはやけにテンションが高く、オトコ漢臭い明久と見知らぬ二人。

詳細は分からないが何かしらの魔法がかかっているようなので姉が関係しているのだろう。

ならばおそらく問題はないはずなのだが——このテンションはいったい何の魔法をかけたんだ。

精神高揚……片付けてある書類から察するに手伝いとして呼ばれたのは容易く理解できるが、そうなる理由が分からない。

「……部屋に籠ってよ」

厄介ごとに臭いを感じたクリスは見なかったことにした。

コンコン

「……………」

コンコンコンコン

「……………」

ドアをノックするが何の返答もないことに疑問符を浮かべながらドアを開ける。

そして詩織の視界に入ってきたのは――

「……………誰もいませんね」

どこいったのあのアルバイターども。

見たところ仕事は終わってるようだが、そのまま屋敷探索でもしているのだろうか。

一階には見られて困るようなものはないが、二階だけだ困る。

明久には前に説明しているはずなので上がらないはずだが

チュドオーンッ！

「……………」

二階のトラップが発動した音だった。

思わず頭を抱える。

何やってんだあいつら、と。

それに探查魔法を使ってみたら入り口付近で秀吉が捕縛魔法に捕まっていた。

レッドフィールド家の人間の許可なしに出ようとすれば作動するトラップなのだが、急用でもできたのだろうか。

とにかく二階で『あれ』を見たかもしれない全員の記憶を……面倒だから秀吉も消しちゃえいいか。

幸い屋敷に来了時を基点にして記憶を消すための魔法の目印をつけておいたので楽勝だろう。

「おはよう」

「おう」

「おはようなのじゃ」

「……（スッ）」

「おはようございます」

「おはようアキ」

詩織を除くいつものFクラスの主要メンバーが集う。
教室に入った明久は真新しい卓袱台に感動しながら自分の席に荷物を置く。

「そういえばアキ」

「うん？」

「昨日のバイト、どうだったの？坂本達レッドフィールドさんの家に行って来たんでしょ？」

「あ、それ私も気になります」

バイト……？

「何の話？」

「はい？」

「アキ？」

昨日は確か……

「小学校で運動会をしてたはずだよ」

「俺はエステに通っていた」

「ワシはプロレスを習っていたのじゃ」

「……………教会でお祈り」

「……………」

姫路さんと美波が凍り付いている。
いったいどうしたんだろう。

「おはようございます」

あ、詩織だ。

「シシシシオー！？ いったいどうなったのアキ達！？」

「何してたんですか昨日は!？」

二人ともいったいどうしたんだろうか。

詩織はその二人の剣幕に困ったように首を傾げ、ポンと思いつくと口元到人差し指を持って行き――

「禁則事項です」

とオチャメに言った。

翌日、僕のお金を横領していた母さんから仕送りがちゃんとされていた。

いつもより2万ほど多めに送られてきたのでやはりなんだかんだでお金を横領したことを反省していたんだなと思った。

2・5・3 バイト……したっけ？（後書き）

この小説って結構原作読んでること前提なんですよね。

詩織が介入してない部分多くあってしかしその部分を知ってること前提で話が進んでる部分もありますから。

ようやく3巻に入る前の話終了。

次は合宿編ですね。

3 - 1 問題発生（前書き）

今回短めです。

3 - 1 問題発生

「good bye old satan」

謳うように一言。

同時に胸を貫く熱い閃光。

『俺』の顔をした奴が私に向かって手をかざしていた。
そうか。

ようやく分かった。

何故私が女として転生したのか。
全ては――

「貴様のせい……だったのか！」

前世の自分の顔をした『奴』を睨みつけて傷の確認をする前に転移魔法を発動させる。

場所はランダム――途中に何回か別の地点を中継することによって本拠地を悟らせない為に飛んだ。

「とまあこういうことがあったんですよ」

「軽っ！？お姉ちゃん軽いよ！？内容と反比例して語り方が軽すぎるよー！」

と言われても、幸い治癒阻害の術式は組み込まれていなかったみた

いだからすぐに治癒できたし……。

「心臓に当たらなかったのが命の分け目でしたね。さすがに即死したら治癒するものでもできませんし」

「そういう問題!？」

そういう問題なのだ。

そもそも上級魔法使いというのは神に匹敵する力をもつので理外の存在であることが非常に多い。

見た目人間でも中身が化け物とかよくある話だ。

そんな者達が一見致命傷を受けても次の瞬間には再生しているなんてのもよくある話なので、即死さえしなきゃ死なないのだ。

「で、お姉ちゃんの前世が男とかいう妄言の理由がわかったの?」

「あくまで妄言なんです……まあいいです。いえ、よくありませんが話がすすまないのので置いておきます。

さて、私が女として転生した理由はただ一つ。あのクソツタレが私が本来転生するはずだった肉体を奪い取ったからですよ」

あの畜生。

人の胸貫きやがって。

「じゃあその身体は何なの?」

「この世界の神々がどういう世界の管理をしているのかは知りませんが、たぶんどこから適等な肉体をもってきたんでしょう。

どうせ『魔王繋がりでいいんじゃない?』とかてきとうな理由ですよ」

「……神様って偉いてきとうなんだね」

「そうですね？そりゃあ世界の管理をしなきゃ自分達が困るからしてますが、その他はボランティアになるので意欲的ではありません。たまに使命感に燃えてる神様が頑張って人間を管理するんですが、千年くらいたったら大抵他の神々に毒されて二トになります」

「そんな夢のない話は聞きたくなかったよ……」

神様って仕事すればするほど格があがるけどそれで上がるのは権力と腕っ節だけなので皆たまにしかしようとしない。

まあ詩織が前世で魔王だった時代にいった異世界の神から聞いた話なのでどこまで本当かは知らないが。

詩織が幼い頃に会った成り立ての神に聞いた話も合わせればそんなに間違っていないと思う。

「そういえばお姉ちゃん、そろそろ強化合宿だよな？」

「……………？そうですね。それがどうかしました？」

「……………男のままで？」

「……それは考えてなかった。

だがしかし、教職員は詩織の性別を分かっているので部屋は女部屋にいれるのが普通なのだが――」

「そういえば明久君達と同じ部屋ですね……」

あの時は何も考えずにそのまま同じ部屋に入れられたのだが、今考えると問題だ。

西村先生が微妙な目で見ていたことをちゃんと考えていればこのようなことにはならなかっただろう。

「あ、お風呂どうしましょう」

「あ、じゃないよお姉ちゃん!？」

考えてから露見する問題の数々。

認識障害で男風呂に入っても別にバレやしないのだが、さすがに女として16年生きてきた詩織は抵抗があった。

男を捨てたわけじゃないがそこまで女を捨てたわけでもない。

「んー……学園長に話して時間外にちょちよつと使わせてもらいましょう」

「……男風呂に入るとかやめてよ？お姉ちゃんを覗き魔として警察に突き出したくないから」

「私は痴女じゃありませんよ」

「あと移動手段はどうするのお姉ちゃん。Fクラスは現地集合なんでしょ？」

Aクラスは文月学園からバスで移動らしい——あまりの待遇の差に泣いた。

「転移魔法を使います」

「え、おねえちゃ——」

「転移魔法を使います」

「……いいの？それって」

「世の中の法律には合宿の集合場所に魔法を使って行っではいけないなんてありません」

「それ屁理屈だよ！？」

「だって明久君達と行くことになったらとんでもない目に合うって私の感が囁いてるんですよ！？」

明久と一緒にいかないと誘われた時に真っ先に襲われたのは悪寒。そして信じられずに占ってみた結果、毒殺の相が出てきた。

意味が分からないが明久達が死ぬわけでもないことを占いで確認したので放置をすることにする。

詩織は巻き込まれたくないので別のルートで行くこととなったのだった。

夕飯時、各クラスに分かれての食事。

誰が作ったかは知らないがなかなか美味しい。

この合宿所は文月学園が旅館を買い取って作り変えたらしく、快適に過ごせそうだ。

「しかし……明久君はどこいったんですか？」

彼の食事情ならば身体を引き摺ってでも食べに来ると思うのだが。Fクラスの主要男メンバーは詩織の言葉にさっと視線を逸らす。

「明久君ならお昼ごはんをいっぱい食べすぎたみたいで、まだ寝てますよ」

「アキったら、食いしん坊なんだから」

……………食べすぎ？

毒殺の相が出ていたのを知っている詩織としてはどうしても疑わしい目で見えてしまう。

「……………雄二君？」

「レッドフィールドか……………知りたいか？」

「はい。そういえば私、未来予知ができて——どうも毒殺されるリアルな夢を見たんですが、何か関係が？」

占いで未来の情報を限定的に現在へと流出させたのだが、細かい説明は省く。

「……………実は姫路の弁当がな、毒薬なんてレベルでは計りきれないほどの代物だな」

つまり明久はそんな毒薬を食べて倒れ付いたらしい。あれ？

「置いてきたんですか？」

「……………飯抜きは困る」

「明久なら大丈夫じゃろ」

「だな」

Fクラスメンバーって本当に仲が良いけど悪いですよね。

3 - 1 問題発生（後書き）

詩織がTSした理由を書きました。

そのうち番外編で裏サイドとか書くかもしれませんねー。

ちなみにですが3章は綾香が出てきませんが、別に裏サイドで死んだとかではありません。

綾香はお嬢様学校に通ってて外出が厳しいので来れなかっただけです。

クリスにいたっては学年違いますしねえ。

3 - 2 巻き添え……え、まじですか？

強化合宿一日目の日誌を書きなさい。

姫路瑞希の日誌

『電車が停まり駅に降り立つと、不意に眩暈のような感覚が訪れました。風景や香り、空気までもがいつも暮らしている街とは違う場所、何か素敵なことが起きるような、そんな予感がしました』

教師のコメント

環境が変わることで良い刺激が得られたようですね。姫路さんに高校二年生という今この時にしか作ることのできない思い出が沢山できることを願っています。

詩織Ⅱレッドフィールドの日誌

『合宿所につき、誰もいなくて暇だったので中を探検した。探索の結果、赤のオーブと盗賊の小箱を手に入れたので満足だった』

教師のコメント

いったいどこを探索したんですか。

土屋康太の日誌

『電車が停まり駅に降り立つと、不意に眩暈のような感覚が訪れた。あの感覚はなんだったのだろうか』

教師のコメント

乗り物酔いです。

坂本雄二の日記

『駅のホームで大きく息を吸い込むと、少し甘いような、仄かに酸っぱいような、不思議な何かの香りがした。これがこの街の持つ匂いなんだな、と感慨深く思った』

教師のコメント

隣で土屋君が吐いていなければもっと違った香りがしたかもしれませんが。

「明久、起きたか！良かった……電気ショックが効いたようだな」

わざわざ合宿所のどこからAEDを持ってきた雄二は明久が目を覚ましたのを確認するとそれをしまう。

かなり心配しているフリをしているが詩織は雄二が明久を放置して晩御飯を食べていたのを忘れていない。

「ここって……合宿所？」

「ああ、そうだ。全く贅沢な所だよな文月学園が丸ごと買い取って合宿所になっているんだとよ」

「でもそのおかげで快適じゃないですか。少なくとも私はのんびりできます」

「……シオ？」

「はい。なんでしょう？」

「……………え、同じ部屋？」

この部屋は8人部屋だが明久達と詩織で5人部屋として使っている。このも厄介なメンバーを一纏めにして監視したい意図と、詩織は余ったのでいれたのだらう。

「……………いいの？」

「自衛手段は完璧です。なんなら私が寝てる時に触ってみますか？消し飛びますけど」

ブンブン

残念、高速で首を振られてしまった。

「む、明久、無事じゃったか！良かったのう……。お主がうわ言で前世の罪を懺悔し始めた時には、正直もうダメじゃと……」

そんな友人を放置して外出してる秀吉まじ外道とかちよっと思った詩織だが、決して口には出さない。

明久も生へと喜びを感じているようなのでそれに水を差すことはないだらう。

それにしても……と何か嫌な予感が詩織の警鐘を鳴らしていた。とにかく嫌な予感がする。

「……………ただいま」

「お帰りムツツリー」

「……………明久。無事で何より」

「あ、心配してくれたんだ。ありがとう」

「……………情報も無駄にならずに済む」

「情報？昨日俺と明久がお前に頼んだ件か。随分早いな」

「あの、何の話ですか？」

「試召戦争でもないのに今更何の情報が必要なのか。
つい気になった詩織が聞いてみると

「先日、明久の下に脅迫状が。雄二は盗聴の被害にあったのじゃ」

「……………はあ」

「……………犯人の痕跡を発見した。手口や使用機器から同一人物の
犯行と断言できる」

「まあそんな奴、二年の中に二人いるだけでも嫌だしきつと同じ人
だよな」

「詩織も盗聴をやろうと思えば魔法で一発なのだが下品な気がしてや
つていない。」

「それで、その犯人は誰だったの？」

「……………（プルプル）」

「あ、やっぱり犯人は分からなかったの？」

「……………すまない」

「いや、そんな。協力してくれるだけでも感謝だよ」

話を聞いている限りではムツツリー二は善意の協力者のようだ。
詩織は協力すべきか否かを会話を聞きながら考えている。

「……………」『犯人は女生徒でお尻に火傷の跡がある』ということしかわからなかった」

「君は一体何を調べたんだ」

「今すぐ変態として突き出してもいいんですよ？」

それに対してムツツリー二は網をはったというとその成果を流す。

『いらつしゃい』

『…………雄二のプロポーズを、もう一つお願い』

「ってこれ翔子ちゃんじゃないですか」

「しょ、翔子…………あいつもう動いてたのか！」

「よっぽど手に入れたんだね」

雄二ももう認めちゃえばいいのと思うものの、そこは当人の問題だろう。

『毎度、二度目だから安くするよ』

『……値段はどうでもいいから、早く』

『さすがはお嬢様、太っ腹だね。それじゃあ明日——と言いたところだけど、明日からは強化合宿だから引越しは来週の月曜で』

『……わかった。我慢する』

「あ、危ねえ……強化合宿があつて助かった」

「別にいいじゃないですか結婚するくらい……」

聞こえないように呟き、窓際に腰掛けて「嫌いじゃないでしょう」と付け加える。

男のツンデレとか誰得だよ本当。

あ、翔子得か。

そして次に犯人へのヒントとなる会話を聞いていると、確かにお尻に火傷がある女生徒らしい。

どうも母親に盗聴のことがばれてお尻にお灸をすえられたらしい。

「そうだ！もうすぐお風呂の時間だし秀吉に見てきてもらえば！」

「明久。何故ワシが女風呂に入ることが前提になっておるのじゃ？」

「そうですよ。いくらなんでも裸になったらばれるでしょう」

雄二ももつと言ってやってください。

「明久、それは無理だ」

「どうして無理なのさ？」

「いや、じゃからワシは男じゃと」

「3ページ目を見てみる」

〈合宿中の入浴について〉

男子A B Cクラス…	2 0 : 0 0	2 1 : 0 0	大浴場（男）
男子D E Fクラス…	2 1 : 0 0	2 2 : 0 0	大浴場（男）
女子A B Cクラス…	2 0 : 0 0	2 1 : 0 0	大浴場（女）
女子D E Fクラス…	2 1 : 0 0	2 2 : 0 0	大浴場（女）

Fクラス木下秀吉… 2 1 : 0 0 2 2 : 0 0 個室風呂？

「くそっ！これじゃ秀吉に見てきてもらうことができない！」

「そういうことだ」

「なんでワシだけが個室風呂なんじゃ！？」

「……私との待遇の差に怒りを感じますね」

そりゃあ男として登校しているのだが、男の秀吉は……ってこれは学園長の嫌がらせか。

あの腐れババアめ……

「全員手を頭の後ろに組んで伏せなさい！木下はこっちへ！その3馬鹿とその付属品は大人しくしなさい！」

付属品って私のことですか？

「仰々しくゾロゾロと、一体何のまねだ？」

女生徒十数名がこの部屋に流れ込んでくる——え、何この状況。

「よくもまあ、そんなシラがきれるものね。あなたたちが犯人だつてことくらいすぐ分かるのに」

「はあ……犯人ですか」

先程から犯人だの盗聴だのよく聞くが、文月学園は実は犯罪者の巣窟なのだろうか。

「コレのことよ」

「……CCDカメラと小型集音マイク」

「これが女子の脱衣所に設置されていたの」

「え！？それって犯罪じゃないか！一体誰がそんなことを」

「とばけないで！一体貴方達以外の誰がこんなことをするっていうの！」

そんなこと言われても

「明久君達は犯人じゃありませんよ。だいたい女子風呂へ設置していく時間がなかったじゃないですか」

明久君気絶してましたし。

「ふん、知ってるのよ。吉井が晩御飯食べにこずに女子風呂へ設置にいつてきたことをね」

「……はい？」

「それだけじゃないわ。シオ、あんたでしょ。短時間で犯行を可能にする為にこの合宿所の詳細な位置取りを覚えたのは。その為に一番に合宿所に辿りついた——」

「……え？はい？ちよっ……」

気付けば明久は姫路瑞希と島田美波の両名に折檻されており、雄二は既に翔子にアイアンクローをくらっている。

ムツリーニはこの時代の拷問だと言わんばかりに石片を正座で抱かされていた。

そして疑惑がかかっている詩織も当然——

「や、やめ……」

「大人しくしなさい！」

「り、理不尽です！」

拷問は30分程続けられた。

3 - 2 巻き添え……え、まじですか？（後書き）

あんまり変えるところなかったや。

次の話あたりから詩織が本格的に動き始めます。

今回は傍観者ではなく犯人を追い詰める側として参加するでしょう。
魔法を使われたら一発で判明しそうだが——そこは何とかしよう。

3 - 3 お尻派（前書き）

なんかタイトルで10分くらい迷ってたけど、もう何も考えずにつけました。

3 - 3 お尻派

強化合宿二日目の日誌を書きなさい。

姫路瑞希の日誌

『今日は少し苦手な物理を重点的に勉強しました。いつもと違ってAクラスの人たちと交流しながら勉強もできたし、とても有意義な時間を過ごせました』

教師のコメント

Aクラスと一緒に勉強することで姫路さんに得られるものがあつたようで何よりです。今度の振り分け試験の結果次第ではクラスメイトになるかもしれない人たちと交流を深めておくと良いでしょう。

土屋康太の日誌

『前略。夜になって寝た』

教師のコメント

前略はそうやって使うものではありません。

吉井明久の日誌

『全略』

教師のコメント

あまりに豪快な手抜きに一瞬言葉を失いました。

詩織「レッドフィールドの日記」

『女の子なのに女風呂の覗き疑惑をかけられ、合宿所を魔法で吹っ飛ばそうかと思うくらい暗黒面に落ちていました。私だって女の子なんですよ。そりゃあ女の子っぽくないところもありますけど、もう感性は完全に女の子なんですよ』

教師のコメント

……レッドフィールドさんにはお気の毒でした。

詩織は悲しみの淵に立っていた。

他のメンバーもいるから聞こえないように一言。

「私……女の子、なんですよ？」

昨日は普段こういった折檻を受けていない詩織を雄二達は心配そうにしていたが、意気揚々と女子風呂へと覗きに行った。

結果西村先生に補習を受けて疲労困憊といった感じで戻ってきてすぐに寝た。

今この部屋にいるのは女の子にも関わらず女子風呂への覗き疑惑をかけられた一人の被害者。

ぶっちゃけ認識阻害なんかで男のフリして登校していたのが悪いのだが、無実の罪で罰せられた詩織はどこまでもネガネガしていた。

膝を抱えて横になってシクシクと漏れ出てくる声が第三者がこの場にいれば居たたまれなくなること間違いなしだ。

というか同じ部屋のメンバーが力いっぱい詩織から目を逸らしていた。

「しくしくく」

「……シオは案外打たれ弱いんじゃない」

「みたいだな。これは作戦には組み込めんな」

雄二は冷静に詩織の状況を把握し、部屋で待機してもらうことにした。

根元に制裁を加えていた姿を考えるとここまでガラスのハートとは思わなかった雄二は思わぬ戦力外に頭を抱える。

Bクラスのメンバーを腕輪の力一つで吹き飛ばした力は伊達ではないのだ。

「とりあえず合同学習だね。ほらシオ。立ち上がって」

「いいんですよ。私は女の子の裸を覗きに行く変態なんですよ」

「……どうしよう雄二」

「とりあえず引き摺って行くぞ。そのうち目が覚めるかもしれん」

「……詩織。大丈夫？」

「翔子ちゃん……うう……翔子ちゃん……」

切なそうに翔子を呼びながら抱きつく詩織。

その姿を執拗に構われなくて安心したようなモヤモヤするような気持ちで見つめる雄二。

（シオ＝レッドフィールドか。俺と会ったことあるんだよね？何時だ？翔子とも面識があるということは小学校低学年くらいの話だな？……………待て、翔子は何て言った？）

クラスメイトの女顔の男が翔子に抱きついて慰めてもらっているのを注意深く観察する。

「私は悪くないですよ？というか私が覗くはずないじゃないですかあ……………」

「……………うん。分かってる。詩織はやってない」

（……………詩織？詩織ってあの召喚大会で出てきたシオの兄弟だよな。

……………同一人物か。ならシオって名前は偽名か？待て。おかしい。召喚大会で見たレッドフィールドは間違いなく女だった。……………）

もう一度注意深く詩織を確認する雄二。

（……………俺の目の錯覚か？何だあの胸のふくらみ）

よくよく見てみると詩織の男子制服の胸辺りが膨らんでいた。あれをどうして男だと俺達は思ってたんだと雄二はさらに考える。

（詩織……………詩織……………どこかで聞いたような気がするんだが。…………………………！！？）

唐突に襲い掛かるフラッシュバック。
その姿は――

『詩織が男の名前で何が悪いっ!!』

「雄二どうしたの!? 滅茶苦茶震えてるよ!」

「い、いや。何でもない」

自身をフルボッコにするかつての女の子の蛮行に恐怖が蘇ったとは言えない雄二は口を噤む。

そういえば明久が以前シオが女で魔法使いだのと戯言を言っていたが、もしそれが本当ならば全てに納得がいく。

というか何であそこまで詩織が落ち込んでいたのかやっとなんて。そりゃあ女の子なのに女子風呂の覗き疑惑をかけられてしかも無実の罪で折檻されたら落ち込む。

「はい?」

翔子に抱きついて悲しみを癒していたら唐突に近く誰かが認識阻害の対象外となった。

何でこのタイミングで、と思い周囲を見回して、その人を見つける。

「雄二君ですか」

「……雄二？」

呟いた言葉に翔子が首を傾げる。

「いえですね、昔に私と会ったことを思い出したようです」

「……そう」

部屋の男子が4人中2人が詩織の性別を知っていることになる。
これ以上増えたらさすがに問題になりそうなので秀吉とムツツリー
二にはバレないようにしたいものだ。

「工藤さんだっけ？」

「そうだよ、君は吉井君だっけ？久しぶり」

見るとAクラスらしきボーイッシュな女の子が明久に話しかけていた。

女の子の服を着ているので間違いなくAクラスだろう。

「それじゃ、改めて紹介させてもらうね。Aクラスの工藤愛子です。
趣味は水泳と音楽鑑賞で、スリーサイズは上から78・56・79、
特技はパンチラで好きな食べ物はシュークリームだよ」

「シュークリームと聞きました！」

「……お主、案外安いのじゃな」

落ち込んでいた詩織が飛び込んできたのを見て呟く秀吉。

「ん？どうしたの吉井君」

「いや、別に工藤さんの特技を疑ってるわけじゃないんだ。ただ、その……」

「はい。特技はシュークリームですね」

「シオはもっと人の話ちゃんと聞こうよ!？」

「え？違うんですか？」

「がっかりです、と言い放ち勉強机に座り教科書を取り出す詩織。後ろではスパッツがどこのとか話しているが、奴らに羞恥心はないのだろうか。」

工藤さん 僕 こんなにドキドキしてるんだ やらない？

「……………」

「ない、んだろうなあ。」

「音をつなぎ合わせて一つの言葉にしているようだが、なかなか上手い。」

「そもそも明久だってそんな変態的な言葉を勉強中の人たちの中で――」

「キミが――僕にお尻を見せてくれると嬉しいっ!」

「……………」

「明久は変態のようだ。」

「なるほど。明久君はお尻派ですか……」

「何感慨深げに呟いてるのさシオ！違うよ！違うからね！？」

お願い工藤さん！ 僕にお尻を見せて

「隠さなくてもいいんですよ。男の子の趣味嗜好は人それぞれですから」

「その自愛に満ちた顔で許容するのやめて！」

「……今の、何かしらね？瑞希」

「なんででしょうね？美波ちゃん」

私刑執行人のお出ましのようだ。

「まさか、ただでさえ問題クラスとして注意されてるのに、これ以上問題を起こすような発言をしたバカがいるのかしら？」

「困りましたね。そんな人がいるなら、厳しいお仕置が必要ですよね」

最近姫路瑞希が完全にFクラスに染まったと思う。

FFF団といい、染まった原因はたぶんそこらへんだと思う。

「二人ともこれは誤解なんだ！僕は問題を起こす気はなくて、ただ純粹に お尻が好きって だけなんだ——待って！ 今のは途中に音を重ねられたんだ！お願いだから僕を後ろ手に縛らないで！あとそっちの皆も笑ってないで助けてよ！特に雄二とシオ！」

「いえ、いつまでたっても答えを出さない、しかも気付かない明久君にも落ち度はあるかと」

「何のこ——ムツツリーニ助けて！」

「工藤愛子。悪ふざけが過ぎる。……うまくやってみせる」

そう言つとムツツリーニは工藤愛子と同じように小型録音機を構えた。

「姫路さん。美波。よく聞いて。さっきのは誤解で、僕は お尻が好き って言いたかったんだ。特に雄二 とシオ の が好き ってムツツリイニイーツ！後半は貴様の仕業だな！上手くやるつて、工藤さんよりも上手に僕を追い込むつてことなの！！」

というかそこに何で私の名前が——ああ、彼らには男に見えてるんだっけ。

「……………工藤愛子、お前はまだ甘い」

「くっ！さすがはムツツリーニ君……………！！」

まったく何やつてるんだろつこの二人。

「……………吉井。雄二は渡さない」

「しよ、翔子ちゃん？」

まさか合成に気付いて——ないんだろつなあ。

「いいですか翔子ちゃん。あれは――」

「同性愛を馬鹿にしないでくださいっ！」

「うっさいです！」

いきなり入室してきたコルネ頭を反射的に殴り飛ばす。

蛙が潰れたような声を出して崩れ落ちたその人物を廊下に放り出し、
今度こそ勉強を再会させる。

「ありがとうシオ！これからもよろしくね！」

「……………？は、はい？」

何故か島田美波にとっても感謝された。

3 - 4 覗き準備前——私は興味ありませんよ（前書き）

今回も短め。キリのいいところで終わるとどうしても短めになりがちなのは確かだが、今回は単に筆が進まなかっただけともいう。

3 - 4 覗き準備前——私は興味ありませんよ

「とにかく雄二！起きろコラアッ！」

明久の叫び声に渋々ながら目を覚ます。

何事かと見てみると雄二が明久の寝ている布団のすぐ傍で寝ていた。翔子から聞いていたが寝相が悪いのはまだ直っていないらしい。

「ふああああ……今日も自習ですか……」

毎日似たようなスケジュールにうんざりするが、ある意味その為の合宿なので文句は言えない。

ルームメイトは昨夜も覗き騒ぎを起こして補習で散々だったようだ。にも関わらずやたら元気なのは、馬鹿だから疲れなんて知らないのか。

隣で明久が雄二を撲滅しようとしているが、この二人の仲が悪いのはいつもの事なので放っておく。

「さて——」

今日は参加しますか。

朝食の時は明久達と離れて食事をして、自習中はやめておこうと思いき伸ばし続けてお風呂の時間前。

自習中の後半に少しだけ話そうかなとも思ったのだが、いつのまに

か明久達が消えていた。

「しかしお前が参加してくれるとは思わなかったぞ」

「うむ。あまり不正とか好きそうじゃなさそうだからの」

実際魔法でかなり好き勝手やってますが、と詩織は心の中で呟いた。

「それで昨日はFクラスで特攻したようですが、今日はどうするんですか？」

「今日はD・Eクラスをこちらに引き込むことに成功した。戦力がイーブンとはいいがたいが、昨日よりはマシだろう」

「だよね。Fクラスメンバーだけだと相手によつては瞬殺されちゃうしね」

ここにいるFクラス主要メンバーと姫路瑞希以外は特に長けた教科や操作技術があるわけではないので点数差で普通に負けてしまう。ならば人数を増やすというのは当然の結果なのだが、あまりそれは賢い選択ではない気がする。

「人数を増やすのは構わないんですが、それならAかBを引き込むべきでは？」

「…………… Aは説得に失敗。Bは纏まってない。Cは代表が女子だから尻込みしている」

「なるほど。まあ犯罪ですから尻込みしないほうがおかしいんですが……………」

「でもここまで騒ぎになると入浴自体中止になったりしないのかな？」

「それはないだろう。教師側にもプライドがあるからな。『覗きが阻止できないかもしれないので入浴は控えてください』なんて言うと思うか？」

「ああ、そっか」

「……………待てよ？」

それなら最終的に出てくるのは教師陣ということになる。本当にD・E・Fクラスの戦力だけで足りるのだろうか。

「それとこれは憶測だが…………教師側はこの事態を好ましく思っている可能性もあるな」

「え？ 僕らの覗きを？」

「ああ。あくまでこの合宿の目的は『生徒の学習意欲の向上』だからな。目的がなんであれ、召喚獣を使った戦闘を行う以上は勉強をせざるを得ない。女子側も同様だ。防衛のためには召喚獣が必要不可欠だからな」

なるほど——詩織はそろそろ教師側が明久達をこの部屋で監視すると思ったのだが、その考えは杞憂らしい。

本当に雄二の考え通りなら最後まで好きにさせてもらえるだろう。

「吉井っ、大変だ！」

もうすぐ作戦開始時間というところで須川亮が部屋に飛び込ん
でる。

聞くところによると大食堂で待ち伏せされて戦力を分断されたよう
だ。

ムツリーニによると情報は漏れてないらしいが明らかな先手、情
報が漏れたのではなく雄二の思考を完全に読んだのが前提だとす
る……

「翔子ちゃんですか」

「よっぽど雄二の覗きが許せないんだね」

やはり翔子は反対か……まあ当然だろう。

詩織が話をすれば翔子とて理解して力を貸してくれると思うのだ
が、それは希望的観測だ。

雄二がとある理由で脱衣所へ行きたいので手伝ってくれと言ったと
ころで、そのまま覗きに行かないという保障はない。

むしろFクラスメンバーだし嬉々として覗きにいくだろう。

………こいつら本当に無実なのか？

「とにかく出るぞ！」

作戦はもうないようなもの、とにかく分断された戦力を練り直す。

そう言い放ち雄二は部屋を飛び出した。

それに続く明久達を見てから小走りについていく。

「……………そういえば召喚獣はどうでしょう」

前回の大会の時に0点召喚ではなく通常召喚にしたのだが、今はま
た0点召喚だ。

まあ今回はそれを補う為に一つ技をつけておいたので大丈夫だろう。

「あの明久が一撃で……噂に違わぬ才女だな」

「はい？」

明久が一撃って……………彼は操作技術に長けているだけでまともに攻撃を食らえば一撃で死ぬだけの点数なんです。が。そう思い相対している者とその点数を見て吹いた。

『学年主任 高橋洋子 VS Fクラス 吉井明久
総合科目 7791点 VS 902点』

「……………」

「あら、レッドフィールドさんですか。貴方も防衛に参加するんですか？」

詩織の姿を確認した高橋先生は召喚獣のフィードバックによる痛みでのた打ち回っている明久を一瞥してから話かけた。
しかし

「防衛に参加？何なまっちょろいこと言ってるんですか」

「レッドフィールドさん？」

「私は貴方の敵です。試獣^{サモン}召喚」

『学年主任 高橋洋子 VS Fクラス 詩織〓レッドフィールド
総合科目 7791点 VS 0点』

「レッドフィールドさん。いくら無実の罪で痛めつけられたからって自棄になつては……」

「自棄？違いますよ。これは……」

ゆつくりと杖を高橋先生の召喚獣に向ける。

「八つ当たりというのはですよ」

「余計悪いですよ！」

3 - 4 覗き準備前——私は興味ありませんよ（後書き）

次回詩織VS高橋先生の巻。

まだ作者の頭は何も考えてないのでたぶんノリで決まる。

3 - 5 強者達の戦い（前書き）

もっという文章書けるんじゃないかと思うけど、これが限界なんだ
……。
戦闘って文才がよく関係するから理系の俺には厳しいんだぜ。

3 - 5 強者達の戦い

0点開始召喚、そして点数は相手のほうが遙か上——悪条件に悪条件が重なったようなものだ。

詩織の召喚獣は圧倒的に格上相手には弱い。

ディバインバスターやスターライトブレイカーなど当たれば格上相手でも消滅させられる。

しかし格上である相手はまず点数の関係上素早いので当たらない。その為にバインドというものがあるがこれの拘束力は自分の点数に比例するのだ。

つまり格上相手ならばすぐに破られる代物である。

もしも詩織の持ち点数が高橋先生に匹敵するならばやりようはあった。

しかし詩織の総合科目の保持点数は4200点前後……腕輪保持より少し上程度だ。

他の教科だけでいえば学年で首位をはれるほど優秀なのだが、世界史と日本史と地理、古典が足を引っ張っている。

だからこそ総合力では翔子に勝てないのだ。

本当は総合科目ではなく苦手科目以外で勝負したかったのだがそれも言っていられない。

「……………」

高橋先生の手がぶれたのを見て『プロテクション』をはる。

するとほぼ同時に何かが詩織の召喚獣の近くで打たれる音がする。

圧倒的な点数に鞭——もはやその攻撃は不可視の領域だ。

「よく防ぎましたね」

「鞭は確かに細いし慣れた人が使えば防御も回避も難しいです。しかし鞭には決定的な欠点があります」

「何ですか？」

「それは鞭を打つためには身体を大きく動かさないといけないということ。小さな動きだけで鞭を扱うのは不可能ですからね。そして――」

『学年主任 高橋洋子 VS Fクラス 詩織Ⅱレッドフィールド
総合科目 7791点 VS 0点』

「……？ダメージをうけてませんね」

「はい。プロテクション――発生時間は僅か0・1秒ですが、全ての攻撃をシャットアウトすることが可能です」

動きが鈍い召喚獣を防御面で強化する。

それが0点召喚という欠点を抱えている詩織の秘策だった。

「ではいきます――プラスターシステム、リミット1、2。リリース」

『学年主任 高橋洋子 VS Fクラス 詩織Ⅱレッドフィールド
総合科目 7791点 VS 2000点』

本来ならば4000点まで一気にブーストしたいのだが、高橋先生の武器は鞭だ。

何回も打たれるならともかく一発一発の攻撃力はあまり高くない。しかしその分速さが十分に高いので4000点までブーストして後

がないような状況は作りたくなかった。

「アクセルシューター」

4つの弾が宙に浮かぶ。

高橋先生も鞭を振るために大きく右手を振り上げる。

「……いきなさい！」

「目を覚まさないレッドフィールドさん！」

同時に放たれる攻撃。

相手の召喚獣の動きから鞭の軌道を予想した詩織はその位置に光弾を配置、手元にさらに一つ残して残りの二つを弧を描かせながら飛ばす。

左右から迫り来る光弾に高橋先生は鞭を二度高速で振るうことで排除しようとする。

「デイベインバスター」

一発目が消える直前でアクセルシューターの魔法を取り消し、すぐさま次の魔法にかかる。

もちろん目標は——召喚獣を一撃で消せる頭。

「早い!？」

高橋先生が予想以上の攻撃の早さに驚き、桃色の光線をサイドステップで避ける。

そしてそのまま一回転し、鞭をなぎ払うかのように振るった。

「デイベインバスター」

それを予想していたかのようにスライディングで鞭を潜りながらの砲撃。

「!？」

鞭を振り終わった状態の僅かな隙に迫り来る砲撃。

それを高橋先生は避けられないと判断したのか左手で光線を受けながら射線から避けた。

左手でかばわなければ顔に当たって勝ちだったかもしれないが、やはり一筋縄ではいかないよう――

「っ」

不味い、失敗した。

そう直感的に悟った瞬間鞭に打たれる詩織の召喚獣。

『学年主任 高橋洋子 VS Fクラス 詩織II レッドフィールド
総合科目 5814点 VS 2937点』

こちらが削れたのは2000点程に削られたのが1000点程――
上出来だろう。

しかしこちらの点数が削られたのは明らかに判断ミスだ。

高橋先生程の点数になると砲撃を撃った後の硬直すら命取りだ。
プロテクションで防ごうとしたのだが設定した硬直時間ではることも出来ず、そのまま受けてしまった。

「アクセルシューター」

今度は五つに増えた光弾の二つを手元に残して三つを相手に向かわせる。
そして

「な——」

同時に召喚獣を高橋先生の下へと走らせる。

どちらも遠距離型なのは分かっているもののこのままでは負けるのは確実にこちらだ。

ならば突破口を開く意味でも接近するしかない。

一瞬で消される三つの光弾を確認すると手持ちの光弾も消し、相手の拳動全てに神経を集中させる。

「っ——！」

突っ込む詩織の召喚獣に放たれる鞭の連撃をプロテクションのみで防ぐ。

0・1秒のみ展開可能なこれにはクールタイムは基本ないがある制約が存在している。

それは展開後の0・1秒間に相手の攻撃を防がなければ20秒間のクールタイムが発生するというものだ。

つまり確実に相手の攻撃を防がなければプロテクションは次の攻撃を防げない。

『学年主任 高橋洋子 VS Fクラス 詩織Ⅱレッドフィールド
総合科目 5814点 VS 4109点』

足や手にだが、一度ずつ鞭を受け損なったのを確認するがそれでも十分に接近できた。

あと一撃で詩織の召喚獣は消滅するが、この距離なら十分。

接近する詩織を嫌がったのか高橋先生は後退しようとするがその前に杖を相手に向かって槍投げの要領で投げる。

「投げた！？」

「武器なんて使えてなんぼです！そして——バインド！」

杖が高橋先生の召喚獣の胸に当たり、200点程削ると同時にピンク色の帯が全身を包む。

そして落ちた杖に手を伸ばしながら

「アクセルシューター」

「同時行使できるんですかそれ！？」

実は詩織の召喚獣の技の中でもバインドのみ特別なものだ。

この技だけは他の魔法の使用中でも使うことができ、またこの魔法を行使している最中でも他の魔法を使用できる。

だからこそアクセルシューターで八つの光弾を出し

「これで終わりです！」

全てを高橋先生の召喚獣にぶつけた。

細かいコントロールを全て投げ捨て、落ちている杖を拾いながらの攻撃。

そしてそのまま杖を流れるような動作で相手に向け

「デイベインバスター」

砲撃でもって貫いた。

「で、私は勝ったというのになんですかその体たらく」

「……ごめん」

「高橋先生を抑えられたのは今回だけですょ？次はきつと容赦の欠片もなく殲滅してくると思います」

「すまん」

「下手すればチャンスは今日が最後だったかもしれません。だというのに勝てそうになかったから降参？」

「……申し訳ない」

「馬鹿ですか？土下座すればいいとも思ってるんですか？」

「すまぬ」

明久、雄二、ムツツリー二に秀吉を正座させての説教。
自分があんなに頑張ったのに降参なんて結果で負けたのだけは許せない。

確かに八つ当たりという目的があったもののそれも高橋先生を相手にすれば明久達がなんとかしてくれると思ったからだ。

今回の最終目標は断じて高橋先生に八つ当たりするためではない。

「もういいです。寝るんです。寝るったら寝るんです」

そして詩織は不貞寝を決め込んだ。

3 - 5 強者達の戦い（後書き）

原作知ってる人は予想通りかもしれませんが、この戦いにおいて高橋先生は最強戦力ではありますが最終防衛には携わってません。

だからシオリンは頑張ってますがこの勝負の勝敗は大して関係ありません。

まあシオリンすねちゃいましたけど。

3 - 6 夜這い編

強化合宿三日目の日誌を書きなさい。

土屋康太の日誌

『前略。（坂本雄二に続く）』

教師のコメント

今度はリレー形式ですか。次から次へとよく思いつくものです。

坂本雄二の日誌

『そして翔子が俺の前で浴衣の帯を緩めようとした。俺は慌ててその手を押さえつけ、思い止まるように説得した。ところが、隣では島田が明久に迫っていて妙な雰囲気になっており（詩織「レッドフィールドに続く」）』

教師のコメント

君たちに一体何があったのですか？ 土屋君が略した部分がとても気になります。

詩織「レッドフィールドの日誌」

『物音に起きてみればそこには既に雄二に馬乗りになってR18寸前の翔子と思考を読んでもと妙な食い違いをしている明久と島田美波がいた。空気を読んで部屋に結界を張ろうか迷っていた時、それは起きた（吉井明久に続く）』

教師のコメント

あまりポンポン魔法を使わないようにしてください。……吉井君の
日誌はどこでしょうか。

吉井明久の日誌

『後略』

教師のコメント

ここでその引きはないでしょう。

「ふに？」

隣で誰かが話す声と激しく動く音に目を覚ます。
合宿所なので人の出入りや話す声くらいには反応しないように警戒
レベルを下げていたのだが、それを越えたようだ。
まったく深夜に誰だと思い周囲の状態を確認する。

明久↓島田美波に迫られている。もげる。

雄二↓翔子に迫られている。いいぞもつとやれ。

ムツリー二↓カメラを構えている。ふざけんな。

秀吉↓寝てる。特になし。

「……………」

いったい何が起こったんだろう。

翔子はいつものことだとして、何で明久は島田美波に迫られているんだ。

いや、一方通行だが好意があるのは知っていたが——明久は何をしただろう。

「……………リーディング」

思うように頭が働かない。

とりあえず明久の頭の中と島田美波の頭の中を覗き、考えていることを読み取ると——

「えっと」

明久は島田美波を刺客か何かと思っており、島田美波は明久に誘われてホイホイ乗り込んできている。

……本当に明久は何をしたんだ。

「ふう。……………」

「……………」

溜息を吐き、ふと翔子のほうがどうなっているか見ると雄二と目が合った。

その雄二の視線を辿って翔子がこちらを見ている。

「……………（スッ）」

指を一本。

「……………（コクリ）」

「ちょっと待て!？」

一時間でいい? な詩織にの問いに頷いて返した翔子のやり取りにツッコミを入れる雄二。
とりあえず……

「ムツツリーニ。これは没収です」

「……………!？」

ガンとバックに大きく出そうなくらいショックを受けているムツツリーニを尻目に奪い取ったカメラを自分の鞆の中に入れる。
そしてふとそのカメラのメモリーが気になって再び取り出してから中身を確認すると

「……………ムツツリーニ。盗撮は犯罪ですよ?」

「……………盗撮じゃない」

「なら何ですか?」

「……………芸術だ」

「えい」

不健全なものを全て消去しておく。

もちろん後でデータの残骸から復旧できないように魔法まで使って。

「あーっ!？」

キャラすら捨てて叫ぶムツツリー二の声に反応したのか島田美波がようやく秀吉以外が起きていることに気付く。

どれだけ盲目なんだお前とツツコミを入れたいところだ。

だがその前に部屋に結界を張って部外者が来れないようにしておこうか迷う。

がその決断をする前にあれが入ってきた。

「お姉さま無事ですか！？美春が助けに来ましたよ！！」

「み、美春！？どうしてあんたがここに来るのよ！」

「さっきお姉さまのお布団の中に入ったら誰もいなかったから、もしやと思っただけ……！やっぱりここも探しにきて正解です！」

「あの……一応今は睡眠時間なんですが」

詩織がオズオズと申告してみるも当然のことながら無視される。

「あ、危なかったわ……。昨日で懲りたと思って完全に油断してたのに……」

「お姉さま！男の部屋に来るなんて不潔です！おとなしく美春と一緒に裸で寝ましょう！いえ、勿論色々するので寝かせませんが！」

「やめるんだ清水さん！それ以上の会話はムツツリー二の命に関わる！」

「……………！！（ボタボタボタボタ）」

「雄二、とにかく続き」

「翔子、お前は本当にマイペースだな！」

「翔子ちゃん？さすがにチャンスだからといっても初めてが他の人に見られながらはどうかと思うんですが」

「な、なんじゃ！？目が覚めたら女子が三名もおる上に雄二は押し倒されてムツツリー二は布団を血で赤く染めておるぞ！？」

血つて落ちにくいんですね……。

「あああつ！皆してそんなに騒いじゃダメだよ！このままじゃ、鉄人に気付かれて――」

『なにごとだつ！今吉井の声が聞こえたぞつ！』

廊下から響き渡ってくる西村先生の声。

今就寝時間中なんだから貴方も少しは自重してください。

「……………」

「え？なに？なんで全員が『吉井が声を出したせいで見付かったじゃないか』みたいな目で僕を見ているの？」

いや、実にそのとおりなのだが。

再び溜息を吐いてからどうやって西村先生に見付からずに逃げられるかを話し始める一同を見る。

「アホですか貴方達。こうすれば万事解決です」

「男の分際で私の首根っこを掴むなんて不潔です！やめてください！」

「はいはい」

清水美春が暴れるものの浴衣を掴んでいるので帯を抑えないと脱げる。

だから暴れるといってもそこまで激しいものではない。

ガチャリとドアを開け、廊下に出るところらに向かってきている西村先生に向かって手に持つそれを差し出す。

「どうしたレッドフィールド。吉井の声が聞こえたが」

「はい西村先生。これが明久君に闇討ちしようとしたので鹵獲しました。補習室で反省させておいてください」

「なっ！？こ、この男は嘘をつ『ああ、弁明はしないことです。島田美波に迷惑をかけてくなければ』——っ！！」

今この場で正しい弁明をすれば部屋は確認され、島田美波も補習を受けるだろう。

そのことを理解したのか――

「なんて下劣なんですか！私が言う事を聞かなければお姉さまに手を出すなんて……！！」

「……西村先生これとつと持っていつてください。日本語通じませんし」

「……………」

西村先生はこちらを疑わしそうに見やり、そして今も暴れようとしている清水美春を見る。

「……………まあいいだろう。問題は起こしてないな？」

「はい。大丈夫です」

しっかりとそう答えると西村先生は一つ頷いてから廊下を去っていった。

片手にコルネ髪のある、清水美春を引き摺りながら。やっと寝れる、と思いながら部屋の中に入る。

そこには西村先生がいなくなったので再び雄二に襲い掛かろうとしている翔子の姿が。

「……………翔子ちゃん」

「……………何。今忙しい」

「レッドフィールド助けてくれ！」

「そんなことはいいか『明久君は黙っててくださいね』ら……………はい」

「はあ。あまり私を困らせないでください」

「……………わかった」

すっごくい渋々と引き下がる翔子を見て雄二は詩織がまるで救世主かのように見えた。

今分かった。

翔子にとって詩織はストッパーだと。

翔子対策が分かった雄二はガッツポーズをとってから詩織に感謝を告げた。

3 - 6 夜這い編（後書き）

今回は描写するか迷ったんですが、夜這い編。

綾香が夜這いにくるパターンも考えてみたんですが、カオスになつて收拾がつかなくなる可能性高いので今回は見送り。

ちなみにシオリンは翔子を超応援してるので雄二の期待はあまり意味ないものだったりします。

3 - 7 覗きの結末（前書き）

……もういいんだ。

3 - 7 覗きの結末

この強化合宿全体についてのまとめを書きなさい。

詩織「レッドフィールドのまとめ

『初めて男という生き物そのものに嫌悪感を覚えた。清水美春の気持ちがいさしだけ分かった気がする』

教師のコメント

強化合宿中の男子達の行動は確かに目が余るものがありました。が、同性愛に走るのはまだ早いと思います。あとまとめなのでもう少し長めに書いて欲しいんですが、提出しにきたレッドフィールドさんがとても怖かったのでこれでいいです。

今日は強化合宿最後の夜、つまりは覗きの最後のチャンスがある。会話を聞いていると雄二は女子の写真を男子達で回して戦意の高揚を目指しているらしい。

あわよくばA・B・Cクラスの男子達も加勢させようという魂胆だろう。

しかし横から写真を見せてもらったが、確かに可愛いことは可愛い。がそれだけじゃないだろうか。

ひょっとして転生して感性までもが女になったのでそう感じるだけなのか？

「むう」

既に雄二達は作戦開始時刻を待つばかりで、明久がソワソワと時計をチラチラ見ていた。

「明久。今更ジタバタするな。補充のテストも全て受けたし、写真も回した。やるべきことは全てやったのだから、あとは何も考えずに戦うだけだ」

しかし雄二は無駄に男らしい……目的が覗きということを見るとあれだが。

あれ？覗きが目的ならそれも男らしいといってもいいのか？

「D・E・Fクラスは昨日に続いて全員参加のようじゃ。あとはA・B・Cクラスが協力してくれるかどうか、じゃな」

「今日は特に防衛が厳しそうですね」

先程買ってきた緑茶のペットボトルで喉を潤しながら呟く。
それを耳ざとく聞いた雄二は興味深げに詩織を見た。

「ほう。分かるか？」

「当たり前です。D・E・Fクラスが補充テストを受けたということとはまだ覗きを続行するということが教師達に丸分かりです。さらに言えば今日が最後のチャンスな上、昨日と同じではないのは確実なのでその分防衛力を強化するのは当然の結果です」

下手をすれば内密に女子の入浴時間ずらして入ってるんじゃないか。そう思ったものの口には出さない。

雄二もその可能性に気付いているだろうが、そもそも彼らの目的は

風呂場ではなく脱衣室だ。

そりゃあ雄二とて男の子なので覗けるなら覗きたいだろうが、それでも目的を逸することはしないはずだ。

「ああ、その通りだ。今日の戦いは今までより厳しいものになるだろうな。で、レッドフィールドはどうするんだ？」

「ふむ」

正直もう昨日高橋先生を倒した時点でお腹一杯だ。

それに雄二は詩織の性別を知っているのでもそもそ士気が低いのは承知している。

だからこそ断るのは簡単だろう。

「……………むむむ」

ピーンと直感がきた。

……………よし。

「今日は部屋でお留守番してますね」

「そうか。無理強いは出来ないしな」

占ってみた結果、『彼らの望みは失敗する』とちなみにこの彼ら、というのは文月学園男子のことだ。

であるならば覗きは失敗する確立が非常に高いのだろう。

詩織がそのことを踏まえて動けば成功する確率も上がるのだろうが、敗戦濃厚の戦いに手を出すほど詩織は愚かではない。

となれば傍観が一番だろう。

家から手元に転送した本を読み終え、背伸びをしてから時計を見る。既に時刻は9時を過ぎている——どうやら一時間近く集中していたようだ。

「サーチ、つと」

女子風呂の脱衣所の生体反応を調べ、誰もいないことを確認する。やはり入浴時間をずらしたようだ。となれば教師陣はこの事実を伝えるだけで男子達の士気を簡単に削ぐことができる。

なるほど、こりゃあ負けだな。

そう思いながら転移の魔法陣を――

「つと、いけないですね」

そういえば脱衣所にはカメラが仕掛けられているのだった。記録媒体への認識障害をはってから転移を行う。一瞬の浮遊感の後に変わる視界。

「ん、さてと……」

服を脱いでタオルを巻いてから……

「って何で学園長がいるんですか」

「ああん？そっちこそ何でいるんだい」

お互いここにいることが疑問のようだ。

浴室に音が反響し、しばらく見詰め合うが詩織は興味を失ったかのようにまず身体を洗い始める。

ちなみに詩織はお風呂セットを持ち込んでおり、ボディソープやシャンプーは全て自作の代物だ。

まあ自作といっても肌に優しいとかの効能はなくて、全て魔法関連の品なのだが。

「~~~~」

無意識のうちに歌を歌っている詩織を学園長は胡乱な目で見てから溜息を吐く。

まあ一人で独占できると思っていたら厄介なガキがきたとかその辺だろう。

髪と身体を洗い終え、湯船につかりほっと一息。

「ふうー。癒されます……」

この瞬間、詩織は心身ともにタレきっていた。

超油断していたといってもいいだろう。

だからこそ大声で行われていたそのやり取りに気付くことなく、湯船に身を沈めていた。

「全員、心して見る！これが俺達の勝ち取った栄光だ！」

ガラリと扉が開けられる。

ここで詩織にとっての不幸は最近男として活動しすぎて男の声に何も反応しないことだ。

つまり雄二の声に慣れすぎて、タレきった頭ではそれが女子風呂に

入ってきたことに気付かなかったのだ。

「な、なんだいアンタたちは！？雁首揃えて老人の裸見に来たのかい！？」

『割にあわねえーっ！！』

だからこそ詩織は不幸だった。

その声をつるさいと思い、何も考えずに注意しにいかうと思ったから。

「つるさいですね。少しは静かにしてて……って何を見て——」

湯船から立ち上がり、入り口に集まっている男子生徒たちに注意をしてからその視線がこちらに集まっていることに気付く。

自分——裸。

タオルは？——かろうじてかかっており、下はかろうじて隠れているが上は丸見え。

……

「ぶ……」

『……………』

ガン見であった。

「ぶつとおん！ジェノサイドフォーム！」

詩織の身体が光ったかと思うとそこにいたのは白いブラウスにチェックのスカート、そして黒いマントを着た詩織の姿が。

一瞬で着替えるという怪奇現象を見てようやく我に返った男子生徒は目を逸らす、が――

「今更ですよ、それ！瞬きなる陽光、青き地にて恵みとなりて、全てを照らせ！」

詠唱によつて詩織の手から出されたのは熱線――つまりはビームだ。本来この程度の魔法に詠唱はいらないのだが今回は魔法陣を弄りながらの詠唱だ。

威力は死なないように弱めてある理性くらい詩織には存在していた。

「死ねっ！死ねっ！死ね……っ！貴方達の価値は死ぬことで上がるんです！」

「ちよっ！し、詩織！？あ、あ、あーっ！」

「明久^{トミ}撃破！」

「落ちてレッドフィールド！争いは何もつつあああああっ！？」

「雄^{トミ}二消毒！」

「……っ」

「その鼻血流しながらよけてるムツツリ！今^{おしおき}肅清してあげますから動くんじゃねええええっ！」

言霊を使って鼻血まみれながらのムツツリ二の身体を縛ってからビームを放つ。

いきなり身体が動かなくなつたことに驚いている奴の顔に一撃。

鼻血の花が咲いた。

数十秒後、風呂場の脱衣室には男子の死体——生きてる——が転がっていた。

それを見て詩織は——

処分通知

文月学園第二学年総勢149名

上記の者達を一週間の停学処分とする

文月学園学園長 藤堂カヲル

ついムラツときてやった。

覗いた女子生徒に裸にされてロビーで正座して徹夜を強要された身としては心の底から後悔している。

写真はやめて欲しかった。

くある生徒の反省文より抜粋く

3 - 7 覗きの結末（後書き）

ブチギレシオリンがまた出てきました。

もういいや。

今回最後の戦いなのでシオリン参加すると思いきや、参加しませんでした。

そもそも敗戦濃厚な勝負では詩織は逃げをうちます。

そして……そう、性別バレイベントです。

半月くらい前からシオリンは作者によって男子生徒に裸を見られることが決定されました。

超番外編：聖杯戦争（前書き）

ネタです。

10分ちよつとくらいで書いたネタです。

作者は原作をやったことがありますが、今原作もってないのでかなり勢いで誤魔化します。

超番外編：聖杯戦争

ドクン

心臓が高鳴る音。

彼女、詩織は戦闘服である白いブラウスにチェックのミニスカート、そしてマントを羽織って待機していた。

先日部下の下級神がとある世界で失態をおかしたらしく、その責任を取るために詩織はここにいる。

向こうの管理者は笑って許してくれたのだが、戦神として無理矢理責任を取ることを決めてしまった。

管理者は悩みながらある一つの仕事を持ちかけた。

すなわち、第五次聖杯戦争に参加すること。

なんでもその世界に間違ってドラゴンを投入してしまったので討伐してほしいらしい。

本来なら神が介入して瞬殺で終了なのだが、その世界は神が降りるにはあまりよくない世界らしい。

まあドラゴンが幻獣種とやらで最強だとか言われてる世界なので、神の降臨はよくない結果を及ぼすのだろう。

「きましたね」

神域の端で静かに佇む詩織の足元に魔方陣が紡がれる。

神としての降臨はよろしくないなので聖杯戦争というものに参加する形で降臨することになったのだ。

「では、いつてきます」

「サーヴァントサタン。契約により召喚に応じました」

自らが何かに召喚されるという感覚は実に久々だ。

同時に必要な知識も頭に流し込まれ、聖杯戦争のルールをしっかりと確かめる。

そしてその内容を整理しながら待つこと十数秒。

「……………？」

下げていた顔を上げ、周囲を見渡す。

「……………あれ？マスターは？」

そりゃあいなくても困らないけど、いないと聖杯戦争のルールとして駄目なんじゃないだろうか。

魔法を使って自身のリンクを探したり周囲の生体反応を探查したりして状況を調べる。

結論、野良サーヴァントでした。

「あんだ…………何者？サーヴァントなのは間違いないんだけど」

「凜。クラスは分かりますか？」

「分からないわ。剣だけで戦ってたからセイバーって言いたいんだけど……」

「剣を使うからセイバー……ですか。まったく、久々の人間界で魔法使いに出会ったと思えば、下級魔法使いばかりですか」

「魔法使いですって？」

「そうですよ魔術師風情。正直貴方達、雑魚いんですよ」

自重しない戦神シオリンの猛攻は続く。

「ゲイ・ボルク刺し穿つ死刺の槍！」

「はいはい。プロテクトプロテクト」

「何……我が必殺の一撃をたかが障壁で弾いただと？」

「というか格が違いすぎて呪いがまったく通ってませんよ。まあ英

雄といつてもたかが人間レベルですね」

少しは自重しろと誰かが言うべきだがシオリンは目的もなしにサーヴァントにちよっかいを出し始める。

「貴様……何者だ!？」

「戦神詩織です。クラスはサタン」

「ならば天の鎖エルキドゥよ!」

「はいはい。デスフレアデスフレア」

「ば、馬鹿な……神が鎖を……?」

「まあ神としての……貴方がたで言うなら神性なんていくらでも自分でコントロールできますし。そもそも私、上級魔法使いですよ?」

何か喧嘩を売ってきた金ぴかを持っていた宝具全て奪ってから消滅させるシオリン。自重しろ。

「くっ……I am the born of my sword」

「あ、知ってますよそれ！私の故郷でよく見た奴です！なるほど、貴方が原点ですか……」

「何を言つて……な！？」

「でもごめんなさい。その能力の弱点は知ってるんですよ。その芸術的ともいえる剣製、精製中にちよつとちよつかいをかければ上手く剣を作れないんですよ」

エミヤさんに剣製を一度も成功させずに歪な剣を量産させるシオリン。まじで自重しろ。

「エクスカリバー約束された勝利の剣！」

「大聖杯がやつと壊されましたね……で、ドラゴンはいつになつたら登場するんでしょう？」

「貴様、サタン！？何故ここに！」

「あらあらセイバーさん。……聖杯が消えたというのに何故貴方は消えないんですか？」

「本当だ。セイバー、どういことなんだ？」

「私にも何がなんだか……」

「……まだ、何か裏があるようですね」

来年春、Fate/stay night 自重しない魔法少女
シオリン とう少女って年齢じゃない編上映開始。

超番外編：聖杯戦争（後書き）

上映開始とか書いてるけど、予定ないですよ。
騙されないでくださいね。

番外編：戦神シオリンの転生担当代理（前書き）

時間軸で言えばバカテス編終了の2億年後くらい。

あんまり需要ないだろうなと思いつつ書いた作品だけど、今日の分が昼前に書ける気しないのでとりあえずで投稿。

本編は明日から作る（キリッ）。

気が向けばまた夕方くらいに本編書き終わって投稿するかも……？

番外編：戦神シオリンの転生担当代理

トントン

重なった書類の横を机に軽く叩くことで揃え、一枚目の顔写真と前世の情報を確かめる。

その書類をしばらく眺めていると

「戦神様。一人目入りますよ」

「わかりました」

自身の右腕ともいえる補佐官からの連絡に返事をする。
そして目の前に音もなく現れたのは――

「うわ！？何だこの和室！？」

ギャーギャーと叫ぶ人間だった。

「こんにちわAさん。貴方は死にました」

「え？えつと、貴方は……」

「神です」

「神！？結構綺麗な人だな……って死んだってどういうことだ？」

この人間は死んだことを自覚していないタイプ……と。

「そのままです。ちょっと世界の揺らぎに巻き込まれて死んでしま

ったんですよ。まあ転生特典ありますので気にしないでください」

「気にするなって気にするよ!」

「それで特典は何がよろしいですか?」

書類の数を見るに一人一人に時間をかけてるわけにはいかない。

「何でもいいの?」

「何でも構いませんが、自身の身の丈にあった能力をオススメします」

「身の丈?どういうこと?」

この転生者めんどい。

そう思いながらも聞かれたら答えなきゃいけないので渋々ながら説明することに。

「貴方の魂の格……いわゆる力の器ですね。その器に入りきる能力じゃないと器そのものが砕け散るんですよ」

「……つまり?」

「死にます。魂が砕け散り、消滅します」

「ちょっ!?!?」

いいからとつと決めてくれ。

「で、何がいいですか？」

「うーん……世界から先に決めていいか？」

「駄目です」

「何で!？」

「世界によって持ち込んではいけない能力がありますから。当然でしょう」

世界には管理する神がいる。

転生者をそこに送るのは自由だが世界の理そのものを変えるような能力を与えるわけにもいかない。

「んー……じゃあ魔力を無限で」

「無理です」

「この程度で!？」

「貴方だけでなく自分の器大きいと過信してるんですか」

魔力無限なんて上級魔法使いでもありえませんよまったく。

「じゃあゼロ魔の4系統全部スクエアの才能で」

「む。それだとゼロ魔世界に行くことになりますが、いいですか？」

「ああ。構わない」

……美形にしてくれたのナデポつけてくれたの言わないな。
なら素直に転生させてあげればいいでしょう。

「分かりました。他に何かありますか？」

「……名前を覚えてくれないか？」

「名前はまあ結構ありますが——詩織と呼んでください」

「ああ。詩織、またな」

そう言うとき最初の転生者は消えた。

こうやりやすい転生者ばかりだとやりやすいのだが——

「次です」

「はい」

次の人は………なんだこいつは。

「どこだここ。そのアマ、ここがどこ知ってるか？」

どこのチンピラだ。

「こんにちわBさん。貴方は死にました」

「ああん？ふざけてんじゃないぞ」

「死因は世界の揺らぎです。そういうことで貴方には転生してもら

おうと思います。何か特典は――」

「聞いてんのかオラァ！」

Bが殴りかかってきた。
なので

「……」

無言で炎の魔法をBに放つ。

Bは断末魔をあげながら和室を転がり、最後に詩織に手を伸ばして消滅した。

「さて、次です」

まったく神相手に殴りかかるとかして馬鹿なんじゃないですかね。

あれから世界の揺らぎが神の管理不届きということの説明に加えると5人中3人くらいが殴りかかってきたので消滅させつつ転生を進める。

転生させるよりそっちのほうが楽なものだ。

というか前世で善行を積んでない人物は全員記憶消して転生でいいじゃないかと思う。

「次です」

「はい」

そして現れたのは――

「む？ここはどこだ」

いかにもなスーツをきた厳つい顔をした人物。

書類をみた限りでは最終戦争とやらで世界の滅亡を防いだ人物らしい。

その後英雄扱いされているので相当の器があるだろう。

「（中略）」

説明をし終わると転生者は少し考えた後、最初の転生者と同じように何でもいいのかと聞いてきた。

「魂の器に応じた能力なら何でも構いません。貴方は世界を救ったようなのでその分結構な無茶できますよ」

「そうか。なら全てを癒す力をくれ」

「……………？構いませんが、理由を聞いても？」

「俺は人を殺すことでしか人を救えなかった。だから来世では人を治す力が欲しい」

……………こんな人ばかりだと転生課も神々が就職しようと思うんですけどねえ。

「ふむ……貴方程の人間なら、世界に対して有益でしょうね。いいでしょう。私の権限において全ての世界への転生を認めます」

そう言つて転生者の前に現れたのは世界の名前と詳細が書かれたモニター。

世界に有益な人物ならどこの世界に転生させてもいい。

だがこれまでもたくさんいたが、ハーレムだの無双だの言い始める奴は大抵世界に対して有害だ。

即詩織の故郷、世界021に送つてやった。

あそこは転生者は害悪と正しく認識されているので10歳になる前に上級魔法使いに見つかつて殺されることだろう。

「ここがいい」

「……………戦争真つ只中の世界ですが、よろしいんですか？」

「構わない。それだけ救わなければならぬ人がいるということだ」

なにこの聖人。

怪しく思つたので記憶をリードしてみたが嘘を言っていないようだ。むしろ前世のことを本気で悔いており、やり直したいという気持ちが大きい。

「わかりました。サービスとして貴方が前世で残してきた家族に祝福を与えますね」

「……………助かる」

いやいやいや、今までの我侭な転生者に比べれば十分楽ですよ。

たまに、おーるふいくしょん？とやらを望む馬鹿な転生者がいるのだ。

そんな奴にはそれっぽい能力を与えて転生先で2、3年で死んでもらった。

というか魂の器が耐え切れず一回使っただけで死んだ。

その分この転生者は何回能力を使っても死なないだろう。

「他に何か能力ありますか？まだまだ器には余裕ありますけど」

「……………ならば俺の愛用していた装備が欲しいな」

「本当に無欲ですね」

「何。俺の家族まで気にかけてくれるのだ。それ以上望むのは欲張りというものだ」

凄く危険な香りのする男だが、これは転生先でハーレム作っても仕方がないくらいいい男だ。

ふと書類の履歴を見てみると相当な……………9角関係
って何だ。

これで一途に幼馴染のことを愛したらしい。

まあ神としてみてきたけど、ハーレムって作るのは魅力があれば簡単だけど維持するのが難しいんだよね。

絶対不満でるし。

「それでは、良い旅路を」

「ああ。世話になったな」

「ふう。これで頼まれた仕事は終わりですね」

「はい戦神様。しかし転生課の人たちも戦神様に代理で担当をやるなんて……なんて不敬な奴らでしょうね」

「構いませんよ。そのおかげで今日は素晴らしい人物と出会えました」

「ああ、あの最後の男ですか。確かに素晴らしい色をした魂でしたね」

「はい。彼の経歴と先程の会話のログは消しましたよね？」

「ええ。彼に関する記録は全て抹消しました」

「……………神に到達するだけの下地を与えましたし、いずれは神へと至るでしょう。その時はもちろん」

「はい。勧誘すればいいのですね？ 私達のグループに」

「ええそうですね。まったく代理なんて仕事面倒だと思ってましたが、とんだ棚ボタです。」

「疲れましたが、数十人の魂を消し去った甲斐がありました」

「まあ殴りかかってくる人間を相手にするの面倒ですからね」

番外編：戦神シオリンの転生担当代理（後書き）

戦神シオリンの転生者に対する扱い。

文中に出てる世界021というのは詩織の魔王時代に生きた世界のことです。

他の作品くらいのチート転生者なんてゴミ屑のように殺されちゃいます。

まあ世界そのものの法則がチート転生に向いてない世界でもあるのですが。

あと実はAの転生でチートに4系統スクエアを選んだ時に世界を詩織が決めてますが、たかが魔法の才能を与えるだけなので他の世界でも本当は大丈夫です。

面倒なので世界決めて放り込んだだけです。まじシオリン外道。

3・5・1 シオリン三変化（前書き）

結構勢いで書いた。反省は少ししている。

3・5・1 シオリン三変化

『はっちゃんけシオリン』

カンカンキリキリカンカン

「お姉ちゃん何してるの？」

今朝、庭から聞こえてくる謎の音に起きて覗いてみればそこには複数の機械を弄っている詩織の姿が。
電車っぽい何かやドリルのついた戦車に航空機、そして極め付けに謎のメカメカしいライオンが鎮座していた。

「これですか？全てを説明すれば、話は長くなるんですが……実は先日ガオ。イガーというアニメの再放送を見たんです」

「うん」

「格好良くて作っちゃいました」

「短いよお姉ちゃんっ！？後そんな軽いノリで巨大ロボット作るのやめて！」

誰もが見惚れる笑顔を振りまいている詩織に心の底からツツコムクリス。

魔法の秘匿を人に押し付けるくせに自重しない姉に溜息を吐いてから急いで部屋を出て階段を下りる。

止めないとんでもない目に合うから急いで急いで急ぐ。

「お姉ちゃん待って！」

庭にたどり着いてみれば既にメカライオンの口に入ろうとしていたところだった。

「何ですかクリスちゃん」

「いや何ですかじゃないでしょ！どうせ軽いノリで合体しようと思ってるんでしょ！？」

「軽くなんかありませんよ。しっかり成功率は確保してます」

ふとガオガイ。ーのとある名台詞を思い出し、まさかと思い聞いてみる。

「……………ねえお姉ちゃん」

「はい」

「合体の成功率、いくつ？」

「もちろん……………60%です！」

「ちょっと待ったあああああっ！」

メカライオンの口に消えていく姉を全力で引きとめようとするも間に合わず、立ち上がったメカライオンを呆然と見やる。

「何、足りない分は勇気で補えばいいんですよ！」

「お姉ちゃんちよつと冷静に考えてよ！それ本当に命かけていい確率じゃないでしょ！？」

「さあ行きますよ行きますよ。簡単に許可が通るファイナルヒュー
ジヨン！承認！ガ。ガイガー！」

メカライオンから響く声にクリスは慌てて家の中に退避する。
そしてドアを閉め、衝撃に耐えるべく身体を縮め、全力で障壁を張
った。

その直後に庭から連続で鳴り響く謎の爆発音。
また近所の人達に「またレッドフィールド家か……」と言われるこ
とを覚悟しながら、クリスは溜息を吐いた。

『はっちゃけ……てない冷酷シオリン』

『く、来るな！』

パン

『っあああああ！』

『ジヨニー！』

『行くなマイケル！あれは罠だ！』

『しかし！』

ポリポリとポテトチップスを一枚袋から取り、噛み砕く。
隣ではクリスが寝転びながら画面に魅入っていた。

「ねえお姉ちゃん」

「何ですか？」

「確かにこの手足を撃って動けない仲間をいたぶって、敵が出てくるのを待つスナイパーの戦術は正しいけどさ」

「はい」

「お姉ちゃんならどうするの？やっぱり見捨てるの？」

「私レベルになるとスナイプなんて余裕で防御できますから助けますよ」

「いや、そうじゃなくて。助けられない場合どうするの？」

助けられない場合、か。

「撃ちます」

「何を？」

「動けない仲間を」

「……………え？」

「いたぶられるくらいなら一思いにサクッと殺してあげます」

「……………結構シビアなんだね」

「まあ困にするって手もありますが、仲間が拷問されるって分かってて放置はできませんからねえ」

『綾香との通話記録』

「もしもし？」

『詩織ちゃん詩織ちゃん詩織ちゃん！』

「……………何ですか？メイド服は着ませんよ？」

『そんな話してないよ！やばいよ、やばいんだよ！』

「はあ。どうしたのですか？」

『あのね、つい……………』

「……………？」

『ついお父さん倒しちゃっ——』

プッ、ツーツー……ピロロロロ

「はいもしもし」

『詩織ちゃん切らないでお願いだから!』

「アホですか貴方。アホなんですよね。先生を倒すなんてそんな……面倒なことを」

『だよね。あれで大人としてのプライドが高い人だから、目に見えて落ち込んでるし』

「それで何故私に電話を？」

『そりゃあキャバ嬢のごとくお父さんに接待を——』

プッ、ツーツー……ピロロロロ

「お掛けになった電話は、電波の届かないところにあるか——」

『声で分かるんだよ詩織ちゃん!?!』

「黙りなさい。何婚約者を実父に売り飛ばしてるんですか」

『でも詩織ちゃんのことを一番気に入っているのはお父さんなんだよ?..』

「はあ」

『もちろん性的な意味でも気に入って——』

「娘の婚約者に性的な意味でつてやばくないですか？」

『……………おお！』

「今更気付いたんですか！？」

『いくらお父さんでも詩織ちゃんを渡せないよ！』

「先程まで売り飛ばそうとしてましたよね？しかもさっきのセリフから察するに肉欲的な意味で売り飛ばそうとしてましたよね！？」

『気のせい気のせい。仕方ない。この前の詩織ちゃんの裸ワイシャッ奉仕プレイのビデオを——』

「ちよつとそこで待ってる綾香。今すぐお仕置きだ」

『——え。し、詩織ちゃん？男モードというかドＳモード入ってない？』

「くくく……………安心しろ。さて、鞭とロウソクはどこだったかな」

『ひい！？やややややめてよ詩織ちゃん！詩織ちゃん回復魔法使えるからって本当に無茶するんだからっ！』

「そつだな……………確かにＳＭはやりすぎか」

『ほっ』

「認識阻害もあることだし、ペットプレイにするか」

『……………ペッ、ト?』

「裸の綾香にリードをつけて公園を散歩だ。なあに、見られたとしても公園を出たら皆忘れてるさ」

『それ見られてる時は正しく認識されてるよね!? 詩織ちゃん謝るから——』

「あ、リード発見。じゃあ——」そこで待ってるよ綾香」

『い…………いやあああああっ!』

3・5・1 シオリン三変化（後書き）

後半は完全に作者の暴走です。

エロゲ脳とか言われても否定できないくらい暴走してます。

まあ作者はSMとか露出プレイはあんまり好きじゃ——ゲフンゲフン。

羞恥に身悶える女の子はイイと思うけどね！

4 - 1 温度差がはげすい

以下の問いに答えなさい。

『西暦1492年、アメリカ大陸を発見した人物の名前をフルネームで答えなさい』

姫路瑞希の答え

『クリストファー・コロンブス』

教師のコメント

正解です卵の逸話で有名な偉人ですね。コロンブスという名前は有名ですが、意外とファーストネームが知られてないことが多いです。意地悪問題のつもりでしたが、姫路さんには関係なかったようですね。よくできました。

清水美春の答え

『コロン・ブス』

教師のコメント

フルネームはわかりませんでしたか。コロンブスは一語でファミリーネームであって、コロン・ブスでフルネームというわけではありません。気を付けましょう。

詩織「レッドフィールドの答え

『アメリカ・ディスカバリー』

教師のコメント

アメリカがファーストネームの時点で疑問を持ってください。

島田美波の答え

『ブス』

教師のコメント

過去の偉人になんてことを。

「面倒臭いです……」

「お姉ちゃん不登校なんてやめて！」

もう朝だというのに布団から出ないで丸まっている詩織を説得するクリス。

かれこれ一週間は不登校生徒をしている。

まあ無断欠席しても文月学園は重要人物である詩織に文句など言ったりしないのだが。

「もういいんですよ。どうせ私なんて裸を見られるのがお約束のキヤラなんです」

「落ち込むのは分かるけど立ち上がって！」

「……どうせ私なんて」

「お姉ちゃん？」

「パーフェクトもハーモニーもないんですよ……ふふ、ふふふふふふ」

こいつあやべえ。

たまにテンションが高くなっておかしくなる姉だが、ここまでネガネガしているのは初めてだ。

頑なに原因を話そうとしないのでどう慰めていいか分からない。

「綾香さんはこっちに来れないし……どうしよう本当」

結局クリスが詩織を説得して登校できたのがそれから1時間過ぎだったという。

一時間目の授業が終わるチャイムが鳴り響き、ちょうど良かったと詩織は自分の教室の障子を開ける。

「おはようございます」

『……………え?』

「ってなんですかこの雰囲気」

女の子の制服を着た詩織に驚きの声をあげる一同を無視して視線はまっすぐ異様な雰囲気を出している二人へと向かう。

そこには明久と島田美波が付き合いたての男女のようにお互いを意識しあっていた。

「……………レッドフィールド……………いや、詩織か。久しぶりだな」

「はい。お久しぶりです雄二君」

どこか若干の恐怖が見えるのは気のせいだろうか。

「ぬ?雄二。詩織とはいったい誰のこと……………誰じゃ?」

今気付いたのだろう秀吉がコチラを見て固まる。

「んー、自己紹介しておいたほうがいいですかね、これ」

「そうしておけ」

「では。シオ=レッドフィールド改め詩織=レッドフィールドです」

『な、なんだってええーっ!?!?』

Fクラスの面々が『胸が……………』と勝手な評価をするやら『俺の嫁になってくれ』といきなり求婚するだの『ふっ!ふっ!ふっ!』と何故か筋トレでアピールをします。

「合宿所では……よくも人の裸を見たなこの野郎ども」

空気が一瞬で冷える。

詩織の周囲には氷柱が浮かんでおり、物理的な意味でも冷えていたがそれをどうするのかと問い詰めたい。

「——だって、ウチはアキと付き合っているんだから！」

「畳返しっ！！……あれ？」

島田美波が爆弾発言を言い放ち、嫉妬に狂ったFFF団の攻撃を予見した明久が畳で防壁を作る。

が、今の教室は一角を除いて完全に冷え込んでいたので誰もそつちを見ていない。

「……貴方達——私の下僕でいいですよね？」

『イエッサー！』

「私は女です」

『イエス・マム！』

他クラスの人間にも後で釘を刺しにいかなければ。

「そこの下僕A」

「え？俺は須川りよ——」

口答えしようとした瞬間風弾を撃ち込んで沈黙する下僕A。

「その下僕B。朝ご飯まだですからパン買ってきてください」

「今校門しまってるから外に出れな——」

名前で口答えすることはなかったが他のことで口答えする下僕B。
当然風弾で畳の上に転がしておいた。

「その下僕C。分かってますよね？」

「イエス・マム！」

良い笑顔を浮かべて下僕Cは教室から出て行った。

走っていくあたり、ちゃんと立場を理解しているようだ。

「男なんかが存在するからお姉さまが惑わされるんですーっ！」

急に聞こえた声、清水美春は明久を睨みつけながら叫びをあげていた。

「この豚野郎を始末します！そして美春が第二の吉井明久としてお姉さまと結ばれるのです！」

明久も必死になだめようとするも、清水美春は明久の皮を剥いで成り代わるとまでいい出す。

一体何があつたんだこいつら。

「雄二君」

「あ、ああ。何だ？」

「あれ、何があっただんですか？」

聞いてみるとどうやら吉井明久は島田美波なる人物に今朝、キスをされたそうだ。

その話がこじれるにこじれて今に至るという。

「アホですね」

「助けてムツツリーニ！清水さんを止めて！」

そっぴいばムツツリーニがさっきから静かだが、いったいどうした

「……………今、消しゴムのカスで練り消しを作るのに忙しい」

「くそっ！練り消し作ってるフリをして飛び回る清水さんのスカートを目で追ってるムツツリーニなんて大ッ嫌いだ！」

「……………！！（ブンブン）」

ああ、なるほど。

そっぴいことか。

「助けて詩織！」

「二度も人の裸を覗いておいて、よくもまあぬけぬけと……………」

詩織の発言に言葉に詰まった明久は視線を漂わせてからしばらくし

て清水美春を地力で抑えることにしたらしい。

「とにかく豚野郎は消えるべきです！そして美春はお姉さまと結婚して、生まれてくる娘にお姉さまの『美波』から字を取って、『美来』と名付けるのです！」

「待つんだ清水さん！男が生まれたらどうするんだ！」

「男なんかが生まれるのなら『波平』で十分です！」

「そんな、あんまりだよ！」

「二人とも！その前にウチと美春じゃ子供ができないって気付きなさいよ！」

「んー、私の魔法を使えばできますよ？女同士でも」

「本当ですか！？」

「いやまあ、綾香と女同士にも関わらず婚約者なのってその辺が理由ですし。」

「まあ男か女かの片方がいなくなった時に子孫を残す為の秘伝ですけどね」

「それを美春に是非！」

「ちょっとシオ！教えないでよ！絶対教えないでよっ！！」

そもそも魔法なんだから教えても習得できない可能性のほうが高い。

見たところ清水美春の魔力量は平均より若干高いものの、才能は平均そのものだ。

大雑把に言えば召喚獣の動かし方が上手ければ上手いほど魔法の扱いは上手いのだが――清水美春の扱いは平均そのもの。

そういう意味で言えばおそらく学年では雄二が一番才能あるだろう。

「俺が？」

「ええ。私の下で5年も習えば町一つを1時間で壊滅できるくらいにはなりますよ」

「物騒だなおい」

4 - 1 温度差がはげすい（後書き）

意外と雄二が魔法の才能あり設定。

まあ魔法教えるイベントはないんですけどね、ある事情から。

4 - 2 女王

今この授業をもしクリスが見ていたならば、啞然としただろう。そしてこう言ったに違いない。

「お姉ちゃんがくれた……」

と。

西村先生による英語の授業中、普通なら誰もが制裁を恐れて真面目に取り組む授業だがこの時は違った。

「紅茶」

「はいただいま！」

「お茶請けはどうしたんですか？」

「我々の手持ちはポテチだけで――」

「……へえ」

「今すぐ買いに行つて来ます！」

暴君がいた。

詩織と卓袱台を共有している姫路瑞希がひたすら居心地悪そうにしているのが印象的である。

堂々と教室を出て行った生徒に西村先生は視線を送るも何もしいきつとレッドフィールドもストレスが溜まってるのだろつとスルーしたのだ。

「不味いです」

「は？」

「紅茶。ゴールデンルールも知らないんですか？」

「ゴールデンボール？」

「……………握りつぶされたいんですか？」

「（ブンブン）」

絶対零度だった視線がもはや魔眼となりつつある。

その空気の中、隣で明久と島田美波がイチャついている。

姫路瑞希は「どうしてこうなったんですか」と頭を抱えて身を小さくしていた。

「もういいです。ココア買ってきてください。ココアなら貴方みたいな愚鈍でどうしようもない屑でも入れられるでしょうから」

「イエスマム！」

罵倒に対して文句を言わない。

詩織の周囲に転がっているFクラス男子半分の屍が彼らにそれを悟

らせていた。

「……………レッドフィールド」

「何でしょう西村先生」

「そろそろ機嫌を直せんのか？」

「西村先生は年頃の女性の肌がそんなに安いと？」

「むう」

そう言われては何も言い返せない。

あまりもの光景に見かねたので助け舟を出してみたのだが、意味がなかったらしい。

普段が真面目なだけに無理矢理やめさせるのは気が進まないのだ。

「ところで西村先生」

「なんだ」

「清水美春、大丈夫なんですか？」

実は先程清水美春が授業中にも関わらず乱入してきたのだ。

なんか明久と島田美波のイチャつき具合が初々しい恋人レベルに達したのでついでに怒りゲームもマックスに達したFクラスの面々と共に明久を攻撃していた。

そこを西村先生が授業中だからと場を鎮めたのだが、どうも清水美春は納得していないように見えた。

「三角関係で話が拗れると結構酷いことになるんですよ?。」

「まるで体験したかのような口ぶりだな」

「……………」

「すまなかった」

悲痛そうな顔をした詩織の雰囲気になんて耐え切れず謝る西村先生。

「吉井だし大丈夫だろう」

「それは明久君なら大丈夫だろう、か明久君だし大丈夫だろう、のどっちなんですか? 正確には」

「え? それどう違うの詩織?」

「『なら』、だと明久君ならこれくらいの争いは自分で何とかするだろうという信用になります。」

逆に『だし』、なら明久君なんてどうなってもいいだろうという無関心になります」

「はは。鉄人だって先生なんだから当然『なら』じゃ——」

「『だし』だ」

「畜生っ! そういうと思ってたよ!」

休み時間、島田美波な姫路瑞希を連れて教室を出て行き女王様気分を味わっていた詩織はクラスの隅で話し合いをしていた雄二に呼ばれた。

「何でしょう雄二君」

「実はだな……」

急に呼ばれたことに不思議に思っているところやら清水美春が所属しているクラスが試召戦争の準備をしているらしい。

それも合宿で覗きの主導をしていたFクラスを制裁する名目でだ。だがDクラスの目的はともかくそうなった引き金は全て清水美春にあるらしい。

ようするに明久が愛しの美波と仲よさそうで気に入らんということだろう。

「で、何か問題あるんですか？」

「む？大問題だと思うのじゃが」

「……………ミカン箱に戻ってしまう」

はい？

「あの、雄二君」

「何だ」

「この卓袱台ってクラスの出し物で稼いだ金を使って買ったものなんですよね？」

「ああ」

「つまりこの卓袱台はFクラス生徒の私物ですよ。いくら学校側でも取り上げることは不可能では？」

「……」

雄二以外の全員が沈黙する。
ん？雄二以外？

「それでも駄目だ」

「……理由を聞いてもいいですか？」

「俺達の最終目標はAクラスの設備だ。3ヶ月の空白期間は痛い」

「………思うところはありますが、いいでしょう。それで私に何をしてほしいんですか？」

「翔子と秘密裏に契約をしてきてほしい。具体的にはDクラスがもしFクラスに攻め込んだらAクラスがDクラスを攻撃すると――」

「雄二君。分かってて言ってますよね？」

「………やはり駄目か」

「当然です。私は翔子ちゃんの親友です。代表がFクラスに試召戦争で肩入れしているなんて良い結果を招きません」

「詩織、そこを何とかお願いできないかな」

明久が本当に申し訳なさそうに言うが

「すいません。私は雄二君や明久君程クラスの設備にこだわってないんですよ。だいたいDクラスくらいなら私一人でじゅうぶ――」

そういえば一週間近く部屋に引き籠もってたから補充テスト受けてないっけ。

「……………まあ何にせよ、卓袱台は私物です。ミカン箱にならないので私にとって今回の試召戦争はどうでもいいんですよ」

「そうか」

元々雄二も駄目で元々だったようであまりつつこんでこない。

「そんなことより明久君」

「ん？」

「三角関係は本当に舐めないほうがいいですよ。NTRとか余裕ですから」

「ねぬていー…………？」

「三角関係だど？そういえば詩織。昔言ってたお前の婚約者ってい

「うジャンはどうし——」

「ゆづじ、くん？」

「.....なんでもない」

4 - 2 女王（後書き）

女王シオリン降臨。

クリスの感想の通りグレてるだけです。

そのうち元に戻ります。

まあ今回でFクラスのサブメンバー達との上下関係が出来上がった感があります。

作者はNTRが大嫌いです。

ドロドロしたのはちよつと……と思ってる人なので、あからさまなのは嫌いなのです。

そしてシオリンが実は……？なフラグをたてておきました。

4巻読んだ時から思ってたんですけど、この時点でのFクラスの卓袱台って売り上げで買った私物ですよ？

なのにクラスの設備が下がる云々って話、正直原作者のミスだと思うんですよ。

雄二だって卓袱台を買った本人ですからそれに気付かないはずありませんし。

4 - 3 ホント、調理室は地獄だぜ

以下の状況を想像して質問に答えなさい

『あなたは大好きな彼と二人きりで旅行に行くことになりました。ところが飛行機に乗っていざ出発、というところで忘れ物に気が付きます。』

さて、あなたは一体何を忘れたでしょう？』

姫路瑞希の答え

『頭痛薬や胃薬などの医療品』

教師のコメント

これは『あなたが好きな人に何を求めているか』についてわかる心理テストです。忘れ物はあなたに欠けているものを表し、忘れても気が付かず出発してしまったということは、一緒にいる彼がそれを補ってくれるとあなたが考えているからなのです。どうやら姫路さんは好きな人に安らぎを求めているようですね。

詩織「レッドフィールドの答え

『武器』

霧島翔子の答え

『手錠』

教師のコメント

忘れ物の前に、持って行くとする時点で間違っています

工藤愛子の答え

『下着を穿はいていくこと』

教師のコメント

あなたは好きな人に何を求めているのですか

あれから明久達は何やらゴチャゴチャしつつ、昼休みになると屋上へと向かっていった。

台本がどのとか言っていたが……何のことだろうか。

「美味しそうだねそれ」

「食べますか？」

「うん。……だけど惜しいなあ本当。キミが男の子だったら食べちゃいたいんだけど」

Fクラス主要メンバーが緊迫した雰囲気曝しだす一方、詩織はAクラスで優雅にお弁当を食べていた。

工藤愛子なる人物と木下優子という人物達と仲良くなり、翔子と彼

女らとの4人で昼食をとっていた。

「そつえばそつちはいいの？」

「何の話ですか？優子ちゃん」

「Fクラスのこと。DクラスだけじゃなくてBクラスからも狙われてるみたいだけど、詩織は大丈夫なの？」

「いいんじゃないですか？」

「投げやりだね……」

まああれで雄二は中々の策士だ。

DクラスとBクラスを試召戦争で下したその実力は伊達ではないだろう。

「そつえば翔子ちゃん。あれから雄二君とは進展しましたか？」

「……………まだ」

本当に雄二は翔子の何が不満なのだろうか。

こんなに可愛いのに。

「そつえばキスがどのとか雄二君が愚痴を言ってきたんですけど、何したんです？」

「……………寝てる間にキス——」

「はあ」

「しようとしたけど、できなかった」

何だよ今のタメとつつこみたいが翔子のやることに一々つつこんでいる時間がいくらあっても足りない。

「じゃあファーストキスはまだなんだね」

「そういう愛子はどうなのよ？」

「ボク？そりゃあ……数え切れない程——妄想でならあるよ」

でしょうねえ。

愛子は口では結構過激なこと言うが実は男性経験皆無だ。

直接聞いたことはないが、明らかに男慣れした感じではないので間違っていないと思う。

「私は興味ないわね。詩織はどうなのよ」

ふと優子に聞かれてどう答えたものかと考える。

「ふむ。既に二度すませてあります」

「ファーストで二度って何！？」

「詩織もボクと同じで妄想で？」

「いえ、リアルです」

前世と現世です。

「……………最初のほうは、どんな？」

「そうですね……………」

本当の意味でのファーストキスは前世の……………どれだっけ。
確か……………

「ついムラツときて暴れる幼馴染の唇を無理矢理——」

「妄想だよね！？それ妄想なんだよね！？ボク警察呼びたくないよ？」

「まあ誤解と嫉妬で泣きながら暴れる幼馴染を押さえつけてですが、その後はベッド直行です」

「……………男らしい」

そりゃあ前世は男ですし。

「さすがに聖剣で左手を細切れにされた時は死を覚悟しましたがけどね」

「……………詩織、妄想だよねそれ？」

愛子が汗をたらりと流しながら質問していたのが印象的だった。

弁当を片付けた詩織は翔子達に別れを告げて一人校舎を散歩していた。

お昼御飯は普段はFクラスの教室で食べるのだが今日は翔子に呼ばれたので行っただ。

曰く料理の出来を見て欲しかったらしい。

詩織としては前回見たときより上達しているのが分かったので、このままいけば雄二も堕ちるだろうと言っておいた。

「……………」

廊下を歩いていると不審な二人がどこかの部屋を覗いていることに気付く。

不審な二人というかもろ明久と雄二だった。

「どうかしたんですか？」

「む、詩織か」

「ししし詩織！解毒の魔法とか持ってない！？」

いきなりアンチポイズンな魔法を要求された。

囁き声だが、いったいどうしたんだろう。

「何を言っているのか分かりませんが、毒といっても色んな種類があるんですよ？例えば痺れ毒の類の解毒魔法をとある魔法薬にかけたら術式が干渉しあって周囲の魔力を根こそぎ——って」

『えーっと……まずは、ココアの粉末をコーンポタージュで溶いて』

「……………」

3人が扉の前で沈黙する。

ここは調理室で、中では姫野瑞希が何やら不可思議なものを作っているようだ。

「ねえ雄二！彼女は何を作っているの！？いきなりゼリーから遠く離れた何かになっているような気がするんだけど！」

「静かにしろ明久。姫路に見つかるぞ」

「……………」

ガラッと音をたてて開けた扉を潜る。

するとそこには驚いた顔をした姫野瑞希が二つの食材を手にしていた。

「レッドフィールドちゃん？」

「詩織でいいですよ瑞希ちゃん。で、それは何なんですか？」

「あ、はい詩織ちゃん。オレンジとネギのどっちを入れると明久君が喜んでくれるか迷って……………」

「……………何を、作るんですか？」

「え？ゼリーですけど」

見て分からないの？とも言いたげにボウルの中身を見せる。
既にココアの茶色とポタージュの黄色であんまりな色になっていた。

「……………ネギオススメです」

「そうなんですか？」

「はい。明久君はネギが大好きです。いつかお金持ちになったら一日三食ネギ料理を食べるんだと語っていましたから」

もちろん嘘っぱちである。

覗きの主犯である明久なんて謎の料理を食ってしまえばいいんだ。ちなみに扉の外から詩織達を止めようとする明久とそれを抑える雄二がいた。

「じゃあふんだんに使いましょう。あとは、隠し味にタバ——」

『これ以上は聞くな明久。食えなくなるぞ』

『待つて！せめて最後に入れられたのが『タバコ』なのか『タバスコ』なのかだけでも確認させてよ！』

というような声が聞こえたが詩織は結界で完全に調理室と外との音を遮断した。

「スコを使おうと思うんです。これで喜んでもらえますよね！」

（明久君。普通に考えて瑞希ちゃんは高校生なんだからタバコなんて持つてゐるはずないでしょう）

そういえば雄二もなんでそれに関して弁明しなかったんだろう。まるで瑞希が普段から危険物を手にしてそれを材料に料理を作ってるみたいじゃないか。

そんな非現実的な——と詩織は思っものの、詩織こそ非現実な代表
だということを忘れていた。

4 - 3 ホント、調理室は地獄だぜ（後書き）

屋上についていつて告白の演技に詩織を加えようかなと思ったんですけど、今のシオリンはそんな芝居に付き合うほど明久に対して機嫌が良くないので却下しました。

そんなわけでBクラスの怪しい動きと、屋上での偽装恋人イベントはマルマル飛ばされました。

シオリンは瑞希の料理の恐ろしさを知りません。
せいぜい材料を選ぶセンスが致命的になくて不味い料理を作るくらい
の認識です。

そろそろ不定期更新になるかもしれぬ。

4 - 4 ゼリーの行方、そしてFクラスの行方

「はあ。家の決まりですか」

「はい。家訓で学生時代に一度は男装すべきだと」

呼吸するかのようにあまりにも堂々とした詩織の嘘は変な説得力があった。

この場限りしか誤魔化せず、家に帰ってからよくよく考えればどう考えてもおかしいのだがこの場を凌げば勝ちなのだ。何に勝つのは知らないが。

「ところで瑞希ちゃん。この豚肉はどうしますか？生ですけど入れます？」 作ってるのはゼリーです

「そうですね……男の子なのでやっぱりお肉のほうがいいですね」

「それならコーラも一緒にいれましょう。何かお肉が柔らかくなるとか聞いたような聞いてないような……まあどっちでもいいですね」

どす黒い色になり始めたボウルの中身にトプトプとコーラを投入する。

シュワシュワと炭酸がはじける音がするが、ボウルの中身とあわせればそれはまさに地獄の釜の音。

「後は……何いれたらいいと思いますか？」

「後は固まるようにゼラチンを投入……固める時間が面倒なので魔

法でポイポイツと凝縮して固めちゃいましょうか」

「便利ですね魔法」

「ちちんぷいぷい」

あえてふざけた詠唱でボウルの中身を凝縮させる。
デデーンとバックにつきそうなそのゼリーは、某ティルズなグミの
如く食えば即死効果をもたらすだろう。

「少し多くなりましたね……これどうしますか？」

「私がいくつもらいましょう。後はFクラスの数人にあげますか」

「はい」

「……………とりあえず家に帰ったら綾香に食べさせてみますか」

「何か言いました？」

「いえ、何も」

ワイワイとゼリーカップと氷を入れた袋を持って瑞希と共にFクラスへ向かう途中、雄二と明久がいることに気付く。
今日はよく二人に会うなと思いをかけようと――

「気にするな。姫路の料理を選んだのは俺の趣味だ」

「……………」

ひょっとして雄二は自殺志願者なのだろうか。

「え？坂本君、私の料理が好きなんですか？」

ああ、やつちゃったと天を仰ぐもののどのみち雄二にも渡す予定だったのでそのまま話を進めることに。

「ひ、ひめ、じ……？」

「良かった。そう言ってもらえると嬉しいです。けど、霧島さんに聞かれたら怒られちゃいますよ？」

「私は翔子ちゃんの味方ですけど、今回は報告しないでおきましょう。……………しなくてもお仕置きになりますし」

「は、はは、は」

頬を引き攣らせて無理矢理笑う雄二に明久が一言。

「ウェルカム（グッ）」

「てめえ、そのムカつくほど爽やかな笑顔はなんだ……！」

「本当に仲がいいですねお二人ともー」

詩織の棒読みに雄二が忌々しげに明久と交互に睨みつける。
そして瑞希は十分に量を余らせているゼリー袋を見て

「坂本君の分もありますので、良かったらどうぞ」

「……………。そ、そうか。すまないな。後で腹が減った時にでももらおう」

「ぼ、僕もそうするよ。姫路さんありがとね。そして詩織は滅びればいいんだ……………」

「いいえ。これくらいお安い御用です。あと最後何か言いました？」

「いや、なんでもないよ」

明久君……………その態度はよろしくないんじゃないだろうか。
ちよつと立場というものを分からせなければいけないようだ。

「んじゃ、行くぞ明久。ムツツリーニ」

「了解」

「……………わかった」

「御三方、待ってください」

「……………」

詩織のオーラが黒くなったのを感じたと同時に逃げようとした3人を引き止める。

「ゼリーが3人では食べきれないほどあると思いますが……くれぐれも他の人に全部食べさせないようにしてくださいね」

「あ、ああ。もちろんだ」

「ちなみに呪いをかけましたので、今日の夕食前までに最低一つは食べないと……」

「……」

「クスツ。行きましょうか瑞希ちゃん」

「あ、はいわかりました」

「……ちょっと待て！ いったい何の呪いをかけたんだ！？」

あれから戦々恐々としている雄二達をニコニコ見ながら過ごすこと数時間。

休み時間の合間合間にE・D・Cクラスと順に男子達に立場を分かってさせるために周っていた。

Bクラスへは放課後になるが……そこまでやる気はないので明日でもいいだろう。

ちなみにAクラスへは既に昼休みに釘を刺し終わっている。

「ん？」

苦手な日本史の教科書をじっと見詰めていてふと誰かが出て行く音に振り向くとそこには雄二を連れて出て行く翔子の姿が。いったいどうしたんだろうか。やけに慌てた様子だったが。

「詩織」

「さ……なんですか明久君？」

「ちょっといいかな？」

さんをつけるよこのデコ助野郎と言いかけた詩織だが、真剣な顔をしている明久に何かを感じ取って態度を改める。

「実は……」

明久が今までの経緯を話し、秀吉とムツツリー二がそれに付け足すようにフォローする。

どうやらBクラスが攻めてこようとしているので準備時間を設けるためにもDクラスを激昂させて試召戦争を起こさせようとしているらしい。

その為にも清水美春を怒らせるために明久は島田美波と付き合うフリをしていたという。

そしてDクラスとの話し合いの場を設けたはいいがBクラスの陰謀でFクラスの頭脳である雄二が帰ってしまったと。

「……………しかし気に入りませんね」

「へ？」

「人の不幸を捏造して噂を流すなんて、心優しい翔子ちゃんを馬鹿にしています」

またお前か根元。

立場を分からせる必要が一番あるのはどうやらBクラスだったようだ。

しかも――

「そして貴方もです明久君」

「僕？」

「…………… 自覚なしですか。まあいいです。どうせ思い知ることになるでしょうから」

正直な話、今回の明久の行動が詩織は気に入らなかった。

女の子がキスまでしたというのにやったのは『付き合ってるフリ』なんて相手を馬鹿にしたことだ。

誤解で云々はまあ仕方ないとしても明久は島田美波に大して誠実に答えるべきだった。

誤解とはいえキスまでしてくれた女の子にそんなことを要求する明久が気に入らない。

「…………… 今回は騙された雄二君に変わって交渉の場に同席してあげます。Dクラスを怒らせればいいんですね？」

「うむ。まああまり乗り気ではないみたいじゃから、程々協力してくれれば嬉しいのじゃ」

4 - 4 ゼリーの行方、そしてFクラスの行方（後書き）

今回シオリンが明久に対してちょっと厳しめです。

第三者から見たらこの明久の行動って結構最低だと思うんですよ。
まあ本人は真面目なんですけど。

お茶を濁す超番外編を書こうかなと思って活動記録のほうでアンケート出してみましたけど誰も見ないだろうからこっちに書いておくことに。

fat eみたいに何か詩織に介入して欲しい作品があれば感想でもらえれば書くかもしれません。

まあ既にISは書きちゃったんですが。え？原作読んだことありませんよ？

あとこれもアンケートかもしれないけど、10万PV記念何がいいですかね？

詩織の前世話が幼少時の話がクリスマス幼少時視点か一章と二章の間で省略したバトル部分を書こうか迷ってるんですが。

他にも「こんなの書けよ」とかあったら感想もらえると書くかもしれません。たぶんですが。

4・5 交渉と見せかけてフルボッコ会（前書き）

今回殆ど原作通りです。

ちらちらつと詩織の考察が入ってる程度なので、原作知ってる人とかは読み飛ばしても実は平気な回だったりします。

あえて言うなら詩織が明久をどう思っているか、くらいでしょう書かれているのは。

4 - 5 交渉と見せかけてフルボッコ会

放課後、空き教室の前に立つ詩織の隣には明久と秀吉と島田美波がいた。

Dクラスとの交渉の場——相手を上手く怒らせて試召戦争に持ち込ませなければいけない。

Fクラスは試召戦争を起こす挑戦権を失っているのでDクラスに挑戦権を使わせようということだ。

「待たせたね」

明久が空き教室の扉を開けると中にはDクラス代表の平賀と清水美春が椅子に座って待っていた。

というか明久、ひょっとしてそれで挑発してるつもりなのか。まさか相手より遅く着いたことに形だけの謝罪することが挑発に繋がるとでも？

確かに時間につるさい相手ならそれも有効かもしれないが、そんな人物は普通交渉の場につかない。

つかせてもらえない、が正しいのだが。

「お姉さまっ！お会いしたかったですっ！」

「美春！？ちよっと、暑苦しいからひつつかないでよっ！」

ふむ。

ここで交渉の場でありながら——とか繋げて罵倒してもいいが、それがFクラスそのものを叩き潰す云々になるかは微妙だ。

というか清水美春は現在の状況ではまず間違いないし、この前上下関係を分からせたばかりの平賀も大して反応はないだろう。

「とにかく離れなさいっ！」

明久が目の前にいるにも関わらず猛烈なアピールをしている清水美春を強引に引き剥がす島田美波。

先程から一度も明久を罵倒していないし、存在すら忘れていような感じがする。

これは……

（なるほど。もう吉井明久は眼中にない、ということですか）

これはもう無理。

清水美春を怒らせたところで宣戦布告まで行くことはない。

そう悟った詩織は目線で何かを訴えている明久から視線を逸らし、興味なさそうに窓の外を見始めた。

「清水よ、そこまでにしておくのじゃな。島田は明久の恋人じゃ。むやみやたらと手を出すでない」

（んー……秀吉君。そういう忠告は明久君が言うべきであって……自分から島田美波と明久君は恋人関係じゃないって言ってるようなもんですよ？）

一見すれば明久が言い出せないことを見かねた秀吉が変わりに言つたと取れるが、それはありえない。

何故なら島田美波がそのことを言い出さないからだ。

もし本当に明久と島田美波が恋人ならば島田美波はここぞとばかりにその関係をアピールして清水美春を引き剥がすだろう。

だからこそ二人が恋人だというのはありえない。

もしここに雄二がいたならば秀吉を連れてきたことに頭を抱えてい

るころだろう。

「何をふざけたことを言ってるのです？お姉さまとその豚野郎の間にはなんの関係もないことくらい、お姉さまの顔を見れば一目瞭然です」

清水美春が島田美波を本気で好きならばそれは当然の結果だ。
好きな人だからこそ分かることがあるということだろう。

「それは……」

「だいたい、その豚野郎がお姉さまに相応しいとは思えません」

確かに今回はちよつとどうかと思う行動が目立つ明久だが、それはさすがに早計ではないかと詩織は思った。

明久は馬鹿だ。

馬鹿すぎてこいつ本当に将来どうすんだと不安になるくらい馬鹿だ。しかし馬鹿だからこそ、明久はこつまで愚直に進めるのだ。

ただの馬鹿なら救いようがないが、こついった馬鹿はそれを長所とするとすくある。

もしも明久に恋人が出来ればどこまでもその人物を真つ直ぐ愛することができらるだろう。

それくらい素直な馬鹿なのだ。

「そりゃ、僕は勉強も出来ないし部活もやってないけど」

そついう問題じゃない。

明久の馬鹿は確かに長所となる時もあるが、短所となる時もあるのだ。

今がまさにそれだ。

「勉強？部活？違いますね。美春が言いたいのはそんなことじゃありません。それ以前の問題です」

そう、恋愛においてそれは『言い訳』にすぎない。

「美春は前々から二人の関係を見てきましたが、その豚野郎の態度は最悪です。同じクラスの姫路さんに接する態度とお姉さまへの態度があまりに違いすぎます」

確かにそうだが、それは違う。

明久はただ二人を同じに扱っていないだけだ。

馬鹿だから明久はどっちも大事と思っているに決まっている。

だが詩織は決して変わって弁明する気はない。

それを詩織が言ったところで何になるのだ。

これは明久が撒いた種であり、清水美春のように端から見れば確かにそれは区別していたのだから。

「姫路さんには優しく気を遣い、まるでお姫様を相手にするかのような態度。それに大してお姉さまへの態度はどうです？全く気遣いもなければ、異性に対する最低限の優しさすら見れないじゃないですか」

「……………それは、まあ」

「詩織！？」

まさかの味方からの追撃に秀吉が驚きの声をあげる。

「はつきり言えばその豚野郎はお姉さまの魅力に気付いていない

どころか、何の気も遣わずに男友達に接するような態度でお姉さまに接している大馬鹿野郎です。そんな男がお姉さまに相応しいかどうかなんて、容姿や学力以前の問題です。それに――」

一旦言葉をくぎり、止めを刺すかのように清水美春は言った。

「演技とは言え『好き』とまで言ってくれたお姉さまを放って姫路さんを追うなんて、普通は考えられません。もしかして、お姉さまのことを男だとも思っているんじゃないですか？」

「――っ!!」

島田美波は清水美春の言葉に耐え切れず出て行った。
というか明久よ、そんなことまでしてたのか。

「美波!？」

「追ってどうするんです？また男友達に接するように乱暴な言葉でもかけるんですか？そうやって更にお姉さまを傷つけるんですか？」

そうでもない。

今明久が島田美波に追いつき、本気で慰めたとしたら関係はどう転ぶか分からない。

だが分かることは――明久にとって島田美波は本当に大切だということだ。

馬鹿だからそれ以上のことは本人にしか分からないが、それだけは確実だ。

「明久。島田はワシと詩織が追おう。今お主が行っても逆効果じゃ」

「お断りします。私には彼女に投げかける言葉がありません」

「……………そうじゃな。では行ってくる」

あまり接点のない詩織が慰めても惨めになるだけだろう。

「……………よくわからないけど、俺ももう行っていていいんだよね？こんなんじゃない謝罪どころの話じゃなさそうだからな」

そして平賀は気まずそうに秀吉に続いて空き教室から出て行った。むしろここからが本番だと詩織は思っていたのだが、代表である彼が出て行ったのならばお開きが妥当か？
そう思案していると清水美春が明久にトドメを刺すべく宣言した。

「この話し合いに何の目的があつたのかは知りませんが、美春はもう貴方を恋敵として認めるようなことはありません。お姉さまの魅力に気付かず、同性として扱うだけの豚野郎に嫉妬するなんて、時間の無駄ですから。……………お姉さまの魅力がわかるのは美春だけです」

ああ、終わりですか。

詩織は一人そう呟いて清水美春と共に席を立った。

この空き教室に入った時から感じてたように、やはり無駄だったのだ。

それでもここに留まっていたのは明久が何かをするんじゃないかという期待からだった。

この馬鹿なら青臭い青春ドラマみたいなセリフを吐いて上手いこと挑発してくれるんじゃないだろうかと思つたのだ。

だが詩織の想定は外れたようだ。

つまり明久は本当に島田美波に異性を感じていない。

「島田美波も哀れですね……」

清水美春も同意見なのかそのセリフに反応し、何かを言いかけたが結局は口を閉ざした。

しかし――

「ちょっと待って、清水さん」

詩織が扉から出た直後、明久の声が聞こえた。
この状況において何を言うつもりだ。

「………まだ何かあるなら、私も聞きましょうか」

「詩織？」

「……………」

まあ、失望させないで欲しいですね。

4・5 交渉と見せかけてフルボッコ会（後書き）

ヒーローはピンチから盛り返すものです。

前話で詩織が思っていたことは半分くらい清水美春が言ってくれました。

さすがに男云々とまでは思ってますが、なんでこの扱いで島田美波が明久のことを好きなのか前々から疑問には思っています。

「本当に何があっただんですかこの馬鹿は」って感じで。

島田美波が好きな人ならば、清水美春のように思うのは当然のことでしょう。

あれ？それを考えたら清水美春が明久にしていることって当然のように思えてきた。

4 - 6 複製思考

以下の状況を想像して質問に答えて下さい。

『あなたは今、独りで森の中で道に迷っています。』

明かりもなく暗い森の中を進むと、あなたは湖のほとりに小さな小屋を見つけました。これ幸いと中に入るあなた。すると、そこには椅子とベッドと肖像画が。さて、その肖像画に描かれている人物の特徴は？頭に浮かんだものを3つ挙げて下さい』

姫路瑞希の答え

『 1 ・ 楽しい表情

2 ・ 優しい瞳

3 ・ 明るい雰囲気』

教師のコメント

これは『あなたの好きな人の特徴』についてわかる心理テストです。暗い森はあなたの不安を表し、そんな時に見つけた小屋の中にある肖像画は『あなたの心を支えてくれる伴侶』を表します。

どうやら姫路さんの好きな人は温和で明るくて楽しい人そうですね

詩織Ⅱレッドフィールドの答え

『 1 ・ 白い髪の毛

2 ・ 赤い目

3 ・ 柔らかな雰囲気』

教師のコメント

レッドフィールドさんには婚約者がいるらしいですね。

その人の特徴と一致しましたか？

清水美春の答え

- 『 1 ・ 気の強そうな目
- 2 ・ 男らしい胸
- 3 ・ ポニーテール 』

教師のコメント

最後の一つがおかしい気がします。

島田美波の答え

- 『 1 ・ 折れた指
- 2 ・ 捻じ曲げられた膝
- 3 ・ 外された手首 』

教師のコメント

全部おかしい気がします。

『 我々Dクラスは、 Fクラスに対して宣戦布告を行う！ 』

Dクラスからの使者がFクラスにそう告げてすぐに出て行った。
詩織は予想通りの展開にクスリと笑い、不思議そうな顔をしている
雄二達を見る。

そして困惑顔で秀吉が明久に挑発は成功したのかと聞くが慌てたように誤魔化されていた。

「……………のう詩織。明久は何をいったのじゃ？」

「ひひひひ秀吉！」

島田美波を追わないでその場に残った詩織なら、何か知ってるかもしれない。

そんな思惑で聞いた秀吉に明久が慌てて人差し指を唇にあてて詩織にアピールする。

「秘密です」

「ほっ」

まるで辺りに幸せを振りまくかのようにニコニコしている詩織はかなり胡散臭そうに見えるが、そこから読み取れるものはなにもない。演劇で鍛えている秀吉もその完璧なポーカーフェイスに追及を諦めて作戦会議に参加した。

内容はまず戦力の確認。

Fクラスは色々な理由があり合宿から補充テストを受けていないので点数があまりない。

そこで今の戦力を把握する為にFクラスの面々は渡された紙に自分の残り点数を書いていくこととなった。

明久がそんなことするより一刻も早く補充テストを受けて戦力を整えるべきじゃないかと問うが、雄二はそれに否を出す。

確かに元々Fクラスが補充テストを受けてないことは把握されているようだが、今回の戦いはこちらに完全にフリな状態からのスタートだ。

こちらの戦力が万全でないのは向こうも分かりきっているので普通なら最初に全兵力で持って叩き潰してくる。

だからこそ相手に全軍突撃という司令を躊躇させなければならぬのだ。

「例えばですね明久君。ポーカーで降りられない勝負になったとします。ですが手札がブタの時、どうしますか？」

「おりられないなら……強気でハッターをかます？」

「そうです。完全に不利な状況でのスタートですから、今回Fクラスが勝つには心理戦が最重要なんですよ」

まあもつとも雄二が勝つことに拘っているのかは微妙だが。

「……………」

「どうかしましたか雄二君」

「いや、やけに協力的だなと思ってな」

「あら、そういう認識でしたか」

まああながち間違っではないない。

詩織が雄二達に積極的に協力するのは今回が初めてだ。訝しまれても仕方がないといえよう。

「今回はこの『物語』の行く末が気になりましたから。その末席に座るくらいはいいと思えただけです」

「物語だと？」

「はい。明久君がどのように決着をつけるか、のですね」

「……………もうすぐ時間」

ムツツリーニの報せに雄二は少しだけ詩織の表情を読もうとし、すぐに指示を出し始める。

雄二からの演説が終わり、開戦時刻の9時丁度となると同時にFクラスメンバーが渡り廊下を死守せんとクラスを飛び出していく。しかしその中で詩織は動かない。

その隠し切れない好奇の視線は明久と島田美波に向けられていた。

「ふふふ」

雄二が詩織の笑みを見て「何だこの悪女は……………」と呟くがそっちは無視。

明久が何とか島田美波と話そうとするも余計に島田美波の機嫌が悪くなってそのまま出て行った。

馬鹿だなあ明久は。

怒ってる女の子への対応の仕方がなっちゃいない。

特に世間話から始めたり探りを入れたりするのはタブーだ。

そのどちらもコンプリートした明久は、島田美波に怒られて去られても仕方ないだろう。

「うん……」

「駄目でしたね」

「詩織？」

「はい。怒ってる女の子に世間話から入ったりしたらイライラされるだけです」

「……………そうなの？」

「そうなんです。あと怒ってるって分かってるのにそれを聞くなんて馬鹿にしているのかと思います。明久君、原因は貴方だって分かってるんですよ？」

「……………うん」

「忠告はしましたが、仲直りする気はあるようなので説教はしませんが。とにかく今は防衛しましょうか」

明久が返事をする前にクラスを出て行く。

その時に雄二の心底胡散臭そうな視線が見えたのは気のせいだろう。

予想通りどんどん消滅していくFクラスの面々に優勢だがどこか探るよつに戦っているDクラス。

ふと辺りを見回してみると瑞希がいなかった。

Dクラスは瑞希に煮え湯を飲まされた面々なので必要以上に警戒心を起こさせるためだろう。

となると今いるメンバーで足止めしなくてはいけないのか。

「サモン試験召喚」

やられそうになっていたFクラス男子と交代するように召喚。

対して相手側は舌打ちをしてこちらを見て、そして顔が恐怖に引き攣った。

まあ上下関係は刷り込んでおいたので当然だろう。

「お、お前はレッドフィールド！」

「……………？どなたでしょうか？Dクラスの男の子としか記憶にないんですけど、どこかでお会いしましたっけ？」

「前の試召戦争で俺と戦っただろ！？」

……………

「？」

「心底分らないって顔をするな！ま、まあいい」

『Dクラス 笹島圭吾 VS Fクラス 詩織』レッドフィールド
総合科目 1427点 VS 0点』

「ふむ…………」

「知ってるんだぞ。レッドフィールドは姫路さんに続いて要注意人

物だからな。だから補充テストを受けていないのは知っている」

そして彼だけでなくFクラスの面々を消滅させたDクラスメンバーが詩織の召喚獣を囲った。

要注意人物をここで落とすという決意だろう。

「詩織！」

「明久君、ご心配なく」

そして詩織は点数全てを開放し――

「今日は本気でいきますから……プラスターシステム、リミットオーバー」

『Dクラス 笹島圭吾 VS Fクラス 詩織Ⅱレッドフィールド
総合科目 1427点 VS 328点』

召喚獣の杖をひゅんひゅん回してから構えた。

撃たせる前に倒す、Dクラスはそうするべく囲った数人を一気に飛びかからせた。

詩織Ⅱレッドフィールドが召喚大会において見せた数々の戦いから導き出しされた欠点を突くのに有効な戦術だ。

今までの詩織ならまず間違いなく一人を落としてそのまま負けていた。

「アクセルシューター」

その言葉に反応して出てきた光弾は六。

そして――

「デイベインバスター」

さらに砲撃が召喚獣を貫いた。

柔をもって剛を制す。

杖を巧みに操り相手を転ばせ、倒れたところにデイベインバスター。その隙に飛び掛ってくるものは待機していたアクセルシューターが膝や手などの部分を狙う。

それによって召喚獣は転んだり武器を落したりしていた。

「それは二つ同時に使えないんじゃないのか!？」

まさかの反撃にどう動くべきか戸惑った召喚獣の足元にアクセルシューターを打ち込み、体勢が崩れたところにデイベインバスターを撃つ。

時には相手に近寄り、杖で殴りかかりながら0距離デイベインバスターを放つたりと非常にアグレッシブだ。

「NOです。普段は使いません。シングルタスクでは無理ですからね」

「じゃあ何故!？」

「企業秘密です」

以前クリスにマルチタスクは使えないのかと聞かれたことがある。その時詩織は使えないと答えたが、実はそうでもないのだ。

何事にも裏技があり、魔法戦闘の術に長けた詩織しか使えないような代物だが、確かにそれはあった。

即ち——自我のコピーによる複製思考。

思考力を割くのではなく思考を複製する完全なマルチタスク。

前世で魔王をしていた詩織の究極技法であり、詩織が最強クラスであつたのはこれの恩恵によるものがかなり大きい。

「デイベインバスター」

いくら点数差があろうとデイベインバスターは攻撃力という観点から見ればチート臭い代物だ。

効果：貫通とかついてそうなスキルで、急所に直撃さえすれば点数に関わらず消滅させることが可能だろう。

少なくともデイベインバスターが直撃して倒れない点数というのを詩織は想像できない。

「さて、明久君は行ったようですね……」

思考の一つを割いて遠見の魔法で明久を監視する。

もはや魔法の無駄遣いだが、詩織はこのために今回の試召戦争に参加しているのだ。

「っ……」

一瞬遠見の魔法に多くのリソースをふってしまい、慌てて手直する。

複製思考のデメリット——それは自我の在り所だ。

この魔法はミスしてしまえば複製された思考の中に自我を埋没させ、魔力が切れると同時に複製思考と共に自我が消えるという最悪の結末が待っている。

それに魔力の消費が本当にやばい……詩織の魔力量は転生前と比べて大幅に減少している。

複製思考の魔法が自発的に切ったのではなく魔力切れで切れたのならどんな不具合が起きかわからない。

ある意味命懸けなのだが、それほどに明久の行動が気になったのだ。

「アクセセルシューター」

当たった光弾が全て消えたのを確認すると同時に新たな光弾を生成する。

シングルタスクならば大雑把な操作しかできなかったが複製思考によって完全なマルチタスクを持つ詩織には関係がない。

一つ一つの光弾を歴戦の魔王であった詩織が制御することによってそれは恐ろしいファンネルもどきとなる。

「ま、そろそろ終わりそうですね」

遠見の魔法からは明久と清水美春の一騎打ちが見えた。

この試召戦争ももうすぐ終わりだろう。

だから

「最後に派手にいきますか、ね！」

4 - 6 複製思考（後書き）

自我の複製って設定、結構考え付く人多いと思います。

まあうちのシオリンのほうの場合はそれに命懸けが付与されちゃいますが。

もうこの状態のシオリンは「呂布が出たぞー！」な感じです。

この状態と同じ点数をもった明久ですら瞬殺するので、詩織の本気具合がわかりますね。

たぶん次で4章最後かな。

4・7 結末、そして結果（前書き）

今回微妙な伏線を回収したつもりだけど、何かごちゃごちゃになってるかも。

所々に後付設定があるからそのせいだろうなあ……。

4 - 7 結末、そして結果

やはり、というべきか。

明久は清水美春に吼えてくれた。

あの時の発言は嘘ではない、本心だと。

その後雄二達が明久に攻撃し、ここにいないメンバーと瑞希以外の全員が肅清することによって停戦を持ちかけた。

もともとDクラスにとっては益のない戦いだ。

開戦派の筆頭であった清水美春の戦う気がなくあんなれば速やかに停戦は行われるだろう。

「ふふふ」

「……あなたは楽しそうね」

「はい、とてもとても楽しいですよ。やはりというべきか、運命の申し子を見つけましたから」

島田美波は理解できないその言葉に首を傾げ、撤退していくDクラスを見届けてから詩織に向き合った。

「ありがとね。危ない所を助けてもらって」

「いえいえ。同じFクラスじゃないですか。礼は不要ですよ……美波ちゃん」

「同じクラスでも礼くらいは言うわよ。で、シオ。どという風の吹き回しなの？」

シオ——詩織であることが露見した今でも詩織のことをそう呼ぶ人物は文月学園では一人しかいない。

実は島田美波はかなり初期の頃から詩織が女であることに気付いていた。

どうやら先天的に間接作用系の魔法が効きづらい体質のようだ。

間接魔法とは呪いや思考操作、精神攻撃の類のようなものだ。まあ男と見せていた詩織を女と見破っていたので最初は屋上に呼び出してかなり脅し的なことをした。

魔法で槍を作り喉下に突きつけたのだが、美波は怯えるだけで何もなかったたので魔法で徹底的に身体をスキャンしたら魔法使いでないことが判明。

土下座する勢いで謝り、事情を話して黙っててもらうことで今に至る。

表立っての交流はなかったがメールでちよくちよく連絡はしあっていた。

まあそれも明久に関する愚痴みたいなもので、友達というには少し薄いかなと詩織は思っているのだが。

接点がないから美波にかける言葉がないと交渉の時に秀吉に言ったものの、事実は後半のみだ。

あの時詩織が追って美波にナニを言えればいいというのか。

あの時点で詩織には清水美春の言葉を否定するだけの材料を持っていなかったのだ。

それにあの夜に泣きながら滅入っていた美波が電話をかけてきてずっと話を聞いていたので、あの時は一人にしてあげたほうがよかったのだろう。

そもそも詩織が「気に入らない」とまで言うのはよほどのことだ。

詩織の性格ならば気に入らない相手はただ評価を下げるだけでわざわざ口に出してあげるなんて親切はしない。

詩織は『美波が蔑ろ』にされているという事実が一番気に入らなかったのだ。

「シオは試召戦争にはあんまり積極的じゃなかったじゃない。どうして今になって？」

「ただの気紛れですよ」

本当は明久がこれ以上美波を蔑ろにするなら変わって報復するつもりだったのだがその必要もないらしい。
あとは……

「美波ちゃん。放課後あいてますか？」

ムツッリーニの思考を読み取ってやはりと確信を得てから詩織は雄二に話しかけた。

「ところで明久君が清水美春に何を言ったか知ってますか？」

「何だ？喋る気になったのか？」

教室に帰った時に労いの言葉をかけてくれた雄二だが、その距離は一步引いていた。
何をしでかすか分からない辺り、翔子と同レベルの警戒を抱いているのだろう。

「……………その必要はない」

ムツツリーニは小型レコーダーを手に持ち会話る録音していたという。

そして――

「三人とも、まだ帰ってなかったの？」

種はまき終えた。

Fクラスメンバーによる肅清で0点になった召喚獣の補習を終わらせた明久がクラスに戻ってきた。

そして彼らが話し合っている最中に出口のほうを見て。

「ふふふ」

小さく忍び笑いをした。

こいつあ黒い！と誰もが思うような笑みだが、幸いにして誰もそれを目撃していない。

唇に人差し指を当て、ウィンクを出口で見えないよう身を隠している美波に送った。

雄二達とはある男女の会話、と称してその内容をクラスに流し始めた。

「……………スタート」

『この話し合いに何の目的があったのかは知りませんが、美春はもう貴方を恋敵として認めるようなことはありません。お姉さまの魅力に気付かず、同性として扱うだけの豚野郎に嫉妬するなんて、時間の無駄ですから。…………お姉さまの魅力がわかるのは美春だけです』

小型レコーダーからかつての交渉で流れた声が鳴る。

「あれ？この声って……」

どうやら明久は気付いていないようだが、秀吉は清水美春の声だとすぐに特定した。

『……………なんですか？美春に何か言いたいことでもあるんですか？』

「って、ちょ、ちょっと待って！この会話ってまさか！」

「ご名答。これは、お前と清水と詩織が昨日の放課後に何を話していたか、その一部始終を録音したものだ」

「あれってこういう意味だったの詩織！？」

何のことですか、と明久のほうを見向きもせず answers 詩織に冷や汗を流す明久。

これは不味いと。

『うん。一つだけ。清水さんの誤解を解いておきたいんだ』

『誤解？何がです？お姉さまと付き合っているというのが演技だという話なら既に知っていますけど？』

『明久君。これ以上見苦しい真似をすれば、私何をするか分かりませんよ？』

『……………なら、詩織にも聞いて欲しい』

明久がその先を思い出して暴れだすが雄二が秀吉に指示して押さえ

込む。

『いや、そうじゃなくて……その……美波の魅力を知っているのはキミだけじゃないってこと』

『何を言ってるんですかっ！いつもお姉さまに悪口ばかり言って、女の子として大切に扱おうともしないで！』

『うん。それは清水さんの言う通りかもしれない』

『だったら、お姉さまの魅力の何を知っていると言っんです！』

『確かにお姫様みたいに扱っているわけじゃない。男友達に接するみたいに雑な態度になっているかもしれない。けどね——』

『わーっ！わーっ！聞くなーっ！流すなーっ！』

『うるさいですね。彼女に聞こえないじゃないですか。』サイレンス

魔法の使用も致し方なしです。

「……………！？……………！！！！」

「詩織ナイスだ」

『けど、なんですか？』

『——けど、僕にとって美波はありのままの自分で話ができて、一緒に遊んでいると楽しくて、たまに見せるちょっとした仕草が可愛

い。とても魅力的な——女の子だよ』

『……………明久君。随分恥ずかしいと言いますね。ま、明日の放課後に悶えなければいいんですが』

明久が叫べないかわりに顔を覆ってゴロゴロと床を転がりまわる。顔を覆い隠しているが耳が真っ赤なことからどうなっているかは簡単に想像できる。

三人が明久に素直な褒め言葉を言い、その度に拳を握る力が強くなっていく。

たぶん殴り飛ばして記憶を飛ばせないか検討でもしてるんだろう。

「……………っ！！（ダッ）」

「あらあらムツツリー二君。お帰りになるにはまだ早いですよ?」

「……………なぜっ!」

教室を出て廊下を伺おうとしたムツツリー二の進行方向に一瞬で移動し、止める詩織。

その行動を怪訝そうに見て、一瞬で驚きに変える雄二。

「まさか、本人が聞いていたのか?」

「ふふふ」

曖昧に笑う詩織に明久以外の3人が外で美波が聞いていたことを確信し、表情を硬くする。

「明久君」

「な、何？詩織」

「約束は果たしますよ」

「……………？ああ、あの仲直りを手伝ってくれるってやつ？」

「はい。清水美春をちゃんと納得させたようなので、ご褒美です」

「ありがとう詩織！助かるよ！」

「いえいえ」

明久が詩織の手をとって感謝する姿を複雑そうに見つめる雄二と秀吉とムッツリーニ。

確かに仲直りできるだろうが、これって大丈夫なのだろうか。

「詩織、分かっててやったな？」

「悪趣味じゃよさすがに」

「……………どうかと思う」

明久以外からは非難轟々だが、もちろん反論させてもらっ。

「あらあら。盗聴なんて手段を用い、当事者でもないのに無理矢理聞いた方々よりはよほど倫理的だと思いますが？まあ先程の発言の通り、確実にやると踏んでましたけどね」

「「……………」」

さつと3人が顔を逸らした辺り、自覚はあつたのだろう。

クラスには喜びの声をあげる明久に沈黙した3人、そしてニコニコした詩織。

帰宅準備を整えた5人はその後速やかに自宅へと帰った。

その夜、美波から恥ずかしいだのこういうことなら事前に言えだの散々文句を言われた。

だが最後に蚊の鳴くような声でお礼を言われたので、まあこういうのも悪くないだろう。

4・7 結末、そして結果（後書き）

実は美波はシオリンが女だと最初から気づいてたという。

これ自体は最初から構想としてはあったんですけど、そこから派生する色々な設定は後付が所々にあるんですよ。

まあ小説書いてるとよくある話だ。

今回のシオリン黒いです。

とても黒いです。

全て計算通りに動いて「計画通り！」と新世界の神の如く黒いです。ちなみに詩織は美波のことをメル友くらいだと思ってましたけど、今回で友達くらいの認識になりました。

瑞希も似たようなものでどっちかに肩入れするとかはありません。

そろそろ10万PVアクセス到達するからそろそろそっち投稿し始めるかもしれない。

今書き終わってるのがIS介入編とクリス過去編の二本。

シオリンデレパートは余裕があれば書く。というかクーデレのデレって……学園祭編の屋上みたいな感じでいいんだろうか。

まあ要望あればもう一本くらい書くかも？

さて、明日のシオリンは！

『Bクラス代表制裁編』

『再現可能？』

『兄、そして……』の3本です！

短編なので別に3本アップするとかいう意味じゃありませんよ。

4・5・1 彼女の兄（前書き）

IS編をお昼前後あたりに。

4・5・1 彼女の兄

『Bクラス代表制裁編』

「はっはっはっ」

暗い夜道を走っていた。

既に何処を走っているのか検討もつかないが、とにかく前へ前へと走り続ける。

この足を止めた時、それが自分の最後になると本能が告げているから。

『かごめかごめ』

深遠の闇から幼子のような穢れなき声が耳に届く。

まるで園児が歌っているかのような上手いとはいえない無邪気さすら感じるそれは、夜道で聞くと薄ら寒く思える。

この歌は……？

『籠の中の鳥は』

いったいどこから聞こえてくるのかは分からない。

遠くから聞こえてくるようにも思えるし、すぐ真後ろで囁くように歌っているようにも聞こえる。

嫌な汗が先程から流れ続けているのには気付いているが、汗を拭うその動作すらも走ることに妨げにしか思えなかった。

『いついつ出やる』

耳元で囁いているような気もするし、真正面からも聞こえる。自分が恐慌状態に陥っているのを吟味しても十分な怪奇現象だ。

『夜明けの晩に』

囁くような声が先程からずっと鳴り響いているのだ。

もう気絶して楽になりたい。

そう思うものの足を止めて後ろを振り向くことすらできない。

走って、走って、逃げるしかない。

どこを走っているのか分からないが、視界に入ってきたのは小さな公園。

その向こうに交番があるのが見え、そこがゴールとしか思えない彼はさらに速度をあげた。

『鶴と亀が滑った』

もはや足はパンパンで、今すぐにでも休みたいほど疲弊しているが、あともう少し。

もう少しで助かるとさらに足を動かす。

そして公園を抜け、交番の前にたどり着き助かったと心の中で歓声をあげて中に入ろうとして――

「……………え？」

唐突に交番が塵気楼のように消えてしまった。さっきまでは確かに目の前にあった――

『後ろの正面だあれ？』

「――っ」

今度ははつきりと聞こえた。

全方向から聞こえるような怪奇現象じゃない。

はつきりと、真後ろから聞こえたのだ。

やめろ。

振り向くんじゃない。

そのまま逃げる逃げる逃げる逃げる！

「……………あああああああ！」

ずっと恐怖で侵されてきた彼の心はそれに耐えうる程強くはなかった。

恐怖心を抑えることも出来ずに叫び声をあげながら振り返り、『それ』はいた。

「……………根元君……………遊びましょ？」

鼻先が触れ合うような程の至近距離で、目と鼻がない『それ』は唯一ある口でニコリと晒った。

「あら、気絶しましたね。ついでに失禁も。とりあえず起きたらまた驚かせる為に首を絞められた痕を……よし、赤くなりました。痕が12時間消えない呪いをちょちよいと」

翌日、何故か自室で目覚めた根元恭二は自室で目覚めた事実から夢であると判断した。

しかしズボンが妙にアンモニア臭いことに気付き、この年齢で漏らしたのかと落ち込んでから証拠隠滅の為に洗濯機へと放り込む。

そして顔を洗おうとして首が赤くなっているのに気付く。

虫刺されかと思ってよく見てみたら両手で締め上げられた痕だと気付き、再び恐怖の声をあげることとなった。

その後彼は妙に背後に誰かいないかを気にしつつ登校した。

『再現可能？』

「お姉ちゃんお姉ちゃん」

「何ですかクリスマスちゃん」

「これ見て！」

さっと差し出されたのは聖杯戦争な某格闘ゲーム。

「これがどうしたんですか？」

「お姉ちゃんサーバントの真似できる？」

「……………」

そう言われて技の一つ一つを検証してみる。

まずエクスカリバー。

剣にそれっぽいエフェクトをつけて巨大ビームを撃てばそれらしきものは出来るだろう。

そしてアーチャーの剣製。

ぶっちゃけ無理。

特殊効果を持つ魔法武具を魔力一つで練り上げるとか上級魔法使いだってしない。

あれはもう職人芸だ。

世界を作るとかはそもそも考えない。

あんな長い詠唱したら上級魔法使いなら国一つ焼き尽くすくらい楽勝だし。

次にランサーの因果反転の槍。

昔戦ったオーディンが同じ感じの槍を使ってた気がする。

あの時の槍を回収していたならば出来ただろうが、魔法のみで発動となれば難しいだろう。

次はライダーのよくわからん色々。

石化の魔眼は楽勝として、ビーム？は普通に撃てる。

ペガサス召喚は契約さえすれば出来るがこの世界にペガサスはいない。

次にキャスターは……再現とか以前にそれ以上のことが出来る。

そしてバーサーカーは……まあマトモな生き物やめれば死んでも復活できるようにはなる。

「で、アサシンはどうなのお姉ちゃん」

「燕返しですか」

「うん」

「……………剣技のみですか？魔法使わないで？」

「もちろん。お姉ちゃん無手は駄目駄目だけど剣術は達人でしょ」

まあ無手もそれなりにいけるけど、とクリスが内心で呟く。

実際詩織は無手が苦手と言っているがそれは剣術と比べてである。

剣術としては神に匹敵するレベルで鍛えたので無手がどうしても才能がないと思っているのだ。

「んー……正直ですね」

「うん」

「魔法使わないで同時に斬りつけるって物理現象に喧嘩うってますよね」

「……そこは言わない約束だよお姉ちゃん」

「魔剣使えば楽勝で再現できますよ？ただ剣技のみってなると、ち

よつと物理現象の壁を越える必要がありますね」

「結論は？」

「無理です。不可能です。インポッシブルです」

『兄、そして……』

「おはよう詩織ちゃん！」

「……………ああ。綾香ですか」

「何その『久しぶりすぎて忘れてました』とか言いたげな間は！？綾香とってもシヨックだよ！」

「単に寝起きは頭が回ってないだけですよ……………」

フルフルと頭を振り、眠気を飛ばしてから自分に跨ってる綾香を見る。

「……………」

「寝てる！寝てるよ詩織ちゃん！婚約者が目の前にいるのに挨拶だけして二度寝って綾香泣いちゃうよ！？」

「うるさいですね……」

「うるさいって言った！？」

相変わらずテンション高いなこの子と馬乗りになっている綾香をどかしてから今度こそ起き上がる。

「ところで綾香」

「うに？」

「何でいるんですか？」

「婚約者だよ綾香達は！いちゃいけないの！？」

朝からよく叫ぶ婚約者だ。

それからプンプンと怒りながら部屋を出ていく綾香を見送ってからそのそと着替え始める。

「そついえば詩織ちゃん」

ちょうど下着姿になった時に戻ってきた綾香。

狙ってるんじゃないかと疑心暗鬼になるものの飛び掛ってこないの
でそういうわけではないらしい。

「明良にいが帰ってくるんだって」

「…………え」

詩織は下着姿のまま、服を手を取った状態で固まった。明良が帰ってくる——複雑な感情が詩織を困惑させる。

「そうですか。ジャンが帰ってくるんですか……………そう、ですか」

詩織は複雑な感情を持て余したまま呟く。

帰ってくる。いつもジャンと呼べと言っていた綾香の兄が——詩織の元婚約者が。

4・5・1 彼女の兄（後書き）

シオリンが最近暴走するところばかり書いてる気がする。
まあ根元君は書いてるうちはちょっと楽しかったけど。

f a t e ネタでした。

シオリンの前世の世界では概念武器とかその辺はあんまりポピュラーじゃなかった上、非常に扱いにくいので使用者は殆どいません。そもそも上級魔法使いはそういった類の魔法具への対策を必ず持ってますし。

転生者超嫌われてますから概念武器とかもよく対策されてますからね、詩織の故郷では。

はい、兄は兄でも綾香の兄でした。

明良ことジャンはそのうち登場します。

別に裏サイドとかのキャラじゃないので本編で普通に。

超番外編：IS（前書き）

IS 編 仮 1 話。

超番外編：IS

IS……インフィニット・ストラトス。

宇宙での運用を想定したパワードスーツという名の世界最強の機動兵器。

詩織は神々の中でも神権第一位を持つ創造神の命令でこの兵器が跋扈する世界に転生することになった。

命令は兵器転用の可能な技術独占された革新的な物による世界への影響を調べる、とのことだ。

だが詩織は知らない。

働きすぎの詩織に休暇の意味で創造神がこの世界に転生させたことを。

「しかしIS学園ですか。……………私が行く必要あるんですか？」

「社長もお年頃なんですから学園くらい通いましょうよ。社員一同、そう望んでいますよ」

「ですが」

「これ、署名です」

秘書に渡された署名の名前をざっと見て、それらが社員達の名簿の如く並んでいるのを見て深い溜息を吐く。

「社長は義務教育何も受けてないじゃないですか。皆社長に女の子らしいことをして欲しいんですよ」

「既に学校で習うような教育は不要です」

「そうじゃなくてですね社長。女の子らしいこと――」

秘書が自分を説得しようとしているのを見て再び溜息を吐く。

この世界における詩織は捨て子だ。

神々が転生する時、親という存在は大抵神としての職務の邪魔になることが多いので普通は捨て子になるような家庭に転生する。

そして捨て子になり孤児院で5歳になった詩織は一人姿を消しとある会社を立ち上げた。

最初は正体不明の敏腕社長として運営していたのだが、それも12歳になると同時に自らの名前と姿を堂々と晒す。

もちろん影武者だのパフォーマンスだの散々言われ、初めて会う部下達には疑惑の目で見られたが今ではもうそれはない。

疑惑の目がなくなったのはいいが、調べられると容易に分かったのが詩織が義務教育を一切受けていないという事実。

どこの学校にも詩織の名前が存在しなかったのだ。

「とういかなんでIS学園なんですか。この会社は別にIS作ってるわけじゃないでしょうに」

「でも技術的には学ぶところありますよ。……………それに社長に男なんて近づけてたまりますか」

「おーい、聞こえてますよ」

「何のことでしょう」

「……………はあ」

それだけではあるまい。

詩織は机から一枚の書類を出し、それが原因だと確信するとびりびりと破った。

「ん？社長その紙は……ああ、IS適正検査ですか」

そうなのだ。

白騎士事件が起こり、ISが世間に認識されるようになってから会社で行われたIS適正検査。

詩織はもし社員にIS適正が高くて若い者がいればIS産業に参入してみるかと軽い気持ちで行ったのだが、それがいけなかったのか。社員達といい交流の場になるかなと思い一緒に適正検査を受けて判明したのがIS適正S。

社員達には何とか隠し通したがこのことを知った日本政府は詩織を代表候補生にしようと躍起になったものの、断り続けて今に至る。

詩織はこの誘いを受ける気はなかったのだが、IS学園に入学する年齢が間近になり会社に直接乗り込んできた日本政府の人間。

それを目撃した社員達は義務教育を受けていない詩織をなんとかして学園に入れようと署名すら集め、今に至る。

「そもそも私は学園に入る必要はないんです」

「どうしてですか？」

「……………」

この世界に來たのは世界にISがどうという影響を与えるかを知る為——と詩織は思っている。

なのでIS学園に入り時間をとられるのは下策なのだ。

「とにかく社長！こんなに皆が懇願してるんですから学園に入るく

らいいじゃないですか！」

「逆ギレですか！？だから私は……」

「あ、もう入学試験に申し込みしましたから」

「いつのまに！？」

もうあれだ。

試験に落ちればいいのだ。

試験用に用意された打鉄を身に纏って突っ込んでくる胸のでかい嬢ちゃんの攻撃をモロに受ける。

「うわー、やーらーれーまーしーたー」

「棒読み！？って真面目にやらないと不合格にしますよ！」

「どうぞどうぞ」

実際不合格にしてくれて一向に構わない。

というかこんな試合、誰も見てないだろう。

先程男の操縦者が現れたことで話題が一気にそっちにいつている。今や時の人である男のIS操縦者を話すことで忙しいのだ。

動かない詩織にやる気がないと判断し、ライフを撃つ試験管。

もちろん詩織はそれを防がずに受け、シールドエネルギーが0になり敗北した。

「で、私棒立ちで負けたのに何で合格してるんですか？」

「貴様が詩織Ⅱレッドフィールドか。実は貴様のIS適正がSという話だがな、Sどころかそのさらに上に行く史上初めて観測される程の値がでている。その為にもテストパイロットとしてIS学園に特別入学となつたのだ」

「……………つまり、試験の合否に関わらず入学は確定だったと？」

「そうだ」

「ガッデム！」

明日は初登校の日。

事前に教えてもらった情報では自分は一組に入学するらしく、しかも自分の席は男のIS操縦者である一夏の隣らしい。というのもこの前やってきた兎の情報なのだが――

『やーしーちゃん！元気してた？』

『……………』

『もうしーちゃんったら不機嫌そうにして。相変わらずシンデレだなあ』

『うるさいです。消えてください』

『で、しーちゃんにはんぱかぱーん！I S コアを贈呈するよ！はいこれ』

『……………（ポイ）』

『って捨てちゃ駄目だよしーちゃん！』

それからガン無視する詩織の隣でピーチクパーチクマシンガントークしながら社長室を独占していた兎。

詩織はこの兎が嫌いだった。

いや、嫌いというのは正しくないだろう。

うざかった。

どういうわけかこの兎は詩織が魔法技術を持っていることを知っており、ことあるごとに接触してくるのだ。

いったいどこでバレたんだと頭を抱えるものの心当たりはない。

「……………」

あの兎の考えは分かっている。

兎は本来認識している人物には酷く親切だ。

なのにも関わらずI S コアを渡しただけというのは詩織がどのようなI S を組み立てるのか興味があったのだろう。

事実面倒だが詩織は独自にI S を作った。

名は『斑鳩』。

ぶっちゃけそのタイトルのゲームをやっている時になんともなくでつ

けた名前だ。

ISそのものの制作費も10万円とかかかっていない。

IS企業が聞いたら泣くような設定を頭の中で整理しつつISの設定を微調整する。

「この魔法式はここにすると……」

詩織が作ったのはISであってISではなかった。

本来ISは物質兵器を搭載したものであるのだが、斑鳩は違う。大部分が魔法の術式を発動する為の魔法兵装を展開するものだ。その為に

「起きなさい斑鳩」

調整し終わったISを纏い、その身を確認する詩織。

かつてのジェノサイドフォーム、白いブラウスにチェックのミニスカート、そして黒いマントの姿が鏡に映っていた。

そこにメカっぽい装備は一切ない。

ISというよりは変身ヒロインのようである。

「……………まあこれでいいでしょう」

武装？

そんな魔法で補えばいいんですよ。

そう言わんばかりにISにつき込んだ装備は全て補佐系のものばかり。

とにもかくにも、詩織は部下達に見送られてISとはいえない専用機を所持しながら学園に入るのであった。

超番外編：IS（後書き）

ちよつとはつちやけすぎた気がする。

本編の設定はまるで考えていない。

二次作品知識しかないのでこんなことに。

原作見たことも持ってもいないから本編導入部分しか書きませんでした。

リリなの編は既にちよつとだけ書いてるけどIS編は今後書く予定がありません。

というか原作ないしね。面白そうだけど。

要望複数あれば考えるかもしれぬ。どこまで真剣にかは知らんけど。

お姉ちゃんは電波少女（前書き）

クリス視点。これとIS編がPV10万記念でいいですね。
出オチなのは書き始めた時が頭の中身が完全コメディ一色だったんだから仕方ない。

お姉ちゃんは電波少女

「詩織が男の名前で何が悪いっ!」

「俺の名前がサザエさんみたいだあ?」

「ちょっと殴ってもいい? 答えは聞かないけど!」

「俺の性別を踏みにじった貴様の陰我、俺が断ち斬る!」(ただのジャンプ斬り。殺してません)

「どんな装甲だろうとただ撃ち貫くのみ!」(魔法で生成したステークを打ち込む。一応殺してません)

「サタンズヘル・アンド・ヘブン!」(心臓^{コア}を抉り出す。殺してないと信じたい)

「はいだらああああああ!」

以上がクリスの姉の男扱いされた時のダイジェストだった。

クリスは引っ込み思案であった自分をグイグイ引っ張ってくれる姉が好きだった。

自分が我侭を言えば苦笑しつつそれに付き合ってくれ、何においても自分を優先してくれる。

どんなヒーローよりも格好良く、どんな壁だって突き破る。そんな憧れだった。

まあ半年前くらいから姉ではなく兄と呼べといい始めるし、ダイジェストの通り突拍子もない姉であったのだが。

「お兄ちゃん……」

「ん？何だクリス」

姉の部屋の中を覗き込み、クリスは不安そうに机で何か作業をしている姉に抱きついた。

「一緒に寝ていい？」

「ああ、父さんと母さんは今日いないのか。じゃあ一緒に寝るか」

頭をポンポンと撫でて姉、詩織はクリスの手を引いてベッドの中に入る。

「お兄ちゃん、またぜんせの話聞かせてくれる？」

「……血生臭くない記憶探すの疲れるんだけどなあ」

小さな声でボソツと何かを呟いた姉に首を傾げるクリスだが、すぐに頭を撫でられて何を疑問に思ったのかも忘れる。

「そうだな。あれは幼馴染のカーベラと町に買い物に行った時の話だが――」

クリスの姉は魔法使いだ。

クリスにとってそれは当然のことで、子供の小さな世界では当たり前
の真実だった。

おねだりして見せてくれる魔法はクリスに姉の凄さを何度も再認識
させた。

だが――

「魔法使いなんているわけがないよ」

「でもお姉ちゃんは魔法使いだもん」

「うっそだ！。魔法使いなんてテレビの中にしか存在しないんだよ」

「違う！お姉ちゃんは魔法使い！」

誰にもそれは理解されなかった。

未来のクリスがもしこの頃のことを覚えており、振り返ったならば
苦笑して当たり前だと思うだろう。

魔法使いは存在しない――それこそがクリスと世間との決定的な常
識のズレだった。

「お兄ちゃん魔法使いなんだよね？」

「そうだけど、それがどうしたんだ？」

やっぱりそうだ。

大好きな姉の言うことは絶対だ。

ヒーローは嘘をつかない。

だから私は正しいんだ。

「今日ね、お兄ちゃんのことを話したら魔法使いなんていないなんていうんだよ。酷いよ本当」

「……………」

クリスは不満たらたらに愚痴を言い、それを聞いた詩織は凍りついた。

乞われるままに自身の前世の話をしてきた詩織だが、まさかクリスがそれを他の人に話しているとは思わなかったのだ。

幼子でありながら幼子でない詩織はまさかクリスが魔法使いの話が普通の話だと思っていなかった。

幼子でなかったからだろう。

詩織は素直にそれが自分の失敗であることを悟った。

「なあクリス」

「なあに？お兄ちゃん」

「魔法の話は他の人にしちゃいけない」

「……………？なんで？」

「魔法は普通の人たちにとっては存在しないからだよ」

「なんで？魔法はあるんでしょ？」

「あるけど、ないんだよ。お兄ちゃんとクリスの中にしか、今はないんだよ」

意味が分からなかった。

何であるのにないのか、クリスは小首を傾げて聞いた。

「なんで？お兄ちゃんは嘘をついてないんでしょう？」

「いや、あのだな……」

どこか歯切れの悪い姉にクリスは不機嫌になっていく。
魔法は確かにある。

今まで見せてくれたそれらは確かに魔法だったのだ。
なのにヒーローである姉は今自分に嘘をつこうとしている。

「お兄ちゃん」

「……………ないよ」

「え？」

「魔法なんてない。友達にそう言っただクリス」

「……………なんで？」

意味が分からない。

何故わざわざ友達に嘘を吐く必要があるのか。

「なんでもだ。お兄ちゃんの言うことを聞くんだけ」

初めて上から目線で押さえつけられた。

当然今まで姉に甘やかされてきたクリスがそれに我慢できるはずがなく――

「…………やだ」

「クリス」

「お姉ちゃんなんで嘘なんてつくの？」

「だからそれは…………」

「嘘はいけないことなんでしょ？なんで？」

「そりゃあ嘘はいけないことだけど、魔法のことは世間に知られたくないんだ」

「なんで？」

「なんでって…………」

「お姉ちゃんが嘘は吐くなって言った」

「いや、俺はお兄ちゃん——」

「お姉ちゃんはお姉ちゃんでしょ？」

「——っ。だから…………！」

「お姉ちゃんをお兄ちゃんって呼ぶのはおかしいよ。だってそれ嘘だもん！」

売り言葉に買い言葉。

思えば姉はあの時自分と話す前からどうしようもなくイライラしていた。

それがどうしてか分からないけど、とにかく姉とは大喧嘩したのだ。部屋を出る時になって「何子供と本気で喧嘩してんだ俺……」という声が聞こえた気がしたがクリスマスは気にもとめなかった。

姉の株価下落である。

といっても元々姉が大好きなクリスマスにとっては一時的なもので、すぐに株価は戻ったがそれでも思うところはあった。

あれから姉は自分にどこか腫れ物を触るかのように接してくる。子供特有の感覚でそれを感じ取ったクリスマスにはそれが酷く不快だった。

それに今でもクリスマスはあの時のことは自分は悪くないと思っていた。この時両親がこの事態を察して二人の間に入っていればすぐに仲直りはできただろう。

だが両親は気付かず、年月は半年も流れる。

「むう……魔法はあるもん」

今日も友達に言われたことに不満を呟きながら寝転がる。

いつもなら姉の部屋にいて甘えているのだが、ここ半年ほどはそれもしていない。

姉は最近レッドフィールド家の仕事を手伝い始めてちよくちよく出かけていることがあり、今も外泊中だ。

「つまんない」

何か面白いことはないか、そう思いふと考える。

そういえばそろそろ姉の誕生日だ。

こっそり姉の部屋から拝借している『基礎魔法大全』で何かを作つてプレゼントすればいいのだ。

きつと姉は自分が魔法を使えないからあんなことを言うんだ。魔法を使えるようになれば姉だって反対できないはずだ。

「じゃあえつとまずは……チョークチョーク……」

『基礎魔法大全』に書かれている成り立て魔法使いが使う魔法陣を使った儀式魔法。

キチンとした魔方阵を書けて魔力がそこそこ扱えれば誰にでも扱える魔法だ。

確かこつちの世界で言う錬金術が出来たはず。

それを思い出したクリスは庭に材料である土を取りに行った。

「えつと……万能なる源よ……我は大地の理を操り………何て読むんだろこれ」

クリスは知らないがそれは詩織の前世における文字だった。

元々本来の詠唱は日本語ではなく魔法言語で行われるものだ。

しかしこの世界の言語による『詠唱』という分野で日本語で構築すれば3%前後の消費魔力の改善という新しい発見をした詩織は独自に最も適した詠唱を作り始めたのだ。

その分魔方阵が単純になり、威力や効果その他が落ちるのだがそれは詩織にとって都合が良かった。

なんせ前世での詩織の魔力が100とすれば現世での詩織の魔力は6。

元々魔王クラスの攻撃力なんていらないので低燃費の詠唱系を作ることとなったのだ。

そして錬金術の儀式魔法、しかも初級のそれを詩織が使っことは殆どない。

なので魔法書に書き記す際にキチンと翻訳していなかったのだ。

もちろん全て翻訳したほうが魔法の効率が上がるのだが、後半部分は翻訳しても0・1%か0・2%しか上がらないと見てそのままにしたのだ。

『基礎魔法大全』は元々クリスに与えようと思ったものではなく、クリスが詩織の部屋から拝借したものだ。

もしこれが詩織がクリスにプレゼントしたものなら完全に翻訳してあっただろう。

「まあいいや。とにかく錬金！」

何て読むか分からないクリスは魔法少女のような兎さん先端をしたステッキを作ろうとした。

魔方阵が淡く輝き、中央の土が徐々に形を成していく。

しかし――

「……………あれ？」

出来たのはボールペン。
なんで？

魔法の知識が殆どないクリスは失敗の原因を考えてみるが当然のことながら分からない。

一応先端は兎だが、これではただのキャラ物のボールペンだ。
その辺の100円ショップとかで売ってそんな代物である。
仕方がない。

もう一度……そう思い魔力を出そうとしたところで気付く。

「？」

出ない。

どうやら魔力切れのようだが、この錬金術はそんなに魔力を食うの
だろうか？

まあないものはしょうがないのでまた翌日にやってみればいい。

そう思い証拠隠滅と魔方陣を雑巾で綺麗に消し去り、失敗作である
ボールペンを筆箱に入れておく。

明日こそは失敗しにしようと願いながら、クリスは部屋を出て行っ
た。

魔方陣が淡く輝く。

ここまではもう何度も繰り返した作業だ。

そして中央に置かれている土が輝き、徐々に形を作り――

「……………?」

すぐに崩れた。

「……………もう明日なのに」

何回やっても成功しない魔法に苛立ちを覚えながら土を花壇に捨てに行く。

『基礎魔法大全』によると失敗した材料というものは魔法の食材として不適切らしいので入れ替えるのだ。

クリスは知らない。

失敗した材料は一度魔力を抜かないと処分してはいけないということとを。

数週間後レッドフィールド家の花壇の植物が急成長を遂げて人を襲うという天然のトラップとなったのはまた別の話だ。

「ああもう！なんでなの!？」

花壇に土を放り投げたところでクリスは痼癢を起こして叫んだ。

その叫び声に詩織が部屋でビクツと反応したが、どう顔を合わせていいか分からなかったのでそのままスルーされる。

というかクリスのやつている魔法はいわゆるモドキだ。

詠唱はあくまで目安で、熟練魔法使いは意思一つで魔法を発動させるがそれは魔法に対して相応しい知識があつてのことだ。

魔方陣を見本通りに書き、魔力を垂れ流してるだけのクリスが魔法を思うままに使えるかといったら否である。

そもそも最初に失敗とはいえ錬金に成功したこと自体が奇跡だ。

しかしその奇跡がクリスに下手な自信を持たせ、何度も錬金術を試し今に至る。

「……………」

本当にどうしよう。

姉の誕生日プレゼントはあのボールペンでいいだろうか。

ちゃんとした形で作れたのはあれだけだし……とクリスは一生懸命考えた。

しかしクリスは忘れていた。

半端とはいえ魔法を使えるといってもやはり子供なのだろう。

当初の目的である姉に魔法を使えることをアピールするという目的を完全に忘れていた。

覚えているのは姉に何のプレゼントをすればいいのかくらいだ。

「……………仕方ない」

ボールペンを飾るためのリボンあったかな、とクリスは家の備品を思い浮かべながら自室にそれを取りに行った。

後日、本当にこんな安物のボールペンでいいのだろうかとビクビクしながら姉にプレゼントすると、抱きつかれるほど喜ばれた。

そしてその翌日にボールペンが錬金術で作られたことに詩織が気付いてクリスに問い詰め、魔法の危険性を説いた上で魔法を教えることとなった。

わけの分からない手順で魔法を使用されるよりは教えたほうがまだマシだ。

そう詩織は後にクリスへと話、魔法の知識を得たクリスが当時自分

がやっていた錬金術モドキが下手すれば悪魔を呼び出していたことに顔を青くするのであった。

お姉ちゃんは電波少女（後書き）

冒頭の元ネタ全部分かる人いるのだろうか？

クリスが精神的に大人だから詩織に歩み寄ったんじゃないくて、ぶっちゃけ忘れてただけって話。

実はプレゼント渡す時、両者にけっこう温度差ありました。

4・5・2 スイッチ（前書き）

今回シオリンが最終形態までいっちゃんいます。

4・5・2 スイッチ

『ライたん』

ピコピコピコ

詩織とクリスはテレビから少し離れて共にゲームをしていた。廃人ゲーマーなクリスにレッドフィールド家当主として少し忙しい詩織。

普通なら圧倒的にクリスが有利なのだが実はそうでもない。

「くっ……」

「……………」

呻き声をあげるクリスに対して極限に集中している詩織。

両者の顔色を見ればクリスが劣勢なのは聞くまでもなかった。

「あ、あ、あーっ!？」

「……ふう。疲れました」

コントローラーを置いてから盆に乗せてある麦茶を一口飲み、喉を潤す詩織。

「うう。お姉ちゃんやっぱりそれやめない？」

「無理に決まってるじゃないですか。使わないと勝負になりませんし」

それ、とは思考加速の魔法だ。
結構思考のリソースをとられるので魔法戦ではあまり役に立たないが魔法を使わない純粹な勝負では有用な魔法だ。
前世では剣士の中でも上位に当たる人達は魔法の習熟度に関係なく全員この魔法を取得していた。
剣士同士の戦いでこの魔法を使えるのと使えないのではかなりの差があるほどの便利さだ。

「そついえば忘れてたんだけどお姉ちゃん」

「はい？」

「この前ライタンとか言う男の人が来たんだけど、知り合い？」

「……………ライタン？」

「う、うん」

「……………次その男が来たら絶対に家にあげないでください」

「え？」

「いいですか？絶対ですよ」

「なんで？」

「そいつは光神って言って、神々の中でもかなり上位……………というかこの近辺の世界だと最高神です。あとライタンってのは本名じゃないですよ」

「え、嘘でしょ？なんかアロハシャツ着てたよ」

「はい。アホですから」

「……………神様なのに？」

「快樂主義者ですよ彼。理解はある方なんですけど、生粋のトラブルメイカーです」

最高神がトラブルメイカーってやばくないだろうか。

「絶対に家にあげないください。絶対世界規模の厄介事を持ってきますから」

「……………お姉ちゃん」

「なんですか？その箱は」

差し出された小箱に首を傾げて受け取る詩織。

「それ、ライたんさん……………様？がお姉ちゃんに、って」

「受け取ったんですか！？」

「う、うん。それ」

「はあ……………開けないと駄目ですよ、やっぱり」

『リーディング』

理由は分からないがレッドフィールド家を突然訪ねてきた綾香に詩織は魔法を教えていた。

それは既に8年前から続いているもので、綾香は8年間魔法を鍛えている。

そんな中魔法のバリエーションを増やす為に魔方陣を勉強している時にふと綾香は思った。

「ねえ詩織ちゃん」

「なんでしよう綾香」

「たまに綾香の考え読み取ってる魔法あるでしょ？あれって具体的には何なの？綾香にも使える？」

詩織はその質問に『リーディング』の魔法のことかと納得する。

まあ『読心』だの色々呼び名はあるが相手の記憶を読み取る魔法だ。

「相手の魂に思考領域を複写して読み取る魔法ですよ」

「……………？魂ってそう簡単に解析できないんじゃないっけ？」

「はい。出来たとしても極々一部ですね。でも心を読むにはその程度でいいんですよ」

「どういつこと？」

「欲しい情報だけを正確に読み取れば他の情報はいりませんよね？その極々一部を欲しい情報として入手すればいいんです。現在進行形で考えていることなら難しくはないんですよ。難しいのは記憶を読み取るほうで、そこらは結構情報の取捨選択がシビアです。具体的に情報を取得しないとまったく関係ない記憶が釣れてしまいます」

「へえ」

「ですが」

「うん？」

「私の記憶を読み取ろうとしても無理ですよ？」

「……………ソナコトカンガエテナイヨ」

「リーディングの魔法は魂の知識に通じている必要がありますし、何より下級魔法使いですらレジスト可能ですから。私に効くわけがありません」

もともと魔法を使えないようにした捕虜の記憶を探るための魔法だし。

少なくとも戦闘中に思考を読み取るような魔法は存在しない。

「あれ？じゃあ綾香もレジスト出来るの？」

「できますよ」

「じゃあなんで教えてくれなかったの!？」

「……………変態行為を事前に阻止できますし」

「ガーン」

『ドS様 スイッチ』

パンパンパンパン、カチャ……………

「……………」

「ふむ。命中率97%つてところですか」

「詩織ちゃん」

「はい。何ですか綾香」

暇を持て余し強引に外出許可をとってレッドフィールド家に来た綾香は困惑していた。

つい先刻、扉の前に立ってインターホンを鳴らしてみるのが誰も出ないので進入許可でもある鍵を所有している綾香は勝手に入った。そして誰もいないだろうから詩織の部屋に行って暇を潰してようかと思ったのだが、ふと感じた魔力にその足を止めた。感じる魔力に誘われるように辿ればそこにいたのは銃を手に一丁ずつ持つて的に向かってぶっ放している詩織の姿が。

「詩織ちゃん魔法使いだよね？」

「はい」

「……………何で銃使ってるの？」

綾香はまったく銃に詳しくないのでハンドガンタイプだとしか分からないが、とにかく詩織はそれを一旦置いてから綾香に向き合った。

「そりゃあ便利だからですけど」

「うに？詩織ちゃん身体強化使えば銃弾とか軽く避けられるよね」

「ええ」

「魔法使いつて銃とか使わないんじゃないの？」

「いえいえ、そうでもありませんよ。黄色い巴。ミというキユウ。えと契約した魔法少女は無限の銃製を……」

「違うくない！？何か違うくないそれ！？」

そうですか？と返してから詩織はガシャンとどんな原理か分からない

いが壁から出てきた二丁の銃を両手で掴む。

今机に置かれているハンドガンではなく、たぶんだがスナイパーライフルだ。

「二丁スナイパーライフルってどうなの？」

「ふむ。普通なら厨二病乙、って感じですね」

「……………詩織ちゃん」

「魔法で照準補佐もしてますし、かなり強いですよ？千里眼で壁抜きしつつヘッドショットとか余裕ですし」

「もう魔法で攻撃でいいよね、それ」

「魔力の消費量が段違いなんですよ。それにこれで相手の骨を貫けば半身不随とかにさせられて、魔法で治すことを条件に——」

「聞きたくなかった！」

婚約者のとんでもないドSさに耳を塞いで首を振る。

それでも詩織は国ごとに差はあれど世界を支配している。

何それ怖い、とその話を聞かされた時綾香は呟いたがマジだった。

「この世界にも呪い返して一応ありますからね。一人に集中してかけるならいいんですけど、複数人にかけたらそれが怖くて……まあ呪いのほうが未知さが加わって必死に許しを請うので興奮するんですが」

恐る恐る塞いだ耳を解いてみれば続いていたドS談義。

普通なら綾香は「ふーん」と他人事ですますのだがこと婚約者になってからは違う。
なんとこのドS、いつもはドMの癖にふとした拍子にドSになるのだ。

こういった話をペラペラ話している時は――間違はなくドS。

喋りつつパンパンと手に持つライフルを交互に撃ちながら流れる的を打ち抜く詩織に気付かれないようにその部屋を出ようとして――

「綾香、今日は泊まりですよ？ みつちり魔法談義をしてあげますよ……特に嫌いな技能関連を。」

ああ、とてもとても楽しみです。綾香の涙目も困った顔も軽い絶望の入ったその表情も……ふふ、ふふふふふふふ、あはははははははは！

詩織の目のハイライトが消え、二丁ライフルの撃つ間隔が短くなる。そしてゆっくりとこっちを向いた詩織と目が合い

「ひい！？」

綾香はそのまま考えることを放棄し、気絶した。

その夜、綾香が酷い目にあったのは言うまでもない。

4・5・2 スイッチ（後書き）

光神に渡された『小箱』は本編ではなく裏サイド側のイベントなので特に書く予定はありません。つか一応神様とのコネクションがあるっていう伏線の回です。

シオリンたまに記憶読んできますけど、実はそんなに使い勝手よくないって話。

シオリン最終形態の巻。前世ではこんなでもなかったのでヤンデレっぽいのは現世の女の性格の影響です。そこにDSである男の性格が加わり、DSヤンデレになっちゃいます。浮気をすればnice boatになります。

以下前話の元ネタ説明。興味がなければスルー推奨

詩織が男の名前で何が悪いっ！

・ガンダムZの主人公から。女みたいな名前の主人公がそれを指摘されてキレルシーンです。

俺の名前がサザエさんみたいだあ？

・JOJO4部のリーゼントヘアな主人公から。髪型を馬鹿にされた主人公がブチギレた時に行ったセリフ。

ちよつと殴つてもいい？ 答えは聞かないけど！

・仮面ライダー電王から。主人公側にいるとある仲間が変身した時に言うセリフのアレンジ。

俺の性別を踏みにじつた貴様の陰我、俺が断ち斬る！

・牙狼の主人公である魔戒騎士が言つたセリフのアレンジ。最初のところは「夢を踏みにじつた」なので、見事に改悪である。

どんな装甲だろうとただ撃ち貫くのみ！

・スーパーロボット大戦でアルトアイゼンにのつたキョウスケ・ナンプがステークを使う時に言うセリフ。作者はこれに燃えた。

サタンズヘル・アンド・ヘブン！！

・某勇者王の必殺技。ガガガな歌で有名で、かつこい。勇氣。それで全ての説明がつく。

はいだらああああああ！

・ZONEのANUBISというゲームのヒロイン？が叫ぶ謎のセリフ。主人公が「そこを通せ！」と言い放つたのに対してこう叫びながら襲い掛かる。もちろん多くのプレイヤーがこのセリフに疑問符を浮かべ、調べられた。結果製作陣からの回答は「意味はない」とのこと。なんてこつたい。

5 - 1 抱き枕カバー

以下の英文を正しい日本語に訳しなさい。

『Die Musik gefallt Leuten und
der reichert auch den Verstand.』

島田美波の答え

『音楽は人々を楽しませる上に心を豊かにします。 これは英語ではなくドイツ語だと思います』

詩織「レッドフィールドの答え

『音楽は人々を楽しませる上に心を豊かにします。 P・S・魔法で翻訳しましたが、これ英語じゃありませんよね?』

坂本雄二の答え

『出題が英語ではなくドイツ語になっている為に解答不可』

教師のコメント

申し訳ありません。先生のミスで違う問題が混入してしまいました。日本語訳は島田さんとレッドフィールドさんの解答で正解です。

ですがレッドフィールドさんは後でその辺の魔法について職員室に弁明に来てください。

今回はこちらの手落ちなので無記入の人も含めて全員正解にしたいと……

土屋康太の答え

『↑あぶりだし』

吉井明久の答え

『↑バカには見えない答え』

教師のコメント

——思っていたのですが、君たち二人だけは例外として無得点にしておきます。

ソワソワソワソワ。

落ち着きのない詩織は先程から立ったり座ったりを繰り返していた。綾香からは既にジャンが日本についたと連絡が入っており、今レッドフィールド家へと向かっているそうだ。

もうそろそろ登校時間なのでそんなに時間はないのだが、ジャンが挨拶だけでも言っていたので待っているのだ。

ちなみに多少遅れてもすぐに文月学園へと行けるように運転手にはスタンバイさせている。

「お姉ちゃんちよつと落ち着こうよ……」

「……………凄い、複雑なんですよ?」

「いやまあ、わかってるんだけど。綾香さんが連れてくるんだから、その辺大丈夫でしょ」

「……………先に行つていい？」

「お姉ちゃんに会いに来るのにお姉ちゃんがなくてどうするの」

もつともな正論に返す言葉もなく、あげていた腰を再び下ろす。

そして――

「来ました……………」

「綾香さんいるから裏門から来てますね」

よく見知った魔力がレッドフィールド家へと入ってきたのを感知し、詩織はさらに落ち着きがなくなる。

クリスがそんな姉を呆れながら見守ること数分後

コンコン

「ど、どうぞ」

「やつほー詩織ちゃん」

「お久しぶりです綾香さん……………」
「というか何で私がない時にお姉ちゃんに会いに来るんですか？綾香さん結構うち来てるのに久しぶりっておかしいですね」

「だってクリスちゃんがいたら詩織ちゃんにいかがわしいことできな――」

「黙つててください綾香」

「……………はい」

黒い笑みを向けられた綾香は黙るしかなかった。

「はは、久しぶりだなこのやり取り」

「……………ジャン」

「久しぶりだな詩織。元気にしてたか？」

金髪碧眼の美男子、黒谷明良。

ジャンと自称する彼は2年ぶりに詩織と再会した。

挨拶もそこそこ、ジャンが帰ってから車に乗って文月学園へと向かっていった。

本当に疲れた……………出来ればこのまま学校を休みたいくらいだ。

「もう2年たつたじゃない。そろそろ慣れなきゃ」

「……………いや、罪悪感でいっぱいなんですよ？」

「それがお姉ちゃんの選んだ道でしょ。文句言わない」

クリスが反抗的ですお母様。

「はあ。まあいいです。そういえばクリスちゃん、期末試験は大丈

夫そうですか？」

「文系科目はわかんないけど、理系科目は平気」

「理系科目で駄目だったら魔法を基礎から鍛えなおですよ」

「わかってるって」

魔法はだいたい理系よりの技術なので高校レベルの科目くらいは学年3位くらいとってほしいものだ。

階段でクリスと別れてFクラスへと向かう。

スカートのポケットから携帯電話を取り出して時間を見ると、結構余裕はありそうだ。

いつもよりは遅いがそれでもホームルームには十分間に合っている。

「あれ、美波ちゃん。おはようございます」

「シオ？おはよう。今日はちょっと遅いわね」

「少し家の用事がありました」

美波と話しながら、Fクラスの扉に手をかけて

「雄二の家に泊めてもらえないかな。今夜はちょっと……帰りたくないんだ！」

ガラッ

手はそのまま扉を開けたが、頭は硬直していた。

吉井明久が携帯電話を開いて大声で先程の言葉を言っていたのだ。

「ウチにはアキの本心が全然わからないっ!」

「み、美波ちゃん!？」

「え!？何!？なんで美波は登場と同時に退場しているの!？」

「さっき大声で言った言葉を深く考え直しなさい!」

相変わらず自覚はないようだ。

最近よく明久と雄二関連で翔子から愚痴られるのだが、これは酷い。翔子の自意識過剰かと思っていたのだが、翔子でなくても誤解するだろう。

「あれ？ムツツリー二君？その荷物なんなんですか？」

ふと気がつけばそこにはムツツリー二が立っており、何やら大量の荷物を抱えていた。

「……………ただの枕カバー」

「いや、なんで学校に枕カバー持ってくるんですか」

「……………商品」

よく分からないが売り物らしい。

しかし明久はムツツリー二に何かを感じ取ったらしく、荷物の包みの一つを奪い取り、中身を確認める。

詩織もついでにと包みの一つをさらに奪い、確かめる。

「さて。何が入っているのか……な……」

「明久君どうしまし……え……？」

詩織の手元の包みから出てきたのはメイド服を着た詩織の姿がプリントされた抱き枕カバー。

一体どこで？

そんな疑問が浮かぶもののまずすることはただ一つ。

「ムツツリー二君？」

「……………（ブンブン）」

「ところでこの僕のセーラー服姿のプリントされた抱き枕カバーのことなんだけど——」

「……………ただの、枕カバー」

「ただの、じゃないっ！枕カバーと抱き枕カバーには大きな隔たりがあるということをよく覚えておくんだ！っていうかどうして僕の写真なの！？」

当然の如く明久も猛抗議する。

しかしその抱き枕カバーを見て詩織が一言。

「中々可愛いじゃないですか」

「詩織!？」

「まあ実物を知ってたら気持ち悪くて触りたくありませんが」

「酷いよ!？いや、気持ちはわかるけど……っ!」

コンコン

「失礼。土屋君はいるかな？前に頼んでいた枕カバーを」

Aクラスの久保利光がFクラスへと入ってくる。

それに気付いた明久が声をかけて

「あれ？珍しいね久保君。枕カバーって、誰かの買うの？」

「——なんでもない。少々用事を思い出したのでこれで失礼するよ」

そそくさとFクラスから去っていく久保を見て、そして詩織を見てから明久は言った。

「……詩織、久保君は優良物件だと思うんだ」

「いきなり何を言い出すんですか」

何故か明久は久保が詩織の抱き枕カバーを買いに来たのだと勘違いした。

事実は明久が持っている自身の抱き枕カバーが目当てなのだが、久保はノーマルだと思っている明久にそれを察しろというのは無理は

話だろう。

「はぁ……。とにかくムツツリーニ。とりあえずその抱き枕カバーはあとで没収するからね……。作った分を全部回収して、写真を秀吉に換えて持ってきてよ」

「明久よ。ドサクサに紛れてワシの抱き枕を作るでない」

「そうですよ明久君。人のものを勝手に取って、しかも改造するなんてダメです。……一枚は私の分なんですし……」

瑞希はすっかりFクラスに馴染んだようだと言織は遠い目で空を見上げた。

もうこのクラスに、まともな人はいない。

「ところで先程のお主らの話は何じゃったのかの？」

「俺が明久にトランクス姿での登校を強要された、という話だ」

言織が正気に戻り、雄二を見える。

「……………あの、雄二君？」

いったい何があれば下がトランクスのみで登校できるというのだ。性癖とかそういう話じゃなければとてもではないが、納得できな――

「翔子が暴走したんだ」

納得した。

「はあ。翔子ちゃんとお話しておきますね」

「頼む……お前だけが頼りだ」

縋るような雄二の目に深い溜息が出る。

翔子ちゃん……相手に引かれるほど押してどうするんですか。

「ところで明久君、今日は妙に小奇麗ですね」

「え？そ、そうかな？」

「それに顔色もいいいな。まあ顔色はいいとしてもだ、制服がきちんとしているのは妙だ」

「……………明久らしくない」

全員の明久に対する認識を知りたいところだが、わりと間違っていない言葉だと思う。

「た、たまにそういう気分の日もあるんだよ！それより、そろそろチャームが鳴るよ！鉄人が来る前に席につかないと！んじゃ、そういうことでっ！」

強引に話を打ち切って自分の席につく明久。
ナニをそんなに慌てているのだろうか？

「」「怪しい……………」

男性陣の言葉が明久の今の状況を表現し、また詩織もそう思って記憶を読もうとしてやめた。

最近この魔法に頼りすぎな気がするし、そもそも普通なら不要な魔法だ。

最低限のプライバシーくらいは守ったほうがいいだろう。

5 - 1 抱き枕カバー（後書き）

最初の問題のところでシオリン普段から不正してんの？とか聞かれ
そうですが、してません。

英語は完全にマスターしているシオリンが英語じゃないと思って解
読した次第です。

五章は実家訪問勉強編ですね。

午前の授業4コマが終了し、昼休みに入ると詩織は鞆からお弁当を取り出した。

蓋をとつてみると中には見る人が見ればかなり手の込んだことが分かる食べ物の数々。

もしも料理がそこそこ得意な明久が見ていたら「何でこんなに気合入ってるの?」とか聞きそうだが、あいにく彼は今ここにいない。いったい何の心境の変化かは知らないが午前中の授業を真面目に勉強することで過ごし、七回も教師に保健室に行けと言われていた。普段の教師からの明久への印象がよくわかる対応だった。

「で、明久君は瑞希ちゃんのクッキーを見て逃走ですか。美波ちゃんも追いかけていきましたが」

「うむ。ついでに言えば雄二も霧島に追いかけておる」

「何やってんですか翔子ちゃん」

卓袱台の正面にいる秀吉と共に弁当をつつきながら話す。

何かと女扱い……いや、秀吉扱いなので正確に言えば男扱いされていない秀吉だが、男扱いしてくれる詩織とは結構仲がいい。

「しかし今回のクッキー大丈夫ですかね?メタンニトリルの臭いしましたけど」

「分かるのかの?」

「ええ。さすがに極々少量でしたが、独特なアーモンド臭なので間

「違いますよ」

まったく明久といいこのクラスの男メンバー達はどどういう胃をしているのだろうか。

正直瑞希のあれを常人が食えば入院確定なのだが……まあおそらく召喚システムが原因だろう。

「勉強の意欲の向上ですか……」

「……………」

「召喚システムの目的ですよ。この技術はまったくの偶然ですけど、おそらく百年後くらいになれば開発者達は歴史の教科書に名が記されているでしょうね」

「どういうことじゃ？」

「この世界には魔法はありません。いえ、正確には廃れました。しかし今、召喚システムという魔法が世間に認識されました」

「ちょっと待つじゃ。召喚システムが魔法？」

「はい。魔法ですよ？魔法陣出てるじゃないですか」

「……………う、うむ」

「魔法とは即ち世界の理を塗りつぶす行為です。魔法に深く通じるということは理に縛られないということです」

つまり簡単に言えば超人化するということだ。

明久達が瑞希の手作り料理に対して死んだり病院送りになったりしないのはその辺が原因と詩織はにらんでいる。

というかそうと考えると明久達の毒に対する耐性の高さが意味不明だ。

「そういえば秀吉君。期末試験は大丈夫ですか？」

「む……努力はしてあるが、自信はないのじゃ」

「まあFクラスに入ってる時点で努力してるだけマシと言っべきなんでしょうかね……」

あんまりな評価に言い返そうと秀吉は思ったものの、わりと事実なので押し黙る。

「ふう、ごちそうさまです。さて、次の授業は……」

今日の授業は全て終わり、終業のチャイムが鳴ると詩織は出していたノートと教科書を鞆にしまった。

「雄二、ちょっといい？」

「ん？どうした明久」

「今日なんだとさ、雄二の家に泊めてくれない？それで、期末テ

ストの出題範囲の勉強を教えて欲しいんだ」

——ザワッ

教室にざわめきが広がり、クラスメイト達がそれぞれ話し合いをはじめた。

『おい……聞いたか、今の……？』

『確かに聞いたぜ。俄かには信じ難いことだが……』

『まさかアイツらがな……』

『ああ。まさかあの吉井と坂本が……』

『『期末テストの存在を知っているなんて……』』

「……………私からすれば皆さんも似たようなものなんですがね」

詩織の言葉に一齐に皆が明後日の方向へと顔を向けた。

「勉強を教えて欲しいだろ？」

「うん」

「やれやれ……。お前はまだ七の段が覚えられないのか」

「近所の小学生にすら劣る学力ですね」

「待って！僕は一度も九九の暗唱に不安があるなんて言った覚えは

ないよ！？分数の掛け算だってきちんとできるからね！？」

「ああそうか。三角形の面積の求め方に躓いているところだったよな」

「（底辺）×（高さ）÷（三角形の面積）！いい加減僕を馬鹿扱いするのはやめなさい！」

説得力ありませんよ明久君、間違えてますし。

「よしよし、よくできた明久。あとは最後に二で割ることを覚えたら三角形の面積が出せるようになるからな？」

「というか明久君。数学のテストどうやって点数とってたんですか？」

本当に謎だ。

「ふう、やれやれ……。雄二は人の揚げ足を取ることと詩織を味方につけることに関してだけは天才的だね」

「凄え！その返しは流石の俺でも予想外だ！」

このレベルまでいくともはや小学校時代に何か辛いことがあって勉強する環境になかったとしか考えられない。
が、おそらくそんなことはなく素で馬鹿なのだろう。

「あの、明久君」

「なに、姫路さん？」

「あのですね、九九の覚え方にはコツがあるんですけど、」

「言えるからね！？いくら僕でも九九くらいはきちんと言えるからね！？」

「さっきの三角形の面積を四角形の面積の求め方で解を出そうとした時点で説得力ありませんよ」

凄く慌てて弁解する明久だが、もう手遅れだと思う。

それから明久は召喚システムのデータがリセットされるので武装をリセットしてグレードアップさせたいと言った。

詩織の場合は自家製の武器なのでその辺は関係ないのだが、一応テストにはそれなりに勉強して挑むつもりだ。

明久は雄二の家で勉強をする提案をしたのだが雄二が拒否。

明久の家ですべきだと雄二が言い、本人がそれを焦りながら拒否したので何かあると感じいた面々が明久の家で勉強することを提案する。

もちろん明久は嫌がったのだが、もはやニヤニヤしている雄二を止められるはずがない。

おそらくだが明久の不幸は雄二にとって蜜の味なのだろう。

そんなことばかりしてるからこいつら仲が悪いんじゃないだろうか。

「あ、私もいきますよ」

このままだと美波とか瑞希とかが明久の家の近所に迷惑をかける可能性が高い。

ストッパー役として一応出向くべきだろうと詩織はFクラス主要メンバーについていった。

5 - 2 ? (後書き)

青酸カリ↓メタンニトリルに修正しました。

まあメタンニトリルっていうのはシアン化水素のことで、青酸カリが胃液と反応した時に出てくる気体（これがアーモンド臭がする）のことです。

これの臭いがするって教室の皆やばくね？と思うけど明久達だし大丈夫じゃね？

というか気体のお菓子ってナニ？って感じだけど、もう不思議なお菓子でファイナルアンサー！。

決して面倒になっただけではない。

柑橘系の臭いとかも考えたけど、まあ別にいいかな

5・3 ブラコンな姉

雄二達は楽しそうに会話をしながら明久の家へと向かっていた。特に雄二は滅多に隠し事をしない……というか出来ない明久の隠し事を暴けるのでいい気分なのだろう。

「でも、なんでしょうね？ 明久君がそこまで隠すものって」

「何かしらね。強化合宿であんな覗き騒ぎまで起こしておいて、今更いやらしい本なんて隠す……何よ瑞希」

「し、詩織ちゃんが……」

「シオが？ どうした……の……よ」

言葉を遮られた美波が見たのはバックに『ゴゴゴゴゴ』と書いてありそうな凄みを出している詩織の姿が。

「ふ、ふふふふ。クソ男子どもめ。いつか灼熱業火の鉄槌を……」

「……………ま、まあ急に手作りの弁当を持ってきたこと、＼シャツにアイロンがかかっておったことなども合わせて考えると…………」

秀吉が黒化している詩織をスルーして強引に会話を戻す。

明久と雄二とムツツリー二の顔が引き攣り一歩下がっていたのを攻められるものは誰もいない。

「女でもできたか」

「……っ!?」

雄二の推測に皆が目を見開き、揃って明久を見た。

そして美波は詰め寄り、秀吉は何故か仮想の女に妬み、ムツツリーは明久に妬んだ。

瑞希は明久を信じると擁護したが、実際はヤンデレ的擁護だ。

これで明久に彼女がいて婚約していたなんてことになれば殺傷事件が起こるかもしれない。

「ま、中に入れば全部わかるだろ。ほら明久。鍵を出せ」

「やだね」

「ほう。なら詩織、開けられるか？」

「楽勝ですよ。アンロックっと」

カチャリと鍵も使わずに空く扉。

「詩織!？」

「はいなんですか？」

「何で『私何かしましたか?』って言いたげなの!? 人の家の鍵を勝手に開けちゃ……」

「お邪魔しますね」

「聞いてよ詩織!」

明久の言葉を見殺して玄関に上がるとそこには――

「いきなりフォローできない証拠がーっ!？」

ブラジャーが室内に干されていた。

「なるほど。女が出来たっていうの……」

詩織が言い切る前にブラジャーを掴んで別室に放り込む明久。

彼女さんの下着を無造作に掴んで別室に放り込む……ひよつとして家族関連なのだろうか。

よく観察してみるものの明久の顔には照れなどの羞恥が欠片も存在しなかった。

「……もう、これ以上ないくらいの物的証拠ね……」

「そ、そうじゃな」

「……………殺したいほど、妬ましい……!!」

ムツッリーニは彼女を作りたいなら妬む前にまず自分の行動を振り返ってみるべきだと思います。

女の子に盗撮なんて受け入れられるわけないでしょうに。

「ダメじゃないですか、明久君」

「え？何が？」

「あのブラ、明久君にはサイズが合ってますよ?」

「『コイツ認めない気だ!』」

「……………瑞希ちゃん、現実逃避は後で辛くなるだけですよ?」

まあ家族の可能性が高いのでそうでもないのだが。

「姫路さん、これは僕のじゃなくて!」

「あら?これは――」

瑞希の視線はリビングに置いてあった化粧用のコットンパフに移り

「ハンペンですね」

「『ハンペン!?!』」

いったい瑞希の頭の中はどういった構造になっているのだろうか。

「あ、お弁当ですね。……………いきなり俯いてどうしたんですか瑞希ちゃん」

「ひ、姫路さん…………?」

「しくしくしく…………」

「あ、明久君、瑞希ちゃん泣かせましたね。ここは切腹でお詫びするしか…………」

「詩織は黙っててっ!ええええええ。ど、どうしたの!?!」

「もう、否定し切れません……」

「ちょっと待って！どうして女物の下着も化粧品もセーフなのにお弁当でアウトになるの！？」

「そりゃあ学園祭での女装が効いてるからじゃないですか？」

「あの時のせいかつ！？」

何を今更。

シクシクと涙する瑞希に困ったように視線で詩織に助けを求めた明久だが、助ける気がないのが分かると白状した。

どうやら今明久の家には姉が帰ってきているらしい。

その言葉に安心の吐息を吐く面々。

それぞれ安心の意味が違う気がするが、追及する気はない。

「ところで明久君」

「何？詩織」

「何で隠してたんですか？別に姉が来ていることくらい話してもいいと思うんですけど」

「……………そういえばそうだな」

詩織の疑問に雄二が同意し、他の面々も気付く。

皆の問い詰めるような視線にとうとう観念したのかポツリポツリと語り始めた。

何でも明久の姉は破天荒な正確をしており、常識がないらしい。

観念した明久だが、常識のない明久をもって常識がないと言わせる

だけの姉に皆は逆に興味を持ったようだ。
唯一雄二だけは皆を嗜めていたのだが、いったいどういう風の吹き
回しだろうか。

『あら……？姉さんが買い物に行っている間に帰って来ていたので
すね、アキくん』

しかしそんな雄二の行動を無意味にするかのようなタイミングで帰
って来た明久の姉。

皆の前に姿を現した明久の姉は挨拶と歓迎の言葉を言った。
極々普通のお姉さんじゃないか。

そんな思いをそれぞれが抱きつつ自己紹介から入ることに。

「私は吉井玲あきひといいます。皆さん、こんな出来の悪い弟と仲良くし
てくれて、どうもありがとうございます」

あきら……明良？

ジャンと同じ名前だが、漢字はさすがに違うだろう。

「ああ、どうも。俺は坂本雄二。明久のクラスメイトです」

「……………土屋康太、です」

「はじめまして、雄二さんに康太くん」

（明久君？普通に良いお姉さんじゃないですか）

（これでおかしいと言うなんて、お前はどれだけ贅沢者なんだ。俺
なんか、俺なんか……っ！）

雄二、いったい何があつたんだろうか。

「ワシは木下秀吉じゃ。よしなに。初対面の者にはよく間違われるのじゃが、ワシは女ではなく――」

「ええ、男の子ですよ？ 秀吉君、ようこそいらっしゃいました」

「……………っっ！！」

玲の言葉に顔をハツと上げ、感動の表情を浮かべる秀吉。

「わ、ワシを一目で男だとわかつてくれたのは、主様で二人目じゃ……………！」

「勿論わかりますよ。だって」

女神のような微笑みを浮かべて、玲は言った。

「だって、うちのバカでブサイクで甲斐性なしの弟に、女の子の友達なんてできるわけがありません」

この姉弟、仲が悪いのだろうか。

「ですから、こちらの三人も男の子ですよ？」

瑞希と美波と詩織を見て妙な嫌疑をかけてくる。

詩織はある意味中身は男の子なので強く抗議することはできず困った顔をしていた。

「ちょ、ちょっと姉さん！！ 出会い頭になんて失礼なことを言うの

さ！四人とも女の子だからね！！」

「明久！ワシは男で合つとるぞ！！」

「そうですよ明久君。それも失礼ですよ」

秀吉はどう見ても……外見は女の子だね。

気持ちには分かるが明久が玲を失礼というのは何か違う気がする。

「……………女の子、ですか……………？まさかアキ君は、家に女の子を連れてくるようになっていたのですか……………？」

……………ああ、なるほど。

このお姉さん、ブラコンなのか。

明久が必死に弁明しようとするが、玲はそれを遮って

「……………そうですか。女の子でしたか。変な事を言つてごめんなさい」

明久は助かったと思つていようだが、ブラコンシスコンというのはあまり舐めないほうがいい。

事実、玲はそんな明久を笑顔で見ているが、目は笑っていない。

「ところで、アキくん」

「ん？何？」

「お客様も大勢いらっしゃるようですし、アキくんが楽しみにしていたお医者さんごっこは明日でもいいですよね？」

「明久君……マニアックですね」

「ね、姉さん何言ってるの！？詩織も違うからね！？僕がまるで日常的に実の姉とお医者さんゴッコを嗜んでいるような物言いやめてよ！僕は姉さんとそんなことする気は――」

「実の姉じゃなければするんですか？」

「しないよ！絶対しないよっ！！」

へえ。

「じゃあ私がお医者さんゴッコしてあげましょうか？」

「……………え？」

「何ならメイドさんゴッコでもいいですよ？」

「アキ！歯を食いしばりなさい！」

「明久君……まさかと思いますが、受けたりしませんよね？」

美波が激昂し、瑞希の目のハイライトが消えヤンデレアイとなる。明久がフルボッコにされるのを見ながら詩織はクスクスと一人笑った。

そしてそつと一言。

「そういえば、色々あって明久君にはまだ合宿所の罰を与えていませんでしたね」

5 - 3 ブラコンな姉（後書き）

最後のシオリンの提案は別に明久にフラグがたったとかじゃありませんよ？

現在明久株はシオリンの中で下落中なのでつい苛めてしまう感じです。

清水美春との対話で結構戻りましたけど、その後協力してたのはどこまで清水美春に対して言った言葉が本当かを見届けるためです。なので今の関係は悪友って感じですね……仲はどっちかというと初期に比べて良くなりましたが、妙な方向にいっただけです。

5 - 4 写真。英語で言うとフォト（前書き）

最近ちょっと原作視点に沿いすぎて面白くないなあ……何かでこ入れしないと。

5 - 4 写真。英語で言々とフォト

お医者さんごつこの誤解がとかれた後、明久は何故か玲に200点の減点をされていた。

一体何の減点なのかは分らないが、明久が慌てていることから都合が悪いことなのだろう。

「ごめんなさい。話が逸れてしまいましたね。貴女方三人のお名前を伺っても宜しいでしょうか？」

「あ、はい。申し遅れてすいません。私は姫路瑞希といいます。明久君のクラスメイトです」

「ウチは島田美波です。アキとは――友達、です」

美波が一旦明久を見てから言ったが、キスまでしたのにとか考えてたのだろう。

いい加減明久は何かしらアクションを起こすべきだと思っんだ。

「詩織」レッドフィールドです。明久君とは……」

ニヤリ、そう表現するしかない詩織の顔を見た明久は慌ててその口を塞ごうとするが

「裸を二度も見られた仲です」

空気が凍りついた。

「……………アキくん？」

「何てこと言うのさ詩織！？僕はそんなことしてな――」

「明久君と一緒に浴室に入ったこともあります」

「明久君？」

「アキ？」

玲だけでなく瑞希と美波も立ち上がる。

「……………」

ダラダラダラと汗が明久の顔から一気に噴出す。

雄二は「いいぞもつとやれ」と言いたげに離れたところから面白そうに見ている。

ムツツリー二は明久を呪い殺す勢いで睨んでおり「羨ましい」と血涙を流しながら見ている。

あ、想像したのか鼻血もセットで出てきた……………って怖い。

秀吉は何か「妬ましいというかなんとというか……………なんじゃろ」と首を傾げている。

「安心して下さい皆さん」

「詩織……………！」

やっと弁明してくれるか。

そう目を輝かせた明久に詩織は止めを刺した。

「私は浴室では明久君の為にメイド服を着ていましたから。そうい

えば明久君、学園祭ではメイド服に大変な興味を示していましたね」

「ちょーっ！？それじゃ僕が詩織にメイド服着せて浴室に連れ込んだと思われ間接が捻れるように痛いっ！」

明久の身体の一部の間接が素敵な角度になっている。

「大丈夫ですよ明久君」

「た、助け……」

「折れても治せますから」

魔法って便利です。

それから宣言通り魔法で治した明久は玲が買ってきた食材から夕食を作ること。

夕食をご馳走になるのは嬉しいのだが、そうになると毒を盛られないか心配だ。

さっき明久が恨めしそうな目で見てきてたから。

まあ毒くらい口に入れた瞬間分かるのだが。

口に入れるだけで死に至るような毒はそもそも見た目が臭いで判別がつく。

「そういえば明久君は料理得意なんでしたっけ？」

「得意ってほどじゃないけど、人並みにね」

その言葉に驚きの声をあげる瑞希と美波。

複雑そうな表情をしているが、美波はそんなに料理下手なんだろうか。

ちなみに瑞希は論外である。

「そう不自然なことでもないだろう？俺だって料理くらい作るしな」

「……………紳士の嗜み」

「わ、ワシは、その……………あまり得意では……………」

「紳士の嗜みですから私も得意ですよ」

「いや、詩織が紳士ってのはおかしい。得意なのは分かるけど」

心の中はいつだって紳士ですよ。

「ムツツリーニと詩織はともかく、雄二はやっぱり家で夕飯作って覚えたタイプでしょ？」

「おう。その通りだが……………やっぱりってのはどうしてだ？」

「あはは。だって、雄二は家の中で一番地位が低そうだもん」

「……………？明久君、何を言ってるんですか？」

「え？何って——夕飯って、家の中で一番立場の弱い人が作るもんなんでしょ？」

「「「……………」」」

今の明久のセリフで家での明久の待遇が分かった気がする。

「母の方針で、我が家ではそういうことになっています」

「そ、そうなんですか……」

「アキのお母さんって、なんかパワフルな人っぽいわね……」

「普通は立場に関係なく、作れる人が作るもんなのじゃがな……」

「え！？普通の家では違うの！？おのれ母さん！よくも今までずっと僕を騙し続けてくれたな！？」

「いや、レッドフィールド家当主な私が料理してた時点で気付きましょうよ。これでも一番偉いんですよ？」

まさか詩織が一番レッドフィールド家で地位が低いとも思っていたのだろうか。

「ええ！？当主って……本当なのシオ？」

「はい。レッドフィールド家本来の仕事はまだ両親が行っています
が、新しい分野関連は全て私が担当してるんですよ」

魔法で色々ズルできますし。

そう呟いた瞬間全員が目を見開き、そして頭を抱え、ついには何事もなかったかのようにスルーした。

「で、誰が手伝いますか？」

「おう、俺が手伝うぞ」

「……………協力する」

「！あ、あのっ！私が…………」

「「いや、女子は座ってていいから」「」

瑞希が間髪いれずに断れ、シヨンボリと座り込む。

毒物出されても困るので、妥当な処置だろう。

明久たちが台所に詰め、後姿でなにやら作業しはじめた辺りで玲が詩織に話しかけた。

「しかしお久しぶりですね、詩織さん」

「……………？どこかでお会いしましたっけ？」

記憶を探ってみるものの記憶には欠片もない。
こんな強い特徴を持った人物、忘れるはずがないのだが…………。

「とても幼い頃ですからね。一応アキくんにも会ってますよ」

「うーん……？いつ頃ですか？」

「アキくんが5歳くらいのころですね。その時にここの近所の公園で……」

5歳頃、近所の公園……

『ふはははは！我こそ魔王！真なる地上の覇者！ひれ伏せ！跪け！媚びへつらえええええええつ！！』

「……………」

暴走して近所の子供達を束ねていた記憶しかない。

「懐かしいですね……あの時詩織さんに教わった教えは今でも心の中に残っています」

「……………」

いつたいどれのことだろう。

結構ノリだけで色々言っていた気がするが。

「姉弟同士で結婚することに躊躇うな……あの時の言葉は今でも忘れられません」

『ちょっと詩織！どういうこと！？ひょっとして詩織が今の姉さんの原因なの！？』

台所から聞こえてきた大声に「ああ、あれか」と玲のことを思い出した。

そういえば弟とどう接していいか分からないとか相談に来ていた人に色々ときとう言っただけ。

「……………てへ」

『しおりiiiiiiii!』

「あ、良ければアルバムでも見ますか？アキくんの小さな頃の写真ですが」

玲の提案に瑞希と美波と秀吉は賛成し、持ってきてもらうことに。

そして玲が持ってきたものを詩織が検分（さすがに犯罪臭のするものは抜くため）してから見せることに。

……………まあ全部別にいいかな。

「まず一枚目です！ドロー！」

「これはアキくんが二歳の頃のお風呂の写真です」

「す、すっごくかわいいですっ！」

「うむ、愛くるしい顔をしておるのう」

「素直そつで可愛いわね」

「この頃はまだバカなのが可愛いですからね。二枚目ドローです」

「アキくんが四歳の時のお風呂の写真です」

「あははっ。アキつてばお風呂の仲で寝てるわ」

「暖かくて気持ちよかったんですね」

「無邪気な寝顔じゃな」

「これは……ちよつとだけドキツときましたね。まあビフォーアフターでどうしてこうなった、の典型ですね」

『詩織なんてこというのさっ!』

『いいからこっちに集中しろ明久』

「三枚目、四枚目ドロです」

「アキくんが七歳の時のお風呂の写真で、こちらがアキくんが十歳の時のお風呂の写真です」

『待った姉さん!どうしてお風呂の写真ばかりなの!?そのアルバムは何の写真を集めてるのさ!』

明久が嫌な予感を感じたのか台所から必死にこちらへ呼びかけるが、誰も反応しない。

「そして、これが……昨晚のアキくんのお風呂の写真です」

懐から取り出したるは一枚の写真。

「……………（ゴクリ）」

『このバカ姉があーっ！！いつの間にそんな写真を！？さては着替えか！脱衣所に着替えをもってきた時かっ！』

『明久。鍋から目を離すな。吹き零れるぞ』

『もうそんなことはどうでもいい！それよりあのバカの頭を――』

「あ、じゃあ私からも。明久君を着替えさせた時の全裸写真です。さすがに大事なところはモザイク加工してますがね」

『――あのバカどもの頭をフライパンでかち割ってやることのほうが大切なんだ！』

『料理をなめるな。いいからおとなしく鍋を見ている』

『離せーっ！雄二のバカーっ！』

ちなみに写真は焼き増しして友情の証として女性陣三人に配りました。

玲はモザイク加工してあったのが御気に召さなかったようだが、それでも受け取っていた辺りもう末期なのだろう。

5 - 4 写真。英語で言うところのフォト（後書き）

玲とは過去に会ったことがある設定。

まあ数度だけなので詩織も殆ど覚えてませんけど。

一応その時明久にも会っていますがお互い全く覚えていません。

5歳の頃の記憶なんて普通覚えてませんからねえ……詩織は中身が大人なので断片的に覚えています。

5 - 5 お食事とお勉強

「皆、待たせたな。夕飯ができたぞ」

雄二が皿に盛ったパエリアを机に並べながら告げた。

パツと見た限り中々美味しそうで作った者が料理に手馴れていることが分かる一品である。

「へえ。本当に料理出来るんですね」

「疑ってたの？」

「食生活が塩とか砂糖とか常日頃言ってる人の料理の腕を明久君は信じられますか？」

「……………」

どうやら納得していただけたようだ。

さすがに料理が出来ると断言している雄二が手伝いに行っていたので下手なものは出てこないだろうと思っていたのだが、聞いてみるに明久が主導で作ったらしい。

これは一人暮らしする前辺りで培われた家事スキルなんだろうが、一人暮らしになってからおそらく役に立っていないのはどういふことだろう。

「あ、ありがとうございます……………」（ポッ）「」

「お、美味しそうね……………」（ポッ）「」

「姫路さん、美波。どうして僕の顔を見て顔を赤らめるの？」

「これを見たからですよ」

「こ……これは」

瑞希達に配った一枚の写真。

それはかつてメイド服を着て明久宅に進入した時に入手したものだ。

「ほら、モザイクかかってますよ」

「モザイクって目元にかかってるだけじゃないか！？こんなのおかしいよ！」

「大事なところじゃないですか」

「確かに大事かもしれないけど、女の子に見せるのに隠すべきところはこちらじゃないと思うんだ……！」

何か明久が力説しているがスルー。

まあさすがにR18指定なものを渡すのはどうかと思ったのでヌードレベルに止めているが。

そこはかかないチラリズムが逆にエロいつて聞いたことがあるのでいいだろう。

「アキくん大声ばかりだして……リビングにまで聞こえましたよ？」

「だって詩織が……」

「人様のせいにするんじゃないやありません。カルシウムが足りないので

はありませんか？」

そう言いながら玲は深皿を明久の前に置き、パエリアを逆に遠ざけた。

「皆さん、貝の殻はこのお皿に入れて下さい」

「はいわかりました玲さん」

「何それ！？僕の夕飯は貝の殻だけなの！？カルシウム不足とか言ってるけど、これってただの苛めだよね！？というか真っ先に入れた詩織に便乗して雄二も入れるなあああっ！！」

「安心して下さい明久君」

「なにを！？」

「魔法で明久君の歯を頑丈にしますから。これで貝の殻もバリバリ食べられますよ！やったね！」

「違うっ！僕が言いたいのはそういうことじゃない……っ！」

「アキくん、まだ食事前ですが、御飯時だつてのに品がないですよ」

「姉さん……もしかして、姉さんは僕のことを嫌いな……？」

一切援護してくれない姉に疑問を持った明久の言葉。

まあ先程から殴られたり貝殻食わせられそうになったり写真公開されたりと散々だから当然である。

「心外です。何を言っているのですかアキくん。姉さんがアキくんを嫌うわけないでしょう。寧ろ、その逆です」

「え？嫌いの逆ってことは」

「無論、大好きです」

「そ、そうなんだ……」

「はい。姉さんはアキくんのことを愛しています」

はつきりと弟に正面を向いて堂々と言い放った玲。
さすがに堂々としすぎていて明久は照れたようで、顔を少し赤くして――

「一人の異性として」

一気に青くなった。

「最後の一言は冗談だよね！？それなら寧ろ嫌いでいてくれた方が嬉しいんだけど！？」

どうしようこれ、フォローするべきだろうかと詩織は考える。

玲の言葉によると今の明久好き好き―なのはある意味詩織のせいだ。さすがに明久が望まぬ禁忌をおかすのはどうかと思うので助けてやりたいと思うのだが、どう助ければいいのかだろうか。

「日本の諺にはこういうものがありますよね」

「何！？また余計な事を言うの！？」

「バカな子ほど可愛い、と」

「諦める明久。世界でこの人ほどお前を愛している人はいないぞ」

「待つて！それは僕が世界で一番バカだと思われてるってことなの！？」

「う、ウチだつてアキのことを世界で一番バカだと思っているわ！」

「わ、私だつて！この世界で明久君以上のバカな子はいないと確信しています！」

「やめて！それ以上皆で僕を傷つけないで！」

いや、ある意味愛されているのだが……。

しかし明久の女難の相は酷いものである。

一度お払いでもしたほうがいいんじゃないだろうか。

「まあ冷めないうちに頂きましょう」

玲の一言に皆の視線がパエリアに移る。

このまま明久が攻められているのを見ているのもちよつと楽しいが、不憫だし料理も勿体無いのでいい頃合だろう。

「『頂きます！』『』」

手を合わせてから詩織は目の前のパエリアに取り掛かった。
一口食べて、なるほどと納得する。

「美味しいですよ明久君」

「そう？この前詩織の家で食べた料理のほづが美味しかったけど……あ」

「アキくん？女の子の家で料理を食べたってどういうことですか？」

「玲さん。明久君に勉強を教える為に致し方なく連れ込んだだけです。使用人もいましたので、問題ありませんよ」

「……………ならいいですか。アキくん、ちゃんとお礼は言いましたか？」

「う、うん」

まるで救世主を見るかのように明久がキラキラと目を輝かせながら見てくる。

別に嵌めようとして話題を振ったわけじゃない。

「そりゃあ料理の腕もありますが、食材が豪華だったのも事実です。パエリアに関して言えばどっこいどっこいだと思いますよ」

まあパエリアなんて5回くらいしか作ったことはないが。

「そもそも私が料理を出来るのは幼い頃から受けてきた花嫁修業です。男の子に料理の腕を抜かれたら先生に怒られますよ」

「ん？ならクリスちゃんも料理できるの？」

「いえ、あの子は……………ほら、甘やかされて育ちましたから」

詩織の父と母は親馬鹿である。

今でこそ詩織とクリスの婚約者が出来たので落ち着いているが、前はベタベタに甘やかされていたのだ。

詩織は前世の記憶関連で余り甘えなかったこともあって特にクリスは甘やかされている。

花嫁修業を詩織が鬼のように課されていたのに対してクリスは初日でギブアップしたので行っていないのだ。

あれから食事は明久が男女関連で玲に追及されたりしていたのだが、程なくして全員が食べ終えて後片付けを終えた。

「そろそろお勉強を始めましょうか？」

「そうね。あまり帰りが遅くなっても困るし」

勉強か……………そういえばこれ勉強会だったっけ？

「皆さんお勉強ですか。それなら良い物がありますよ？」

「良い物？」

「はい。今日部屋を片付けていて見付かりました。今、持ってきてますね」

リビングから玲が出て行くと同時に詩織は疑問の声をあげた。

「明久君」

「何詩織？」

「明久君って参考書とか持ってるんですか？満足に食事する余裕もないのに」

「……………あれ？」

首を傾げる明久が疑問の声をあげるがその答えを出す前に

「参考書というのかもしれませんが、役に立つかもしれませんので」

テーブルに置かれた一冊の本、そのタイトルは『女子高生 魅惑の大胆写真集』。

「アキくんの部屋で見つけました」

「僕のトップシークレットがあーっ！！」

「ふうん、御飯はまともなものを食べる余裕がないくせに性欲だけはあるんですか……………」

ボソツと玲に聞こえないように呟くが明久はそれに気付かず玲に詰め寄っていた。

溜息を吐いて二人が言い争う———というか明久が玲を非難するのを静かに見る。

「アキくん。ベッドの下に置いてあったほかの参考書も全て確認し

ましたが、あなたはバストサイズが大きく、かつヘアスタイルはポニーテールの女子という範囲を重点的に学習する傾向がありますね」

「冷静に考察を述べないで！いくら言い方を買えて取り繕ってくれてもそれが僕の趣味傾向だってことがバレちゃうんだから！」

「ポニーテール、ですか……」

「大きなバスト、ね……」

瑞希と美波が数秒お互いの一部をじっと見つめ、そしてハッとしてから詩織のほうへ向いた。

「はい？」

「「……………」」

詩織の髪、サイドポニー。
胸、結構大きい。

「……………」あの？」

無言の圧力が痛い。

「わ、私は雄……雄二君は翔子ちゃんに悪いのでスルーしておきますか。秀吉君に教えてますね」

詩織ならば翔子も恋仲にならない限りは許してくれるだろうが、それでも一対一というのはあまりいい状態ではない。

そんな友情関係で危ない橋を渡るくらいなら秀吉に教えたほうがマ

シだ。

「ふむ。では頼むかのう」

「はい。まずは英語ですけど――」

個人授業をしようとしていた詩織だが、玲がハーバード大学の出だということとで講義をしてくれることに。

詩織が勉強すべきは古典や歴史なのだが、まあたまにはこういうのもいいだろうとそのまま講義を聞くのだった。

5・5 お食事とお勉強（後書き）

どうしてもこの辺は明久達と行動をしないようにすると完全オリ話になっちゃうな。

それでもいいんだけど、五章ってほのぼののメインだしまあこれはこれでいいか。

5 - 6 ジャン

明久の家で勉強をした次の日の放課後、詩織は憂鬱そうに溜息をつきながら帰り支度をしていた。

「詩織」

「はい？なんですか雄二君」

顔を上げるとそこには雄二が鞆を片手に立っていた。

相方はどうしたんだと明久を探すとムツツリー二と瑞希と美波に話しかけていた。

「これから俺の家で勉強会をするんだが、お前もどうだ？」

昨日に続いて今日も勉強会をするらしい。

詩織にとって昨日はあまり自身の勉強になるようなことがなかった為今日は参加したいのだが、そうもいかない。

「すみません。今日はジャンの歓迎会なんですよ……」

「ジャンだと？確かお前の……」

「はあ。元婚約者ですよ」

「なんだ。婚約は解消したのか」

そういえば雄二も仲が良かったっけか。

「雄二君も……いえ、明久君があれですから参加できませんよね」

「……………」

今回の勉強会は雄二にとってかなり優位に働く。

武器のリセットという意味でも、明久の学力向上という意味でも。点数が最下層である明久はその技術力でもって格上と戦えている。その明久の学力向上というのは明久本来の戦闘力を大幅に増加させるのだ。

もしも試召戦争を真面目に戦い抜くことを考えているのならば今回の勉強大会を取りやめて歓迎会に参加するなどありえない。

「いや、俺は……」

「いいんです。雄二君は雄二君の考えがあるんですから。まあ正直に言えばクッションが欲しいところですが」

「クッション？」

「元婚約者……元、なんですよ。気まづくないはずがありません」

「大丈夫か？」

あまり大丈夫じゃないが、いつまでも引き摺ってても仕方のないことだ。

「2年間も猶予をもらえたんですから、そろそろ向き合わなきゃいけませんから」

雄二達に別れを告げて詩織は一直線にレッドフィールド家へ帰った。そして冷蔵庫の中から材料を取り出していき、順番に下ごしらえをしていく。

4人前といういつも作ってる量の倍でいいんだろうが……一人男の子がいるので若干多めのほうがいいだろう。

『明良にい連れてきたよ詩織ちゃん』

「む……もうですか」

『もう落ち着きが全然ないから持ってきてちゃった』

頭に直接聞こえるようなそれは念話の魔法だ。

「今から料理を始めるので私は対応できませんよ？」

『うに。大丈夫大丈夫。明良にいても対応できないから』

「……………客室で暇を潰してください」

『うにうに』

以前明久を案内したあの客室に行くように指示してから用途に合わせた鍋を順番に確認していく。

「さて……………作りますか」

料理は出来た。

今はタイムストップというかなんというか、出来上がった料理の時間を止めて出来立ての段階で保っている。

正直魔力がありえないくらい消費するのだが、元々あんまり使うものでもないのでもいいだろう。

それらを食卓に並べてから館内の魔力を感じ取る。

どうやらクリスは自室に、綾香とジャンは客室に……いない、だと。

「……………」

軽く探ってみると何故か詩織の部屋に二人ともいた。
何してるんだこいつらは。

「綾香。何してるんですか？」

『うに？あ、もう出来たの？』

「何してるのかと聞いているのです」

『……………詩織ちゃんの体質は分かってるんだけどさ、これはないと思うんだ』

「！？な、何を見たんですかつ！」

『いやね、おやつ代わりのつもりなんだろうけど、これは人間の食

べ物じゃないわけで……」

見られた！

『あれ』を見られた！

「いいから早く来てください！あ、クリスマスちゃんですよ！」

途中にクリスマスにも念話で食卓まで来るように言い、食器を出して並べる。

程なくして3人は話しながらやってきて食卓についた。

「おお、美味そうだな。久々の詩織の料理、楽しみだぜ」

「やれやれ。ジャンに美味い以外に褒め言葉があるなら私も少しは頑張ったんですけどね」

「美味しいものは美味いから仕方がない！世界の真理だぜ」

本当にやれやれだ。

現婚約者である綾香はその様子をニコニコと見守り、クリスマスが溜息をつく。

2年前までよく見られた構図だが、今もまだ出来るとは思わなかった。

「……………」

「……………」

感慨にふける詩織と同様に感じたのか無言で見詰め合う詩織とジャン。

「明良にい、人の婚約者とらないでよ」

「お前が言うかそれ!？」

まさにお前が言うのである。

「まさか妹に婚約者寝取られるとは思わなかったんだぜ……? 相手は女なのによ」

「ジャンも聞いてると思いますけど、私の前世は男です。ですから正直男とか女とかどうでもいいんですよ」

「お姉ちゃん、そろそろその妄言やめようよ。いい大人なんだからさ」

そろそろクリスも現実受け入れるべきだと思っただお姉ちゃんは。

「しかし相変わらず肉が多めだな……」

「そうですか？」

全ての料理に肉が入っているので多めといえば多めだ。

しかし詩織はそんなことを呟いたジャンを睨みつけて黙らせる。

相変わらず口の軽い男だと思いながらも席につき、時間を止めた魔法を解く。

その瞬間部屋に広がる香りにジャンが感嘆の声をあげて席に着いた。

「そいじゃ頂くかね」

「うに」

「わかったわ」

「では……」

「……いただきます」……」

地下のワインセラーから持ってきた赤ワインをグラスに注ぎ、口に流し込んでから顔を顰める。
その様子を見たジャンが苦笑しつつ自身のグラスを傾けた。

「相変わらず酒苦手なんだな」

「……こんなもの毒ですよ。ポイズンです」

魔法で自動的に食器は片付けられ、食卓には既に酔い潰れた綾香とクリスが寝ていた。

一応毛布をかけたので風邪はひかないだろう。

浮遊魔法で部屋まで運んでもいいが、そんな気は微塵も起きない。

酔い潰れるのは自己責任だ。

「の割には全然酔わないよな」

「ジャンもそうじゃないですか。ザルの癖にお酒好きだからかなり飲みますし」

おかげで婚約者であつた頃は付き合いでかなりの種類のお酒につきあつてきた。

正直あまり細かい味とかは分らないが、まあこついつのもいいだろう。

「なあ、聞きたいことがあるんだ。ずっと……婚約者じゃなくなつたあの日、二年前からずっと」

「何ですか？」

だいたい想像はつく。

もしも詩織がジャンの立場であつたならば同じような疑問を持っただろうから。

「詩織は、俺を愛していたのか？今は本当に綾香を愛しているのか？」

「……………」

想定通りの質問に詩織はグラスに残つたワインを一気に煽つて空になつたグラスにワインを注ぎながら答えた。

「……前者はノーです」

「……………だろうな。なら後者は？」

「イエスと言いたいところですが、微妙なところです。ジャンなら

分かってるんじゃないですか？レッドフィールド家の『あれ』を知っているジャンなら」

「……………それでいいのか？」

「私にとって永遠のパートナーはカーベラです。ただ、それだけでいいですよ」

詩織「レッドフィールドはあまりにも堂々とした立ち振る舞いから誤解されやすい。

誰もが彼女は過去を振り向かないと思っている。

しかしジャンが知っている通り——詩織は前世を一欠けらも捨てられていない。

「私は現世で幼少の頃こう思いました。きっと私はレッドフィールド家の血筋を残す為に夫をとるでしょう。でも私にとって永遠のヒロインはカーベラです。そんな男でも女でも勝てない永遠の少女……それがカーベラなんです」

「女々しいぜ」

「今は女だからいいですよ。だいたい考えてみてください。カーベラと私は前世で数十年に渡る大冒険をしました。培われた絆は並大抵のものではありません。そんな彼女との絆をたかが数年で上回れるとでも？」

「わかったわかった。ま、俺はもう脱落してるからな。綾香にでも言ってやってくれ」

詩織からワインボトルを奪って自身のグラスに注ぐジャン。

「ふふ。別に再戦を申し込んでもいいんですよ？」

「あー、無理無理。現状だと綾香と同じ方法で迫れってことだろ？俺には無理さ。まだ口説き落とすほうが現実味がある」

「根性なしですね。まあ……ジャンはそれでいいのかもしれない。とにかく」

ずっとワイングラスをジャンのほうに向ける。

ジャンはそれで意図を理解したのか詩織のグラスに自身のグラスを近づけ

「何に対してかは分かんが」

「これは魔法的な意味合いですよ。分かりやすく言えば無事を祈るようなものです」

「なるほど。では」

「乾杯」

5 - 6 ジャン（後書き）

オリ話。

雄二の家や美波の家についていってもよかったんですけど、葉月とはあまり接点ないので空気になりそうだったのでこっちになりました。

詩織の恋愛観が少し出てきます。

あとジャンの顔見せでもありますね。

美男子な外見のジャンですが、中身は熱血です。

過去とはいえ詩織が結婚してもいいかなと思えるくらいには良い男です。

詩織が雄二に結構好意的なのはジャンと似てる部分があるからなんですよ。

5 - 7 霧島家でおべんきょ

ジャンと小さなパーティーを開いた次の日の昼休み、明久達は今度は翔子の家に集まって勉強会をするらしい。

というのも明久に世話になってるから翔子が自発的に家へ招待したのだが……世話？

ちなみにその時雄二がまた翔子に連れて行かれたのだが

「雄二は大丈夫だったの？昨日は結構遅くなったけど」

「俺の親は何も言わないから大丈夫だぞ？」

「いや、そうじゃなくてさ」

「なんだよ」

「二日連続で女の子と夜遅くまで出かけてる上に、昨日は途中までだけど姫路さんと夜道を二人きりでしょ？霧島さんは怒らないの？」

「……………」

「何やってんですか雄二君」

「待て詩織。俺は何もやってない」

焦った顔をしている雄二が言っても説得力がない。

本当に何もやってないんだろうが、当の本人がどう受け取るかは……

「ま、まあ、大丈夫だろ。バレなければなんの問題も」

「おい雄二君。後ろ後ろ」

「……後ろ？」

雄二が振り向くとそこには無表情で目が本気の翔子の姿が。明日、生きて帰ってこれるといいね。

「……雄二。今の話、向こうで詳しく聞かせて」

「まあ待て翔子。お前は勘違いをしている。お前の考えているようなことはなにもしていないし、そもそもお前に俺が責められる謂れは無いと」

「……うん。言い訳は向こうでゆっくりと聞かせてもらう」

雄二と翔子が教室から出て行った。

そんな光景を見て詩織が一言。

「馬鹿ですね雄二君は。こういう時は男が悪いつて相場が決まります」

「嫌な相場だ……」

「といいますがね、明久君。私の言うことですから確かですよ？」

男の観点から見ても女の観点から見ても男が謝っておくほうが男女関係は円滑に進む。

まあ雄二は翔子との関係を円滑に進める気はないのだろうが、いい加減少しは妥協したほうが………したら結納になりそうだから抵

抗してるのか。

無駄な抵抗ですねえ。

P i P i P i P i P i ! !

「はい？」

直後詩織の携帯にメールの受信音が鳴り響く。
手にとって新着メールを確かめて見ると

【M e s s a g e F r o m 坂本雄二】
たすてけ

「焦ってたんですねえ……………というか私に助けを求められても」

「助けないの？」

「……………そりゃあ最近はよく助けてますけど、そもそも私は雄二君と翔子ちゃんはくつついたほうがいいと思ってますので」

雄二はツンデレすぎて困る。

恐らく翔子がどうかではなく問題は雄二自身にあるんだろう。

……………まあ翔子が押し過ぎて雄二が引いてるのは事実なのだが。

それから帰って来た翔子が招待の話を切り出してその日は終了した。

「……詩織、いらつしゃい」

「久々に翔子ちゃんの家に来た気がします。ん、んー………やは
りザルじゃありません？警備が」

「……詩織の家は魔窟。霧島家とは違う」

それはそうだが……

「……ダメ」

「まだ何も言ってませんよ」

「……じゃあトラップ仕掛けない？」

「………」

ちようと言おうとしていたことを先に言われたことで顔を逸らす。
そんな詩織に溜息をついた翔子はある客室へと案内した。
ついでに鉄格子のついた部屋から簀巻きになった雄二を回収してか
ら客室へとたどり着く。

「既に皆は来ているようですね」

「……雄二を連れてきた」

ドサツと明久達の前に雄二を転がす翔子。
翔子にはポーシヨンの類を数個渡していたのだが、どうやら使つま
でもなく自力で回復したらしい。

「ここは……………何故明久達がここに？」

「いや雄二。まず自分が縛られて転がされていることに疑問を持とうよ」

「気絶して目覚めたらこんな状態だったなんていつものことだからな」

それから勉強をある程度まで進め、翔子にご馳走してもらったが…

……………

「やはり、プロには敵いませんね」

「……………詩織の料理もなかなか」

「ありがとうございます」

「翔子。なぜ俺に取り分けた料理だけ毒々しい紫色をしているんだ」

「……………詩織にもらった薬なんて入ってない」

あ、そこではらしちゃ……………

「翔子。なぜ俺のコップに注いだ飲み物だけ毒々しいピンク色をしているんだ」

「……詩織にもらったものだから怪しい薬じゃない。出所はしつかり」

「詩織いいいいっ!!」

やはり吼えられた。

「どういっつもりだ？」

「安心してください。惚れ薬の類ではありませんので」

「じゃあ何だ？」

「……朝になったら黄色い朝日を拝める素敵なお薬ですよ」

「……………（ポツ）」

「媚薬じゃねえか!？」

失敬な。

「催淫剤ですよ!」

「言い方なんてどうでもいいから翔子に薬を提供するのをやめてくれ……………」

「あ、上手く当たればそのまま出来ちゃった結婚も……………」

「本当にやめてくれっ!!」

雄二からは非難轟々だが詩織はそこまで強い薬を作った覚えはない。恐らくだが雄二が薬を摂取しても翔子の望むような展開にはならないと思うが……………本心ではどう思っているかによる。

「…………雄二」

「なんだ翔子」

「…………勉強の進み具合はどう？」

「まったくもって順調だ。心配はいらねえ」

「…………本当に？」

「ああ。次のテストではお前に勝っちまうかもしれないぞ」

「…………そう」

「そうしたら俺は晴れて自由の身だな」

……………？

……………何が何だかわからない……………（A A 略

いまいち因果関係がわからないが、きっと雄二の中で何か不思議理論があるのだろう。

「……………そこまで言つのなら」

「ん？」

「……勝負、する？」

翔子ちゃん、まさかその勝負で勝ったら結婚してもらうとか言わないですよ？

「勝負だと？」

「うん。雄二がどの程度できるようになったのか、見てあげる」

「ほほう……。随分と上から目線で言ってくれるじゃねえか」

「実際雄二君は格下ですけどね」

「……そう。実際に、私のほうが上だから」

事实は認めたほうがいいですよ。

「くつ。上等だ！勝負でもなんでもしてやろうじゃないか！本当の実力の違いってヤツを見せてやらあ！」

あーあ……………

「雄二君」

「ん？」

「結婚式には呼んで下さいね……………まあ雄二君が呼ばなくても翔子ちゃんが呼んでくれると思います」

「お前本当に失礼だよな！？」

5 - 8 お風呂

「前回までの三つの出来事！

一つ、明久の下に一人暮らしを脅かす姉が襲撃。

二つ、それに危機感を感じた明久が勉強会なるものを開く。

三つ、雄二の結婚日程が決まった！」

「嘘をつくな！というかいつたい誰に向かって話してるんだ？」

「いえ、神界の観測者の方に……」

「もういい。魔法関連だということは分かったからもういい」

どうせ光神とか見てるだろうし、と言おうとしたものの雄二はそれすら聞きたくないようだ。

「で、雄二君が翔子ちゃんと勝負するのはわかったんですけど、いったいどんな勝負を？」

「……出題範囲の簡単な復習テストで勝負」

妥当ですね。

「おうよ！今までの俺と思うなよ！」

「……それで、私が買ったら、雄二は今夜私と一緒に寝る」

「は？」

「おおっと、翔子選手！既成事実を作りにいったー！」

「……………」

「無反応ってある意味傷つくんですよ？」

呆然としている雄二が自分の言葉をまったく聞いていないことが分
かり、溜息をついてから料理に手を伸ばす。
寂しくなんてないんです。ないっただけなんです。

「霧島さん。ゴメン、杏仁豆腐を食いたいからナイフを貸してもら
えないかな？包丁や日本刀でもいいけど」

「……………今持つてくる」

「待て翔子！今のコイツに刃物を渡……………待て詩織。渡すなよ？絶対
渡すなよ？」

「フリですね！

「フリじゃねえよ！いいか、絶対渡すんじゃないぞ！」

明久が何か強請るような視線を向けてくるが放っておく。

ある意味雄二より羨ましい立場にいるくせに、この男はどれだけ救
いようがないのだろうか。

「……………代わりに、雄二が勝ったら吉井と一緒に寝るのを許してあげ
る」

「驚くほど俺にメリットがねえぞ！？」

「……なら、詩織で」

「嫌ですよこんなヘタレ。男臭いですし」

「男臭い……」と落ち込んでいる雄二だが、言葉を撤回する気はない。

実際男臭いのだコイツ。

詩織が嫌がる理由はそのみだ。

「……………愛子も勝負する？」

「それもいいけど、折角だから——そのテスト、皆で受けてその点数で部屋割りを決めようよ」

愛子の提案に明久が頷こうとし、瑞希と美波に猛反対される。

しかしFクラスに染まりきった彼女達は明久が愛子と一緒に寝るくらいなら自分が一緒に寝るとか言い始めた。

どうやら場の流れはテストの点数上位者から順番に部屋を決める流れになりそうだ。

そこで詩織は考えてみた。

まず1、2、3位は確実に翔子、瑞希、自分が独占するのは確定だろう。

翔子が雄二をペアに選び、瑞希は明久をペアに選ぶ。

なら自分は……………秀吉？

正直ムツツリー二は全力で回避したい相手なので秀吉を選びたいところだ。

というか朝起きたら鼻血塗れとか容易に想像できるので勘弁してほしい。

「……詩織」

「はい？」

「……先にお風呂になった」

考え込んでいる間に話は進み、先にお風呂に入ることになったらしい。
チラリと横目で雄二を見てみると明らかに何かを企んでいる顔をしていた。

（……んー、この状況で雄二君がしそうなこととすれば……
……テストに対する不正かそれに準じることかな？それか翔子ちゃんがこの前言ってた婚姻届？）

前者はともかく後者の対策は完全だ。

なぜなら——詩織は翔子に頼まれて魔法によるセキュリティで何人たりとも婚姻届に近づけないようにしたからである。

「霧島さん。お風呂はどんな感じですか？」

「……大浴場と露天風呂がある」

「翔子ちゃんの家のお風呂は気持ちいいんですよー。たまにお風呂目当てで泊まりにきちゃいます」

「詩織ちゃんと霧島さんって仲がいいんですか？」

「……けっこう」

一応幼馴染に分類されるから仲はいいだろう。
連絡を取り合っていたとはいえ直接会ったのは結構久々なのだが。

「そういえばサウナもあるんですけどっけ？」

「さ、サウナ？ここ温泉旅館じゃないわよね？」

「楽しみですね」

「ボクも楽しみだよ。温泉も、姬ちゃんのコレを直に見るのも、ね」

「きゃっ。ど、どこを触ってるんですか工藤さんっ」

「本当におつきいよね。何が入ってるんだろ？」

「そりゃあ脂肪ですよ」

その言葉に美波、翔子、愛子の三人が詩織の胸を睨みつけ

「「「……羨ましい」「」」

「いや、邪魔なだけですって」

前世が男だった身としては本当に邪魔って気持ち大きい。
そりゃあ胸は好きだよ？でも好きなのは他人の胸であって、間違っ

ても自分の胸ではないのだ。

全国の男達の諸君も考えて見て欲しい。

気がついたら自分はきよにう少女になっており、町を歩いてみる。胸は妙に重く、しかも主観的には同性である男どもが「うほっ！」な目を向けてくる。

「家の中ではたまに胸を小さくしてるくらいです」

「小さく！？ちょっとシオ！あんた胸のサイズ変えられるの！？」

「……？はい。魔法でちょちょいのちょいですよ」

「……詩織、偽乳？」

「いえ、これは天然ですよ。魔法で変えるっていつでも元データはちゃんととってますから」

無理に身体スタイルを変えると違和感が出たり成長が阻害されたりする。

なのでスタイルを変える魔法は長くて6時間、理想を言えば1時間以内に止めておいたほうがいい。

まあ詩織に限ってはそのような必要もないのだが。

いや、詩織に限ってはではなく、上級魔法使いに限ってだ。

「……つまり、ウチの胸を大きくするのは身体によくないってこと？」

「はい。将来スタイルが崩れて胸が片方だけ急成長したりお腹が異常に出たりするのが構わないなら操作しても構いませんが」

そう言つと美波は顔を真っ青にしてブンブンと振つた。

翔子と愛子を見てみると似たような感じで首を振っていた。

「身体に影響を与えない方法なら幻術がありますけど……………」

……虚しくなりますよ?」

「ボクはそつちならちよつと試してみようかな……………ムツツリー二君の反応が面白そうだし」

皆が忘れ物やらなにやらで部屋に戻っていく中、詩織は一人露天風呂で寛いでいた。

どうせ愛子の逆セクハラでムツツリー二が鼻血を出して、明久が馬鹿をして瑞希と美波にお仕置きされ、雄二もまた翔子にお仕置きされているのだろつ。

「ふー……………生き返ります」

「……………詩織」

「ん、翔子ちゃんですか。他の皆も。ああ、ところで雄二君何してたんですか?」

「……………婚約届けを盗もうとしていた」

ああ、そつちだったのか。
じゃあテストのほうは諦めたのだろつか?

「……シオ、肌綺麗ね」

「ありがとうございます美波ちゃん。ですがまあ、これは魔法の副作用ですから」

「魔法の副作用で肌が綺麗になるのかな？」

愛子が疑問の声をあげるが、んなわきゃあない。

「魔法使いがある一定の力量を見に付けるとその身体はあらゆる法則から解き放たれます。まあその中に綺麗になる、というのがあってですね」

「綺麗にですか？」

「はい。魔女はいわゆる誘惑する存在ですからね。スタイルは良くなりますし、肌のツヤも良くなります。ついで言えば不老です」

無言で翔子が詩織の肩に手をかける。

「……………」

「まあ私のような存在を上級魔法使いと言うんですが——あまり羨ましいとか思わないほうがいいですよ？なんせ——」

魔法の心得のある人間、そして魂を狙う悪魔、果てには神にも狙われることがありますから。

5 - 8 お風呂（後書き）

上級魔法使いは不老です。

法則に縛られない魔法を使いこなす彼らは既に法則に縛られない存在となっています。

上級魔法使いは即死さえしなきゃ死なない云々もその辺が関係しています。

あとスタイルや肌などもです。上級魔法使いは総じて美形です。美形ったら美形なんです。美形だから上級魔法使いになるんじゃないくて、上級魔法使いだから美形なんです。

今回出番の少ない女子サイドで書いてみた。

翔子以外の女の子が影薄いからなあ……。

5 - 9 過去の関係

問 以下の文章の（ ）内にあてはまる正しい年と人名を応えなさい。

『紀元前334年 アケメネス朝ペルシアの最後の国王となるダイレオス三世を破った、（？）による（？）が始まる』

姫路瑞希の答え

『？アレクサンドロス大王 ？東方遠征』

教師のコメント

正解です。ここに出てくるダレイオス三世とアレクサンドロス大王の間の戦争はイッソスの戦いとアルベラの戦いの二つがあります。両方とも正しく覚えておくとうまいでしょう。

土屋健太の答え

『？光の勇者アーク ？ファイナルクエスト～国王最後の聖戦～』

教師のコメント

”ファイナル”や”最後”という単語があるのに続編がありそうな気配がするから不思議です。

詩織”レッドフィールドの答え

『？ゼウス ？ラグナロク』

教師のコメント

ギリシア神話と北欧神話が混ざっています。せめて統一してください。

坂本雄二の答え

『?アレクサンドロス大王 ?東方遠征』

教師のコメント

おや?坂本君でFクラスの解答用紙は最後ですか?まだ吉井君の珍解答を見ていないような気がするのですが……まさか正解していたのでしょうか?

お風呂を上がりサッパリしたところでテスト前の軽い復習でもしよ
うかなと思った詩織は部屋で鞆をあさっていた。

筆記用具の中身を確かめてから目当ての教科書を一冊取り出す。

「確か最初は日本史でしたっけ?」

軽い小テストなので一教科あたり10分のスピード勝負なので教科
一つ一つの広い知識をすぐに出せるようにしておくのが重要だ。

特に日本史と世界史の小テストは出題数が多いのでテキパキと書いて
いかなば10分では足りないだろう。

「詩織ちゃん」

「何ですか瑞希ちゃん」

「小テストですけど、どうやら明久君達がテストの封を開けちゃったみたいですので、部屋は男女に分かれることになりました」

「……………なるほど、婚約届と見せかけて狙いはテストそのものを無くす工作だったのか。」

自分を騙すとは雄二もなかなかやるようだ。

「まあ別に構わないんですけどね。瑞希ちゃんだって明久君と同衾なんてしても寝不足になるだけですからね。翔子ちゃんだって同衾くらいだったら今更ですよネ？」

「べ、別にそんなことは……………」

「……………知ってるの？」

知ってるってより手を出したかは別として寝ている雄二の布団に潜り込むくらいはしてそうだと思ったのだが、やはりやっていたらしい。

「ちょっとシオ。何でウチの名前がないのよ」

「ボクの名前もかな」

「いえ。美波ちゃんは失礼ですけど、テストの順位になったら瑞希ちゃんより下なのは明らかですし……………愛子ちゃんは今も言うまでもないですよネ」

「何で？」

「順位的に言うとなると選ぶのはどうせ美波ちゃんですよね」

詩織は愛子がなんだかんだで男性経験が皆無なのは見抜いていた。キャラとして色々エロ発言をしているもののぶっちゃけた話、エロに興味津々な男子学生の女子版みたいなものだ。

その手の知識があるからといって実際経験がないというのはどの学年にも一人はいる。

「ふふふ……シオちゃん、それは分からないよ？ムツツリー二君を選ぶかもしれないし」

「シオちゃん、ですか？」

「うんシオちゃん」

この前までは「詩織」だったのにいつたいなんでそんな呼び方になったんだろう。

「キスもしたことすらない癖に……」

「あ、あるよキスくらい！」

「ふっ」

「笑われた！？シオちゃんに笑われた！？しかもすごい見下す感じで！」

どうせないくせに、という意図を込めて笑ってやったのだが、相手はそう取らなかったらしい。

まあある意味見下しているといえば見下しているのかもしれないが、それは愛子が経験がないからそう思うだけではないかと詩織は心の中で自己弁護をする。

「親愛のキスでいいならしてあげますよ？」

「知らないよ！なんでファーストキスが女の……………あ」

「凄い口軽いですね愛子ちゃん」

魔法で軽い誘導をかけたのだが物の見事に引がかかった。

あくまでおまじない程度なので本当に引つかかるとは思わなかったのだが…………愛子が顔を真っ赤にしたのを見て満足そうに詩織は笑った。

「……………そういう詩織も」

「翔子ちゃん？」

「…………ジャンと綾香の三角関係はどうなったの？」

先程まで機嫌良さそうに笑っていた詩織の表情が固まる。

「ボク、興味あるな」

「う、ウチもかな」

「私ですけど……………聞いてもいいですか？」

愛子は復讐の意味で話に乗り、瑞希と美波はお互いを意識しながら

興味を示した。

三角関係といってもかなり変則的なのでダメになるとは思えないのだが――

「……ジャンって男の子は詩織が好きで、婚約者だった。ジャンの双子の妹の綾香も詩織が好きだった」

「禁断の愛ですね！」

「……………美春を思い出すから聞きたくなくなってきた」

じゃあ話を中断してくれと言いたところだが、翔子の口は止まることを知らない。

「……詩織は綾香の想いに気付かず、何も考えずにジャンと結婚しようとしてたけど綾香が詩織に決闘を申し込んだ」

「ん？ジャンって人じゃなくてシオちゃんに？なんで？」

「……レッドフィールド家の風習。自分より強い人には従う」

風習っていうか、習性というか……………一般人に話すようなことではないと思う。

それは翔子も分かっているのかそれ以上のことは話さない。

「……そして綾香は詩織に勝ち、ジャンから寝取った。婚約は破棄で改めて綾香と婚約」

「ねえシオ。あんた、女よね？」

「はい」

「………………。女の子同士なのに婚約って出来るの？」

「魔法って便利ですよね」

「わかったわ。出来るのはいいとして、あんたはそれでいいの？」

そう言われても性意識なんてものは前世の関係でかなり希薄なのだ。加えて魔法で同性でも子供を成す事は可能なので問題はない。

……………何か魔法に頼りすぎている気がするが、気のせいだろう。

「それはシオちゃん、気のせいじゃないと思うんだけど」

「シャラップ。問題はありません。それより私はもう寝ます。寝るったら寝るんです。これ以上三角関係について聞きたくないんです」

想像して欲しい。

婚約者が婚約破棄のことを突然聞かされて呆然としている姿を見た詩織の心境を。

あの時はまじで心が痛かったです。

ちなみに期末試験だが、いつもどおり詩織は日本史と世界史と古典

を除く全てを高得点を取り、逆にそれらは低得点をとった。

5 - 9 過去の関係（後書き）

恋愛関係の話になっちゃいましたね……まあこんなこともある。

最後の一文がかなり投げやりに思えるのは間違いじゃない。
というかテストしてる姿なんて書いても……ねえ？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2976w/>

バカとテストと前世魔王と

2011年10月27日01時15分発行